

云按に常陸岩間山の近邊に男體山ありそこに雷洞ありて雷出入す近邊の樹木梢皆こがれたりといへり
 (十四)石佛 相摸築井縣土屋山の拘盧尊佛下野井出觀音岩船地藏の類皇國に石佛いとおほかり南昌府志卷之三山川下寧州部に石佛州南二十里高丈餘宛若_ニ鐫刻_ニ水旱居民禱焉とあり自然に佛の形せし石これかれきこえたり追記すべし石像ノ始元字釋書十七ノ下
 (十五)郷倉 今の世村里に年貢米を積貯る倉を郷倉といへり南昌府志卷之八公所部に縣倉郷倉の名ありまた東郷倉西郷倉南郷倉北郷倉などありまた舗あり總舗某舗などいへり屋敷の事也院あり館あり役所をいへり

(十六)神社の縁起 縁起はもと由来をしるしたる記にて佛書の字也縁記など中比のものに書たるもあれど誤也按に神社の縁起はふるくよりいひし名なれどおなじくは祠記といはまほし南昌府志卷之二十一曲祀下徐孺子舊祠の條に曾鞏撰_ニ祠記_ニとありまた徐孺子新祠の條に郡人朱善撰_ニ祠記_ニとあり
 (十七)福來病 日本紀略天德三年の條に今年人民頸腫世號_ニ福來病_ニ云々同長元二年十月の條に自去月

至_ニ今月_ニ京中人病_ニ頸腫_ニ世謂_ニ之_ニ福來病_ニ云々倭漢合運長元二年の段に京人腫世謂_ニ福來病_ニ云々玉勝間三の卷に頸のふくらかなるよりかくいひなせし成べしといへりこは世にいふ腹ふくれの金持などいふやうに心得たる説にてひがごと也福來は「フクレ」の語にかり用し字にてやがて「フクレ病」といふ事也福來病「フクレヤマヒ」と訓べし百練抄十五ノ廿九丁ウに不瀉之世以號内竹房
 (十八)倭漢合運 倭漢合運は洛陽の僧圓智が撰にて古書也圓智は時代未_レ知人なれど蓋永祿の比にやとおぼゆ屋代弘賢藏本に慶長八年活版の倭漢合運あり延寶の刊本とは異同少からず此本上下二卷とす武將略紀などもなしたまた春日社本は天正十五年までをしるし後陽成院を今上とせり加賀儒官大島忠藏が本は正親町院を今上と書たり常陸和光院の本あり余未_レ閱また鎮西梁山沙門蓬庵_ニ釋道器_ニが新選和漢合圖あり正親町院を今上とし天正三年までの事をしるしたりこれ古き倭漢合運に對へて新撰となづけたるめればこれよりもはやき物なるとは論なし今の延寶刊本はその比吉田光由が加筆おほければ校合せずして

は引用がたし

(十九)しでの田をさ 古今集打聞俳諧に「いくはくの田をつくれはかほときすしてのたをさを朝な朝なよふ」とふ歌の注に郭公はいくばくの用を作ればにやしてたをさくと朝毎に田長を啼よぶぞといへりしてたをさをなくを田長をよぶことに今はいひなしたり云々遠鏡にドレホドノ田ヲ作ルトテ時鳥ハアノヤウニシテノタヲサヲ毎朝々々ヨブコトゾ云々按に此歌の注釋顯注密勘榮雅抄餘材抄續万葉論の類にこれかれ見ゆ今按にしてのたをさは郭公の鳴聲にてほときすともしでのたをさもなくゆゑ二名有也しでのたをさを郭公の異名といふ證は榮花物語御賀卷に「さなへうゝるをりにしもなくほときすしてのたをさをむへもいふ也」伊勢物語に「名のみたつしてのたをさは今朝そなく菴あまたとうとまれぬれは」これら皆郭公をしてのたをさをよめりまた拾遺にうみたる子のなくなりて又の年はほときすのなくを聞て伊勢「しての山こえてやきつるほときす戀しき人の上かたらなん」これもしでのたをさをいふによりて死出の山をこえてや來つるとよめる也さて

古今の歌はしでの田長をあさなくよぶの「を」もじ蓋_ニと_ニも_ニじの誤にてしでの田長と朝な_ニよぶと郭公が自名のりてよぶをよめるなるべし
 (廿)弓筆の道 文武の道弓馬の道敷島の道などいふは常なれど雪玉集に弓筆の道とよみ給へる歌あり「弓筆の道の外にも思ふときとる春を宿にしるらん」弓筆の道はめづらし
 (廿一)紫蘇巻_ニ荏菹_ニ 今の世しそまきの唐がらししそまきのめうがしそまきのうごしそまきの蓮根などいふものいとおほかり延喜大膳式下に醬瓜糟漬瓜荏菹各一顆また鹽七斗二升八合醬四斗一升七合并味醬漬及荏菹料などありて荏菹は荏の葉に裹みたるにて今の紫蘇巻の類也今も紫蘇のみにも限らず荏の葉をも用る也同式に茄子荏菹料一顆中子料半顆云々また荏菹四百七十六顆吳桃子二斗生薑六升山蘭龍葵子各一斗舌就一斗云々舌就一本仙沼子に作また荏菹六斗料瓜九斗冬瓜七斗茄子六斗青根四斗鹽一斗二升醬末醬滓醬各一石云々
 (廿二)新選和漢合圖下 釋道器が新選和漢合圖下といふ書あり序に鎮西梁山沙門蓬庵_ニ釋道器_ニ謹圖吾高

祖從_二摩訶迦葉尊者_一天竺第十八世復震旦初祖菩提達磨圓覺大師_{南身毒香至國異見大王第三王子也當于}人王第二十七代繼體天王十四年庚子_而蕭梁武帝普通元年庚子_{并後魏孝明帝正光元年庚子}歲始來至_{梁金陵}以降如來心印播_{敷眞丹}佛心宗風吹_{南國}高扇_{於震宮帝網}而遙徹_{于扶桑根抵}故從_{大師東漸}之年紀始書_{下如}圖_{とあり}繼體十四年より起て永祿四年までのことを記し正親町院を今上皇帝と書たりさては永祿四年に鎮西梁山の禪僧道器が撰なることしるし屋代弘賢藏本に古寫本ありてそれには寛永十年まで後人の加筆あり倭漢合運に習て作れるものと見ゆされど取べきこととおほくめでたき書也との所見ひとつふたつを左にあぐ_頭名物六帖書財

○額の始_{推古四年の段に云十一月元興寺成太子額}○大山寺_{平勝寶三云大山寺立○加雅云山}○慈光寺_{延曆廿四年云武州長七云武}○花見御幸_{見御幸始天長八云花}○上野一宮_{元慶六云上}○北面の始_{承元元年云北面始}○武州洪水_{德治元年云九十九}○年忌_{應永廿七云鹿苑院十}○分原合戰_{康正元云正三}○二宮_{康正元云}○三宮_{康正元云}○岡部原合戰_{康正元云}○五十子陣_{文明七云}○武

州洪水_{文明十四云}○富士塚_{文明十八云關東}○武州村岡_{方吉}村明_{應三云}○十六_{氏氏武州村岡内於方吉村}御_{上戸}○立川_{原永正云云}○杉山城_{大永元云}○江戶城_{正三云}○武州葛西_{享祿三云}○淺原山_{燒天文四云}○河越_{城落主上杉朝定}○鴻臺_{天文七云}○沙窪_{天文十五云}○鉢形再興_{天文十七云}○鑊阿寺學校_{御阿寺學校俱美上}○武州洪水_{加筆天正三云}○(廿三)富士塚_{新撰倭漢合圖文明十八年の段に關東}處々築_{富士塚}云々按に小田原記六の卷富士山事の條に武州高尾山に富士權現を勧請せし事も見えたり

○(廿四)名書_に姓氏を細書するは藤原末家の例_{懷紙}の名書に姓氏の字を細書するはもと藤原氏の人本家末家を分んために位署に本家は藤原朝臣を筆太に書き末家はそれにまがはざるやうに細く書く例也これにより源平の人も細く書事と心得たるはひがごとと藤原氏の本家とは攝政家也末家は外々の藤原をいふ此事伊勢貞丈が二上峰にいへり

○(廿五)眞むすび_{山槐記除目の條に夾竿の圖を出し}

松屋筆記卷之三十八

東都 源與清文儒稿

て件夾竿大外記師_{元朝臣作}之與_{予也}寸法如_此以_レ竹作_レ之長_甲方也其員_{廿許}以_二細紙捻_一眞_結之云々とあり

○(廿六)ホイタクウ承仕_{ホイタクウは陪堂と書く也禪家僧司の名にて飯米を司る僧をいふまた承仕といふも禪家の鐘を突ものゝ名也}

○(廿七)同朋_{同朋を倭坊の訛也といふはいかゝあらん同朋の字はもと禪家の力者を同朋といへばそれに出たるにや御成の御供に必從ふものなれば力者の頭を同朋と名づけしも知べからず}

(一)制度擬_{唐禮} 皇國の制度は應神仁徳の御代より漢土の禮をほのぼの傳たりけん宇遲稚郎子百濟の阿直岐王仁を師とし學れしは西晉武帝の代にて晉の禮未百濟には及まじければ後漢三國の禮也三國は惚忙の時にて禮樂定らず後漢はもはら西漢の制度に據たれば皇國最初にまなびしは漢の制度也そのうち聖徳太子の學れしは隋の世の禮に佛家の禮をとりませたる也孝徳天皇の改新の政は初唐の禮也こは中臣鎌子連の作意と見ゆ文武天皇大寶元年の紀に正月朔天皇御_{大極殿}受_朝其儀於_{正門}樹_{鳥形幟}左日像青龍朱雀幡右月像玄武白虎幡蕃夷使者陣_{列左右}文物儀於_是備矣とあるは唐禮全備せる也三代實録貞觀十三年十月の條にも本朝制度擬_{唐禮}と見えたるを思ふべし

(二)家宅の制三變_{與清畿内を歴覽して家宅の制の三變せしを}しる大和の國內橘寺法隆寺などは隋唐の

制を學たる也京都五山は宋の制也宇治の黄蘗寺は明制也之らの佛寺の例にて在家の造作のさまも押はかるべし大和の古寺にはいにしへの皇居をそのまゝ金堂に用たるがおほかり圓圓無住雜談五ノ廿二丁オ鐘樓事ノヲ移シ四明寺ハ天竺ノ祇園精舎ノ一院ヲ移セリ本朝ノ諸神此ノ大安寺ニ學テ作レリト云

(三)代物 奥州會津年譜に天文十九年戊戌九月十日拾ニ永樂通寶錢一用ニ京錢一京錢者歷代之雜錢也傳云駿府大相國公一夕夢レ換レ城醒告ニ忌於本多佐渡守一佐渡守敬曰是公不レ所レ可レ思志路可ニ相換一太易也以ニ京錢一換ニ永樂一公尤容ニ其言一終如レ此云其事倭俗謂レ錢曰ニ代物一代ノ訓志路也故取レ義然也云々按に代物はカハリノモノといふべきをシロといふは字によりていひ出たる詞也俗言に賣しるなすなごもいへり

(四)御湯殿 禁中の御湯殿は浴殿に限たる名にあらず浴殿の外に男末といふ所ありそは主上の陰の御膳を調る所也御茶の湯など常に湧したる所なれば御湯殿といふ也陰の御膳といふは主上の常の供御也晴の御膳は濱島家調進し常の御膳は高橋并大隅長門より調進すれどいづれも規式而已にて當時供御にはならぬ料理也さて晴御膳常御膳ともに供御にならねば

陰御膳とて御湯殿より調じて奉る也武家に七五三五五々三などの晴の膳の時は別にふくさの御膳とてまゐらするがごとし

(五)讀師講師發聲 和歌御會の時歌の讀師は懷紙をひらくのみ也講師はふしなしによむ也發聲は節をつけて歌ふ也これは神樂の家のわざにて飛鳥井持明院小倉などの人々也樋口秘記に見ゆ今の世下賤の會に披講などするはいみじきひがごと也

(六)うはざしの矢井落シ矢 軍將神社に祈請のをり上指の矢を奉るものにおほく見ゆうはざしの矢一名おとし矢といふそは籙には矢甘本さす定也籙の時十九本は内に入てさし一本の大雁股を外の方にさすこれを公家にはおとし矢といひ武家にはうはざしといふ也うはざしを奉るといふは雁股の矢を奉ると也

(七)お夜長の御膳 婦女の詞に夜食をオヨナガといへりこは禁中にて大床子の御膳のおろしを女中の夜食にくふを夜長といへりこれより出たる詞也

(八)髪の中剃 髪の中を少しばかり剃て毛のおほきをすかすは二條康道公髪あつかりしゆる髪の中を剃

られしに始るよし樋口秘記にいへり與清按に撰集抄砂石集太平記などに月白といへるものこれ髪の中剃也二條康道公に起るにあらず

(九)薄疊井ウスベリといふ敷物 今の世うすべりといふはいにしへの薄疊也今の「タ、ミ」はいにしへ厚疊といへり

(十)チャ／＼ムチャカウ井ヤタラ漬 近江より禁中献上にチャ／＼ムチャカウといふもの有郁子籠などの類にて女房執奏也色々の木葉を取あつめて漬物にしたるもの也鞍馬の木芽漬は顯注密勘庭訓往來などに見ゆ近來江戸にヤタラ漬とて茄子や瓜やとり交て漬たる香物あり大森の里の梅びしほ屋にて賣也チャ／＼ムチャカウは俗言にわけもなく混雜せしをチャ／＼ムチャクといふにおなじ心の名也ヤタラも俗にヤタラムシヤウなどいふのヤタラの義にて名付たる也圓圓一未別名就事係にヤタラ拍子

(十一)身屋 越後人の方言に家の本家を「ムヤ」といひその「ムヤ」の左右に作りそへたる家を「ツ」を寢屋とし「ツ」を雜屋とすいづれをも中門とよべりとなん中門は帳の屋などいふ事にや心得がたし「ムヤ」は身

屋とも母屋とも古書に見えたるこれ也母屋寢殿など所見あぐるにいとまなし

(十二)女房文に月日しるす 源氏提要四の若菜上に惣じて女房文には月日付はなき物なれどもこれはこの月その日としかとしらせんがためにもと思ひて書たるなるべし云々

(十三)繪の上に歌を押す 源順集に内裏に女親王たちの御れうに月次の繪かゝせ給うて殿上人に歌をおしつけさせ給ひ云々今傳はれる古畫の上に色紙の押て歌書たるおほしこれいとふるくよりの體裁也

(十四)籠ため形 大河内秀元衛門が松平物語一の卷元龜三年五月神君駿州田中城の信玄が勢を攻給はんとて大井川を渡し給ふ時大河内善一郎伊良尾が瀬をわたして功名せし事をしるせし條に大河内善一郎進出何條事の候べき水かさの干落るをまつ迄も候まじ某先瀬ぶみ仕て御見に入奉んとて手勢并に七十五騎に下知をなし各障泥をとり鏡をつなぎ肌帶をしめ互に鏈笈を組て向の洲先籠ためがたに渡すべき旨機を賦る家康公開召おびたしき大水也危きとなれば無用たるべしと再三制し給ふ大河内聞もあへず伊良

尾が瀬へ馳下り真先に進み漲る早川に馬を颯と馳入云々此外篋タメ形といふ詞合戦の書に所見おほし今俗筋遠といふがごとし

(十五)藏法師 今世江戸深川の藏守をクラボウシといへり藏家守の事也嵯川親元日記に正實房定泉房などいふ御倉法師あり將軍家の御倉預也足利の代には同朋倉法師など五山の僧徒の官を用られし事ありそは學問の道僧家にありて何事も五山僧に問はからるる世なれば自然かゝる事も出来し也同朋は僧家の供法師の名目をやがて將軍家の御供の人の名目にも用し也俊坊などいふ説はうけがたし 爾書卷四十七廿四丁右藏法師同四卷八丁又十二丁右藏法師記四

(十六)大方殿御方 太平記伯耆の卷などに大方殿とあるは母堂の事也親元日記にも將軍の御母堂をば大方殿と書たりまた御方といふは御方御所ともいふ御方住居の義にて將軍家の御嫡子の事也親元日記には御方御所と書たり

(十七)十六島藻 雲州の産に十六島海苔ありこれをウツフルヒといふ讀耕齋文集六の卷に十六島藻贈金節一書あり其文に自雲州一到東武之一輩贈余以

十六島海苔告曰入之水中心挑出而浸以醋浴之或點以醬且熬酒冷汁亦可也十六島倭訓鳥都不流比此是雲州之海島依其所出以名之余素聞十六島之名及訓矣其品味乃始見之其色紫黑色如脩髮之垂結如束幣之亂披因以爲盤之武輕滑淡脆頗含潮氣可謂美之珍也箸之助也倘有不識之者則唯察十六島之可爲地名而豈解其爲海苔與俗訓也哉夫絹之於八丈島也鮫之於竹島也鰯之於五島也銃之於多瀨島也皆今世就其所產之島而爲其物之稱十六島亦此例也海月之訓久良介海松之訓美留梅法師之訓保也淡菜之訓宇美多介皆海味訓釋之最難讀者也豈獨怪十六島之得聞而後知之也哉十六島固是非八割八別之相遠也惟其小洲曲汀淺灣直坵離々累々偶有二三八之數乎所謂八十不足之隈及八十瀨室八島等之類乎且既是雲州之地也試援雲州之往蹤認之八重籬之八雲可併擬十六島之算者耶非耶云々見ゆ按にウツフルヒといふは打篩て製造するゆゑの名歟土人の考を俟べし

(十八)鈴生 種山言語 菓物のおほく枝になりてだれ

たるを俗言に鈴生といへり堀川百首夏履橋顯仲歌に「わかその、花橋の色見れば金の鈴をならすなりけり」一本には金の鈴のなれる也けりとも有夫木抄夏一にも收むこは朗詠花橋詩に枝繫金鈴と作れるにおなじく橋の枝になりたるをやがて金の鈴にたとへし也俗言の鈴生はこれに出たる也けり

北越雪譜下卷廿六山言語の條に深山にありて事をなすには山ことばといふものありてこれをつかふ忘れて里のことばをつかふ時は必山神の祟りありといひ傳ふ他國はしらすその山言語とは米を草の實味噌をつぶら鹽をかへなめ焼飯をさわう雜水をぞろ天氣の好をたかといふ風をそよ雨も雪もそよが舞といふ装をやち笠をてつか人の死をまがった又はへねた男根をさったち女陰を熊の穴此餘あまたありさのみはとて記さず女陰を熊の穴といふをもて思ふにこれらのことば、商家の符調といふものにおなじかるべし云

(十九)忌詞 古く齋宮齋院の忌詞ありて延喜式に載らるまた常の詞にも病を歡樂酒妻鏡の外臍帯を切をホソノヲ、繼グ榮花卵梨をありの實理の書などいふ類

古書におほかりこれをしらすしては皇國の古書に解しがきこと少からず或儒者の吾妻鏡の註釋せしものに頼家御歡樂によりて人に對面なきよしを書たる處にかく放逸の振舞なれば天下を失るよしをことくしく論じいひたるはかたはらいたき論者也此書二冊刊本也取に足らぬ説ども也

(廿)數の調半の字 物の數の調半の字を今は丁半とも長半とも書くは借字也調半と書べし調は「ト、ノ」義半は「ハシタ」の義也定家卿の愚秘抄に調半の字を書れたり

(廿一)浦わけ衣 山わけ衣露わけ衣などは常に歌によめり浦わけ衣ともよみたる有壬二集下に「夕嵐浦わけ衣吹はらへもしほのけふり立やそふらん」此歌夫木抄雜十五にも載たり

(廿二)願文祭文の自作 父祖の碑文墓誌などは有名の博士に乞て書しめ行狀は自記することから國の例也近比服元喬が其子の祭文書たるをあるまじきことのやうに世人いひかたふくめり源氏夕顔に源氏自夕顔の願文を書て文章博士に添削させられし事見ゆ河海抄に清和天皇自作の願文を例に引て注したり一概

にはいふべからず通五 (廿三)年給・除目抄に公卿給事云々執筆大臣除日月若次月之間作公卿給下給大外記大外記召具式部丞參里第以_二上薦家司_一給之或召_二簾下_一自給之六位外記參之時以_二家司_一給之公卿給中_二合停任卷籠_一天給之式部丞_二合中停任卷籠_一天給之不給公卿給一件文無_二禮紙_一紙_二合停任各_一通也一通_二給外記_一一通_二給式部丞_一直廬儀之時攝政作之召_二外記_一下之攝政不_二帶大臣_一者傳_二一上_一給外記云々但曆仁正攝政殿雖不_二帶大臣_一給召_二大外記師兼_一被_二下_一之又仁治三三三_二五縣召除目始關白殿被_二下_一之關白殿執筆左大臣可_二令_一下給之由關白殿雖_二令_一申給_二左府令_一申_二子細給關白殿令_一下給先例不_二詳猶左府不_一可_二令_一下給_二歟_一○内給以下外國年給事於_二年給_一者縣召除目之時不_二被_一下_二勘_一是不_二可_一有_二相違_一之故也雖_二春除目名替國替任符返上等之類_一申文者勿論可_二被_一下_二勘_一又雖_二當年給及京官除目之時_一被_二下_一勘之_二院宮已下公卿給同前於_一内給并直廬儀時攝政給者不_二下_一勘之由有_二舊說_一然而被_二下_一勘之○内給掾二人目三人一分廿人掾ヲバ稱三分目ヲバ稱

二分一分ト云者史生郡司等之類也近代不_二被_一任_二一分ヲ別シ_一天一分召ト_二天任_一之普通召名ニハ不_二書加_一也云々年給の事建武年中行事あがためしの條蟬冕翼抄大間書江次第魚魯愚抄などに見ゆそは毎年除目の時給はるもの也年官ともいふ縣召除目の時に諸國掾一人目一人一分_二史生_一三人を給ふまた京官除目の時内官一人を給ふ又年爵とて除位の時從五位下を一人給ふ也除位は正月五日に行はる大臣年官年爵を給はりて己が心に任せ從五位下を一人申除する也また内官一人諸國の掾目史生などを申任す大臣にかざらず納言參議親王内親王などの給にて受領し國の掾目史生などに任する人おほかり官職難義に年官年爵とは春除目に諸國の掾一人目一人秋除目に内官を給ひ叙位叙爵を一人給はる也給をば誰にても申任じ給ふ事也云々國圖公卿和任に四位の人にも院親王内親王などの御給ありそれは別段の事なるべし (廿四)河藥侍中群要四の卷御浴殿條に御厨子所參上供_二御河藥_一事云々江家次第第十五の卷大嘗會の條七丁_二主殿寮供_一御湯云々治曆長元御記作_二著_一天羽衣入令_二下_一御槽給又以_二一領_一奉_二拭_一云々承保供_二御河藥_一入_二土器_一折敷云々江家次第第十五の卷の條に御河藥白

米也自_二御厨子_一所進_二之入_一土器居四足云々禁秘抄上卷恒例毎月初次第の條に早旦供_二御湯_一云々内侍候_二御垢_一典侍或上薦女房進_二御湯帷_一奉_二河藥_一次典侍取_二河藥器_一抛_二板子_一時藏人鳴絃云々旁注に香ヲカリテ出也云々此旁注流布の印本にあり禁秘抄階梯上卷九に奉_二河藥_一江次第大嘗會承保供_二河藥_一居_二土器_一侍中群要第四御厨子所進參上供_二御河藥_一日中行事四あしにするたる御かはぐすりをとりて云々又云次典侍取_二河藥器_一抛_二板子_一時藏人鳴絃云々日中行事御かは薬をとりてまゐらせてなぐる時かはらけのおを聞てどのもりの助なるくら人弓の絃をうつ云々日中行事に御ゆどのへおりさせたまひて御ゆめしぬれば典侍もしは上薦の女房御ゆかたびらを奉る四あしにするたる御かはぐすりをとりてまゐらせてなぐる時かはらけのおを聞てどのもりのすけなる藏人とのもりならて弓の絃をうつ云々略解に御抄の傍注に香をかりて出すとあれば薫藥なるべし云々與清曰河藥は白米を水に漬してその水を天子の御厨にぬり給ふ也河藥と書は借字にて實は皮藥也皮膚をしてうつくしからしむる藥也薫藥と心得たるはいみじきひが事也

(廿五)名の片字 照光記建久七年五月五日の條に次手結文令_二請印_一云々持來更卷懸紙令_二封_一了持來書名片字返給了云々照光記は十九卷ありといへり余が見しは建久七年五月六月の卷と建仁二年二月三月の卷との二冊のみにて百五十年許の古色の寫本也 (廿六)大尺 同書同月十一日の條に午時許相扶參内大臣殿御出丁云々追參_二大内_一今日依_二御歷覽_一一昨日有_二其召_一以_二人々指圖_一委被_二注_一大尺等云々與清按に大尺は丈尺の誤歟又は丈尺の異名を大尺といへる歟丈尺は今の世の尺杖といふ物の事也盛衰記など古書に丈尺の所見おほかり (廿七)六借井目ハツキと云草むつかしといふ詞はいとふるくより見え字も六借と書たる所見おほかり照光記建久七年五月十四日の條に今朝脚有_二小瘡_一雖_二不可_一驚喚直能令_二見_一之處頗似_二六借物_一無_二懈怠_一可_二付_一藥之由示_二之_一自_二ハツキ_一驚付_二之_一云々メハジキは節用集に天魔草蕪草菴菴荒蕪などをメハジキとよみ即益母也と注したり (廿八)風流井馬長 照光記建久七年六月十四日の條

に於北大路棧敷見物入道殿同御坐今年梶井宮内力者有別願渡之云々以金銀錦繡施風流皆悉著指貫平笠馬長廿餘騎云々按に風流の所見既にいへり馬長はムマノヲサ也吾妻鏡に見ゆ筆記十三ノ四願圖下學集下卷三ノ十願圖下學集下卷三ノ十願圖下學集下卷三ノ十

(廿九)酒氣 同廿六月廿一日の條に内大臣殿自昨日御風氣之由開之午時許馳參謁女房昨日於泉候御前之間御心地違例之由被仰入御其後事外六借御酒氣相加今日同事之由云々今按に御酒氣は御臍氣也音の通するをもて借用し也

(卅)天狗 同廿三日の條に今日刑部語云昨晚侍雜仕開妻戸出之間著柿法師走懸欲取付仍逃入妻戸内止思之間絶入了所司見付令昇出昨今猶度度絶入是天狗所爲歟此一條殿惣不吉也云々按に一條殿病中の事也天狗の所見は村瀬氏が藝苑日涉に擧たりき

(卅一)荒和秋の菅貫 同廿九日の條に荒和秋不堪著如雁衣之間以衣令菅貫今夜陰陽師資元が云姪者不菅貫也俗説云六度菅貫之如何此各大謬説也只如例秋雖向贖物不立之由稱之仍今夜用此

説云々按に如雁衣の如の字蓋衍歟または加の字なごの誤にや可考願圖政治要略廿九

(卅二)東庄 照光記建仁二年二月七日の條に最勝金剛院領伊賀國大内東庄云々按に東庄とは庄の東の方をいふよしの名也本庄新庄北庄などもとよりの庄園を本庄新しきを新庄庄の北の方を北庄といへる名也庄内といふも其庄の内の義也願圖東鑑六ノ十七丁ウ印

(卅三)和歌所 同月九日の條に自和歌所有三首題云々按に和歌所の事明月記家長日記古今著聞集などはじめとして所見おほかり

(卅四)遊女 鄂曲亂舞 同月十五日の條に今朝頭々遊君各賜衣裳云々また申時遊女鄂曲等了云々同月廿一日の條に遊女列座亂舞如例云々

(卅五)猿樂候 御前庭 同十六日の條に巳時參上今日猿樂依召參御前庭施其藝公卿以下候御前末座殿上人上北面等自閑所見之申時許事不訖以前退下各賜馬一疋願圖外出云々

(卅六)宮廻 同廿二日の條に巳時許出京參日吉酉時許宮廻通夜願圖云々又三月十日の條に天明之後出京參日吉巳時參著沐水宮廻了入宿所小倉歸京未

一點入高倉云々按に沐水は沐水の誤歟水をあみて後宮廻せられしなるべし小食は明月記杯にも見えて臨時の食也此時の小食も巳時と未時との間なれば午時なるべし

(卅七)スミトクサの狩衣 井五體不具の穢 同三月朔日の條に一日雨晴不具穢云々午時參院スミトクサノ衣也依老風也但スミトクサハ壯年若者之歟云々

(卅八)持佛堂 同六日の條に持佛堂北廂稱北面一方昇左進大夫云々按に持佛堂は古書所見おほし願圖下集家廂門ニ持佛堂

(卅九)梅花三月開 同十五日條に近日梅花之盛也今年花甚遲梅及二月晦開遲梅近日猶盛也云々按に三月十五日梅花の開こといごめづらし

(四十)和歌の讀上 同廿二日の條に乘燭之程御供參院今夜和歌六首其内三首可誦進之亥時許出御和歌所有召參御前依仰置和歌又依仰讀上大臣殿令取進給應喚叢長明家隆定家寂蓮座主大臣殿御製之外六首有家雅經有催不參所勞自餘無催今夜歌各宜次有當座會加之暮春又依仰讀上入御退出大ニフトキ歌暮夏からひ由也云々 秋冬艶體立旅云々按に大にふ

とき歌からひたる歌なごのこ長明無明抄に見ゆ

(四十一)懷紙 井柳宮 同廿四日の條に攝政於南面方召院司長兼令書手結給保近朝經書之云々仁安ノ書之長兼取視懷紙持參柳宮書訖持參御所奏之御所ハ北面廂中云々按に此懷紙は和歌の懷紙にあらず競馬の手番を記す料の懷紙也願圖下學集下ノ十三柳枝作之一尺四方也云々

松屋筆記卷之三十九

東都 源與清文儒稿

(一)遊女井遊君別當 吾妻鏡十の卷^{廿八}於^二橋本驛^一遊女等群參有^三繁多^四贈物^五云々^六頼朝上洛の時遊江國^七同^八十^九三^十手越^{十一}黃瀬河已下近邊遊女令^{十二}群參^{十三}列^{十四}候御前^{十五}而召^{十六}里見冠者義成^{十七}向後可^{十八}爲^{十九}遊君別當^{二十}只今即彼^{二十一}等群集頗物念也相^{二十二}率^{二十三}于傍^{二十四}撰^{二十五}置藝能者^{二十六}可^{二十七}隨^{二十八}召^{二十九}之^{三十}由被^{三十一}仰付^{三十二}云々其後遊女事等^{三十三}至^{三十四}訴論等^{三十五}義成一向^{三十六}執^{三十七}申之^{三十八}云々また^{三十九}安祐經王藤内等所^{四十}令^{四十一}交會^{四十二}之^{四十三}遊女手越少將黃瀬河之^{四十四}鶴等^{四十五}云々また^{四十六}會我十郎^{四十七}祐成妻大磯遊女^{四十八}虎^{四十九}云々又^{五十}故會我十郎^{五十一}妾^{五十二}大磯虎^{五十三}遊女^{五十四}着^{五十五}黒衣^{五十六}迎^{五十七}亡^{五十八}夫^{五十九}三七^{六十}日忌辰^{六十一}於^{六十二}宮根山別當行實坊^{六十三}修^{六十四}佛事^{六十五}捧^{六十六}和字諷誦文^{六十七}云々同^{六十八}十七^{六十九}に頼家卿相摸河邊^{七十}遙^{七十一}云々到^{七十二}大磯^{七十三}令^{七十四}止^{七十五}宿^{七十六}給^{七十七}召^{七十八}遊君等^{七十九}被^{八十}盡^{八十一}歌曲^{八十二}云々遊君愛壽俄以落傍云々平治物語參考^{八十三}二^{八十四}に義^{八十五}朝は兎角シテ美濃國青墓宿^{八十六}ニ著^{八十七}玉^{八十八}ヲ彼長者大炊ガ娘^{八十九}延壽ト申ハ頭殿御志淺カラズシテ女子一人オハシマ^{九十}シケリ云々又^{九十一}都^{九十二}ニテ江口腹ノ御女鎌田ニ仰セテ

害セラル云々又^{五十一}大炊延壽ヲ初テ遊君共參リ斜ナラズモテナシ奉ル云々長門本平家物語五の卷室泊の遊君歌事の條に入道相國下向の時室の泊に著れたり彼の習なれば遊君共參りておもひく^{五十二}に幸をひく云々新撰字鏡女部に嬉遊逸也戲也宇加禮女云々和名抄二の卷乞盜部に楊氏漢語抄云遊行女兒宇加禮女^{五十三}云阿會比今案^{五十四}又有^{五十五}夜發之名^{五十六}俗也保知^{五十七}本文未^{五十八}詳但或說白晝遊行謂^{五十九}之遊女^{六十}待^{六十一}夜而發^{六十二}其淫奔^{六十三}謂^{六十四}之夜發^{六十五}也云々大鏡八の卷^{六十六}河尻のあそびしる云云大和物語下卷に亭子院の御前にて遊女しろうたよむ云々古今集離別に白女が歌いのちだに云々万葉十八に遊行女婦土師云々同十九に蒲生娘子の^{六十七}歌見^{六十八}云々往吉物語^{六十九}河尻のあそびもの云々盛衰抄二の卷白拍子遊女傀儡云々新編古今後京極殿たれとなくよせてはかへる浪枕云々夫木抄慈圓浪の上にこがれて過る云々又仲正川の瀬に浪の津云々庭訓往來四月に傾城白拍子遊女夜發之輩云々朝野群載三大江匡房遊女記云々又傀儡子記云々世事談綺五の卷^{七十}傾城云々六百番歌合うかれめ^{七十一}うかれ^{七十二}てあり^{七十三}く旅^{七十四}やかた^{七十五}云々又浪のうへにうかれて過るたはれめ^{七十六}も云々續千載に

一夜あふ行來の人のうかれづま云々一目千軒に傾城町云々和事始^四十訓抄十一^五此外遊女の所見舉盡しがたし今心にうかぶま^六に書つく^七落標^八云々當津の柳陌は往昔天正慶長の比より諸所に遊女を抱渡世の者有しを寛永年中に今の土地を下しおかれ諸所の遊女を一所にあつめ一廓の内に軒をならべさせ其比木村亦次郎といへる浪人者に右廓の庄屋年寄を被^九爲^十仰付^{十一}永く傾城町となる今寶曆七年まで凡百卅年餘になる也前にいふごとく新に町となりしより世人新町とよぶ惣名也又當津にては中といふ云々古樂苑廿六の卷^{十二}に遊女^{十三}曲氣^{十四}氣蘭^{十五}麝體^{十六}芳滑^{十七}容色^{十八}玉耀^{十九}眉如^{二十}月珠^{二十一}瓊螺^{二十二}姫^{二十三}戲^{二十四}金闕^{二十五}遊^{二十六}柴庭^{二十七}舞^{二十八}飛閣^{二十九}歌^{三十}長生^{三十一}云々按に柴庭は紫庭にや可^{三十二}考^{三十三}紅毛雜話五の卷に嫖客はいづれも獨身者にて有妻の人は遊女の樓に登らざるよし見ゆ^{三十四}照光記建仁二年二月十五日條に今朝路^{三十五}入^{三十六}此中^{三十七}兼定^{三十八}一^{三十九}日^{四十}被^{四十一}仰^{四十二}調^{四十三}以^{四十四}如^{四十五}此^{四十六}事^{四十七}已^{四十八}以^{四十九}出身^{五十}云々申時如^{五十一}例^{五十二}遊女^{五十三}御前^{五十四}立^{五十五}降^{五十六}子^{五十七}定^{五十八}事^{五十九}也^{六十}大^{六十一}房^{六十二}見^{六十三}物^{六十四}也^{六十五}手^{六十六}時^{六十七}計^{六十八}出^{六十九}御^{七十}云々遊女^{七十一}列^{七十二}坐^{七十三}亂^{七十四}舞^{七十五}如^{七十六}例^{七十七}云々新編樂部遊^{七十八}女^{七十九}夜^{八十}發^{八十一}之^{八十二}長^{八十三}者^{八十四}云々

以^一禮體^二政所謂君子之道蓋在^三於斯^四若^五巫醫樂師百工^六即其業雖^七賤各能守^八其職^九以^十此食^{十一}農之所^{十二}作衣^{十三}紅之所^{十四}織其所以資用供令多矣^{十五}國^{十六}紅者工女也見^{十七}于^{十八}夫^{十九}如^{二十}此^{二十一}而無^{二十二}罪^{二十三}於國^{二十四}嗚呼自^{二十五}俗儒^{二十六}以下淫^{二十七}書而醉^{二十八}詩志^{二十九}不^{三十}存^{三十一}典刑^{三十二}口^{三十三}不^{三十四}分^{三十五}名^{三十六}分^{三十七}沒^{三十八}世^{三十九}唯唐是拜其愚與^{四十}所謂俳諧師^{四十一}何異而俳諧師之徒世爲^{四十二}最多^{四十三}松屋高田先生有^{四十四}觀^{四十五}於此^{四十六}將^{四十七}就^{四十八}其多者^{四十九}而喻^{五十}之^{五十一}素^{五十二}雖^{五十三}成^{五十四}乎^{五十五}戲^{五十六}造^{五十七}亦有^{五十八}深旨^{五十九}乎哉蒲生秀實識此文のむなしくちりばひうせんことを哀てこゝに書つく

(三)天日嗣井某朝廷 天日嗣の字は大戴禮に出たるを本朝の古書にかり用て書たる也また淨見原朝廷難波朝廷など書は史記秦本紀に咸陽朝廷と見え詩數外編一^四に秦朝廷などもあればもとから國の字を用たる也

(四)彌五郎男申狀 目黒村高峯山長泉律院に南都東大寺より得し古き經論おほかり古文書なども相まじれりその中に七條大和路住人彌五郎男が申狀あり其文云

七條大和路住人彌五郎男謹言上

欲^一早^二召^三賜^四海^五印^六寺^七御^八領^九内^十長^{十一}法^{十二}寺^{十三}人^{十四}松^{十五}女^{十六}井^{十七}阿^{十八}佛^{十九}等

所隱置彌陀女子細事

右子細者於彼彌陀女者自又次郎男之手令賣買歟取之多年間雖召仕更無子細之處去年二月之比不慮令逃失之間賣主懸于又次郎男相尋之處同四月於海印寺御領内長法寺尋相手而彌陀女之母松女并阿彌陀佛等于今悵不返渡之間則又次郎男捧訴狀訴于本所之處女陳申云於彼又次郎男者雖爲本主人賣渡于彌五郎後者更以不可相綺云云取意此條爲通當難所構奸謀之也歟其故者又次郎男爲本主人可相懸彌陀女之逃失之由及約就賣渡于彌五郎男任彼契約致其沙汰之條更非何寄事於左右可申子細哉所詮望又次郎男一旦雖申子細于彌五郎男者更不可申子細之條其理況必然也爰同申狀被買取之後雖被相憑夫妻得暇罷去云々取意此條頗不足言事歟也賣買歟取彼彌陀女之後至去年爲主從之儀不爲妻品品條且在地近顯然也未曾有申狀也而只無何非召仕既自他人之手賣買歟取豈賜暇乎尤可有上察者也若又實暇給者尤放狀可在宜作有之若不所實申狀旁以爲顯然所詮任道理速爲召賜彼彌

陀女□者歟言上如件按に此申狀蓋六七百年前の物歟彌五郎は五郎の子を小五郎その子を又五郎その子を彌五郎といふ又次郎は次郎の子を小次郎その子を又次郎といへる也放狀は暇を給よしの狀なるべし
(五)増上寺成譽僧正辭世 芝三縁山増上寺第四十五世成譽僧正は寶曆六丙子年八月四日年七十七にて寂し給ふ辭世に「七十七年夢忽覺還西天無礙光明裡瞻仰彌陀山」八十までひさしくかりしかりの身をかへして今は西へ行也」前大僧正速達社成譽上人信阿大玄和尚と號す武藏荏原郡下目黒村高峯山大玄寺長泉律院は此成譽僧正の開基也
(六)花殿八會章の跋 長泉律院の古經論の中に花殿八會章あり紙員廿一枚あり奥書に華殿八會綱目章一卷
天平神護元年四月廿二日東大寺僧與顯此書學者重内終不文當成眞佛子廻此功德施法界皆願當得寂靜樂
とあり學の字は與の古字歟學の略體歟天平神護元年の墨痕今に傳はれるもの珍重すべし
(七)如來出現品抄 長泉律院に如來出現品抄の古寫

本あり卷首に「如來出現品抄十九上淨辨」また「大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔卷第十九上」清涼山大華嚴寺沙門澄觀述と見え跋に「嘉祿三年四月一日於石水院御前讀之始之同六月六日讀之了」安貞二年八月十八日午時終許於高山寺草菴點之「同年九月十八日未時許於梅尾住菴以石水院淨辨御本校了」貞永元年七月九日自禪師御房給之淨照とあり

(八)諸侯の年號を書す 因宣堂法帖丑集に載たる漢五鳳石刻に五鳳二年魯卅四年と見ゆ跋に石曰五鳳二年者宣帝號也曰魯三十四年者餘孫魯孝王時也先書天子大一統之年次書諸侯封國之年此漢人之例也といへり

(九)印章は白字を古とす并鈕 清人張應が清秘藏上晋漢印章條に印章以小篆白文爲古其或朱文及大篆鐘鼎篆者皆變體也鈕以龜爲正螭與辟邪駝次之其或以龜以虎以兔以馬以豸以鹿以羊以魚以狻猊以異獸以錢以亭者皆變體也と見ゆ同文通考に印章の事をいへり考べし

(十)繪馬 神社に繪馬を奉ることは法華驗記下卷四十七元亨釋書卷九丁神社考下六十一舊本今昔物語十三册

四南嶺遺稿一の卷和訓栞惠の部神社啓蒙或梅窓筆記下本朝文粹十三朝野群載二の太平記九阿保秋山河原軍の條宣胤卿記一水正十七年十運歩色葉集四の卷衛部軍器考の條同集古圖說などに見ゆまた南郭遺契に唐鄭還古博異志云王昌齡馬當山謁廟乃命使贊酒脯紙馬獻于大王丹鉛錄云吳泰伯祠在闔門之東每春秋市人相率醴多善馬綵與美女以獻之云云國圖神馬ナ木偶馬ニスルト史記東寺書抄九の十九丁オ木像馬云々板立馬トモ松の落葉四ノ四丁オ同五丁オ

(十一)中風の妙藥 中氣は醫療の難とする病にて天刑ともいひつべしこれに一の奇藥あり椶櫚の若葉を黒燒にして即時に用れば忽に平愈して再興ることなし若葉なければ古葉にてもよし用時遅きものは功なし常に貯持て人を救へしこれ仁術也

(十二)武藏多摩郡矢部八幡宮の棟札 武藏國多摩郡小山田領下矢部村に八幡宮あり別當は修驗山伏の大先達覺圓坊とて隣村木曾村にありその宮の棟札は天文年中の物也といへりそれに近邊の人々の姓名をしるしたるをここにあげ

三澤五右衛門 朱書 木曾村ニ三澤五右衛門ト云者アリ 其祖歟トイヘリ

石川藏人 同 木曾村ニ石川圓助ト云者アリ

井上惣兵衛 同 木曾村ニ井上氏アリ
 高梨子 同上
 三澤 同上
 井上 同上
 石川兵庫 同上
 飯田權兵衛 同上 木曾村ニ飯田五兵衛ト云者アリ
 朝野間縫右衛門 同上
 秋元準上 朱書 準上ハ準人ノ誤歟
 小野路村中
 眞光寺村中
 大澤玄蕃 朱書 木曾境川ト云處ニ大澤氏アリ
 五十根次郎右衛門
 武藤佐次右衛門 朱書 原町田ニ武藤氏アリ
 三橋
 新野
 松
 神倉
 石川小八
 酒崎圓心
 長左衛門

勘左衛門 朱書
 鬆崎彦左衛門 朱書ノ字未詳
 河合
 守屋左近 朱書 根岸村ニ守屋氏アリ
 中里喜三郎
 次左衛門
 小池三次郎
 河井又八郎
 河井宮内
 天野喜左衛門
 川本吉左衛門 朱書 木曾村ニ川本氏アル歟
 澁谷三十 同 森村ニ澁谷氏アリ
 若林但馬 朱書 下小山田村ニ若林氏アリ
 小山内記 同 下小山田村ニ小山氏アリ
 薄井主馬 同 下小山田村ニ薄井氏アリ
 田中万太郎 同 上小山田村ニ田中氏アリ
 右の棟札を天文比ならんといふは下小山田村に薄井三左衛門とて舊家あり薄井主馬が子孫にて主馬が子に與右衛門とてあり主馬及與右衛門が墓今存す主馬

は天文中の人なるよし三左衛門いへり右の朱字も三左衛門が談を書入し也
 (十三) 小山田領の永高 武州多摩郡小山田村は小山田氏が舊領にしてその城蹟今は下小山田村の禪宗大泉寺の境内の山にあり鎌倉大草紙に小山田が城と有もこゝ也さて小山田氏が所領の村々を今も小山田領といふ下小山田村の舊家薄井三左衛門が家に小山田領永分といへる書付あり古色にして二百年前の物と見ゆ其文云

小山田領永分
 九拾六貫六百三拾貳文 成瀬村
 九貫五百廿壹文 小川村
 拾三貫七百六拾五文 高坂村
 貳拾三貫四百四拾五文 森村
 四拾五貫五百七拾文 木曾村
 五拾壹貫貳百八拾三文 山崎村
 拾貳貫六百四拾七文 町田村
 貳拾九貫八百九拾三文 熊ヶ谷村
 拾壹貫七百九文 眞光寺村
 貳拾八貫四百拾三文 黒川村

拾六貫貳百七拾貳文 鶴間村
 拾七貫六百文 金森村
 拾四貫七拾貳文 大谷村
 廿六貫貳百九拾文 金井村
 七貫六百九拾文 廣袴村
 拾四貫六百八拾六文 大カ 木倉村
 〃四百拾五貫八百八文
 按にこは北條分限帳の書抜也木倉は今は金井村の内の小名になれり又は大倉の誤成べし上小山田村田中宗右衛門といへる舊家に慶長三年の水帳ありみな永錢の定にて石高にはあらずそは上小山田下小山田と別れざる以前也
 (十四) 一向宗の御白薬 紀州法然寺圓成上人ハ十八歳ニシテ出家ス則一向宗ノ人也其母初嫁シテ圓成ヲ生再縁シテ一向徒ノ妻トナル其寺先ニ一子アリ此以圓成淨土宗トナル其母語云我宗ニ御白ト云フアリ何ヲ以テ作ル事ヲ知ラズ或云白犬ヲ養ヒ其犬ヲ全ク地中ニ埋ミ首ノミヲ出シテ種々ノ珍味ヲツラ子其首ノ前ニ置ク白犬此ヲ喰ント食物ヲ念ジテ氣單ニ通ルニ及ビテ犬ノ首ヲ切テ是ヲ焼灰トナス此灰ヲ人ニ與ル

時其人大信ヲ起シテ單ニ身命ヲ願ズ財寶ヲナゲウツト云如レ此邪教ヲナス汝此宗ニ居ルベカラズト終ニ鎮西ニ投ジテ出家シ淨土奮迅鈔ヲ作り教行信證ヲ破斥スト云々兩本願寺東都參向ノ時分道俗均ク御杯頂戴ト云フ有リ御盃頂戴ノニアラズ御灰頂戴ノヨシ各土器一枚ヲ得テ歡喜ス此灰ハ親鸞聖人ノ遺灰ニシテ此灰ヲ服スル時此身則親鸞聖人ナリト傳受ス一説ニ此事ヲ御白ト云ト云々運領上人及當麻與院幡海上人始住二條清光ハ兄弟也其父ノ家ハ一向門徒ノ豪富也曾テ門跡歷代死相ノ不善ヲ聞テ二子ヲ淨家ニ投ジテ出家セシム兩門跡歷代將死時七顛八倒其相不可忍見ニ此時ハ簾中連枝トイヘドモ其傍ニ入レズ家老ノ下妻氏ナド云フ如キ譜代昵近ノ者ノミ介抱ス死テテ沐浴シ灰ノ如キ物ヲ死骸ニ散ズ其時惡相忽變ジテ無上殊勝ノ好相トナルサテ諸人ニ拜セシムルハ恒例三日ナリ愚人此相ヲ見テ渴仰シ讚歎歡喜スト云々御白ノ西國中國邊ノ人ハ時々云出スアノ東ニテハアママリ沙汰セヌ也秀鸞上野高崎知己ニ深川某寺ノ上人モ一向宗也兒ノ時御白ノ事ヲ聞知リ御白ト白犬ノ灰也ト云テ母ニ叱ラレシト語キ此上人モ中國

産也云々鶴木村光明寺ノ靈祐法師ハ雲州人也其師故郷ニ至テ考妣ヲ追福ス其寺一向徒也即彼寺ニ入茶一碗ヲ服ス香烟不レ常快服畢而歸扱其寺ノ玄關破壞ヲ見テ頻ニ信心オコリ金五十兩ヲ出シテ修復ノ用途ニ宛ツ師ノ性質甚慳吝ナリシカドモ頻ニ寄進ノ心坐ジテ彼一向寺ヘ財施スルヲ厭ハズ五年許ヲ經テ後頓悟シ羹ニ茶一碗ヲ服セシハ例ノ御白ナリケンユエニカ、ル臆念モ起ルニコソト懺悔シ七日別時シテ後遂ニ本念ニ復スト云々右ノ説ハ高崎善念寺ノ僧秀覺ガ筆記ヲ上州白井源空寺ニテ僧ノ亮運ガ寫セシ也其書名ヲ披秀撮要ト云一卷アリ爾時ノ錢香香が僧問七の卷に蘇州欽氏子不載其名少流于色得爾部欽氏子殺狗報の條交時川利刀斷其陰出以治藥藥成年試御女中夜得病作二狗鳴敬登而死欽與三德家王中立周旋王所傳說云々

(十五)燒米 和名抄十六麴糞類部に唐韻云糶燒米稻爲米也和名夜木古女云々契沖が釋義に糶米燒米云云東雅十二に糶米ヤキゴメ倭名抄に唐韻を引テ糶ハヤキゴメ燒米稻爲米也と注す即今ヤキゴメといふもの也民間にして麥をもて糶米のごとくせし物をアラザシといふ義不詳云々空穂國讓中二七十六に左大殿よりよいみち瓜やいごめなまみるみづぶさきなど

松屋筆記卷之四十

東都・源與清文備稿

奉れ給へり云々又丁七やいごめは大がみにこそはなむさてもやまとのには見え侍らすなん云々蜻蛉日記下にあをいねからせて馬にかひやいごめさせせなごするわざにおり立てあり云々又かごのわざ田もいまにかりあつめすたまさかなるあま間にはやいごめばかりぞわづかにしたる云々權中納言定頼卿集物名にやいごめ「あなうやいごめてそたゝにやみなましかくつらからんものとしりせは」舊本今昔物語廿二第七語に糶ヲシテ小大根鮑干鳥ナドヲ持參タル也ケリ云々類聚名義抄法下卷米部に糶「ヤイゴメ」「ヒメ」云々字鏡集米部に糶「ヒメ」「ヤイゴメ」云々色葉字類抄也部に糶米ヤキゴメ燒米稻爲米也新類燒春得米也燒米同俗用之云々撮壤集下食物部に糶米ヤキゴメ燒米同云々難字記四米部に糶「ヤイゴメ」「ヒメ」云々節用集也部に糶米ヤキゴメ燒米同云々新撰類聚往來上に糶ヤキゴメ云々此外落くば物語一ノ上十一丁ウ吾妻鏡十八の卷三丁東海談十二倭漢三才圖會百五の卷倭訓栞也の部などにも見えたれば考べし爾時ノ錢香香が僧問七の卷に蘇州欽氏子不載其名少流于色得爾部欽氏子殺狗報の條交時川利刀斷其陰出以治藥藥成年試御女中夜得病作二狗鳴敬登而死欽與三德家王中立周旋王所傳說云々

(一)行徳といふ地名 下總國葛飾郡に本行徳村ありてそこに徳願寺といへる淨土宗の寺有行徳といふ名は行徳の僧の住ける所なれば俗にしかいひしなるを後には村名となりて行徳村といふなるべし本行徳といふは行徳の本村といふ義を聞ゆ

(二)馬入といふ地名 相摸國に馬入村馬入河なごいふ名あり馬入はもと埴生なりけんを後に馬入の音をかりて書るなるべし清ていふべきを東語に濁ていひさて馬入とも書けること見ゆ

(三)神應經 明の陳會が神應經一卷針治の書也成化十年十一月二十一日韓繼解が序に適有日本釋良心以神應經來獻兼傳其本國神醫和介氏丹波氏治癰疽八穴法其八穴雖未試用神應經其傳授遠有所自而所論折量補瀉法皆古賢所未發者其取穴又多有益發古人所未盡處其所著穴皆撮其切要而得効多者文簡而事周令人披閱尋刻間證

與穴瞭然在目聖上嘉歎命以八穴法付於神應經之末銀梓廣布且以永其傳焉云々八穴灸法の條に成化九年癸巳孟冬日本國島山殿所使副官人信州隱士良心言我國二百年前有兩名醫一爲和介一爲丹波氏此二醫專治癰疽疔癩瘰癧等瘡定八處灸法甚有神効云々此次に八處灸法の事梓桑君誠道傳宗圖あり共に神應經の卷首に附す正保二年五月吉日二條鶴屋町四原仁左衛門開板せり

(四)唐竹枯 類聚大補任下建長四年の條に實治ノ比ヨリ唐竹枯始天建長年中諸國竹皆枯失畢適相殘分九牛一毛云々按に唐竹は今のハチクをいふいはゆるくれ竹也

(五)大黒祭大黒講牛陶稿四ノ三丁ウ同五 大黒天神祭を今は必甲子の日とおもひたれど宣胤卿記には子の日の夜ごと大黒天神供とされるされて甲子に限ることにあらず國圖分册梅漢集。義楚六帖十六ノ廿五丁ウ谷櫛ノ九段廣葉波四ノ十九丁ウ大黒祭の式は日遊書の餘外七ノ廿七丁ウ同録内廿七ノ廿九丁ウ餘外七ノ廿七丁ウ同廿一ノ廿九丁ウには大黒講の事東寺文書抄八ノ十九丁ウに見ゆ梨窓二筆 牛陶稿四ノ三丁ウ同五丁ウ翰林五鳳集五十七

(六)白波 山槐記治承三年二月八日の條に東宮使未別故飯洛近衛使過奈良坂邊之時白波着他方飯洛

仍祭之時不候云々按に白波の事古今伊物の歌におきつしら浪たつ田山とよみ海道の記にも白波緑林と書たり後漢書に故事有國圖寶石類

(七)行幸の時諸社修造 同十一日の條に行幸之時諸社修造爲恒例云々

(八)太平御覽 同十三日の條に清盛入道摺本の太平御覽を内裏に献せらるよし見ゆ此書未レ被レ渡本朝也云々十二月十四日廿日の條にも有

(九)市餅并粉物 同廿二日の條に東宮御百日によりて市餅を買こと見ゆまた粉物置御前ともありまた得餅之日は御湯殿なきよしへり

(十)百塔禮 同廿三日の條に卯刻爲禮百塔向廣隆寺方云々四十九の重尼に依て諸處の塔を巡禮せしよししくはし見ゆ治承四年三月廿一日の條にも有

(十一)茶染 同書治承三年三月三日の條に茶染一斤染立烏帽子とあり今の茶染も同事にや

(十二)青仁井郎等郎從 同日の條に隨身青仁看督長白張白衣火長如恒小舍人童白張白衣調度懸青仁舍人青仁郎等五人相具又郎從十人相從云々按に青仁は青丹の借字也日陰藏に解あり郎等は近侍の差郎從は

外様の隨身なるよしこの文にて知べし國圖鈴木忠侯語八十八段(三の卷四丁ウ)に老若者といふ名目は往昔武士の(組清兩黨のたぐひ也)の者の中に然るべきものを老若といひ其次を若者といふは此餘風成へし云々

(十三)蛭喰 同書治承三年十月廿九日の條に典藥頭定成來喰蛭云々同十一月廿二日の條に典藥頭定成朝臣來喰蛭餘勢猶不之故也按に拾芥抄に蛭喰の事あり籠中抄にはひるかひと書けり蛭に腫物の血を吸はしむるわざ也

(十四)小佛師 同日の小佛師人々とあり大佛師にむかへたる名也

(十五)後家 同書治承三年十一月四日の條に故前左衛門督公光後家三條高倉群盜入云々按に愚管抄にも頼朝が後家と見ゆ其外古書所見おほし國圖大筑波維山ぼうし百練抄五ノ廿五丁ウ真水式目九丁ウ

(十六)小持佛堂 同月廿六日の條に小持佛堂とあり持佛堂は所見おほかり國圖持佛堂ノ釋書廿一ノ十五丁ウ五丁ウ太平記十六ノ三丁ウ此外多し

(十七)風爐 同月廿八日の條に於出居風爐被燒云々

(十八)藤氏長者の朱器臺盤 同月の條に藤氏長者の

朱器臺盤目錄等の事くはしく見ゆ

(十九)藥髮 同書治承三年十二月の條に九日今日東宮二歲令藥髮給云々正月藥髮有憚仍今月所被行也

(廿)魚味 同十一日の條に東宮御著袴御魚味の事あり魚味は魚の喰初也十四日の條にも見ゆ

(廿一)散米 同書治承四年二月一日の條に撫物の人形及散米の事あり國圖大殿祭祝詞注ニ以米散屋中之願也云今昔物語廿七ノ廿打マキ米ノ一見ユ

(廿二)辛繪隨身 同日の條に辛繪隨身二人折半臂下重面白裏青此事有兩說一歎常儀無面青練張也云々

(廿三)五十日の餅百日の餅 同十一日の條に五十日の餅百日の餅の事見ゆ

(廿四)門を立る禁忌日の事 同十五日の條に禁忌日被立門例を舉たり

(廿五)耳金并栗形 同十八日の條に殿上幕懸料耳金不足百五十懸殿上鈴綱料栗形三可令作設之由仰應云々

(廿六)立沙井盛沙 いにしへ立沙といへるは今の盛沙の事也宣胤卿記に立沙の名見え伊勢家諸禮式にた

晝のさまを改めて夜のさまにならせ給ふよし也中務内侍日記四丁に御よるの後もとみにねられず云々又四丁御よるののち春の宮御方土御門の少將ばかり御ともにて院の御方さまにしのびて御らんせらる云々又九丁いまだ御所は御よるのほごにすべりて云々又廿七三月八日はちもくなれば曉ちかく御よるなれとそうしよをもちあぐるまでねず云々これらのつかひさまにてその語意をしるべし

(四十五)田むき 田むきは京邊の名所にてもと田に打むかひたる所なれば名ごなれりいづこにても田の面打見やらるゝ所は田向といふべし中務内侍日記六丁に田むきの月御らんせらるゝに云々山城名勝志七の卷野上の次に出せり

(四十六)朝所 朝所をアイタン所とよむを故實とのみおもふべからず中務内侍日記にあした所と書たり(四十七)稻實 公井標山 貞觀規式西宮記北山抄江次第なごものに大嘗會の時に稻實公あり中務内侍日記に大じやうゑのいなのみのおきないんこや女ごかやいろくのものしやうぞくの衣云々又いなのみのおきなどてびん白く髪は帯のもとまで長くて年も

百とせにもやと見ゆるにそくたいせさすこれを見て心の中に「いなのみのおきなさひたるひんしろし君か千年もかねてしられて」と見ゆ又標山もヒヲノヤマとよむべし同日記にひをの山ひくひしめくしやうぞくごもしてわたしつれば云々とあり(四十八)廻立殿 中務内侍日記に廻立殿をくわいりふ殿と書たりメグリ立殿とはいはぬなるべし(四十九)様 様といふは方の義にて公方様といふも公方の方といふよし也中務内侍日記五十八に内裏さまへもまゐらすとありされど後世に様といふはもと同語ながら少しけぢめ有よく心得て用べし(五十)入道はまはり道にもいふ 法體せし人を入道といふは常なれごまはり道より道なごの事をも入道といへり中務内侍日記五十九にこことはてぬればなし原へかへりぬついでにちとにふだうなごして京へまゐりつきぬと有

松屋筆記卷之四十九

三縁山倭學士源興清稿

(一)祝髮 唐書二百廿二南蠻傳下十 婆賄伽盧國の條に民七歳祝髮止寺至二十有 不達其法復爲民云々祝髮の字本朝の古書におほく見ゆ(二)左衽 また廿一 昆明蠻の條に人辨首左衽與突厥同云々とあり倭漢も太古は左衽也右衽にせしは漢土の聖人の私也西洋阿蘭人など今も左衽にて天地自然の性也佛の律衣また左衽也(三)蘆葉の達磨 蘆葉の達磨として達磨蘆葉に乗りて漢土に渡來しよしをつたへ晝にもさる□□を書くはうけがたし唐書二百廿 叛臣傳一丁 李忠臣が條に至徳二載節度使王玄志使秦率兵三千自雍奴擄草絶海擊賊將石帝延烏承洽云々とありこの草は今

琉球草とて花生などに用るもの類なるべし達磨もさる大草の大竹の如きを擄に用る國を経て來しより草の葉に乗れるよしを傳會して奇妙□□示せし也秦とは李忠臣がもとの名を董秦といひたれば也(四)耳の大小 唐書二百廿 叛臣傳三丁 李忠臣傳に忠臣戀直不通書帝嘗謂卿耳大真貴兆對曰臣聞驢耳大龍耳小帝喜其野而誠云々と見ゆ(五)察子 井俊坊同朋 唐書二百廿 叛臣傳高駢が條一丁に用之既自任淫刑重賦人々思亂乃擄廢吏百餘號察子厚稟食令居衢閭間凡民私閱隱語莫不不知道路籍口誅所惡者數百族云々按に用之は高駢が臣にてもと商僧呂用之といへるもの也晚唐に高駢國柄を采て呂用之を用ひ亂に及びし也用之が察子は六波羅の禿室町の俊坊の類也また俊坊と同朋とひとつこととするは誤也同朋は禪家の力者の名也(六)字音を用ひるの詞にとりなせし例 字音の詞をやがて用にとりなせるは裝束をさうぞき猿樂をさるがひ」なごいふ類おほかり又動かぬ體語を活かし

を「ひじる」「たふさぎ」を「たふさぎて」などおほし
 (七)「は」と「わ」とかよひひかけの歌、蜻蛉日記に
 はらからのみちのくにの守にて下るを長雨しける比
 その下る日はれたりければかのくに、かはくといふ
 神あり「わかくにの神のまもりやそへりけんかわか
 けあかり天津空かな返し」今そしるかはくとときけは
 君かため天てる神の名にこそありけれ」此外「はし
 る」「わしる」「はつか」「わつか」など通ひしいとおほ
 かり此歌も通音をいひかけし也

(八)川竹のうき身 倡妓などをたごへてうき川竹の
 身といふ出處たしかならず春雨抄三下に川竹うき草
 也夫木「うきふしに沈もやらて川竹の世に□□□な
 き名をや流さん」と有此歌夫木抄にはなし可レ考

(九)蛇の蝦蟇を食ふ因縁 法苑珠林九三丁 阿修羅部
 衣食の條に正法念經を引て龍王雖食百味末後一
 口要當變作蝦蟇云々と見ゆこれ蛇の蝦蟇を好て食
 ふ因縁也

(十)姓氏望族 明の吳興の凌迪知字稚哲が古今萬姓
 統譜の凡例に姓有望有音有氏曰望者如河間
 渤海等郡名是也曰音者宮商角徵羽是也曰氏者如

以國以邑以官爲氏等類是也云々○又云姓之有
 氏如水之有源歷代世譜云五帝之相承三王之繼禪
 無非出於黃帝之後故有姓必有氏今常姓亦有
 無氏者云々○又云姓之有望以氏者名於郡故曰
 望本原則同而支派各異如劉則二十五望王則二十一
 望餘或五望四望三望者然惟取其顯者書之問亦
 有無望者悉從舊籍不敢妄加增損云々萬姓統
 譜百五十卷歷代帝王姓系統譜六卷氏族博考十四卷共
 に凌迪知が撰也皇朝にて翻刻せり望族姓氏の事氏族
 博考にくはしく見ゆ國圖好稱族望如王則太原鄭則梁陽
 李則魏西豈皇杜則京兆梁則安定張則河東清河則博陵之類難傳誌
 之文亦然迄今考之竟不知爲何郡縣人孫可恨宋人編多
 居近畿不歸其鄉一死即葬于孫亦遂自籍如魏野魏氏東萊呂氏華
 陽范氏梓州蘇氏一易簡代居京師又如歐陽居穎而葬新鄭蘇公
 居許而葬鄭後世過陳隨州者豈復可
 尋其彷彿耶此二者至明乃無之云々

(十一)番椒 廣群芳譜卷十三蔬譜一に草花譜番椒
 生白花子儼似禿筆頭味辣色紅甚可觀子種云々
 また食物本草の注に見ゆ一品堂藥選卷懷食鏡を考べ
 し

(十二)八月韭 佛開口井韭變菹 廣群芳譜卷十
 三蔬譜一韭の條十四に張來詩注俗言八月韭佛開
 口爾雅翼物久必變故老韭爲菹云々按に江南の橘江

北に移せば根と變薯蕷の鰻鱺と變類にて老韭も菹に
 變なるべし

(十三)麝香草 馬兜鈴苗を俗に麝香草といへり村
 家方に前胡を射香菜といへり廣群芳譜卷十三蔬譜一
 蒜の條に清異錄蒜五代宮中呼麝香草とも見ゆ

(十四)嘉禾 今茲文政九年諸國大豐熟にて信濃國に
 一莖二穂の稻を出し陸奥國に一穂千粒の稻を出せり
 といへり廣群芳譜卷九穀譜三嘉禾の條に按詩注黍稷
 稻梁皆名爲禾麻與菽麥則無禾云々瑞應圖嘉禾五
 穀之長盛德之精也云々多々その例を擧たれば閱て知
 べし延喜式をも考べし

(十五)尊容鈔 尊容鈔十卷あり亦圖像鈔とも十卷鈔
 ともいふ勝定房惠什の作とも平等房永嚴ともいふ章
 疏録には惠什の下に載す證談鈔云勝定房十卷鈔一
 向圖像也但此圖像作者平等房永嚴也其故可書進
 諸尊圖像之由自白河院有勅命愛平等房誦切勝
 定房惠什阿闍梨撰出功了而爲平等房作及進覽
 故知實義者惠什作也□□上進云平等房作歟云々
 と見ゆ平等房諱永嚴澤方六流中保壽院元祖也成就院
 寛助大僧正付法也此尊容鈔原本は御室の寶庫にあり

第一の卷は諸佛上卷也金剛界五佛胎藏界五佛の圖像
 と傳を記す第二の卷は諸佛下也一字金輪大佛頂佛
 眼尊勝佛頂藥師如來善名稱吉祥如來定光佛釋迦如來
 阿闍佛阿彌陀光明眞言の圖像傳記を載す第三の卷は
 諸經法也仁王法花壽命六字孔雀請雨寶樓閣菩提場の
 八法の圖也第四の卷は菩薩上也五大虛空藏五秘密普
 賢延命八字文殊愛染王金剛王大勝金剛大隨求轉法輪
 の九尊也第五の卷は菩薩下也彌勒菩薩普賢菩薩五字
 文殊一髻文殊一字文殊六字文殊持世菩薩延命虛空藏
 般若菩薩藥王菩薩地藏菩薩龍樹菩薩馬鳴菩薩の十三
 尊の像也第六の卷は觀音上也正觀音千手馬頭十一面
 准母如意輪不空羅索の七尊也第七の卷は觀音下也葉
 衣白衣多羅千臂大勢至香王青頸阿摩羅の八尊也第八
 の卷は諸忿怒也不動降三世軍荼利大威德金剛夜叉无
 能勝大輪步擲烏菟瀧摩金剛童子大元明の一十一尊也第
 九の卷は諸天上也歡喜自在天金色聖天雙身聖天多聞
 天吉祥天大自在天伎藝天女那羅延天鳩摩羅天四天十
 二天の十一天也第十の卷は諸天下也辨才天摩利支天
 十五童子訶利帝母水羯羅天水天妙見北斗炎魔天襲庚
 梨寶藏天女深沙大將正了知大將金翅鳥王大黑天神の

十五尊也いづれもその利益を記し眞言を載彩色の尊像を畫たり無類の珍書といふべし○二の卷大佛頂の圖に輪寶あり如意寶珠あり升龍あり獨鈷あり寶珠は三つあつめたる圖にて火琰あり○同卷に尊勝佛頂の條に天蓋上に火珠ありまた輪寶獨鈷火珠の臺などあり○又善名稱吉祥天如來三の寶珠を持たまへり以下略

(十六) 檜扇 海人蕪芥上十二に法服袈袋鈍色ノ時者持檜扇衣ノ時者不持也云々同下五丁袍并狩襖ノ時ハ兒モ持檜扇六位ノ扇三橋也十五歳以前ノ人ハアヤ杉ノ扇ヲ持也綾杉トハ黒キ楳ノ木ニテ作也云々裝束圖式下八丁に檜扇ハ二十五枚若年ノ時ハ白糸ニテトヂテ糸ノアマリヲ藤花ヲハ、シテ用ル事也云々又云同丁藤花ヲ糸ニテ兩方ノ面ニ押ス宿徳ノ大臣ナド被用大方ハ攝家所用也云々唯心院殿裝束抄ニ扇之事白骨ハ常也赤骨ハ官位ニ寄テ用ル也黒骨ハ凶事ノ時持ナリ云云當用裝束抄に當用白竹黒竹ハ凶事赤骨ハ官位ニヨリ用口傳云々束帶ハ笏重キ衣冠ハ檜扇衣冠ハ中啓可レ仍レ時宜ニ云々中啓ハ末宣胤卿記に檜扇依官數事三十五枚殿上人二同内々御一献之時モ可持候歟否事夏冬共

用編蝠扇候無子細候賢問内々儀用檜扇候束帶之時夏冬用檜扇候衣冠時用檜扇候事又勿論云々尺八笛に檜扇之事寸法無之されば大小有之大抵は一尺計有之候かやうの物定法は無之候と見え候木檜にて候ゆる檜扇と申候女房の相扇も定寸とては所見なし定無之故大小板數多少有之其製精粗有之上扇上位は精製のうるはしきを用事此一物のみにも不限事也相扇赤き杉板にて候云々明月記嘉祿元年十月十五日天晴巳時陰午後雨間降夕陽晴教雅少將以使者尋別當五節女房扇二枚可調進山消息何様物哉或答云扇近代檜扇細面塗雲母シタニカキ書繪山野之林野筋金銅蚊目以村緒若葉絲貫之絲末緒垂物也云々類聚名物考裝束部二に今の世には模様なき素木を檜扇といひて貫緒にもなしこに見ゆるさまなるは今は相扇といふ笛を押し彩色繪を書きつま紅などにしろくごち糸のさきを長さ四五尺ばかりいろくの糸にてすがりのやうにしてたれたるこれをばかざすこと也なによりてあこめ扇といへるにや未考明月記に細面とあるもし明面の誤にてそれをあかめとも訓べき也外にしるしとすべき事未見

云々服色圖解に檜扇四位已下廿三橋或ハ廿二橋トチ糸ノ餘ニテ唐草ヲ置物ニス其長短年齡ニ隨フ關東ニテハ多ク家ノ文ヲ置ル、ナリ十五六歳マデハ杉横目ヲ持ベシ而彩色畫裏蝶鳥五色ノ糸ニテ綴ク、リ花ヲ付ルナリ云々飾抄上に扇公卿宿老之人束帶之時不レ論夏冬持檜扇直衣之時猶持之年少之公卿或炎天持編蝠冬年少之人横目扇散持之云々尙倭漢三才圖會廿六服玩具部に檜扇比阿布岐編檜片二十五枚作之官家毎用之如弱冠則以白絲絨之其絲餘尙爲藤花形如束帶時雖夏月令持之云々
(十七) 大家名家の差別 唐宋詩醇凡例に唐宋人以詩鳴者指不勝屈其卓然名家者猶不減數十人玆獨取六家者謂惟此足稱大家也大家與名家猶大將與名將其體段正自不同云々御選唐宋詩醇四十七卷あり清の乾隆帝の選にて首に乾隆二十五年三月二十二日の江蘇巡撫使陳弘謀が奏狀あり卷端に乾隆十六年五月二十六日奉旨開列校刻諸臣職名あり唐の李白八杜市九白居易十韓愈十一宋の蘇軾十二陸游十三以上六大家の詩十一迄宋の蘇軾四十一迄陸游四十七迄を編集して評を加へし書也小本にて合冊卅二冊四帙

とす中に序目二冊あり
(十八) 酒名 同書卅九眉山蘇軾詩八に次韻王定國得晉卿酒相留夜飲詩に短山壓手氣橫秋更著仙人紫綺裘使我有名全是酒從他作病且忘憂詩無定律君應將醉有真鄉我可候且倒餘樽盡今夕睡蛇已死不須鉤と見ゆ使我有名全是酒の句酒家の口實とすべし詩將酒侯の字も亦おもしろし
(十九) 燈花 同卷蘇軾が夜直玉堂攜李之儀端叔詩百餘首讀至夜半書其後詩の句に愁侵視滴初含凍喜入燈花欲圖妍とあり燈花の瑞の事は居家必用居家必備萬寶全書などにはしく見ゆ
(廿) 「だに」「さへ」「だに」といふ詞は儒書の訓點に「だも」といひ今俗に「でも」といへりされば「だに」は「でも」の心にて「これでも」「あれでも」などの「でも」にかはることなし又「さへ」と通はし用たるも有
(廿一) 九輪釜 九輪釜といふは高師泰が九輪の寶形を鑄直したる釜のよし二條尹房公これを用て茶に呼まわらせし人をさらはれし事本朝語園二の卷に見ゆ本朝語園は十卷あり寶永三年二月刊行して孤山とい

ふもの、序あり作者未詳此九輪釜は天文雜説といふものを引ていへる説也爾雅補注が筆のすまび上十三丁ウに直突の字は漢書に出づ又九輪の塔といふは曲突なり曲突なれば塞煙塔の類に九の數を川へき道理なし云々

(廿二)唐風を慕て國體を損す 水府の儒醫森尙謙が儼塾集一の卷に二十四論を載すそは唐不可學八と唐可學八と日本勝唐八とを合せて二十四篇の論文あり後に和唐合論一篇を附す二十四論序に世之學者必本于唐所以求彼聖人之道誰敢間然雖然偏從唐風則損吾邦體亦可畏矣至若言唐法必可據多書可羨郡縣可行食饌可效粗見不精遂化外域之俗自忘本朝之宜可嘆息焉云々と見ゆすべて二十四論中稱すべき事多かり儼塾集十卷あり二十四論序に元祿十一年戊寅三月戊戌日常陽水戸儼塾森尙謙自叙と見ゆ卷首に寶永三年丙戌六月七十三翁木下元高平之甫書乎御園之好青館といふ序あり與書に尙謙が俗文にて自板にゑり形見に弟子中におくるよしあり爾雅補注七卷十三丁ウ久遠元年九月近日所々立社壇家々行漢禮停止之由宣下云々

(廿三)多書を嫌 二十四論の唐不可學八の第一多書の篇に夫書何爲而作也爲傳道垂教治世安民也

十三經歷史典故及先哲微言要辭數百部備能事畢矣書多則事煩事煩則支離難亂失宗孔子刪詩書正禮樂且曰述而不作其文繁寡要可觀焉周時簡編不夥而聖人取約可知焉其後變簡爲縑制紙代縑後唐明宗之時印板行世至宋累數十萬卷書目猶不可究盡雖不爲之太息哉許魯齋貴朱子之學猶不喜其語錄多卷雖言道學頗厭煩擾吁嗟紛々雜書裨官小說非徒費格墨抑正道之稜稜也其文盛質衰之弊不可學焉全篇と有り按に多書を嫌るは道學者の見識也下の唐可學八の第四廣見の篇には博識を稱賛したり

(廿四)長爪の害 同唐不可學八の二長爪篇に唐俗皆長鬚爪不剪蓋本於聖經不敢毀傷爲孝之始之義云々今夫爪者爪者害于講武故陸子斷爪便手挽弓爲邦用武可謂匪躬之謀矣石晉事契丹稱臣趙宋尊女眞爲君千載讀青史何也以武不足也唐之長鬚爪注于武術不可學焉と見ゆ按に長爪は實に無用にして講武に害あり長鬚は甲冑を帶せん人大に益あり一概にいふべからず

(廿五)郡縣封建の利害 同唐不可學の四郡縣の篇に

夫封建諸侯唐虞三代之法也罷封建爲郡縣暴秦之制也云々兩漢繼秦罷侯置守以降古封建之政廢矣致堂胡氏曰夫封建天下共其利天道之公也郡縣以天下奉一人一人欲之私也至哉言也李唐柳宗元著論而非封建柳子封建勢也一句後儒以爲格言何爾莽之甚也如秦漢論勢可也唐虞三代德化普施傳祚之久爲後世善治良政之祖不可以勢論也朱子綱目詳載胡氏貴封建之說可觀朱子不採柳之論且夫封建則維持多方若上失政一方有亂而一方保持如春秋之時也郡縣則城都不強若上失政一方有亂則土崩瓦解如秦二世之時也我日本今封建久行自然合于聖政宜乎致昇平也唐郡縣之弊不可學云々按に本朝も古は國造其地を領して封建の政也孝徳の比より漸唐風を學びて奈良朝に至ては全く郡縣の政行はれたり爾雅補注十六ノ八丁ウ

知宋朝之小人難見然漢唐小人亦有其始難見者載在方策孔子所謂無爲小人儒是也夫大姦似忠大詐似信苟非試之其實難知虞書曰試可乃已唯舉才無試殆哉歐陽子誤褒安石胡康侯謬稱秦檜觀其外而不察其內也孔子曰惡似而非者夫少正卯魯聞人也聖人所以誅之者以是故也彼小人而似君子者可恐可戒全文按に偽君子を恐るべきよしを論じたり大織冠鎌足大江廣元などは賢人がほせし偽君子也

(廿七)青牛とは道書をいふ 同唐不可學の七道家の篇に宋景謙が日東曲の青牛不渡大洋海莫性無人識道書と作りたる青牛は老子之書也と見ゆ

(廿八)唐は文過武劣の國 同唐不可學の八募卒の篇に凡唐の病在文太過武不及耳且若朝鮮本桀燬之邦也楊隋李唐不能戡之以地接唐山文學漸薰尊南方溫柔之化卑北鄙強者之風故爲我前朝關白秀吉所長驅近來之龜鑑也云々按に平家公家を學て亡び室町公家を學て微なるも同義也都會繁華の人物は武に用るには劣也と知べし

(廿九)宋儒の文佛語を用 同唐可學八の四廣見の篇

に按禮記孔子曰吾聞之老聃云々不以其異端捨其言也程子解中庸爲飛魚躍章曰此是喫緊爲人處活潑々地朱子亦引此語是本俗語而禪家所用也朱子小學問探顏氏家訓語夫顏子推好佛者也其家訓歸心篤恰如讀佛書然不厭之柳子厚蘇子瞻亦好佛者也朱子收其文章於楚辭後語中且蘇子與程子相軋其學甚異而朱子註論語問探蘇子之語王安石博恰而大姦也言行錄載其傳尹彥明拜佛看經而在程門爲高弟范文正公爲救饑民造塔施質以充賑給是皆拘儒所忌非廣見不能也且如咒術醫家之所卑也閻方書中瘡疾勞瘵及小兒夜啼骨硬等間從祝由科本草載巴中毒蜂螫人立死非方藥可療唯禁術可制是亦探其有驗不敢拘忌當去病所謂願方略如何耳即此意也唯在乎主利出坤卦辭或曰子所學廣見如何曰陸象山曰宇宙事即己分內事宇宙便是吾心吾心便是宇宙此言至矣盡矣可謂開發道體無餘者矣孟子所謂万物皆備於我張子以天地與我爲一體皆與此同今無拘於朱子無捨陸子之言是所望也已上文按宋儒之文這些等字を用たるも佛書に据たる也

(卅)日本勝唐八 同日本勝唐八の篇に一皇祚百王なり敬神二義勇三帶劔唐國にては武官四襲封世祿封五無外患海國なればなり六無宦者七食饌多肉せざ八武藝附造劔の八也

(卅一)和唐合論 儼塾集卷之一丁三に和唐合論一篇あり垂仁之久御世同黃帝之治年仁德之辭遜似舜禹之避讓桓武之遷都如盤庚之易居後三條之恭儉若文王之卑服其在宰相者武內之元老備呂望之輔佐聖德之攝政擬周公之制禮大織冠之仕朝合阿衡之立志昭宣公之行事爲花光之廢立其在武將者源賴義義家之遠征伴衛霍之功勞義經之險類鄧艾之入蜀義貞之攻鎌倉猶項羽之破秦楠正成之忠勳齊諸葛之貞烈凡事之比類不可枚舉好惡之相同不可勝數云々と見ゆ

(卅二)貧にして後榮え富にして後衰ふ并燒ぼこり 儼塾集卷二損益論に河東柳子聞人遭失火致書賀之崔玄暉母以兒孫富貴爲惡消息此喜人之所惡愛人之所貴欲渠全其德也故句踐窮而後興夫差盛而後亡朱買臣初貧而途榮石季倫太富而忽儼云々按に信に燒ぼこりといふも柳子厚が語に出たる也

(卅三)窮して道顯る 同文に夫孤臣墮子成困心衡志之德疾疾之人存德藝術智之美所謂文王囚羗里演周易仲尼厄陳蔡作春秋左丘失明有國語屈原放逐著離騷此皆有鬱結其道亨通也古之君子遠利執仁正言直行不枉道阿俗是知命不妄動者也云々

(卅四)朝臣と書事 姓に朝臣と書くは上下に通たること古書に見えて論なきを有識問答二の卷廿丁に姓に付て戸を書事昔は六位七位迄も許也然處後鳥羽院の時代以來禁制也其比は五位にも堅被制之四位は書之云々また官位抄といふものにも後鳥羽院禁制せられしよしありと倭訓栞に見ゆされど新古今竟宴歌に從六位下某朝臣と書たる三人あり後鳥羽院の御時の事なるに新古今竟宴の懷紙にのみ許し給ふべきにあらず官位抄有識問答共に御鳥羽院禁制のよしいへるは誤なり無位のものにても朝臣書んに何のくるしき事かあらん

(卅五)本朝の物語から國の小説 七修類稿廿二辨證類小説の條に小説起宋仁宗蓋時太平盛久國家閑

暇日欲進一奇怪之事以娛之故小説得勝頭廻之後即云話說道宋某年間閻詢眞之本起亦曰太祖太宗眞宗帝四帝仁宗有道君國初州存齋過汗之詩有陌頭盲女無愁恨能撥琵琶說趙家皆指宋也若夫近時蘇刻幾十家小説者乃文章家一體詩話傳記之流也又非如此之小說と見えてから國には宋の仁宗の時もはら行はれしよりし也されどそれより前にも小説の書まれにはきこえたり本朝の物語には村上天皇の御代などに竹取うつぼなどは出来けん源氏は一條院の御代也宋の仁宗は後一條後朱雀後冷泉の御代にあたればや後也さて紫式部源氏を書て地獄に墮し事實物集に見え元施耐菴水滸傳を書て盲目と成し事因樹屋書影に見えて和漢同日の談也

(卅六)外國の横文字 西洋の横文字の沙汰は漢書西域傳安息國の條に書革旁行爲書記師古注今西方胡國及南方林邑之徒書皆橫行不直下也革謂皮之不柔者と見ゆ

(卅七)様 公方様殿様などの様といふ稱を唐國にて書たるは徐兵が見聞録の日本國の事をいひたる條に國雖有王專政者爲將軍三傑音とあり見聞録は

説鈴の中に收たり

(卅八)蒙古新字 蒙古新字を裂れるは元の帝師八思巴なり元史釋老傳にくはし

松屋筆記卷之五十

三縁山倭學士源與清稿

(一)諸道の祭酒 池北偶談一の卷祭酒題名の條に國初設祭酒滿洲一員蒙古一員漢人一員順治十七年裁去蒙古祭酒とありて滿洲祭酒漢祭酒の人々の名を舉たり按に本朝漢祭酒は儒家也本朝祭酒は未との等比なし神道方倭學講談所なごをそのたぐひとすべくや池北偶談廿六卷清の濟南王士禎字阮亭が著述の隨筆也康熙辛未秋の自序あり王士禎號を漁洋山人といへり

(二)康熙帝廢陵に守冢を置 同書一の卷廢陵の條に康熙二十二年陝西平涼府盜發韓康王定王二冢法司按律擬罪上以發掘前代帝王陵墓特令加等因諭歷代帝王陵應加守冢人戸下九卿雜議并禁稱故明廢陵等語聖諭云凡云廢者必如高煦等有罪廢爲庶人然後可彼生爲藩王誰廢之耶上之仁明如此云々歷代帝王の陵に守冢人戸を加ふること實に仁明の主といふべし

(三)臣下私諱 同三の卷臣下私諱の條に晉咸和三年拜王舒爲撫軍將軍會稽內史舒疏父名會乞換他郡朝廷乃改會作鄧宜城有夷水以桓溫父名蘇改水後唐同光三年以郭崇韜父名弘改弘文館爲崇文館長與四年以馬贊父名不欲斥其家諱改同平章事爲同中書門下三品南唐元宗以董思安爲漳州刺史思安辭以父名章特命改名南州又後主嗣位以鍾皇后父名太章尊后爲聖尊后於禮君所無私諱爲臣下諱失禮意矣と見ゆ諱の事は該餘叢考にくはしく見え已に余もいひたり

(四)蜀山籃輕籃 蓋古褰帷之意今惟江寧開封督撫司道府廳縣官皆用煖輜蓋沿宋明都城之制至今未改耳◎本文蓋古上原本缺之と見ゆ三才圖會にその圖ありて輜輿肩行之車也といへり五雜俎にも肩輿の事あり倭漢三才圖會に籃輿をもて駕の事とす籃輿は今の山駕といふもの也いにしへ「アラダ」といへり今「アング」といふはその轉也

(五)のこぎり山 安房上總の境にノコギリ山あり馬崗山と書べし池北偶談三の卷林舍人使琉球詩に三

十六峯瀛海環怒潮日夜響潺湲樓西一抹青林裏露出煙蘿馬齒山射獵山頭望海雲割鮮桐酒醉斜曛紙錢挂道松楸老知是歡斯部落墳と見ゆ馬齒山は琉球の山にてノコギリ山の形なるべし馬齒封とは「アリ」の事をいひて喰違ひて列れるをいふ也

(六)足下黒子 池北偶談卷の十足下黒子の條に畫壇録云郭忠武使渾忠武滅洗足見汾陽足下有黒子捧玩久之汾陽問其故渾答云滅也足亦有之汾陽令跪而視之笑曰不及我明皇雜錄安祿山初事張韓公仁愿韓公嘗令跪足韓公足下有黒子祿山竊窺視韓公問之祿山曰某賤人也不幸兩足皆有黒子比公色黒而加大韓公觀而異焉因加寵薦兩令公功名相埒若祿山叛逆亦與韓公相似相豈足貴哉又北夢瑣言載西門軍容與吳行魯事亦同豈一事而傳聞異詞耶とあり予左足の「カ、ト」内黒節の下に黒子あり未殊なる幸不幸を知らず或人云女子隱門の邊に黒子あるもの必後家の相也といへりさることや

頭置立雜俎五ノ四丁下能改齊漢錄六

(七)詩帳 同書十一の卷詩帳の條に施愚山分守湖西製詩帳題詩其上寄林翁茂之一時名士多屬和名

曰詩帳或一絕句云斗帳殷勤白苧裁使君親自寫詩來孤山處士朝眠穩朝日烘懶未開と見ゆ

(八)瓦硯 同書十一の卷飛廉館瓦の條に元王文定傳秋潤集有飛廉館瓦硯歌略劉郎杳々秋風客神鳥冥飛憶初格豹章爵首尾蟠蛇建章千門風冽々云々此亦在銅雀之前知漢瓦無不可爲硯也按に空華集瓦硯の記あり日本の古瓦硯に用るに足もの少からず

(九)地震定數 同書廿の卷地震定數の條に宋小說載崔公誼爲冀州任丘簿熙寧初河北地震而公誼秩滿挈家南歸一日宿孫村馬舖中風電陰黑夜半有急叩門者云傳語崔主簿君合係地震壓殺人數輒敢擅逃過河今已收魂岱嶽到家速來崔自度必死乃兼程送妻孥至壽陽次日途幸康熙戊申山東地大震冀州尤甚萬與日照縣鄰地震之夜凡日照人客寓者皆從崩壓中得不死寓人客日照者皆死信有定數已未七月京師地震通州尤甚死者凡數百人云々按に地震のこと本朝には記紀の歌佛足石歌などによめるをはじめてにていとおほかり

(十)義虎 同書廿の卷義虎の條に汾州孝義縣狐岐山多虎明嘉靖中樵人朝行失足墮虎穴見兩虎子

臥穴内深數丈不得出傍徨待死日將脯虎來銜一生糜餉其子既復以餒予樵々懼甚自度必不免追味爽虎躍去暮歸伺子復以餒與樵如是月餘漸與虎狎一日虎負子出樵夫號曰大王救我須臾虎復入俛首就樵樵遂騎而騰上置義胥中樵復跪告曰蒙大王活我今相失懼不免他患幸導我通衢死不忘報虎又引之前至大道旁樵泣拜曰蒙大王厚恩無以報歸當畜一豚縣西郭郵亭下以候大王某日中當至無忘也虎頷之至日虎先期至不見樵遂入郭居民噪逐生致之告縣樵聞之奔詣縣廳抱虎痛哭曰大王以赴約來耶虎點頭樵曰我爲大王請命不得願以死從大王語罷虎淚下如雨觀者數千人莫不歎息知縣萊陽人某也急趣釋之驅至亭下投以豚大嚼願樵再三而去因名其亭曰義虎亭宋荔裳魂作義虎行王子一作義虎傳紀其事云々按に日本紀に秦大津父が狼の談も似たる事也

(十一)風聞 同書廿二の卷風聞の條に陳衍云風聞二字出漢書尉陀傳風聞老夫母某已壞削又晉書顧和對王導曰明公寧使網漏吞舟何忍探風聞以察

今爲政云々風聞の字ホノカニキクと訓す

(十二)魚石 井叫蛇 同書同卷魚石の條に前即墨令周圜公盛說汧陽縣有魚石如饅頭狀破之即成兩石各有魚形鱗鬣宛然以手摩指之作魚腥云此山一溪中所產石子盡然溪有魚石娘子廟求石者必禱之不禱則石皆無魚也前鄭令陸雲士又說新昌縣有水籠洞々口出石亦如饅頭狀人戲云欲得糖者或肉或菜者破之々逼肖造物狡獪如此云々按に本朝の奇石は雲根志に載たり予が櫻石記にも又いへり池北偶談廿二の卷叫蛇の條に西有叫蛇能呼人姓名應之即死然性畏蜈蚣逆旅主人每以篋貯蜈蚣客至輒授之令置枕旁云夜半舍外有呼姓名者慎勿應但開篋縱蜈蚣々々即徑去食蛇腦已仍還篋中云々

(十三)カマイタチ 閑田次筆一井カクレ座頭續伽婢子十一の卷カクレ座頭に關八州の間にかまいたちとてあやしき事侍りつじかせおこりて道行人の身に物あらくあたれば股のあたりたてざまにさけてかみそりにて切たるごとく口ひらけしかもいたみはなはだしくもなし又血は少も出ず女蘿草をもみてつけぬれば一夜の

うちになはると云なにもものゝわざともしもがたしただ旋風のあらく吹てあたるとおぼえて此うれへ有るれも正しき侍にはあたらすた俗姓いやしきものたどへ富貴なるも是にあてらるるといへり尾張駿遠參州の間に提馬風とてこれ有馬をたふすつじ風也云々これから國の風鬼也池北偶談廿二の卷洞溪物産の條に風鬼出黔中無形影能以旋風攝人云々とある風鬼はカマイタチの漢名也また下總の國に穴中の怪をカクレ座頭といふ同書同條に夜叉産蜀之黎州穴生長七尺亦名樓路見婦人盜之入穴生子以揚爲姓云々此類といふべし

(十四)響豆 池北偶談卷廿二響豆の條に同年上條に明り李侍郎奉倩廻言樂安縣有孫公者年九十強健如四五十歲人自言生平惟服響豆每歲槐子爲熟時輒令人守之不令鳥雀啄落既成實即收作二枕一夜聽其有聲者即響豆也因棄其餘如是數易而得響豆所在每樹不過一枚每歲服不過一粒如是者數十年矣無他術也と見ゆ槐子はエンズノ實なり

(十五)寇讐及子孫 諺に守屋氏の人信濃善光寺詣れば必災に逢佐野氏の人神田明神祭日に逢は又

災を蒙るといへり守屋氏は物部連の孫にて善光寺如
來を難波堀江に捨たる仇あり佐野氏は倭秀郷の孫に
て平將門を討たる仇あり神田明神は將門の靈也とい
へりから國にも宋秦檜岳飛を讒殺すその子孫岳忠武
の廟に詣ることあたはず一人強てこれを祭て災に逢
しよし池北偶談廿三の卷秦羅子孫の條に見ゆ

(十六) 墜石 文政十四年十一月廿二日余次男幸次郎
後清和と號すと共に武藏國足立郡大間木新田の八町會館
にあり天氣よく晴たるに午打さがる比富士山宮根山
の方にあたりて雷のごとき響あり庭に出て望見るに
西南の空かきくもりて何のゆゑといふことをしらす
里老に問にかゝるためし見ずきかすといらふ廿八日
赤澤藏之助來語云廿二日震動の時武藏八王子邊の子
安村大和田川原日野の原の三處に三尺計の石虚空よ
り落て地中三尺計におちりたるに大和田川原のみ
石地に落たれば碎たりその石のだけを見しに焼たる
石の貌也といへり同十二月九日武藏國多摩郡落合村
の絹商人平兵衛來語云十一月廿二日の震動をかしこ
にて聞しは初は大筒など放たらんやうに三度いかめ
しき音せしゆゑ驚て空中を仰見るに煙のごとき薄雲

たなびきて中にあまたの石をまろばすおとごころお
どろしく半時ばかりにてやみぬ後に人の語を聞に落
合村に五六寸より一尺計の焼ゆる石五處に墜たりそ
のさまやけくろみて質やはらかなる石也近邊の堀内
村に墜たるは長二尺計の薄き石にて僞の字を鐫たる
也寺澤村の八左衛門が庭に墜たるは重さ十三貫目あ
り八王子の子安村大和田村の川原日野宿の原などに
も落たり風聞に富士の麓にて大筒のためし打せりこ
も又は伊豆の山より螺貝ぬけ出たりともいへど熱海
湯治より歸りし人にとふにかしこにたえてさること
なしといへり又相摸大山邊の人の見しには箱根の方
より雲起りて空中を鳴もてこしが大山に突當るやう
にて再もとのかたへ飛かへりぬといへりとなんかく
とりくにいひ傳へて未その實正をしらすといへり
同十七日或人來語云十一月廿五日震動して焼石の墜
たりしは白河侯の預知給ふ上總國御鐵砲臺の焙硝藏
に失火うつりて其勢甚しく藏の築石あまた飛出て三
四十里のよそに墜たる也といへり按に池北偶談廿三
の卷墜石の條に順治十三年二月初十日午時寧陵縣忽
有響聲自東北來黑氣如斗光芒甚異墜落城中民

家其形如石重二斤十四兩見總督李尙書隆報疏と
見えたるは和漢同日の談といふべし

(十七) 念佛鳥 池北偶談廿三の卷念佛鳥の條に唐章
蟾岳麓道林詩靜聽林飛念佛鳥細看壁畫馱經馬按王得
臣塵史安陸有念佛鳥小於鸚鵡色青黑常言一切
諸佛宋元憲詩鳥解佛經言張齊賢守郡日爲作古詩
一篇云々按に空海の性靈集に佛法僧鳥の詩あり

が集にも佛法僧の歌あり高野山松尾山な
ごに此鳥すめりといへり下野日光山に慈悲心鳥あり
ジヒシン〜と鳴く余かしこに正しく聞たることあ
り

(十八) 鏡石 常陸風土記に久慈郡に鏡石あり池北偶
談廿五の卷石鏡の條に湖南祁陽縣語溪有鏡石高尺
五寸闊二尺五寸石色黝黑如漆光可鑑隔江竹木
田塍歷々皆見會有人竊去即昏昧無所視還之如
初喬侍讀石林葉言如此也明人王世貞博
物異苑の土石部
に仙人鏡日林國西南有怪石方數百里光明澄澈可鑒人五臟六腑
謂之仙人鏡國人有疾者皆就而照之其形可知(出白孔六帖)云
見ゆ

(十九) 墓樹片方になびく 万葉集菟原處女をよめる
歌に「塚の上の木の枝なひけりきくかことちぬをと

こにしよりにけらしも」と見ゆ池北偶談卷廿五墓樹
の條に張君又云韓城有蘇屬國司馬子長二墓蘇墓樹
枝皆南向司馬墓樹皆北向驗之良然不可不曉云々と
あるも似たること也張君は張願行がこと也爾雅墓ノ
ナカ、ル、ト史記晉世家十四丁下
孔明墓、令、松、白、楊、懸、風、吹

(廿) 女俠 男だてを俠客といふは人みな知れること
也女だてをば女俠と書べし池北偶談廿六の卷女俠の
條ありて濟南の俠女俠尼の事を記したり

(廿一) 慶雲答於本
問游清 慶雲の事は續記に見えて年號に
も用られ延喜式にも注せられたり武備志百六十一の
卷占度載の占雲氣の篇の氣之災瑞の條に瑞氣三二曰
慶雲若烟非烟若雲非雲郁々紛々蕭索輪囷是謂慶
雲亦曰景氣此喜氣也太平之應云々千五百番歌合
土御門内大臣「もろ人のあふくのみかは君か代は空
によろこふ雲も有けり」此歌夫木抄雜一にも載たり

(廿二) ののこ雲同 夫木抄雜一源仲正家集ののこ雲
の歌に「雲拂ふ月の光におひにけりはしりちりぬる
ののこ雲かな」此ののこ雲は武備志百六十一の卷占
雲氣一氣之戰陣の條に軍行有白雲知猪來臨者大驚
宜備云々同書百六十二の卷占雲氣二氣之軍敗の條

に軍上氣中有^二黑雲^一如^二羊形^一或如^二猪形^一者此瓦解之
氣軍必敗云々また軍上氣如^二羣羊羣猪^一在^二氣中^一此衰
氣擊^レ之必勝云々これらの猪雲をいふべし萬用正
卷天文門に凡占天河内有^二黑雲^一如^二猪蛇^一
之形衝渡斷而復續者固時而有^二雨也

(廿三)みづまさ雲上 慈鎮和尚の拾玉集四に百首歌

「行ふはれぬ水まさ雲にもる月をむなく雨の夜半
やおもはん」此歌夫木抄雜一にも水まさ雲と題して
收たり寫本には水まさ雲ともあれど藻汐草にもみづ
まさ雲とあれば多本に従べしこは水増雲の義なるべ
し武備志百六十一の卷占雲氣一氣之戰陣の條に凡安
營有^二黑雲^一如^二鳴雞狀^一與^二營門^一相對宜^レ移^二營高阜^一
天必大雨河水泛漲防^レ有^二沈溺之患^一とある黒雲を水
増雲といふべし明六安黃鼎王が管窺輯要卷卅六壁宿
の條の雲氣干犯占に黒氣入^レ壁有^二破國亡^一一日有^二大
水^一云々萬用正宗一の卷天文門にも黒雲必雨よしな
ども見ゆ雨圖^二爲^レ伊千首に夕立早過^一夕立の水まさ雲のはやすき
はやすみ
てとも有

(廿四)刀筆 方氏墨譜三の卷博古の部三の卷に刀筆
の圖あり

若作^二之湯^一爾爲^二之削^一善用^二其利^一斯文無雪陳主人
新賦墨



墨譜は明人方子魯が撰にて八卷あり國寶部國華部博
古部博物部太莫部太支部とわかれて全六卷首卷二卷
を加て八卷也ことごとく墨の製形をしるしたる書也
雨圖三才圖會器用二卷卅
九丁ウ圖アリ説アリ

(廿五)鵠の鏡問答於本 夫木抄夏三夏月の條に文永十年
毎月一首中民部卿爲家「かさゝきの鏡の山の夏の月
さし出るよりかけもくもらす」同書秋四月の條に家
集月歌中爲家卿「天の原光さしそふ鵠の鏡と見るは
秋のよの月」同書雜二山の條に御集慈鎮和尚「かさゝ
きの鏡の山の夏の月さし出るよりかけもくもらす」
天の原光さしそふ云々の歌は新拾遺秋下にも家十五
首歌に月前大納言爲家とて載たり鵠鏡は月の異名也
唐李嶠が月詩に桂生三五夕萱開二八時分輝度^二鵠鏡^一
流彩入^二蛾眉^一皎潔臨^二疎牖^一朦朧鑿^二薄帷^一願陪^二北堂
宴^一長賦^二西園詩^一王勃上^二皇甫常伯^一啓^二鑿就^一路鶯駿相
懸鵠鏡臨^二春研爐^一自遠^二王維清如^一玉壺水詩曉凌飛鵠鏡
宵映聚^二燈書^一李白詩明々金鵠鏡了々玉臺前なども見え

鳥鵠鏡といへることも王子年拾遺記に有しやうに
おぼゆ他日考注すべし

(廿六)天皇 尤侗が外國竹枝詞に諸域の風を詞に作
りたる中第一に朝鮮の詞を載せ次に日本次に琉球次
に安南など次第して載たり日本詞に云日出天皇號^二
至尊^一五畿七道附庸臣空傳歷代^二吾妻鏡^一大閣終歸木下
人○自注に隋時致^二書自稱^一日出處天子國中稱^二天子^一
以^レ尊爲^レ號有^二五畿七道三島附庸國百餘^一吾妻鏡紀^二
本國君臣事蹟^一吾妻島名也木下人爲^二平秀吉^一萬歷中
纂^二倭倭國^一自號^二大閣王^一○吹螺揮扇舞^二刀都聖^一羅華
知^二有無^一乞^二得中原音韻^一去也來弄^二筆咏^一西湖○自
注に天子七歲講^二聖經^一天雨曼陀羅華^二使臣答里麻
有^二咏^一西湖詩云一株楊柳一枝花原是唐朝賣酒家惟
有^二吾邦風土異^一春深無^レ處^二不^レ桑麻^一願寓^二嘲笑之意^一
按に大閣の閣は閣の誤萬歷の歴は曆の誤也外國竹枝
詞一卷南滙吳省蘭字泉之が藝海珠塵史部地理外紀類
の部に收む作者の尤侗字同人又字展成號悔菴又號^二
良齋^一江南長洲人拔^レ貢任^二永平府推官^一康熙己未召試
博學鴻儒授^二檢討^一加^二侍講^一銜有^二西堂集^一と巻首にし
るしたり此詩中天皇の字あり天皇の字は東大寺佛像

の銘藥師寺捺銘上宮帝王法説などに見ゆ日本紀に見
えたるは推古紀をはじめとすべし神武天皇など細注
せるは後人の加筆也

(廿七)古文孝經 知不足齋叢書第一集の巻頭に大宰
純が校正せし古文孝經を收たりはじめに乾隆四十
一年七月東里盧文昭序同年暮春海昌吳騫が序同年中春
慈谿鄭辰が序ありて次に孔安國が序太宰純が序を載
す終に宋本の古文孝經の本文を附して扱乾隆丙申花
朝欽人鮑廷博が跋あり鮑廷博が號を不知足齋といひ
し也盧文昭が序に云孝經有^二古今文^一鄭康注者今文也
孔安國傳者古文也五代之際^二家竝亡^一宋雍熙中嘗得^二
今文^一鄭氏注^二於日本^一矣今又不^レ傳新安鮑君以文篤學
好古意彼國之尙有^二是書^一也屬^レ以^二市易^一往者^二訪^一求
之^二顧鄭氏不^レ可^レ得^一而所^レ得者乃古文孔氏傳遂攜以
入^二中國^一此書亡逸殆及^二千年^一而一旦復得^レ之此豈非^二
天下學士所^レ同聲稱^一快者哉云々吳騫が序に古文孝
經孔安國傳世久失^二其傳^一武林汪君翼蒼隨^二估舶^一至^二
日本^一訪求以歸吾友鮑君以文得^レ之甚喜遂刻入^二知不
足齋叢書^一云々五季喪亂孔鄭二家並亡宋雍熙初日本
僧裔然以^二鄭注孝經^一來獻中土始有^二其書^一而孔傳卒不

可_レ得按宋三朝藝文志云周顯德末新羅獻_二列序孝經_一即鄭注也然歐公五代史記謂新羅自_レ晉以後不_レ復至_二中國_一而蔚然事則見_二宋史日本傳_一斯爲_レ可信第不解蔚然當日何不_レ以_二孔傳_一俱來豈此書在_二彼國中_一亦所秘邪日本傳又累言其國太宰府遣_レ人貢_二方物_一或收_二得其牒_一今序刻_二是書_一之太宰純未_レ詳_レ爲_レ何如人_一日本多世職太宰純豈猶其苗裔或以_レ官爲_レ氏者乎云々鮑以文が跋に古文孔經孔傳一冊吾友汪君翼滄市_二易日本_一得_レ之攜歸舉以相贈云々與清按に古事記應神の段に百濟より論語千字文を貢進し事有_レはかしこの西晋の代也古文孝經もそのころにやわたりけん唐玄宗御注も今文なれば古文は唐の代にたえたるとしるし

(廿八)士の三不闕 明の徐禎稷が耻言一の卷に餘齋曰士有_二三不闕_一毋_レ與_二君子_一闕_二名毋_レ與_二小人_一闕_二利毋_レ與_二天地_一闕_二巧云々_一耻言二卷あり藝海珠塵子部儒家類に收む徐禎稷字叔開號_二餘齋_一江南華亭人明萬曆辛丑科進士刑部主事歷_二四川按察司副使_一

(廿九)龍骨 明人姜南が墨齋錢簿の龍骨の條に龍壽萬年不_レ死今之龍骨或以爲_レ蛻也見_二本草_一按造化權輿云龍易_レ骨蛇易_レ皮鹿鹿易_レ角蟹易_レ蟹由_二此言_一之信乎

龍之骨蛻骨也云々按に蛇骨の説は余已にいひたりき可_レ考合_二墨齋錢簿一卷藝海珠塵子部小說類に收む_一(卅)琵琶法師 明の姜南が洗硯新録の演小説の條に世之替者或男或女有_レ學_二彈_二琵琶_一演_二說古今小說_一以_レ覓_二衣食_一北方最多京師特盛南京杭州亦有_レ之嘗讀_二羅存齋過_二汴梁_一一律云歌舞樓臺事可_レ誇昔年曾此擅_二豪華_一尙餘良楸排_二蒼昊_一那得神霄隔_二紫霞_一廢苑草荒堪_レ牧_二馬長溝柳老不_レ藏_二鴉陌頭盲女無_レ愁恨_一能撥_二琵琶_一說_二趙家_一觀_レ此則自_レ昔蓋有_レ之矣云々與清按に本朝の琵琶法師平家物語を演説もまたこの流也洗硯新録一卷藝海珠塵子部小說類の中に收む

(卅一)老學 姜南が琴塘記問の老而學の條に晋平公問_二師曠_一曰吾年七十欲_レ學恐_二已暮_一矣師曠曰何不_二炳燭_一乎臣聞少而好_レ學如_二日出之陽_一壯而好_レ學如_二日中之光_一老而好_レ學如_二炳燭之明_一孰與_二昧行_一乎公曰善哉見_二說苑_一旨哉言乎孔子曰發憤忘_レ食樂以忘_レ憂不_レ知_二老之將_一至云_二爾其自得之妙乎然則學者斃而後已云々與清曰吾友太田覃老後珍書を搜求て抄録倦_二ことなし_一屋代弘賢また老て書を估の癖あり學者死せざるほどは心に好書のいとまなきもの也老たれば學はずとい

はずといふはもと庸人のいひわけ詞也琴塘記問一卷藝海珠塵子部小說類に收む

(卅二)諸子之貴 琴塘記問諸子之貴の條に呂氏春秋云老聃貴_二柔孔子貴_一仁墨翟貴_二廉關尹貴_一清子列子貴_二虛陳駢貴_一齊陽朱貴_二己孫臏貴_一勢玉慶貴_二先兒良貴_一後尸子廣澤篇曰墨子貴_二廉孔子貴_一公皇子貴_二衷田子貴_一均列子貴_二虛料子貴_一別_二二論相似云々_一與清曰近來の古學者には契沖貴_二歌學_一眞淵貴_二萬葉_一宣長貴_二神道_一千蔭貴_二詠歌_一春海貴_二說話_一久老貴_二奇說_一儒者には物茂卿貴_二唐明_一伊藤長胤貴_二經濟_一太宰純貴_二經義_一服元喬貴_二詩文_一山本信有貴_二豪言_一龜田興貴_二酒食_一太田元貞貴_二爭論_一葛西質貴_二戲言_一大窪行貴_二園基_一菊池桐孫貴_二金銀_一その學旨趣を別にするもをかきさわぎにこそ

(卅三)祿盜人 俗に不忠の臣を祿盜人といへり琴塘記問の爵祿寄盜賊の條に宋諫議大夫曾公致堯當_二眞宗時_一上疏有_二云陛下始即位以_二爵祿_一待_二君子_一近年以來以_二爵祿_一畜_二盜賊_一此言雖_レ過亦必有_レ激而然歟云々と見ゆ

松屋筆記卷之五十一

東都 源與清文儒稿

(一)聖教序撮本 明人姜南が琴塘記問の三藏聖教序の條に書苑云唐文皇製聖教序_二命弘福寺僧懷仁_一集_二晋王右軍行書勒石累_一年方就逸少筆蹟咸萃_二其中_一今觀_二碑中字與_二右軍遺帖所_一有者_二纖微克肖_一近世翰林侍書輩多學_二此碑_一目_二其書_一爲_二院體_一由吳通微昆弟已有_二斯目_一後之士夫玩_二此者_一學_二弗_一至_二自俗耳碑中字未_一嘗俗_二非_一深_二於書_一不_レ足_二以語_一此云々按聖教序撮本舶來いとおほかり弘法大師請來目錄眞跡は聖教序の體を學びしもの也院體とは俗體といふにおなじ心也

(二)河豚魚 宋人孔平仲が孔氏談苑一の卷河豚魚の條に河豚腹目切齒其狀可_レ惡人食_二之治不_レ中_一度多死棄_二其腸與_二子飛鳥不_レ食_一誤食必死登州瀕海人取_二其白肉_一爲_レ脯先以_二海水_一淨洗換_二海水_一浸_二之暴_一於日中以_二重物_一壓_二其上_一須候_二四日_一乃去_二所_一壓之物_二傳_一之以_レ鹽再暴乃成如不_レ及_二四日_一則肉猶_レ活也太守李大_二夫嘗以_二三日_一去_二所_一壓之物_二俄頃肉自_一盆中_二躍出乃

知淪之不熟真能殺人云々與清曰本朝乾河豚毒あることなしこれを乾すに有毒のものは乾くことなし無毒の物はよく乾くといへり生河豚は毒の有無辨がたし故に有毒のものを食へば必死す君子慎勿食之孔平仲字毅父一作義甫清江人宋治平二年進士元祐中提點京西刑獄坐黨安置英州崇寧初召爲金部郎中提舉永興路刑獄帥鄜延環慶黨論再起奉詞以卒孔氏談苑五卷藝海珠塵子部雜家類中に收む

(三) 批杷は接木を佳とす 孔氏談苑一の卷批杷の條に批杷須接乃爲佳果一接核小如丁荔香枝再接遂無核也とあり接木の歌は夫木抄に見えたり

(四) 虱北に向竹西北に滋る 同卷虱不南行條に虱不肯僦南而行陰類也其性畏火置之物上隨其所向以指南方俄即避之若知也種竹就西北其根無不向東南行者是亦物之性也云々與清曰虱北行の事は酉陽雜俎にも見ゆ

(五) 廁神 同書一の卷廁神の條に紫姑者廁神也金陵有能致其神者沈遵嘗就問之即畫粉爲字曰文通萬福遊問三姑姓答云姓竺南史竺法明乃吾祖也亦有詩贈遊近黃州郭殿直家有此神頗點提每歲率以

正月一日來二月二日去蘇軾與之甚狎常問軾乞詩軾曰軾不善作詩姑畫灰云猶裏猶裏軾云非不善但欲作爾姑云但不要及他新法便得也云々廁の神の事は已にいひたれば考合すべし

(六) 輪廻再生 同書三の卷輪廻再生の條に知虔州朝議李大夫自云凡二十五子今所有一子也其母以屢失子於病風作時嚙臂志之比再生子齒痕隱然在其臂乃知輪廻再生之說爲不誣爾輪廻再生云々與清曰余が聞見に武州國多摩郡程久保村の民の子同郡中野村の民の子に生れし事ありその傳は友人平田篤胤が記せる書あり死人の手に物書て葬れば生處にて手にその字あり葬れる墓の土をもて洗ざれば消すといへり

(七) 殿下足下執事几前 同書五の卷閣下足下之稱の條に古者三公開閣而郡守比古諸侯亦有閣故有閣下之稱前輩與大官書多呼執事與足下劉子元與宰相書曰足下韓退之與張僕射書曰執事即其例也記室本王侯賓佐之稱他人不可通用惟執事則指左右之人尊卑皆可通稱又自卑達尊例云座前尤非也閣下降殿下二等座前降几前一等豈

可借用哉云々按に殿下は上を清下を濁てテンガといふ攝關の稱也足下は今の入常に用る字也執事几前は中比の往來書牘におほく用ゆ吉野拾遺兒島高德が文に隱老几前と書たることあり國語拾遺卷十に介子推逃公柩木哀嗟伐而製屐每履則股之功俯視其股曰悲乎足下是下之稱爲起於此○是下日知錄十四

(八) 燒尾荒鎮 三代實錄十二丁に勅禁斷諸司諸院諸家諸所之人燒尾荒鎮并責人求飲臨時群飲祓除責被物一起請備去天平寶字二年二月二十日勅書備云云而今論持出後年代久遠有司解怠棄而不行因茲諸司諸院諸家諸所之人新拜官職初就進仕之時一號荒鎮一稱燒尾自此之外責人求飲臨時群飲等之類積習爲常醉亂無度云々同書廿六丁に謹案新格諸司諸院諸家所々之人燒尾荒鎮等惣當禁斷云々按に孔氏談苑五の卷燒尾宴の條に士人初登第必展歡宴謂之燒尾說者云虎化爲人惟尾不化須爲燒去乃得成人又說新羊入羣諸羊抵觸不相親附燒其尾乃定又說魚躍龍門化龍時必須雷電爲燒其尾乃化云々燒尾とは役替の仲間振舞の事也類聚三代格雜郡代解編燒尾卷六ノ廿五丁ウ燒尾小品初拜官獻食天子亦曰燒尾云々

(九) 花を美女に比す 花を美女にたとへしは志賀の山越の歌に道もさりあへずなどよめる類いとおほかり花をし見れば物おもひもなしとよまれしもおなじ孔子談苑五の卷花比美女條に前輩作花詩多比美女如曰若教解語能傾國任是無情也勸人黃魯直醜醜詩曰露濕何郎試湯餅日烘荷令炷爐香乃比美丈夫淵材作海棠詩曰雨過溫泉浴妃子露濃湯餅試何郎意尤工也と見ゆ

(十) 汗衫明衣 汗衫は和名抄にも見えて所謂カザミ也孔氏談苑卷五汗衫所起の條に古者朝宴衣服中有白紗中單百官郊享服中有明衣皆汗逐之狀漢高祖與項羽戰爭之際汗透中單改名汗衫と見ゆ明衣も神祇式に見えたり事林廣記戊集六の卷にも見ゆ

(十一) 魚袋 魚袋は金魚袋銀魚袋ありてみな唐様を傳へし也孔氏談苑五の卷魚袋所起の條に三代以章爲算袋盛算子及小刀磨石等魏易爲龜袋唐永徽中四品官並給隨身魚天后改魚爲龜唐初卿大夫沒追取魚袋永徽中勅生平在官用爲褒飾沒則收之情不忍五品以上龜魚更不追取と見ゆ

(十二) 腰帶 腰帶も唐の制によりて玉帶有文巡方な

とさまぐの制あり孔氏談苑五の巻腰帶所起の條に古有革帶反插垂頭秦二世始名腰帶唐高祖詔令向下一插垂頭取順下之義と有

(十三)笏 孔氏談苑五の巻執笏の條に梁職儀八座尚書以紫紗一裹手版一垂白絲於首如筆通志曰僕射尚書手版以紫衣一裹之名曰笏梁中世以來惟八座執笏者白筆綴頭以紫囊之餘公卿但執手版陳希烈不便稅笏騎馬以帛裹令左右執之李右坐云便爲將來故事云々按に笏の事和名抄桃葉葉裝束抄の歌所見舉盡しがたし三才圖會事物紀原なども考べし

(十四)白樂天詩 孔氏談苑五の巻唐末詩の條に白樂天每作詩令一老嫗解之問曰解否曰解則解錄之不解則又易之故唐末之詩近於鄙俚云々按に此說冷齋夜話にも見ゆ

(十五)竹馬 竹馬の戲は後漢書郭伋傳晉書殷浩傳などに見え尊容抄に古圖あり孔子談苑卷五鳩車竹馬の條に王元長曰小兒五歲曰鳩車之戲七歲曰竹馬之遊云々此說博物志に出たり杜牧が杜秋娘詩に漸拋竹馬戲稍出舞雞奇東坡が詩に竹馬迎細侯大錢與

劉寵なども作れり骨董集にこれかれ引出ていひたり下學集下冊二丁オ和漢三才圖會十七丁オ珍珠船三ノ十三丁ウに王元張曰小兒五歲曰鳩車之戲七歲曰竹馬之遊

(十六)算經 井算盤 學令義解に凡算經孫子五曹九章海島六章綴術三開重差周髀九司各爲一經學生分經習業云々集解に孫子釋云一卷即人名也古記云一卷即人名也今選三卷五曹釋云一卷即人名也古記云一卷即人名也今選五卷九章釋云九卷徐氏祖仲種々計筭也古記无別海島釋云一卷徐氏祖仲海島計筭也古記无別六章釋云六卷高氏古記无別綴術釋云五卷相氏也古記无別三開重差釋云三卷高氏也古記无別周髀釋云一卷古記云一卷今選二卷天地商計也九司釋云一卷九司古記云一卷九司事雜計也云々類聚符宣抄九の卷筭道部に讀書九章一部海島一卷周髀一部五曹一部九司一部孫子一部三開一部云々日本國見在舊目錄曆數家部に九章九卷劉徽注、祖中注、徐氏撰云々九章圖一云々六卷高氏撰六章圖一六章私記四九司五卷九司算術一三開三卷三開圖一海島二、一徐氏注、二祖仲注、圖一綴術六云々孫子算經三五曹算經五甄鸞撰云々同書天文家部に周髀三

道夷注とあり與清曰武英殿聚珍板に孫子算經三卷海島算經一卷を收む乾隆四十一年二月陸錫熊紀昀戴震等が孫子算經の提要云臣等謹案隋經籍志有孫子算經二卷不著其名亦不著其時代唐藝文志稱李淳風注甄鸞孫子算經三卷于孫子上冠以甄鸞蓋如淳風之注周髀算經因鸞所注更加辨論也隋書論審度引孫子算術甄所生吐絲爲忽十忽爲秒十秒爲毫十毫爲釐十釐爲分本書乃作十忽爲一絲爲十絲一毫又論嘉量引孫子算術六粟爲圭十圭爲抄十抄爲撮十撮爲勺十勺爲合本書乃作十圭爲一撮十撮爲一抄一抄爲一勺一勺爲一合之夏侯陽算經引田曹倉曹亦如本書而隋書中所引與史傳往々多合蓋古書傳本不一校訂之儒各有據證無妨參差互見也唐之選舉算學凡十書孫子五曹共限一歲習肄于後來諸算術中特爲近古第不知孫子何許人朱彝尊集五曹算經跋云相傳其法出于孫武然孫子別有算經致古者存其說可爾又有孫子算經跋云首言度量所起合乎兵法地生度量生度量生數之文次言乘除之法設爲之數十三篇中所云廓地分利委積遠輸貴賈兵役分數比之九章方

田粟米差分商功均輸盈不足之目往々相符而要在得算多寡算勝以是知此編非僞託也彝尊之意蓋以爲確出于孫武今攷書設問有云長安洛陽相去九百里又云佛書二十九章章六十三字則後漢明帝以後人語孫武春秋末人安有是語乎舊本久佚今從永樂大典所載甄鸞編次仍爲三卷冠以原序其甄李二家之注則不可復攷是則姚廣孝等割裂刊削之過矣と見ゆまた海島算經の提要に海島算經一卷晉劉徽撰唐李淳風等奉詔注とあり卷端に今有望海島立兩表齊高三丈前後相去千步令後表與前表參相直從前表卻行一百二十三步人目著地取望島峰與表末參合從後表卻行一百二十七步人目著地取望島峯亦與表末參合問島高及去表各幾何答曰島高四里五十五步去表一百二里一百五十步とあるにて海島算經と名づけしよしを知べし與清亦曰清人梅文鼎が古算器考を按に古の算器は籌を用ふ漢書に説ありて竹徑一分長六寸二百七十一而成六觚爲一握度長短者不失毫釐量多少者不失圭撮權輕重者不失黍稬また世説に王戎持牙籌會計すなごあるみな籌を用し證也易の籌これの權輿也今

の珠盤起明初よしくはしく論じたれば閱て知るべし古器算考一卷藝海珠塵子部天文曆算類に收む

(十七)鯉 明人楊慎が異魚圖贊一の卷に鯉本魚子細

如盤茸一莊周寓言鯉化為鵬譬彼詩頌鵬育桃蟲于古

言詮誰發其隙自注に莊子云北溟有魚其名爲鯉鯉

之大不知其幾萬里此寓言也按内則卵醬卵音鯉國

語亦云魚禁鯉鱒皆以鯉爲魚子至小之物也莊子乃

以至小爲至大便是滑稽之開端後人不得其意

云々與清曰楊竹菴が此說千載の惑を開たりといふべ

し鯉鯉の事中華古今注にも出たり

(十八)飛魚 異魚圖贊一に飛魚身圓長丈餘登雲游

波形如鮪翼如胡蝶翔泳俱仙人審封會仰諸著深

灼燦千載奇術云々按に本朝に魚の飛ぶものは文

鯉魚のみ和名抄にトビヲといひ平戸にてアゴといひ

石見にてツバメウヲといふ江戸にてトビノウヲとい

へり

(十九)人魚 異魚圖贊三に髮魚帶髮形如婦人一出

于瀕池肥白無鱗時食制云々按に人魚の類也近江國

蒲生河にて人魚を得し事國史に見ゆその外本朝人魚

の出し事物におほくしるしたりき

(廿)海鏡 寛保元年松月堂が撰びし鎌倉の地志に海

鏡猿田彦九冊あり自序に海鏡は海にある貝の名也其

容如西瓜飢則破れて明口而其中より蟹の如き物

數多道出て喰物又元の海鏡に入る此時海鏡の空腹

正愈爰他智を吾物にして恣に行之たとへ也云々異

魚圖贊四の卷に海鏡殼圓中甚盤膩腹有小蟹朝出暮

至或生剖之蟹子跋々遶巡亦斃といへるものこれ也

(廿一)堪輿 清人程際盛が駢字分箋上卷に堪輿堪天

道也輿地道也堪輿家とは墓相家の事也輿

地の事五十六の卷にいへり

(廿二)田宅賣買門戸 同書上に田宅宅在都田在野

大日門小日戸外日門内日戸

(廿三)炙炮煎煮 同書上に燂炙燂者火燒之名炙者遠

火之稱燂燂燂炮毛曰炮加火曰燂燂燂云々又云煎煮

以火而乾之謂之熬有汁而乾謂之煎

(廿四)醴 又云酒醴清者爲酒濁者爲醴

(廿五)氣味 又云氣味臭之曰氣在口曰味

(廿六)苞苴 又云苞苴稟曰苞藉曰苴

(廿七)束脩 又云束脩束帛也脩脯也

(廿八)錦繡絲紉 又云錦繡錦織

(廿九)衾被衣服衣裳 又云衾被今名曰被古者曰衾

(卅)裝笠笠笠 又云裝笠裝所

松屋筆記卷五十一

二百一

蒲生河にて人魚を得し事國史に見ゆその外本朝人魚

の出し事物におほくしるしたりき

(廿)海鏡 寛保元年松月堂が撰びし鎌倉の地志に海

鏡猿田彦九冊あり自序に海鏡は海にある貝の名也其

容如西瓜飢則破れて明口而其中より蟹の如き物

數多道出て喰物又元の海鏡に入る此時海鏡の空腹

正愈爰他智を吾物にして恣に行之たとへ也云々異

魚圖贊四の卷に海鏡殼圓中甚盤膩腹有小蟹朝出暮

至或生剖之蟹子跋々遶巡亦斃といへるものこれ也

(廿一)堪輿 清人程際盛が駢字分箋上卷に堪輿堪天

道也輿地道也堪輿家とは墓相家の事也輿

て妄に進取らず妄に退かず四十歳より今茲四十五歳に及て退を知て進を恐る智慧の字を察するに能はずして已に老將に至矣爾雅智慧字面大哉禮易本命篇○老子大道廣有仁義智慧出有大國

(卅六)能 又云知能所以知之在人者謂之知之所以能之在人者謂之能荀子正名篇云々按に能は伎藝の所長にして猿樂職などもこの義によれる名也素書に材能の字あり詩丞民の疏に有伎謂之能ともあり爾雅野客十

(卅七)委曲消息變化從橫本末 又云委曲委委也委難就之也曲局也相近局也釋名又云消息消削也減削也息塞也塞滿也釋名又云變化自有而無謂之變自無而有謂之化解又云從橫以利害爲從以威勢相脅爲從後漢書○本末木下曰本木上曰末許氏云々按に委曲は今の消息文に用る詞也消息は日本紀にアルカタチとよみ物語書にせうそことせうそくともいひ消息往來の書雲州消息の類いとおほし變化は物語にへんぐるものと見え歌にもばけともまたばけものといふ詞古書におほく見ゆ從橫は天下に從橫すなど常にいふゆり本末は神樂に注すべき字也

(卅八)干支 又云枝幹甲乙爲幹寅卯爲枝廣雅木旁生

爲枝正出爲幹爾雅云々按に日本紀に干支をコノカミオトウトよめり干は幹也支は枝也

(卅九)涉獵草昧 又云涉獵涉如涉水獵如獵獸漢書傳注云々又云草昧草謂草創一昧謂冥昧易辭云々草昧の字神武紀に見ゆ

(四十)猶豫 又云猶豫先事而慮謂之豫後事而慮謂之猶孟子公孫丑

(四十一)斷絶離別 又云斷絶斷段也分爲異段也絶截也如割截釋名云々又云離別近曰離遠曰別楚辭離

(四十二)外國竹枝詞 日本雜詩異域竹枝詞 清人尤侗が外國竹枝詞一卷あり朝鮮日本琉球安南緬甸占城真臘瓜哇暹羅三佛齊百花文郎馬神滿刺加龍牙犀角龍牙門龍誕嶼東西竺九洲山賓童龍崑崙山靈山交欄山麻逸凍重迦邏吉里地閩蘇吉丹丁機宜合猫里淳泥南巫里蘇祿彭亨婆羅古里忽魯謨斯阿丹竹步木骨都東佐法兒佛郎機呂宋和蘭美洛居蘇門答刺花面阿魯淡洋錫蘭山翠藍嶼溜山三島柯枝大葛蘭小葛蘭小噴喃淡巴甘巴里小刺哇古麻刺朗西洋瑣里天竺榜葛刺勿斯里木蘭皮歐羅巴哈密赤斤蒙古罕東安定曲先土魯番柳城黑婁于闐

亦力把力撒馬兒罕渴石哈烈麻林魯迷天方佛林默德那吃力麻兒速麻里兒寫思藏兀良哈蒙古等の事跡を詞に作りて自注せし書也また土語十首を附す苗人羅々攷狉狉攷人猺人獠人黎人仲家龍家八百總婦等也八百總婦の詞云漢宮管說三千女會長何居八百妻應得房中彭祖術下年恰與定婚齊注に世傳土會有妻八百各領一寨故名元征之道路不通而返明立八百大甸司云々按に八百總婦は越後新潟の八百八後家に對すべしまた奥に起雲字喜亭が日本雜詩十六首を附す小序云日本爲海外諸國之勝舟楫輻輳其中山水奇絶景况佳妙不能盡悉偶占絕句十六首聊記歲序民風之意云とありまた清人福慶が異域竹枝詞一卷あり共に藝海珠塵史部地理外紀類中に收む

(四十三)陳壽三國志の評 世説に陳壽が三國志を撰ぶ時米を乞て佳傳を立んといひ孔明に父を殺されたるを怨て苟或よりも劣れる傳を作れるよしの私曲をそしりたり明人姜南が學圃餘力に晉史官陳承祚作三國志猶尊曹魏以天子之制而等漢吳如春秋列國義例不明固不待言矣然其評雖褒美魏武不

風而其評諸葛武侯之美二國之臣皆所無也其謂應變將略非其所長者承祚晉人爲司馬懿與武侯相持而作遜辭以溢美懿也其隱然與昭烈君臣之意往々見於志中讀者自當見之とあり學圃餘力一卷藝海珠塵子部小說類中に收たり

(四十四)假面井猿類桶 假面は周禮方相氏黃金四目以逐鬼を濫觴にて後にさまざまの面製あり該餘叢考卅三丁にくはしくろうじたり政事要略に方相氏の圖を載す軍裝の面類は鐵面にて額までかくる也目の穴あり金物面類は目の下の頬當也今の猿類は半頬也と伊勢貞丈が赤鳥隨筆にいへり鎌倉鶴岡宮に菩薩樂の古き面あり觀世大夫が家の翁の面靈物也といへりオタフクの面ともオカメの面ともいへるもの寛保年中の畫に見たることあり因に云小桶の手あるを猿ボウといへりこれも猿類におこれる名にや爾雅飯

(四十五)湖のさし引する井泉の類 井泉に鹽のさし引するは諸國におほくさし引する石の手水鉢ありかく應湖の物か

ら國にもおほかり清人愈思謙が海潮輯説下卷應潮之泉第十九に水經注熙平縣南有朝夕塘水出東山一日再增再減盈縮以時未嘗愆期同於湖水海陽記雞籠山下湖水朝夕輒有涌水溢出如湖水時刻不差朔望尤大號爲潮泉黃滔靈公山詩井通納吐脉自注云山間有井通海潮盈縮之候漁隱叢話甬東山下有井井水盈縮與江湖相應癸辛雜識汴城上方寺琉璃塔下有井通海潮高僧傳會稽寶林寺有井應大江潮候云々此外應潮之物第二十に石雞湖雞などの事見ゆ海潮輯説二卷藝海珠塵史部地理山水類の中に收む

(四十六)氷柱 清人李心衡が金川瑣記卷六氷柱の條に慈雲亭落成於丁未秋杪至次年四月氷柱摧致壓檻折復建石牆圍抱亭後始得堅久氷柱者滴水凝自冬及春日積月累漸如牆柱巨者不能合抱夏日爲日光曬燥始有傾折患柱形晶瑩明況如水精琢成即微外他處亦不恒見云々按に夫木杪に霜柱の歌あり氷のはしらも氷柱の字によりて歌によまんになでふことかあらん

(四十七)ビハボン笛井口琴 文政七年八年の間江戸

の兒童ビハボンといふ口笛を吹こと流行せり鐵をもて口に銜むやうに作りたるもの也清の六十七番社采風考口琴の條に削竹爲片如紙薄長四五寸以鐵系環其端銜于口吹之名曰口琴又有制類琴狀大如姆指長可四寸窪其中二寸許釘以銅片另繫一柄以手按循唇探動之銅片間有聲妮々相爾女麻達于明月清夜吹行社中番女悅則和而應之潛通情款夏侍御有詩云不須挑逗苦勞心竹片沿絲巧作琴遠韻低微傳齒頰依稀私語夜來深云々ビハボンは口琴の類といふべし六十七字居魯滿洲旗人官吏科給事中番社采風考一卷藝海珠塵史部外紀類中に收たり又清之余慶遠目録には命が維西見聞紀にも口琴竹片爲之長四寸濶三分刻虛之而中存一線之篋爲絃首尾橫處皆存絃首聯於橫尾視橫齊處長一分刻下其橫處而絃寄於其面如是者三具絃粗細等而下以左手大指食指排持三片之頭張口而置其正中於口間以右手食指中指無名指搏上中下片之絃之尾長處錯落而彈噓噓氣大小以定七均之高下古宗慶些那馬西番皆以筒佩之彈以應歌曲彈者身舞足蹈而與歌合節云々とあり余慶

遠字瑞度湖北安陸縣人也維西見聞紀一卷藝海珠塵史部地理類中に收む清人張洵が滇南新語の口琴の條に削竹成篋取近青長三寸三分寬五分厚一分中開如篋之立中簧約濶二分簧之前稍相錯處狀三尖犬牙削尖極薄近尖處厚如故約後三分漸凹薄至離相連處三四分復厚兩頭各鑿一孔前孔穿麻線如縷以左手無名指小指換之大食二指捏穿處如執柄橫側貼腮近唇以氣鼓簧牙其後孔用線長七八寸尾作結穿之線過結阻以右手之食中二指挽線徐徐牽頓之鼓頓有度其簧閃成聲民家及夷婦女多習之且和以歌之又一種寬僅半兩端瘦削中作一牙簧無孔線二片并用而音各異以左手前三指平執而吹以右手前三指參差搔其末亦伊喔可聽似有宮商此惟二別選及蘭州之夷女盛吹之云々滇南新語一卷清人張洵が撰也洵號西潭漢軍鑲藍旗人監生歷官雲南迤西道有買桐軒集こは藝海珠塵史部地理類中に收たり

中に收て大成の書也卷一衆占籍第四に衆占非一惟夢爲大夢與兆易準故三代尙焉洛出丹書乃設九疇非法著矣河出綠圖乃列八卦易法行矣占夢之秘固性命之理而兆易之揆也云々注に漢書藝文志曰雜占者紀百事之象候善惡之徵衆占非一而夢爲大故周有其官と見ゆ爾雅七修類稿廿八古(四十九)喉痺狗咽の良方 中陵漫錄一の卷狗咽の條に先年旅僧某の寺に來る忽に氣絶して苦む余按に喉痺の甚きものとして山根を細末して吹入る一晝夜にして始て氣息する事を得たり今此症を按に病原候論曰喉内忽有氣結塞不通世謂之狗咽此由風熱所作與喉痺之狀相似是果して此症なりと見ゆ中陵漫錄十四卷江戸藤成裕が撰にて文政九年夏季夏門人中島嘉春が漢文の序あり寫本也成裕は醫師也(五十)一番煎じ二番煎じ 藥に一番せんじ二番煎じといふ事中陵漫錄一番字の義解の條に藥を煎るに一番煎二番煎と云此番の字何に因て義を取る事を知ものなし按に香祖筆記曰書冊爲水潦所浸可于大甌中蒸而曝之至二番乃以物鎮平處速乾色雖微漬而無損壞是此番の字を以て見るべし云々

與清曰鶴に一番鳥二番鳥といひ砂石集にも一番鳥といふ事見ゆ

(五十一) 金山寺味噌 井納豆 中陵漫録四の卷金山寺鹽鼓の條に江戸に製す金山寺味噌は他國になし是は乃金山寺鼓と云て能く當れり又十二月に至れば何宗によらず鼓を作りて且家に謝す是を納豆といひしは何の説に出ることをしらす金山寺味噌は乃東坡金山贈寶覺長老詩誰能斗酒博西涼但愛齋厨法鼓香又寄園寄所寄云天下第一者金山寺鹽鼓と云これ乃金山寺味噌にして此味に次ぐものなし此説に隨て諸方の寺院に製すれども此味に及ぶ事なし又按に今の味噌は此鹽鼓より出たるなるべし云々與清按金山寺味噌は紀伊國和歌山の製を上品とし江戸にても紀州金山寺とよぶ紀伊國にさる寺の名あるにや可尋納豆は吉田にて製るは生姜を加たる干納豆也遠江濱松にて濱名納豆とて製るは山椒の辛皮を加たる干納豆也江戸にて汁に調じて食は糸引納豆とてよく煮たる豆を室中に納て黏て糸を引をいふ味噌は古今著聞集に飛鳥味噌あり和名抄に未醬あり曾水をミソウツといふも味噌水の心にかや

(五十二) 松を植る傳 松を植る時節は寒國暖國の不同ありと雖ども正月彼岸より二月中植れば百に一失なし大木の一尺より五尺に及ぶは掘て鋸にて根を挽切りた命根二三本を残して切たる廻りによき土を入ておく俗に是を鉢といふ又根をまはしておくともいふかくして明年の二月移し植べし梢は鋸にて切べし梢を切らざれば活こなし松は沙地によし又黒土眞土もよし湿地は相應せざるよし藤成裕が中陵漫録四の卷に見ゆまた橘春暉が北窓瑣談に松の木その根さしたるやうに枝もさすもの也枝ぶりを見てその根を知べし外の樹木も大かた如此といへり與清曰松は常陸鹿嶋郡に生るもの奇妙也小松を刈取し跡に孫枝を生じて榮ゆるは他所に未きかす戯に引ぬきてなげ捨置にやがて生付といへり余が見聞の松おほかる中に坂東にて見たりしは相摸國藤澤宿と南郷村の間には松が原あり今も好松四本生立り同國會我山の六本松早川尻の四本松本所小名木澤の三本松下總國印幡沼邊の大松武藏多摩郡小山田村神明宮の大松同郡下矢部村八幡宮の大松鹿島大神宮の神木など擧盡しがたし高砂住吉武隈幸崎の類の名木は別に古書を

抄出して記すべし

(五十三) 炬燵 中陵漫録五の卷火籠の條に世俗コタツと云字をしらす按に陰鏗が詩に火籠恒煖脚又高啓が梅雨の詩に憲寒頓使抛執扇衣濕頻催換火籠これ乃コタツなるべし又七輪と云本字をしらす按に徹庵秘録に八卦爐とあるは八角の七輪なるべし云々火燵の事骨董集上編中に見ゆ大筑波冬「なま」たつの火はつよし又あつ火をけに子にのこつかな下學集増補下二ノ廿八丁ノ火燵記十一丁ノ小袖のたいにはこたつかななる物にて候くるくわ候てかな物などあるものにて候云々

(五十四) 養生腎藥 白芨一味そのまゝ細末にし蜜にて煉朝夕用れば婦人無病になりて房事を強くし多く子を産しむ男子も腎をまし瘵瘵の症に尤も宜し中陵漫録五の卷阿蘭秘藥の條にいへり與清曰白芨は異名を連及草綱目 甘根 上白給 同雪如來 竹粟膠 本藥 なごいひ花を筭蘭 朱蘭 鏡 なごいへり本朝にてシラシケイシユランランなどいふよし本草啓蒙八に見ゆ又人家ニ多ク栽テ花ヲ賞ス葉ハ筭葉ニ似テ縦に皺多シ又紫 蘆葉ニ似タリ夏月莖ヲ出シ三四葉互生シ上ニ數花ヲ開ク形蘭花ニ似テ紅紫色香氣ナシ一種白花ナル者アリ葉長大ナリ花家ニ誤テ「ケイ」ト呼ブ故

ニ尋常ノ者ヲシケイト名ク又淡紅色ナル者アリ「ウスケイ」ト名ク市中ニ販ク者舶來ハ根瘠小ナリ和産ハ肥大ナリ宜ク和ヲ用ベシといへり本草綱目に癰腫惡瘡敗疽傷陰死肌胃中邪氣敗風鬼擊癰緩不收除白癬疥蟲結熱不消陰下痿面上肝炮令人肌滑止驚邪血邪血痢痢瘵風痺赤眼癢結溫熱瘧疾發背癩癰風痔瘻撲損刀箭瘡湯火瘡生肌止痛止肺血また鼻衄不止心氣疼痛重舌鵝口婦陰脫疔瘡腫毒打跌骨折刀斧傷損湯火傷灼などに妙なるよしあり謂人陳士編全五卷四云白芨味苦辛氣平微寒陽中之陰入肺經功專取飲亦能止血散毒消癰死肌腐肉皆能去之數山根止血消瘻殺山此物近人皆用之外治一殊不知其內治更神一用之止血者非外治也爲白芨研末調入于入參歸身黃芪之內一同吞服其止血實神夫吐血未有不傷胃者胃傷則血不凝而上吐矣然則胃中血血也血在胃之外傷胃則血不能降血而入于胃中胃不凝而上吐血善能收斂同參歸身直入胃中爲胃中之斂斂則血從何來此血之所以能止也況白芨又不止治胃中之血凡有空隙皆能塞之鳥可從借外治而不止藥用以內治乎或問白芨能填肺中之損則昔年有賊犯受傷胃服白芨得愈後賊被殺問其胸腹見白芨填塞于所傷之處一果有之乎此前人已驗之方也何必再疑白芨實能是肺填塞于所傷之處一果有之乎此前人已驗之方也何必再疑白芨也予見野史載此段又不如此史官受刑時自云我服白芨散五年得再生不意又死于此人問其方賊云我遇雲遊道士自稱越人傳我一方白芨一助人一兩麥冬半兩我研末每日服三錢吐血痊愈愈然曾讀我云我救汝命汝宜改過否則必死于刑不忍令死于此悔不聽道士之言也我傳方于世庶不沒道士之恩也野史所載如此分用麥冬爲佐以養肺川入參爲使以益

氣則白髮城三細肺中之傷自易矣功立方甚妙惜道士夫載其姓名所謂越人者意者即扁鵲公之化身耶云々

(五十五)杉のさし木の傳 中陵漫錄四の巻挿杉條に杉は挿木にしたるは皮目の處少白く其内は皆赤身也薩州にては毎年四月の比杉の枝を二尺許に切取り六本を二把として山中の泉に浸し置事四五日取上て赤土の泥中に塗て山野の空地に杖を立て穴を爲し深さ七八寸に至る尤地の堅き處は穿つ事なし此穴中に挿む風吹時は廻轉す雨露の潤を歷て自ら堅定する也大抵百本の内七八十本活是より手を附るに及ばず土地の宜き所は尤長じ易し先春に至てその木の素情を見立葉の先新葉を出さんとするを俗にあう採て挿時は百に一失なし苗を仕立て植るに勝れり云々與清曰櫻は今年延の枝を挿には葉莖かたまりてさす長さ二三寸或は四五寸にし葉おほければ切捨てその本をよく切て赤土の中に黄色なるを採て煉て丸くしてそれに挿てさて植る也これを玉摺といふ良法也何の木にても此定也時刻は雨氣の日巳の刻以前がよし未明より巳刻までを限とすべしさて後に度々水を澆がよし物理小識九に杉粘不_レ宜水壤種_レ之亦發然挺茂不久焦枯也と見ゆ

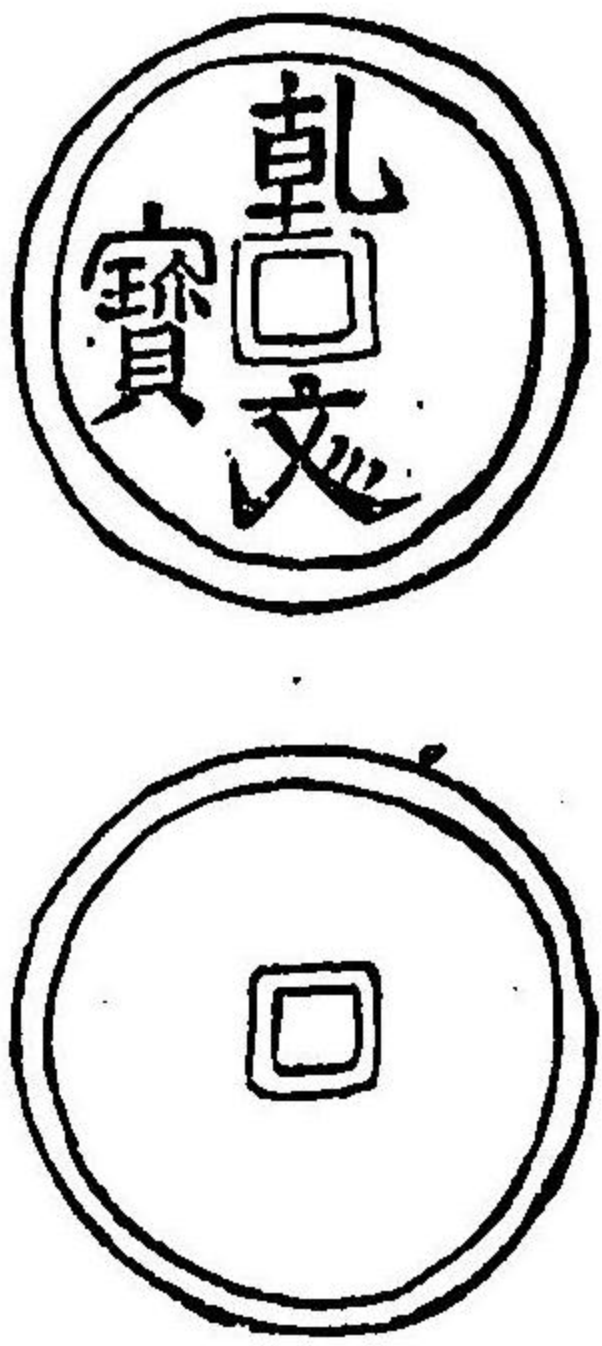
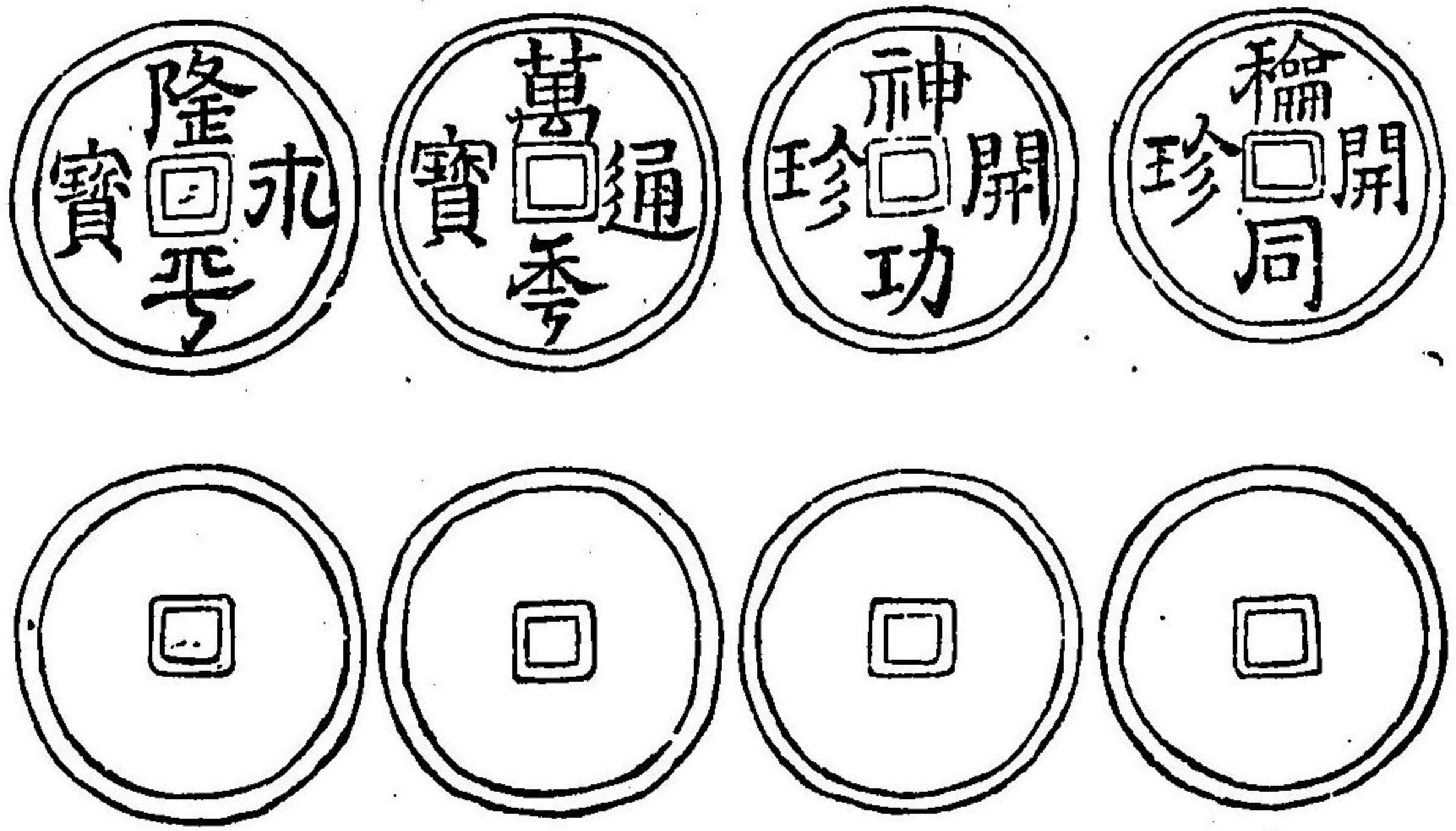
松屋筆記卷之五十二

東都 源與清文儒稿

(一)紙帳 明人屠隆が考槃餘事四の巻帳の條に冬月紙帳或白厚布或厚絹爲之夏月吳中棉紗爲之妙以粗布爲之帳底如綴頂式紐其三面一前餘半幅下垂上寫梅花一副以布衾荷枕蒲褥左設几鼎然紫藤香一迺相稱通人還了鴛鴦債紙帳梅花醉夢間之意また紙帳の條に用藤皮繭紙纏於木上以索繩緊勒作頗紋不用糊以線折縫之頂不用紙以稀布爲之頂取其透氣或畫以梅花或畫以胡蝶自是分外清致云々按に本朝の紙帳これに比ればいと疎也帳は催馬樂に少し儀式帳にさまぐの帳の名あり蚊屋は日本紀に蚊屋媛あり考槃餘事は龍威秘書戊集中に收む爾生八階八卷十三才起居安樂下怡養動用器具部紙帳用藤皮繭紙纏於木上以索繩緊勒作頗紋不用糊以線折縫之頂不用紙以稀布爲之頂取其透氣或畫以梅花或畫以胡蝶自是分外清致唐宋千家聯珠詩格十の卷用讀易字格謝山の紙帳の詩あり梅玉雪盤無_レ暇_レ有_レ生香_レ鼎有_レ茶_レ夜_レ半_レ起_レ來_レ讀_レ周易_レ好_レ看_レ到_レ明_レ月_レ透_レ梅_レ花_レ增_レ注_レ此_レ言_レ紙_レ帳_レ之_レ潔_レ如_レ玉_レ雪_レ之_レ無_レ瑕_レ云_レ又_レ十_レの_レ卷_レ用_レ不_レ倒_レ字_レ山_レ眠_レ之_レ九_レ丁_レウ_レ輪_レ林_レ五_レ鳳_レ集_レ廿_レ五_レ文_レ天_レ祥_レ全_レ集_レ四_レ卷_レ六_レ丁_レウ_レ紙_レ帳_レの_レ詩_レあり紙帳白如_レ雪_レ上_レ有_レ坐_レ客_レ影_レ一_レ自_レ不_レ自_レ由_レ黑_レ光_レ瀉_レ無_レ定_レ人_レ影_レ已_レ散_レ依_レ然_レ雪_レ花_レ盤_レ須_レ與_レ乘_レ燭_レ眼_レ相_レ忘_レ心_レ目_レ靜

(二)日本國詩并錢 清人陸次雲が譯史紀餘二の巻外國詩編の部に朝鮮國詩に金訴が對馬島舟中夜作獨泛孤蓬臥未安西風一夕晚湖寒海天秋色尋無處却向潘郎鬢上看云々日本國詩に釋全俊全俊姓神氏秀皇日本國高井縣人詩集宋學士一回錯買離鄉船抹過鯨波萬里間震且扶桑無異士參方飽看浙西山○無名氏嘉靖七年過風飄至通州守禦所無題白浪滔々上接空布帆十幅不禁風此身若葬江魚腹萬里孤臣一夢中能作此詩可以主試朝鮮矣○貢使失名咏柳湧金門外柳如金二日不來成綠陰折取一枝城裏去教人知道是春深○普福使臣在途有感未遊上國看中原細嚼青松咽冷泉慈母在堂年八十孤兒爲客路三千心懷北闕浮雲外身在西山返照邊處々朱門花柳巷不知何日是歸年○釋天祥以下見沐景順滄海遺珠集寄南珍上人居處僻心與石泉清道在從違俗身閒不用名空階松子落雨巡鮮花生怪得稀相見年來懶到城僧詩無釋子氣又有本色故佳○贈李生異域無親友孤懷苦別離雨中春盡日朔外客歸時花落青山路鶯啼綠樹枝從今分手後兩地可相思○送僧歸重慶東西千萬里來去一身輕碧鳳山前別黃梅雨裏行江長巴子國地入夜郎城昔我經過處因君動遠情○

哭宋士熙 衆山搖落日那忍哭先生老眼非無淚深交最有情人猶惜才調天可厭聰明書法并詩律空留後世名○夢裏湖山爲孫懷王作杭城一別已多年夢裏湖山尚宛然三竺樓臺晴似畫六橋楊柳晚如烟青雲鶴下梅邊墓白髮僧談石上緣殘睡驚來倍惆悵可堪身世老南濱○釋機先挽遂光古先生昨日來過我今朝去哭君那堪談笑際便作死生分曠達陶徵士蕭條鄭廣文猶憐埋骨處西北有孤雲○釋大用挽遂古光氣宇自豪邁孤超傲世時冥鴻冲澗志野鶴出塵姿筆勢雲烟起詩名草木知論交三十載死別抱長悲○啞哩嘛哈使臣答大明高皇帝問日本風俗洪武二十年國比中原人同上古人衣冠唐制度禮樂漢君臣銀魏芻新酒金刀脰錦鱗年年二三月桃李一般春不愧使臣○答里麻使臣或云即西州一株楊柳一株花原是唐朝賣酒家惟有吾邦風土異春深無處不桑麻此詩有調貶中國之心非使臣所宜出錄之以存其事○釋左省口號呈沈潤卿醉中不覺虛簷滴吟作燈前細雨聲云々また三の卷外國錢文の條に日本國錢舊譜曰日本國錢四品並徑寸重五銖其文隸書一曰和同開珍二曰神功開珍三曰萬年通寶四曰隆平永寶其國延歷中鑄また乾文錢宋會要云太平



興國九年日本僧齋然等浮海而至云其國用錢文曰乾文寶とあり日本錢の事三才圖會にも見ゆ倭漢名數を考合すべし譯史記餘四卷龍威秘書第九集に收む
圓寶錢ノコト松の落葉四ノ卅三丁ナリ
 (三)西方聖人匪佛 寄園寄所奇八の卷家渡寄籍の稱謂誤の條に列子述孔子曰西方有聖人一倭佛者以爲指釋氏而言皆妄也國語姜氏曰西方之書有之曰懷與安實疾大事注云周詩誰將西歸西方之人皆謂周也予謂孔子果有是言謂昔文王也於佛何與至天通直指佛爲西方聖人其學可知矣通釋云々按に列子西方聖人の說坦齋通編よくその惑を開たりといふべし
 (四)筆の松管 唐馮贄が雲仙散錄に幽人筆司空圖隱於中條山變松枝爲筆管人間之曰幽人筆正當如是汗漫云々按に陸奥松島天の橋立などの松枝を

もて筆管に作りしもの今も世にもてはやして伊勢の濱荻野田川玉川の萩などもに賣品おほかり
 (五)興米 興米は和名抄舊本今昔物語などその外古書の所見舉盡しがたし桂川地蔵記には道徳興米ともあり雲仙散錄吳興米の條に吳興米炊之飯香白馬豆食之齒齶號國夫人厨吏鄧連以此米搗爲透花飯以豆洗皮作靈沙臘以供翠鴛堂品物類聚云々吳の國は粳米の佳品を出せば興米には用なるべし
 (六)門の關栗木を用れば盜を除 雲仙散錄栗木爲關條に凡門以栗木爲關者夜可以遠盜從容云云
 (七)猿啼處生炭 又啼猿生炭の條に猿啼之地炭乃多有每一聲遺生萬莖窮幽云々
 (八)買春錢 又買春錢の條に進士不第者親知供酒肉之費號買春錢承平云々按に買山事山谷が集に見ゆ
 (九)苦吟筆記十ノ二 又苦吟の條に孟浩然眉毫盡落裴祐袖手衣袖至穿王維至走入醋甕皆苦吟者也詩源云々按に苦吟はによぶといふべしによぶの事已にいへり

(十)左ねちり 俗に左ねちりといふは左繩によれる語也雲仙散錄左燃巾拭面條に陽華用左燃巾拭面倍有光彩白霞云々といふ事も見ゆ雲仙散錄一卷蕪海珠塵子部小説類中に收む唐馮贄が撰とも又は宋王銍が偽託ともいふ
 (十一)酒に不酔方 飲酒家酒に酔ざる方あり雲仙散錄嚼雞舌香條に飲酒者嚼雞舌香則量廣浸半天回則不酔酒中云々と見ゆ
 (十二)茗戰非品茶本非茶 太平記に本非茶あり梅尾を本とし他を非とすこれを戦はしむる事と見ゆ近來品茶の會あり雲仙散錄茗戰の條に建人謂闘茶爲茗戰といふ事あり圓寶茗戰式に茶梅茶龍ノ名見ユ
 (十三)遠鏡非耳學問 西洋人湯如望が遠鏡說に夫遠鏡何昉乎昉於大西洋天文士也其用之利可勝言哉蓋凡人視近與大易視遠與小難遠鏡則無遠近無大小者也約略言之天象地形不出其照而至若山海之間尤爲備盜之先資補益人世亦大矣奈何忽爲悅目快心具也云々又云夫遠鏡者一鏡合之以成器者也其利用既如斯矣乃分之而製造如法則又各利於用焉即中國所謂眼鏡也云々と見えてその圖

を載たり自序に人身五司耳目爲「貴無」疑也耳與「目」又孰爲「貴乎昔亞利斯多稱耳司爲「百學之母」謂凡授受以「耳學問所以彌精彌廣」也若「目司」則巴拉多稱爲「理學之師」何者蓋當「其徒與物遇見」其然「即察其所」以然「由「窺入」細由「有形」入「無形」理學始終總目爲「腑矣而不」寧惟是「明光色光較形聲臭味獨居」上分不「既屬」於目「乎觀夫亞尼瑪以」目爲「居止」孟子謂「存乎人」者莫「良於眸子」則凡情開意動之微必達「於目」善惡莫「掩有」如「執」左契「然者且耳之於聲也有「待目之於形也無待聞每後見每先聞每似見每真聞僅有「輕重清濁」見豈特元黃采素而已哉物體有「大小方圓邪正動靜」數有「多寡」位有「遠近」時非「於目」辨者乎誠若「是則目之貴」於耳「也明矣雖然耳目皆不可「廢者也則佐耳佐目之法亦皆不可「廢者也第佐耳者用力省以「管則遠以」螺則清利物出「於天成」其巧妙自無「可得而言」佐目者用力煩管以爲「眶鏡以爲「晴利物出「於人力」其巧妙誠有「可得而言」者無「可得而言」者「言」之則誕有「可得而言」者「秘」之則欺此遠鏡說之所「由述」天啓六年歲次丙寅仲秋月大西洋湯如望題とあり此文中に耳學問の事あり湯如望は明の天啓

中に西洋より來れる人也遠鏡說一卷蘇海珠塵子部天文奇器類中に收む東坡君實其にうけず 程氏の學を土木偶盜名の學として東坡が譏罵せしことまた程願哲宗を諫て哲宗の色不平なるを聞て司馬溫公かゝる儒生をば人主に親近せさすべからずとて歎息せし事沈作哲が寓簡五の卷に見ゆ寓簡は知不足齋叢書第一集に收む

(十四)程氏の學東坡司馬君實共にうけず 程氏の學を土木偶盜名の學として東坡が譏罵せしことまた程願哲宗を諫て哲宗の色不平なるを聞て司馬溫公かゝる儒生をば人主に親近せさすべからずとて歎息せし事沈作哲が寓簡五の卷に見ゆ寓簡は知不足齋叢書第一集に收む

(十五)古代めきたるものすきは君子の所「耻」寓簡五の卷に司馬君實依「禮記作「深衣冠簪幅巾指帶去」朝服則衣之謂「邵堯夫曰先生可「衣」此乎堯夫曰雍爲「今人」當「服」今時衣「耳君實歎其言有理而合「于通變之義」也近時士大夫好爲「怪服」號曰「唐妝」予謂稽古不「至」秦漢以上「固已淺矣而況於「唐乎云々與清按に近來のなま古學者が古風を好て總髮になり某麻呂と呼びなま儒者が唐風を學などみな無用のものわらへ也

(十六)和漢樂人の長壽 續日本後紀十五に尾張連濱主百十三歳にて長壽樂を舞和歌を奉りし事見ゆ寓簡五の卷に漢孝文帝得「魏文侯樂人竇公」亦年一百八十餘歲獻「其樂書」自言能鼓瑟導「引吾意」とあるは和漢同日の談といふべし

(十七)小惠婦人の仁 沉作詰が寓簡卷六に近世居「長吏之任」者往々好「行」小惠「而愛」人以「姑息」長「惡容」姦以媚「愚民」而賈「虛譽」布衣與「冠帶」競則布衣勝不問「理」之所在事之曲直「也其弊至」於閭巷小民凌「犯士類」善良受「弊不」得「自伸」此賊民之最甚者書曰閭「遠」道以干「百姓」之譽「閭」沸「百姓」以從「己」之欲「然則非」道干「譽與」害「民從」欲者「其惡均耳故聖人深戒」之諸葛武侯曰治世以「德」不以「惠」至論也云々與清曰此論今の世の御代官郡奉行などの職に居人に熟讀せしむべき事也婦人の仁にして大義を知らざるもの世におほかるはもと文學の國ならざれば也

(十八)齊家治國の術 寓簡卷六に家多「偏愛」者衰國多「嬖倖」者危人主自聰明而多能者其臣益欺朝混亂而多「制者其政益」亂官聚斂而多「費者其積益」虧兵民窮瘁而懷「怨者其心必」離賢士失「職而不」容者其志必曠

政令苛虐而好「殺上下」刻急而無「仁恩」者其福祚必移自古以「此亂」亡蓋蔽而莫「之知」也忽「焉其可」悲云々與清曰淵清して魚不「息人」潔して衆不「和齊家治國の術豈可「易哉

(十九)弄臣 漢孝文帝鄧通を愛す丞相申屠嘉通が不敬を責む文帝謝「丞相」曰此吾弄臣君釋「之云々豊大閣の會呂利など又弄臣といふべし

(廿)永樂大典 姜紹書が韻石齋筆談上に成祖勅「儒臣纂」脩永樂大典一部「係」胡廣王洪等編輯「徵召」四方文墨之士累「十餘年」而就計二萬二千一百一十一卷一万一千九十五冊目錄六十卷因「卷帙浩繁」未「遑」刻板「止」寫原本至「宏治間」藏「之金匱」嘉靖卅六年大内回祿世宗亟命「那敦」書幸未「焚勅」閣臣徐文貞階「復令」儒臣照式「纂」鈔一部「當時供」膠寫「者」二百八名每人日鈔「三葉自」嘉靖四十一年「起至」隆慶元年「始克告」竣云々按に天下大部の書永樂大典に過たるはなし本朝にては禮儀類典五百十五卷余が群書搜索目千五百卷此外大部の書をきかず

(廿一)兵主神 宋人吳仁傑が兩漢刊誤補遺一の卷祭蚩尤條に封禪書祠「八神」曰天主地主陰主陽主日主月

主四時主而兵主居其一焉兵主所祠則蚩尤之星也云々此說神名帳に注すべし兩漢刊誤補遺十卷知不足齋叢書第一集に收む兵主神

(廿二)玉づさ 玉づさは玉豆之にて慈苳なるよし已に殘月抄にいへり廣群芳譜樂譜七に慈苳一名解蠶一名苞實一名繭米一名慈珠子一名西番蜀秫一名回回米一名草珠兒云々史記夏本紀注に禹母修己見流星貫鼻又吞神珠慈苳胸坼而生禹云々後漢書馬援傳に初援在交趾嘗餌慈苳實用能輕身省慾以勝瘴氣南方慈苳實大援欲以為種運還載之一車時人以爲南方珍怪權貴皆望之云々此外救荒本草など引出て注すべし爾雅爾雅名義抄七卷子部に慈苳子ツシタマ云々同八卷卯部に慈苳子ツシタマ慈苳子ツシタマ云々

(廿三)龍鬚席 雅亮裝束抄の類古書に龍鬚の名おほく見ゆ廣群芳譜并譜六に龍鬚草本草石龍芻一名龍鬚一名龍修一名龍華一名龍珠一名懸莞一名草續斷一名縉雲草一名方賓一名西王母簪叢生狀如粽心草及菟苾苗直上夏月莖端生小穗花結細實並無枝葉今吳人多栽蒔織席他處自生者不多云々山海經賈超之山多龍修註龍鬚也似莞而細生山石穴中莖倒垂可爲席云々崔豹古今注龍鬚草一名縉雲草江東亦

織以爲席號曰西王母席云々李白詩に莫捲龍鬚席從他生網絲云々

(廿四)八丈草 八丈島に八丈草あり廣群芳譜并譜六に南史扶桑傳扶桑東千餘里有女國食鹹草如禽獸鹹草葉如邪蒿而氣味鹹とあるものこれ也爾雅アツタケサト云

(廿五)雪夢澤并犬戎 世人雲夢澤を一澤の名とおもへるは誤也清人陳士元が江漢叢談二の卷三楚の條に禹貢雲土夢作又分雲夢爲二といひ司馬貞索隱左傳桓四年定四年などを引て雲と夢と二澤なるよしいへり同卷檠瓠の條に羅長源路史云黃帝元妃西陵氏生三子曰昌意曰玄囂曰龍苗龍苗生吾融吾融生十明十明封於桑其國居南裔生白犬是爲蠻人之祖夫十明乃黃帝曾孫而白犬爲十明之子如後世名子爲於菟犬子豹奴虎狍之類非真犬也西陵氏宗國在楚即今夷陵地十明乃西陵氏之胤則徙居南土理或有之豈得以其子爲真犬哉既曰白犬又安得謂檠瓠毛有五采也又郭景純玄中記云高帝時犬戎爲亂帝討之者以美女封三百戶帝之狗名瓠檠去三月而殺犬戎以其首來帝以女妻之不

可教訓浮之會稽東海中得地三百里封之生男爲狗女爲美女是爲大封氏此又非蠻之祖也云云按に犬戎の説太平記に引注すべし爾雅能改豨豨八六十丁オ容齊四

(廿六)天目山 甲斐國に天目山あり武田勝頼敗亡してこもりたる地也明人王世貞が博物彙苑山洞部に天目山在越州高二千九百丈周廻八百里出圖經山上俯視雷雨每大雷電但聞雲中如嬰兒聲殊不聞雷震出境録山有兩湖一如左右目故名出太平記云々と見ゆかしこの名にまねびたる也けり

(廿七)陰陽石 鎌倉鶴岡の社地に陰陽石あり博物異苑土石部に宜都郡有陰陽二大石陰石常潤陽石常燥旱則鞭陰石必雨雨則鞭陽石即止出初云々と見ゆ

(廿八)牡丹石 相模國筑井縣青野原村に牡丹石あり博物異苑土石部に牡丹石慈利武口寮石上有花如堆心牡丹枝葉繚繞雖精於畫者莫能及或以物擊碎其花拂拭之其花復見重疊不一出大明云々その體少違たれど名は相おなじ

(廿九)岩橋 博物異苑宮室部に趙州石橋乃魯班所造極爲堅固意謂今古無第二手矣有張神一乘驢

過而橋動欲傾魯班在下以兩手托定而堅如初至今橋上有張神乘驢痕橋下有魯班兩手托迹出夷云云と見ゆ葛城の久米のいはしに引注すべき事也

(卅)青蚨 長明發心集五の卷四丁に錢を青蚨といふよしをくはしくいへりそは博物異苑蟲鼠部に青蚨似蟬而差大其味辛可食每生子必於草葉大如蠶子一人將子歸則母亦飛來即以母血塗錢八十一文以子血復塗餘錢每市物或先用子者即母歸用母即子歸如此輪還不已出神記云々と見えたるが出處也爾雅珠船三ノ十丁オに青蚨一名錢精取母殺血塗錢繩上入處也爾雅龍腹香少許置櫃中焚之其錢歸繩上

(卅一)火鼠 竹取物語に火ねずみのかはぎぬあり抄に齊東野語と華夷珍詠考を引たり按に博物異苑蟲鼠部に火山中有火鼠重百斤毛長二尺餘細如絲可以作布出神異炎洲火林山有火光獸大如鼠毛長三四寸或赤或白晦夜即見取其毛可爲布出海内云々此說を引もらしはいかにかにぞや爾雅史記大宛傳安息國の條の注魚鼈部に鳥賊魚管自浮於水上鳥見以爲死便往啄之乃卷取鳥故謂之鳥賊腹中血及膽正黑出南云々と見ゆ和名抄に校合すべし

(卅三)龜の鳴 新撰六帖爲家卿歌に「川こしのをちの田中の夕やみになにそとさけは龜のなくなる」龜のなくこと人口にいへどたま／＼の事なれば聞くことあたはずスツボンもスボン／＼となくよりよびし名也博物異苑魚鼈部に能言龜漢元封二年過國獻能言龜一如人言出洞云々とも見ゆ

(卅四)大人米 大人米の事さきにもいひたり駿河國米宮の神體は大人米なるべし博物異苑穀菓部に西域摩揭陀夷有異稻一巨粒號供大人米出孔子と見ゆ

頭鬘梵天鬘草廿二丁オに廿四五ばかりの天女鬘草のごきにながざり一尺あるよれのしろくうつくしきはんをそなへて來り云々珍殊船一ノ十九丁オに御都都名三重
思其米如石綿子亦以上賦仙宮

(卅五)捧心方 捧心方上下二卷あり序云自有生民以來未嘗一日無醫藥也其濟生之利大矣故神農氏嘗草軒轅氏出經素女岐伯倉越人之徒相時而問出厥說也埃仲景思逸而鈞其立厥脈之獲希范叔和而探其願醫乎官局公選世醫家藏良方確論累代之書則奚翅充棟汗牛而已矣諒非斯方惡得

以杆風寒暑濕之攻乎外五勞六極之傷乎內乎哉中盡毒而再生遭折傷而不枯而致天於老則孰爲之歟故曰危候氏之前巢穴以與蟲蛇禽獸同處者不

足敢言焉自有室居烟食之人以來未嘗一日無醫藥也大矣濟生之利也矣我博桑國孤立乎黑洋之東而與中華津絕矣雖然文才人物仁義所宅諸子百家之所業上山川鍾秀海河賦與根異苗金石鋼鐵之類惟天之所賦恐弗多讓中華焉而況越漢跨瀛傳中華之遺而相載而飯者不知幾千萬人焉是以惟業盡東矣於是乎惟醫爲濟生之尤乎哉而我邦以濟生業厥世者唯和丹兩家已矣近世旁支橫派爭道而出和氣久少聞其傳丹家一服亦落如曉星矣爰有梶原淨觀公師承丹家而居其右其我邦素越人乎有萬安頓醫兩方萬安秘而不傳頓醫今行于世矣厥後曰通全亦莫特士也猶嫌我邦之鮮書附船南遊其業益大其觀改焉自今四傳而人曰長淳浮屠氏也稍晦以婆娑於世然而才德所薰莫以加其臭焉雖醫術集成于茲而倫於之才德則蓋其緒餘土直焉耳我友中川公以俊逸穎悟之質依淳而學自方論脈訣藥性鍼灸吹咀劑和之書未有聞而不求而觀不者集裘不遂咄々追焉公念近代醫家者流覺術虧于內聲聞過于外韓氏肥瘠病否之說不知而濟生无澤潤然選方兩卷目曰捧心一病之下必有病證

有脈證載方必取自得其効者語必述古方私弗以措一辭焉其述而不作也夫子之意乎其精選拔華也其便於易問也方必取得其効者也此豈得非以是齊王碩危亦林之遺音乎哉蓋此書作也鼻祖淨觀公萬安方之標準也慕蘭之志於是乎盡其心焉耳矣噲乎守祖業則老也守而弗驕伎療則效也以捧心而目卷則謙也道有多端擇以濟生則仁也一身而四惠厥業勃然而興壽其天澤斯民而俾斯方傳於不朽也必矣濟生之利不亦大乎寶德辛未仲秋日旣月復序と見ゆ群書一覽にくはしくいひたれば閱て知るべし

(卅六)七月の灯籠筆記七十七ノ廿四 伽婢子三の卷牡丹灯籠幽靈の事の條に年ごとの七月十五日より廿四日までは聖靈のたなをかざり家々是を祭る又色々の灯籠をつくりて或は祭りのたなにもし或は町への木にともし又聖靈のつかにおくりて石塔の前にともす灯籠のかざりもの或は花鳥或は草木さまざましほらしくつくりなして其中に火をともしてよすがらかけおく是を見る人道もさるあへず又其間にをざり子ごものあつまり聲よきおんごうにしやうかいださせ

ふりよくをざる事都の町々みなかくのごとし天文つちのえさるのとし五條京極に萩原新之丞といふもの有ちかきころ妻におくれて云々按に七月灯籠の事明月記寛喜二年七月庚寅十四日近年民家今夜立長竿其末稍附加灯樓物張紙舉燈遠近有之逐年其數多似流星人魂云々親長御記文明八ノ七ノ十四條に御燈籠進上ノ十四條に今日燈籠三進上云々宮御方二宮御方同進之云々同文明九ノ七ノ十四條に御燈籠三進上御所如例年云々同文明十九ノ七ノ十四條に燈籠三進上御所如例年云々同文明十九ノ七ノ十四條に燈籠三進上御所如例年云々同文明十九ノ七ノ十四條に燈籠三進上御所如例年云々同文明十九ノ七ノ十四條に燈籠三進上御所如例年云々同文明十九ノ七ノ十四條に燈籠三進上御所如例年云々

(卅七)八丈嶋 八丈嶋の事は北條五代記五の卷續伽婢子一の巻に板部岡江雪齋が渡りて聞きしよし見ゆ伊豆志南方海嶋志七嶋日記の類八丈嶋の由来を記したる書少からず余が國鎮記にも八丈の富士の事をいへり伊豆の嶋の事平治物語に見え大嶋の事は三代實錄に神造のよしあり

(卅八)青砥左衛門が名乗 太平記卅五北條九代記などに青砥左衛門が善政の事見えたれど名乗を欠たり

續伽婢子二の卷六丁に青砥左衛門藤孝とあり

(卅九)焼飯非屯食 續伽婢子二の卷八丁にやきめし二つ持て行かど見えしと有越後の鎌信が事をしるしたる條也にぎりめしともムスビともいふものは古は屯食といへり此焼飯はにぎり飯を焼たる也 爾新撰集上卅二丁オ爾旅部に道のほほりにてつれいひくふて「しる」といふはれさおし(焼めし)涙の外に汁菜もなし

(四十)石垣 石垣といふ名古くはきこえず登といへるが古名也築石ともいひけん筑前續風土記に筑紫はもと唐の敵を拒んために石垣を築たる故築石の義也といへり續伽婢子三の卷一丁に門の前についぢたかく石垣はけづり立たるごとしと見ゆ 爾石垣西城記八撰狂歌集六丁オ

(四十一)矢立硯 矢立硯の名目伊勢貞丈が雜説問答に見ゆ續伽婢子三の卷十丁に永谷兵部少輔といふもの聞書のために持たるやたてとり出し歌二首を雜紙に書つけ云々と見えたり 爾小政盛草子にこしより矢立と歌をあそばして云々盛實記太平記長門平家愚得隨筆附考下名物考調度部十一

(四十二)女の稱に某子といふ事 女の稱に某子といふ事古く某子と貴女におほくいへりされど下賤の女にもいひし例おほかり 續伽婢子三の卷十丁に神祇官

の塔の九輪をおろして茶釜を鑄させけるに上に似る下の者にて我もくと九輪をとりければ和泉河内にありし塔をば皆とりつくしけり塔をこぼち寺を破る罪は無量也と佛も説おきける間此越後守悪行のむくいにやいく程なき内に上杉島山の人々にうたれけり是を聞傳へし後の人もうしとはおもはずして又ふるき塔の九輪をとり九輪釜とてもあつかひけるこそははかなけれこゝに近來數寄の師ありいにしへの茶湯の様をもごきて新き茶の具を用ひ今焼の茶椀茶入にあら釜する梅竹をきりて花いけふたおきとし唐物よりも價高しかくは古の數寄道具の寶物はみなすたりてなんとて大やけより終にかのすきの師を亡し給ひけりされども數寄の道猶たえずして茶好の男再此道をおこし當流とぞいひけるみな人此男の眞似をするに成ぬある時彼數寄男色好の者なればひそかに遊女を數寄屋の内へ呼入けるにあるじの女開付てさうなきねたましき者なれば長太刀を振廻し茶壺をけわり走出る遊女たまりあへずしていにけり彼女やすからず思ひけん長太刀にあたるまゝに露地の木の枝はらくとおとして入にけり其後二三日程へて

のわたりに富有の家ありむすめ一人持たり牧子と名づく年十七八ばかり云々同六の卷四丁に江州坂本に正木のなにかしがむすめ龍子いとけなくして才智あり云々なども見ゆ 爾茶女云云るが古多し續風土記上長谷里小井門子云女人云々後太平記十一ノ十九丁オ梅花無盛織に花子續紀に八重古今に「まら」後撰に「そで」大和に「そつ」

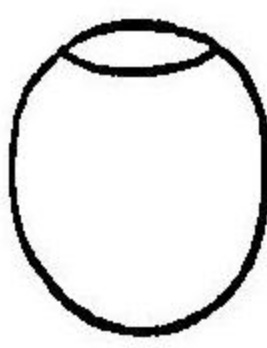
(四十三)アノ山見サイ此山見サイ あこの山見さいこの山見さいといふ諺は似我蜂物語上十一にあの山見さい此山見さいいたゞきつれおはら木を此舞は誰此うたふものはたそ急にまなこをつけよくと有此物語は寛永の比のものとい見ゆ板本上中下三卷あり (四十四)茶の湯茶人歌舞妓茶器 老の寢覺に去程に四海浪しづかにて國をさまりしかば武士の弓をはるわざゆるやかに茶の湯を専にすきて森上林の茶を吟味し宇治醒井の水を輕重を試み百姓をせたけとりて金銀をたくはへ無益の道具を買求遊女歌舞妓にたはふれて小唄をどりのよしあしをえらびよしなき者に施して忠ある士に恩賞なければ家來のものども恨てよき兵は退也云々又云むかし足利の家が高越後守とて權をとり威を振しが一年河内國へ下り石川河原と云所に陣をはり勢猛なるまゝに其あたりの神社

茶の會ありしに客これを見て木のさまかはれりめづらしとて數寄好の人聞傳へくと木の枝をもぎ明たり彼けわりたる茶壺をつぎおけるを見る人は無病なるより壺はつぎめの有こそ見所もおほけれとてわれぬ壺をも漆にてつくり遠山をながめんとて窓を明たり是よりみな人地を高くつきて數寄やを作り改め窓を明たりその家に有まじきかたなれども窓なくば叶ふまじとて内々の住居の見ぐるしき方の見えわたるもいとす窓を明るは耻かき窓にてぞ有ける或露地の狭きは水の引かたなきまゝに池をほり其上に橋をかけ通ひけるを見て我もくと露地に池をほりたり其水のあさく流るぞ涼しくも見ゆるに深き井の水なればくろみわたりてすさまじし或うなる子のもてあそびに鳩鳥を飼おきしが會席のをりふし木しげき奥の方より啼聲きこえしかばさながら山里の様におぼえたりといふほどこそあれ我もくと鳩鳥かひもとめしにぞ價廉よりも高し當流の數寄を好める人は虎を猫とおもひ頗狗に似たりいにしへの茶好と聞しはいさぎよき心を宗としきよらかにしてかざらず信を盡し禮を

先とし先徳の高き墨跡をかけては文字をよみ義理を改め數寄の道の心をきよめ今の人の墨跡をかけて見る人は紙の中の長短古き新しきをいひ文字をよみ得ねばたゞその價いかほどせんなどさだしよき道具かひもとめたるも我實とせんにはあらで□まき買てもがなとねがひ新しき物をば手ぐろめし人目をぬきあたひをとらんと云巧けり「いさきよき茶の湯の水を汲けるに流のすゑはにこりこそすれ」云々老のねざめ一卷寫本也與書に于、時寛永の初やよひの下の弦徳峰老人洛陽のほとりの草菴にしてしるしおきぬと有又寛永二年三月鳥丸大納言光廣卿の跋あり韻圖

茶人は古くは茶飲さいへり太平記廿四丁オ持明院殿吉野遷幸の條に茶飲連歌仕ヲ集テ朝夕遊ビ興セサセ給シカバ云々

(四十五)つぼく、茶人利休居士が好の形としてツボ



ツボといふ形ありかゝるさまにて障子壁などの模様または透などにして茶席の物數寄といへりこれもとは京都稻荷山にて小兒の翫物に田寶ツボとして賣土器也そは土を丸き壺の貌にして乾かためたる物也そを買たる者もてかへりて家の荒神に手向る也文政六年の夏京都境町御門の東六角殿の地内にて柳馬場の突當りの土中

より古き田寶の布目ありて丸きさしたし一寸餘の古物甘許掘出たる事あり按に田寶はもと稻荷山の土を得て歸りて田にちらし其年の豊熟を祈るわざせしを田寶納ん料なごて壺にしそめしにやさてその壺を得て歸りて田に祭れば豊作なるよしひひ傳へしに起れるなるべしそをツボくといふは壺をいくらも物の模様にせるゆる壺々といへることうつなし

(四十六)茶屋茶店 鶴飼信興が和漢雜笈或間に水茶屋は日本近來ノ様ニ思ヘドモ更ニ近來ノコトノミニモ非ズ後鳥羽院城南離宮ノ御幸ニ桂ノ里ノカタヘニアヤシクカリニシツラヒタル軒端アリ朝ケノ烟ニ莖ナドシタテケル有様見ユレバ後鳥羽院等ノ御覽有テ御隨身ナル者ニ尋玉ヘバ秦氏雅常ト云者答奉テアレ大君ノシラセ玉フモノニハ非ズ下部ノ往來ノ旅人イサ、カ立酒ナン吞侍リケルカリ店トナン申侍リケルモノ也ト申上ケルコト後鳥羽院和歌集ノ中ニ見エタリト云々與清按に後鳥羽院御集に此事見えずこゝに引たる文もいと拙くて御集なごに有べき體ならず此作者が偽作なること疑なし茶屋といふ名は關藤川記五丁宗長手記上ノ卅東國紀行卅九丁ツ五などに見ゆ此和

漢雜笈或間一名は水戸史館珍書考と號して元祿昭陽孟春把韻圖於武陵小石巷、鶴飼信興自序とあり始終偽作名の書を引て蒙説を立世を欺き人をおごさんと巧し書にて一事も取事なきもの也桂秋齋が著書の上に立ん事かたき偽説家のしわざ也韻圖

ヤスメテ居ル云々水記享祿五年三月六日ノ條に渡御子万里小路第一於茶屋、孟酌及、數巡、云々同三月廿日の條に湯養於、万里第茶屋、一飲云々參天台記ノ十二丁ツ茶湯錢ノ事見ユ鶴林玉露三ノ十八丁前輩志節條ニ足不、茶坊酒肆、云々茶坊ハ水茶屋也酒肆ハ居酒屋也大筑波冬茶屋の家根しるやあられの總子、かな同雜笈なれば茶やへこそよれ海東諸國記國俗ノ條茶店トアリ茶店梅花無蓋三上廿一丁オ日下齊開卅八和遺六丁ツ風俗ノ部に都中遺老述、方勝間四山戒壇、四月游女之盛、御車不、絶茶棚酒肆、相、接子路、至、有、揆、妓、入、寺、者、

(四十七)武藏國見沼の歌 對山君遺事一名南龍行録寫

リ序に貞享二乙丑年秋のはじめ朋友飯尾某が亭に過りしに渠が父より家に藏置し和漢の書籍影しく書院にひろげ風を入蟲をばらふ其中にひさつの書あり取て見れば當家の初祖對山公の善行嘉言をしるせり申傳る宇山田弄齋が書るものとツヤさだかにはしれずとも、此君は東照宮の第十子にてわたらせ給ふ御童名をば長福丸殿と申御諱を頼將と稱し其後故ありて頼宣卿と改させ給へり云々其書疑はしく誤れる所を正しして乾坤の二巻とす云々左川長行隨書とありまた天和二年壬戌春正月十日江四府備島有先生拜題といふ漢文の序最初漢文の跋あり、乾之卷に其以前江戸より頼宣君御鷹場へ御越箕沼の池に富士のかげうつりけるを見給ひて「たれも見よ箕沼の池にかけうつるふしの高根の雪のあけほの」與清按此箕沼池は武藏足立郡にて笠島

荒園が崎なども此湖にありし也今は見沼新田とて二万石許の新田になれり享保十三年吾六代の祖高田茂右衛門友清此新墾の御用に登用せられ井澤彌惣兵衛ぬしの部下にて弟鈴木文平とともに功を立てこゝの新川に舟通はする事を請ゆるされて同十五年吉野川の舟のさまなる舟四十艘つくりてはじめて通用せしをり友清「よし野舟こゝにうかへて見沼川つなてたえせぬ世々に引まし」

(四十八)河原者 同書乾の卷に頼宣君頼智神速の方世に稀にして心の及ばざる事のみ也船手の竹本丹後守方へ御入終日御遊興の御能を竹本が大夫に被_二仰付_一、是は小春大夫が子にて天王寺聖徳太子の役人名は小太夫といふ是に東北を被_二仰付_一候へども此小太夫は河原者也離子は御免被_二成候_一候へとも離子せず御慰の遠亂に成けるを御聞被_二成いな事_一を役者どもは申候東北の離子を致候へば小太夫には東北を舞候へ兩方面々いたし除にせよ被_二仰付_一事濟候し也云々河原者の事は四條河原に芝居を立てるこゝにて技藝をてらふものゝ名なるよしものにおほく見ゆ韻圖年中定例記五丁宗長手記上ノ卅東國紀行卅九丁ツ五などに見ゆ此和

(四十九)風呂浴室 又云比叡山には浴室を御建立風呂の薪料御寄進被成置云々

(五十)柔術 又云伊丹三郎右衛門直に談せしは光貞君御若年の時關口柔心がヤハラを御學び被成朝夕

(五十一)新田關發漫にすべからず 又云或時新田開發の場所を見立る事あり和歌の浦近邊其外方々七八ヶ所繪圖にいたし奉行其外役人頼宣君の御前へ持參致しけるを御覽被成被仰けるは我勝手の便に宜しとて名ある地を埋名ある山堀崩し田畠にいたす間敷候殊に二十一代集の歌に入名前に書載たる名所舊跡をば堅く綺べからず末代にいたりて紀伊大納言は新田を開き利欲の爲に歌の集に入詩文に載たる名所舊跡を田畑にいたしたり扱も愚蒙の人にて有けるとて末代に我を嘲り耻を末世に残し萬人の笑にならん事掌を指がごとし必々名木を切名地を埋名所舊跡を新田にいたすことゆめく不可致と急度被仰付候先年布引の松枯る時殊の外御惜み被成様々の藥を被仰付何卒枯れぬ様にと種々被仰付候也去により

度々役人を被遣御領國中の名所共御穿鑿有て其跡のたえぬ様に被成けり云々

休よく心得候へ世の人にあまねくほめらるゝ人と普くにくまるゝ人は一くせある大悪人なり釋迦孔子さへ世の人に或はほめられ或はにくまれし也世間の人に一遍に譽らるゝ遠山は輕薄へつらひの大邪智者也忠義の人にあらす或はそしられ又は譽らるゝによきもの有孔子衆惡之必察焉衆好之必察焉或は其衆阿黨比周して好する事あり或は其人獨立て不祥にして惡るゝ事あり毀譽共に不可不察候へば人に誑されて能人とおもひ悪人と思ふべからず大將の心を可付處也云々按に明君享保錄四の卷吉宗公御名語の事の條にも惣じて人は世間にて半は譽半は譏るものによきものは有べし一面にはむるものは大形は不宜者也諸人の能と云は或は心克人に従ひ事を人に任する者か左なき時はけいはく者か間に合をいふ者歟此二色のうちにして大形はよきにあらす唯半分はほめ半分はそしる内そのそしる品をよく聞分道理を極てよし云々

(五十四)股引 又云大雪の降りける時庵原冬野村にて鷹嶋多よし鳥見の者注進申上俄に御出被成候久野三郎右衛門御供に被召連木綿の番取股引にて出候云々

(五十三)遠棚 又云御名代三浦長門守爲時迎に罷出御數寄屋へ入給ひ頼宣君にも御數寄屋へ御出被成候而有誤脱 落宗が遠棚に有を頼宣君御驚被成云々

度々役人を被遣御領國中の名所共御穿鑿有て其跡のたえぬ様に被成けり云々

松屋筆記卷之五十三

東都 源與清文儒稿

(一) 矢矧の橋 岩淵夜話別集上に或時岡崎ノ御城下矢矧ノ橋洪水ニ流ケレバ早速掛渡スベキ旨家康公仰付ラル就レ夫各家老中申上ラレケルハ兼々何モ存寄罷有候ヘドモ箇様ノ折節ヲ以テ可申上ト存罷有候此橋ノ義ハ世間ニ稀ナル大橋ニテ候ヘバ夥キ御物入ニ御座候其上當時戰國ノ義ニモ候ヘバ御城下ニ箇様ナル大河有レ之候ハ第一御要害ニテモ候ヘバ旁以今度流レ捨リ候ヲ幸ト遊サレ 向後ノ義ハ舟渡シニ被仰付可レ然奉レ存候ト一同ニ申上ラル家康公被仰ケルハ抑此矢矧ノ橋ノ事ハ代々ノ記録ニモシルシ其外舞ニモ平家ニモ語り傳ヘテ日本國中ニ誰シラヌ者モナケレバ定而異國ニモ聞エヌ事ハ有マシ然ルニ物入多ケレバトテ今更大橋ヲ停止ニシテ舟渡シニ申付往還旅人ニ難義ヲ掛ンコハ國持ノ本意ニ非ズ縱何程ノ入用タリモ少モ不レ苦早々掛渡候様ニ申付ラルベシ扱又要害ニ頼ムト云ハ人ニモヨリ時ニモヨルベキ物

也當時家康ガ心入ノ程ハ一向左様ノ趣ニ非ズ其段ハ何レモノ心入ニ可有物也然バ要害ヲ求ムルニハ不レ及義也只片時モ早ク橋ヲ掛渡シ往還ノ煩ナキ様ニ可レ被申付之旨被仰出也云々

(二) 根太 又云天正十三年三月濱松ノ御城ニテ家康公御背ニ根太ノ様ナル御腫物出来ケルヲ佐原作十郎前嶋長七郎河野甚太郎ト申三人ノ兒小姓衆ヘ此根太ヲ押出セト被仰付云々按ニ新續犬筑波集夏ニ「うつき来てねふとになくや郭公」といふ發句も見ゆ守武千句四十七丁ウ「秋風にきんやの里や晴ぬらんわが身ひ

(三) トチヘンナシ井ヘンナシ袋 又云其節の取沙汰ニ佛高力鬼作左トチヘンナシノ天野三兵ト申ケルト也云々按に室町殿日記一の卷太田道灌辭世に「昨日までマクマウザウをいれおきしヘンナシ袋いま破るなり」と見ゆ甲陽軍鑑十四卷四下品十五丁左に佛かうり

(四) 女の乗掛馬 岩淵夜話別集下卷に本多上野介申上げるは唯今まで御狩場ヘ召連られ候女中を乗掛馬にて御供被仰付候ヘども當時天下御一統の儀に候へば向後は乗物にて被召れ可然と奉レ存候と申上

る云々女馬に騎事ハ已にいへり

(五) 嵩蒲切合 同下卷に以前駿河に御坐竹千代君と申奉る五月嵩蒲切合御見物に安西町へ小者の肩車に御乗り御出雙方東西に分り未打合不レ始一方は人百計も有レ之一方は人数三十計にて出張有レ之肩に乗せ申小者大人数の方へ趣候を竹千代君被仰はあの小人数の方必勝ベキ間小人数の方へゆけと被仰小者申は何を御存知可有レ之大人数の方こそ可勝ものをと大人数の方へ行其以後打合小人数の方かくし勢有レ之大人数の方散々打負たるを御覽被成小者の頭を御打いはぬ事かと仰られ御笑ひ被成たるよし申ける也云々

(六) 六尺添肩替肩 又云乗物に乘て行に力も勢恰好も揃たる六尺が跡先二人してかつぎ其外に添肩とて跡先手を添力を付其上にも替肩とて貳人も前後に立添てこそ切所難所長旅も心易乗たる物なれ云々

(七) 大耳にきく 又云常々口くせのやうに云事なれども夫を大耳にきく心ゆる唯今のやうなるわけもなき返答をする云々按に大耳は疎耳オホミミの義なるべし古言におほに見るおほにきくなごいふみなおぼろげの義

也今俗には「オロソカ」といへり

(八) 仇を報するに恩を以てす 又云大坂御陣以後駿府御城にて或夜御咄之衆へ被仰けるは云々我等が覺たるは仇を報するに恩を以てすといふ句を若年より聞覚えて常に一心に不忘大事にも小事にも用に立事おほしされば秘藏の要文なれども今日各へ相傳するぞと被仰御笑被遊ける也云々

(九) 神君四十八戰 亦云家康公大坂後の御陣まで御一生の間大小の御合戦に御逢候事四十八箇度とかや傳承り奉る云々按に漢の高祖七十餘戰して天下を有ち神君四十八戰にて宇内を御給ふ漢朝四百餘年御當代萬々歳萬民鼓腹して樂を受ることめでたからずや

(十) 蛤は貞女の節に比す 明君享保録有徳院殿の事跡を巻五二の卷竹姫君様御再縁被仰出候事の條に御代初に御儉約の被仰出にも凡嫁娶の規式も蛤の吸物酒三献を過べからすと御書付出たり人々これほど笑ふ者ありけれども吸物蛤と婚禮の法を立給ふは御學文勝れ給ふ故也と或學者是を稱し奉りき子細は蛤貝は三千世界を尋ても外蛤貝と合ぬ者也とかや外の

貝に合ざるは外の夫に心をかよはさぬ貞女兩夫には見えざる戒と此事を辨へさせ給ふに因て蛤の吸物と被_レ仰出_レけるこそ難_レ有事也と心あるものは稱し奉りけり世に貝合と云て女のあそびとするはこれさお

(十一)文昭君の御代武家の風公家に變ず 同三の卷御鷹野先種々之事の條に東照宮台徳公大猷公御代とは違ひ御旗本衆嗜も忘れ風義あしく成て大丈夫の士も紅粉を以て面を彩色り身に結構なる衣服をかざりひとへに野郎芝居役者にこそならず明君紀州より入せ給ひてより御供に被_レ參たる人々身持上たる氣色もなくゆき短かに髪頭の風までもまやんとして尤武術の嗜勝れて弓馬劍術鎗長刀等に至て名人多く其上に水練まで得ざる仁は一人もなし云々按に紅粉をよそはへるは文昭君の御代新井白石が左道の政を執て京都風に變せしをりの事也

(十二)有徳君御名言 同四の卷吉宗公御名語之事の條に人は珍しき嘶を申ともうそがましき實をば語るべからずと被_レ仰出_レ候寔に人に交るもの如_レ斯心得べき事也と云々

(十三)心中相對死非過料錢 同書五の卷吉宗公松平

乘邑左近大岡忠相越前守へ政事御閑談之事の條に大岡越前守忠相に被_レ命て享保御代初の御仕置に御先代まで男女色欲にて命を落すものを上方江戸在とも心中と申ならはす以ての外不屈の詞也心中と云ては忠とよませて論語にも忠は有たけを顯す事也又まめと訓する處也何ぞかく愚痴文盲にして此世にては不添未來で添ふといふ様なるいたづらもの、此死を心中とやいはん勿論無_レ勿體事也以來は相對死と申唱へし是は人間の智慧にて男女相對して死する事は有べからず皆禽獸の心に成ていたす事也かつて心中にはあらず人にあらざる所行なれば禽獸又は人非人と云べし畜生同斷の者なれば死をこなひ存生せし奴原は非人へ下さるべし死切候ものは野外へ捨べし尤下帯を脱ぎ丸裸にて捨る是畜生の仕置也と御定被_レ遊けるこそいみじき御事也また過料錢の事御先代までは無_レ之候へども昔周の文王の政にも有しとて被_レ仰出_レけり何とやらん罪科を公儀へ金錢を出してその罪を補ふ事如何と笑ふ人も多くありけれども明君の御賢慮をえらす己が短にくらべての事也云々按に文化年中までは相對死の死ぞこなひを非人に被

下しをやがて左右方の親類より非人に金錢を出して足をあらふと稱しもとの良民になりし事あるを制せられて今は必是を洗ふ事叶はず生涯非人にて終る事と成ぬこれも一時の明斷といふべし古事記下廿四丁オ九番

の段に輕太子輕大耶女共自死ト見エタルが本朝女棚ノ始也

(十四)屯田屯倉 大明會典卷十八戸部屯田の條に屯田國初兵荒之後民無_レ定居耕稼盡廢糧餉匱乏初命諸將二分屯於龍江等處後設各衛所創屯田以_レ都司統攝每軍種田五十畝爲一分又或百畝或七十畝或三十畝二十畝不等軍士三分守城七分屯種又有二八四六一九中半等例皆以_レ田土肥瘠地方衝緩爲差又令_レ少壯者守城老弱者屯種餘丁多者亦許其徵收則例或増減殊數本折互收皆因_レ時因地而異云按に屯田の古法は武備志百卅五の卷に太白陰經を引いていひ新法も右の大明會典の文を引いていひたり書洪範八政より奏商鞅が墾草之令などを原とす周禮冬官有_レ屯部今曰_レ屯田司_レ漢書趙充國傳に分_レ屯要害兵耕曰_レ屯田正韻に屯音豚聚也勒_レ兵而守曰_レ屯などあるにて其義知べしました本朝の古代屯倉あり仲哀紀二年二月にはじめて見え孝徳紀に屯倉一百八十一所など

あり屯倉「ミヤケ」と訓す「ヤケ」は家宅也公の御屋敷といふ義也米穀を貯て非常の備とする也今の籾倉の類なるべし屯倉ノ「ヤ」ニ卅ニニイヘリ新撰姓氏錄卷八ニ委シ

(十五)萬歳を唱 大明會典卷四十三禮部正旦冬至百官朝賀儀の條に指_レ笏鞠躬躬三舞踏贊跪唱_レ山呼百官拱_レ手加_レ額曰萬歳唱_レ山呼曰萬歳唱_レ再山呼曰萬歳凡呼_レ萬歳樂工軍校齊應_レ之贊と見ゆ本朝萬歳を唱事御即位の時其外朝賀に有西宮北山江次第代始和抄の類所見多し

(十六)つくり鬚井搗栗及紙子 諸家全太平記一の卷正徳六年正月の序あり印本十四卷目錄一卷共十五冊とす秀吉公關東御發向の條に秀吉公は黒齒ぐろに例のつくり鬚をなされこがねづくりの御太刀美麗をつくりあたりもかややくばかりに出立せ給へば云々又云宇津の山にかゝらせ給ふ云かる所に郷民ども參上しかち栗ならびに馬のくつを奉り吉非を賀し奉る秀吉公御らんじて此たびのかつせんにかちぐりといふ事歟能もいはひてさし上たり目出たし、このたまひて大に御感なされ御めしありし扇服の紙子に紅梅うらつけたるに黄金を相そへ百姓共に下されしかばありがたし忝しと百拜してぞかへ

りける云々 願書 稿集下巻第十一丁オツク

(十七) 武士と下人と女との差別 同書同段に湯淺七右衛門が夏目舎人之助定吉がとりし首を奪し事をいひて藤田と甘糟と同道し大將景勝卿の陣所にゆき右の次第をのべしかば景勝き給ひ武士にして其道をしらざるはこれ下人に同じき也武士は何ごともその理の本をたいて心臓より思案工夫するものゆゑ悪事あれば則腹をきらする也下人は又つたなくしておちつきたる才智なく首もとにて思案せりさるによりてとがある時は首をはねぬる女は又うはきにてはなのさきの分別ゆる鼻をそぐ事古法也湯淺は士也といへども下人にもおそれりて陣中を引わたさせそののちくびをはね札を立て諸人にぞしめされける云云

(十八) まさくと云詞 諸家前太平記五の巻香橋原に新城を築く條に直江山城守兼續云々ことばをたくみにしてまさくといつはりしかば云々

(十九) 陰辨慶 同七の巻寺西多左衛門ぬけかけ高名の條に丹羽加賀守長重の家人に南部無右衛門といふものあり武勇すぐれし大膽ものにて諸國をめぐり武

者修行したりしを稻葉彦六貞通の吹擧にて長重近年めしかへ二千石の知行をあたへおかれけり云々ここに又長原實寶院松雲といへる法師ありこれも武略軍術に達し武者修行して諸國をまはりけるがとせ北陸道を通りけるを長重云々知行千石をあたへ朝暮の同朋とぞせられける云々南部つねく松雲をねたみそねみ云々陰辨慶といふ大いたづらものはあの法師が事よとつねくに悪口せり云々

(廿) のさくと云詞 同八の巻山口右京木崎長左衛門にわがくびをあたふる條に丹羽加賀守長重は敵をのさくと引とらせやすからずおもはれしかば云々 願書 稿集抄九廿四丁オに大方面シタル舞ナレトテ面ノシタノ願書ツカヒチ打ステツレバ其氣外ヘ出テノサクト見エテアルキ云云

(廿一) むさくさといふ詞 井茶瓶 同九の巻江口三郎右衛門旗ざしをこひうくる條に出口又次郎といふもの有云々生つきむさくさものにてありしかばとりたてらる事もなかりしを云々又出口が女房もかひがひしきものなりしがなれば白髪たるかみをたかくからわにゆひあげめかたばらには帯し左の手にはさくえをもち右の手には茶瓶をさげて江口が陣どり

し小山のかたを心ざし云々

(廿二) せくる井あせると云詞 同十の巻江口三郎右衛門蓮臺寺村に出張の條に小松の城をせりなば味方せいを引入るべし云々又長重大にあせりまきりに軍使をはせてはやく引とるべしと下知せらる云々 セイガムと云詞筆記 願書 今昔廿七ノ四十一番に此度ハ強ク擧テ引百十二ノ五十六則 願書 ヘダリケンバ暫クヨリ人ニテ有ケル擧テ引メケレバ途ニ孤ニ成テ有ケル擧松ノ火ヲ以テ毛元ケセ、ルセ、ル擧テ引矢ヲ以テ度々射テ己ヨリ此ル擧ナセソト云テ不擧シテ放タリケンバ云々世蕪泊船集に「の香にせ、られてねぬ夜、今昔廿九ノ廿七語に母カ幼キ子ヲセ、ラカス様ニ我が子我が子ト云テ云々宗五大紳子下四丁オ馬をせり、などをとする事故人のいましめたる事也

(廿三) いざり松の詩繪 同巻同段になし地にいざり松を詩繪にしたる鞍おかせ云々

(廿四) 蠅武者井二重込の鐵炮 同十一の巻別所下野守高名はたらきの條に松平主殿頭家忠まなこをいからし追ばにげ引ばたかる蠅武者ごもものくしやと切て出云々佐野肥後守は二重ごみの鐵炮をはなち敵をふせがれけるが云々 願書 神武紀に五月蠅なすあり鐵輪も有

(廿五) 一鐵者 同書十二の巻木食上人興山和陸あつかひの條に稻葉伊與守貞通入道して三位法印一鐵と號せらる今の世にも勇猛にして氣みじかなる人を一

鐵なりといふ事は此人よりぞはじまれる云々 願書 家盛衰記 十七卷

(廿六) 井田名田均田など古今沿革 蓬窓日録卷之四世務二井牧の條に長山先生胡翰曰天地養万物、聖人養萬民、故天下之利聖人不私、諸己亦不以私於人、井田之制是也、井田者仁政之首也、井田不復、仁政不行、天下之民始敝矣、其後二百十有二年而漢始有均田之議、猶古之遺意也、又其後六百有三年而元魏始有均田之法、猶古之遺制也、先王之遺制遺意由秦以來僅一二見又皆行之不遠、天下之民益敝矣、爲政者南面以子萬姓、一夫之饑猶己饑、一夫之寒猶己寒、之孰無是心也、而訖莫之極焉、方漢承秦苛虐之後、民新脫去湯火未遑、蘇息、高帝因而撫之、逮及文景之世、國家晏安無事、宗戚大臣憑藉貴高之勢、爭取義田宅、以爲子孫利益、郡邑富商大賈周流天下、皆累鍾萬、治生産畜牧、膏壤十倍上擬、封君編戶之氓無立錐之地、則卑下之爲、役爲僕、不暇顧其身、貧富不均、勢所馴致也、故董仲舒言於孝武、以古井田法、雖難卒行、宜少近古、限民名田、以抑兼井、名田者占田也、占田有限、是富者不得過制也、其後師丹

孔光之徒因之令民名田無過三十頃期盡三年而犯者沒入之議者以三十頃之田周三十夫之地也一夫占之過矣晉石苞令民男女二人占田百畝丁男女有差有國食祿者有差或十頃或五十頃兼以品蔭其親屬自啓訐端矣民無恒產不能制之專事要束之間不勞民駭衆坐獲井田之利此吾所未喻也殆不過爲兼井之閑耳非有資於吠吠細民能無不足之患也故名田雖有古之遺意不若均田之善李安世在魏太和中其得君非華夏之主也其得民非歸馬放牛之時也以魏國之大獨能均其土地審其經術差露田別世業魏人賴之力業相稱北齊後周因而不變隋又因之唐有天下遂定爲口分永業之制而取其祖庸調之法口分即露田也露田夫四十畝婦人二十畝而率倍之口分八十畝而不倍惟歲易之田倍之永業即世業也夫家受而不還皆二十畝所以課蔭桑麻也民有多寡鄉有寬狹田有盈縮狹鄉之民受田半之爲工商者不給而在寬鄉者給之亦半也老疾寡妻妾給之三十畝四十畝雖不耕不無養也當戶者益之二十畝雖已有田不可不優也以此均天下之田貪不得鬻富不

得兼猶懼不能守吾法而乃聽民鬻永業以葬鬻口分以遷是以小不足而大亂法也何求於敵賑窮困貧民獲保息周典也何惜而不爲之鬻而加罰永徽之禁抑未耳議者如宋劉敞又以魏齊周隋享國日淺兵革不息土曠人稀其田足以給其衆民獲其實唐承平日久丁口滋多官無閑田給受民不獲其實徒爲具文不知隋唐之盛丁口相若耳開皇十二年發使均天下之田狹鄉一夫僅二十畝隋之給受何加於唐也唐雖承平日久貞觀開元之盛其人戶猶不及隋何至其田具文無實也敞言過矣但狹鄉之民多而田不盈永業之田鬻而民不固如陸贄所謂時弊者勢馴致也時敞賦法亦敞故均田雖有古之遺制不若井田之善周制九夫爲井井有溝四井爲邑四邑爲丘四丘爲甸甸有洫四甸爲縣四縣爲都都有洫地方百里是爲一同治都鄙者以之夫間有遂遂有徑十夫有溝溝有畛百夫有洫洫有除千夫有澗澗有道方夫有川川有路方夫之地三十二里治鄉遂者以之孟軻氏請野九一而助國中什一使自賦蓋二法並行遂人匠人多寡異數而內外相經緯焉王畿之內五十里爲近郊百里爲遠郊六鄉六遂居之六遂

之餘地爲甸地距國中二百里即公邑之田天子使吏治之者也甸地之外爲稍地距國中三百里大夫所食之采地也稍地之外爲縣地即小都之田距國中四百里卿及王子弟之疏者所食之采地也縣地之外爲甸地即大都之田距國中五百里公及王子弟之親者所食之采地也此王畿之制井田常居十之六其不爲井者四郊甸地耳其曰夫夫三爲屋屋三爲井則出地貢者亦三々相任如井田之法八家樹藝一夫稅入于公孟軻氏所謂皆什一者是也鄉遂之地采五十畝或百畝二百畝而都鄙之田或不易或一易再易是亦名異而實同也有肥磽爲之井者必有牧以濟之所謂采與易者則皆牧也故小司徒曰井牧其田野井者其正也牧者其變也井地均不必牧也井地不均必牧以均之也由是達于天下雖有山林川澤不可以開方制者以井收授之以貢助取之諸侯之國可也按而定也楚人東南之要服也蔦掩爲司馬度山林鳩澤藪辨京陵表淳鹵數置濼規假濼町原防牧隰阜井衍沃量九土之入脩千乘之賦况中國之地無山林澤藪之阻無淳鹵置濼之患原隰衍沃舉目千里夏后氏用之以爲貢商人用之以爲助而周人無用

之以制幾甸經邦國其法可考者往往存於周官之書其不合者以孟軻氏爲之權衡豈不較然也哉故嘗以爲井田之法行有十便民有恒產不事末作知重本一也同井並耕勞逸巧拙不相負齊民力二也養生送死有無相贍通貨財三也貨財不匿富者無以取贏絕兼井四也取以十一天下之中正更無橫斂五也比其丘甸革車長殺於是乎出有事以足軍實六也一同之間萬溝百洫又有川澗戎馬不馳突無邊患七也吠洶之水澗則疏之旱乾則引以溉注少凶荒八也少壯皆土著好僞不容善心易生以其暇日習詩書俎豆養老息物成禮俗九也遠近共貫各安其居樂其業尊君親上長子孫其中不煩刑罰而成政教十也一舉而十者具矣何憚而不爲乎其謂不可爲者蓋亦有二焉丘甸縣都其間萬井爲溝洫者又萬計包原隰而寫之窮天下之力傾天下之財非數十年之久不克責于成也非大有爲之君不能致其決也此不可者一也中古以降淳原之俗薄澆僞之風熾恭儉之化衰功利之習勝經久之慮少僥倖之傲多以限田抑富強獨有撓之者况使盡棄其私家之產乎以均田授農民猶

(卅)茶屋茶坊 東國紀行に茶屋の名あり海内奇觀三の卷西湖圖説に茶坊嶺采時有茶坊在焉と見ゆ
 (卅一)八ッ橋 三川の國八ッ橋の説は已に十六夜日記の注にいへり海内奇觀四の卷吳山圖説に六橋烟柳あり圖に湖中出洲ありてその絶間につき六ッの橋あり洲には柳生たりこの六橋のさま余が考の八ッ橋に近しすべて橋八處あれば八橋六あれば六橋といふべきことわり也

(卅二)天狗の圖 海内奇觀四の卷吳山圖説の條の龍池祈雨の圖に三僧龍池に雨を祈り雲上に大瓠を持たる法師瓠より水をそゞぎ外に三神ありてみな雨を下すわざをするさま也一神は此國の小天狗のさまにて羽あり手にすき鉄の類のものを持たりされば天狗の畫ももとは唐土にまねびて作りし也龍池祈雨の詩「山頂龍池古井清泉一流深三秋逢元旱頃刻作甘霖一氣結春雲風光湧曉樹陰沛然祈禱足慰下民心」
龍圖社工部文集卷一天狗賦には天狗を賦とす
 (卅三)娥眉山下齋の木碑 堀近江守殿の陣屋は越後國內屋にありてこの海邊に文政九年の秋木碑流れりぬ



娥眉山下齋

かゝる形にて文字の太さ五六分計大さは七八寸許也碑の丈七尺餘也といへり按に海内奇觀八の卷娥眉山圖説に雙飛橋七天橋涼風橋などあれど外に橋の名見えず字も娥眉或は峨嵋に作れり娥眉も美人の眉にたとへし稱ならんにはさもあるべし蓋は橋の堅様なり右の三橋の外に無名の小橋などの碑なるべくや娥眉山のさま中にありて左に瓦屋右に西域大雪山眉のごとく見ゆこれによりて名づけたる歟此處に春夏時有鳥稱佛現食人掌中寒即不來といへり

(卅四)平戸の古寺及ババンと云詞 肥前國平戸は松浦郡の内にて一の海島也肥前の地と海上或は一里或は三四町を隔つといへり長九里廣さ或一里或二里或八九町十町の島也いにしへ比良島といへるはこれなるべしそこに小川菴とて釋江月の居室ありそは小川宗理といへる豪富の建し寺也また播磨屋宗是といひし豪富も是興寺といふ寺を建て天竺佛の觀音具多羅樹などありこは宗是が天竺に通商せしころ得た

りし也とぞ宗理宗是ともババンの徒也ババンとは八幡といふ旗を舟に立て異國に通商せしを八幡の字を唐人がババンといへるに起れる稱也といへり慶長六年より寛永十一年までは御朱印舟とて異國の交易を許されたりしを寛永十一年に禁止せられしよし骨董録に見ゆ文殊二年十一月八日小西攝津守行長が淺野正被成下御朱印候昨日致預候候則平戸五島是に在陣仕候間上意之旨申當春大唐へ商買に罷出候唐人其外何れも相留改申候不殘召れ可罷上候事云々

(卅五)年號の訓法 東寺文書抄におうゑい四年けん永ちやう二ねんかうゑい三年けむふ二年めいとく三年延ゑんきやう三ねんくわんをう二ねんかてい二ねんぶ永んゑい二年正をうくわんねんけんむ二年かうゑい四年元弘かう三年ふんゑい四ねんけんこう三ねんなど假名ありあれは必吳音のみにもあらず時宜によりてとなへつと見ゆればその心して訓べし
 (卅六)丸 人の名に丸といふは卑下の詞也枕草子二の卷に主上の御前にてまろかなどいはんは心なし今の世に「オン」「拙者」なごいふ類にきこゆれば也さ

れど夫丸フツ猿丸などいふも夫男をいやしめ猿をいやしめたる詞也されば丸を重き字とおもふべからず
 (卅七)御座ミマむしろ 今の世「ゴザ」ども「ウスベリ」どもいふは御狹庭の庭を省て「ゴザ」どものみいへる也薄縁も縁の厚縁よりもいと薄ければいへる名也東寺文書抄二の卷寶徳二年文書に御ざむしろ四まいと有御座庭の義也宗五大帥子廿九丁ウ敷入記卷(類從四百十四ノ三十九丁ウにうはむしろを御座といふ事なき事也たみなどには人によりて御座とも可申也)

(卅八)がら／＼井川村瑞軒 武林隱見録十六の卷川村瑞軒成立の條に酉年の大火の時木曾山をさして行問屋の門にいたり見たりしに問屋の子供表へ出て遊び居けるにふどころより小判三兩とり出し小刀にて穴を明ヶ紙捻を通しもてあそびのがら／＼にして伴の子供にあたへ扱案内を乞て内に入材木調べに來し由を云云々瑞軒は車力十右衛門といふものにて後に大分限となり剃髮して川村瑞軒といひしなり後に御旗本に召出され子孫を川村彌兵衛といへりとなん武林隱見録廿卷寫本也
 (卅九)柔術關口流 武林隱見録十九の卷關口彌左衛門藝術之事の條に關口彌左衛門後改柔術請身の名人

其外劔術鎧等も無殘所^三覺えの士也^四榎原流の鍵の元祖榎原五左衛門も出合右流義のかぎも相談の上付候と也彌左衛門或時つくねんとして庭を詠め居たりしに向の屋根に猫一匹快くねぶりて居たりしがあまりねぶりてころく^五と落たりしが中にて「ヒラリ」こはねかへり四足を立て地に落付たり彌左衛門つくづく見て夫より請身を工夫し屋根へ上りて下へ落る事を稽古す先始はこもわらを澤山にしき其上に蒲團杯を厚くしてひらき庇より落習ひ身を打ざる様に心がけたり初は身を打けれども其下和なればさのみ怪我もなく次第に落様功者になりて後は高き屋根より逆に落れども中にて返りて下へ落ざりけり如^六此鍛錬して柔術流の元祖と成たり云々^七頭書^八三才剛會人事七卷九丁ヨリ十六丁ニ及テ拳法ノ圖アリ十七丁オに拳經ヲ引テ其始ナイヘリ石川丈山覆書集上卷ニ示大明人陳元寶所助詩あり「吾處岩瀑流移榻臨陳生一獄器白雲雲(白雲曰愛宕山)盤蒸岩間美未能盡西話隨恨皆東行一若英歸三鄉國只須止帝京」此詩によれば陳元寶東行せしよし也

(四十) 算術關流井弓の天下和佐大八 同書同卷關新助算術に妙有事の條に關新助は甲府御家人にて有しが文昭院殿御養君の後は御旗本の諸士たり若き比曾て八算をさへしらざりしに家來共塵切記といふ書を

見て居たりしに新助夫はいかなる書ぞと尋られしに是は算用の書物にて御座候と申す新助被問少しの内借し見すべしとて是を疾と讀て算盤をとりよせあて、見られける一二返にて是を覺え夫より面白き事也と思はれて色々の算書をあつめて見られれども何れも不解といふ事なし夫よりして算學啓蒙を熟讀し天元の一の道理を明らめ其上自分の發明を以様様の術を工夫し云々我朝算術古今無類の名人也と見ゆまた和佐大八弓の天下に成りしは星野勘左衛門工夫のよし此卷に見ゆ

(四十一) 善光寺如來 慶長見聞書^{三卷}上卷慶長三年の條に八月十六日善光寺の如來俄に下向町傳に信州へ下向路次にて腰佛は散々の體也此佛上りたまひ無程大閻御煩不吉兆也武田信玄信濃を討取此如來を甲州へ移し無程相煩死去^丁其後秀吉公も如^此御煩有云々按に越後にも善光寺とて一向宗あり謙信信濃を取りて移しまゐらせし像也といへりされど信州水内郡結縁の地なれば他處にては不相應の事と見ゆ^{頭書}落集六ノ廿三丁ヨリ廿四丁ヨリ廿五丁ヨリ

(四十二) 蛇の尻にいりたるを治る方 蛇の尻にいる

はおほくは烏蛇とて小くは黒色也好て人の尻穴に入るにその人さらにおぼえずとぞ此蛇穴に少許首をさし入たらんにはいかに引出んとすれども出ることにし寸々に引切ても首は尙残りて腹にいり遂に人を殺すこれを引出すに「サルノシカケ」といふ木の葉にてまき引出せば僅に尾計さし出たるにてもたやすく引出ぬといへり「サルノシカケ」は赤色の小實なり熟れば黒色になる味酸く甘し葉はカン木の類也小木にて大樹はなし武相の間にて「ヨソゾメ」とよぶ「サルノシカケ」といふ名は越後にてよべり

(四十三) 平文狂文陰文陽文款文識文有文無文 平文は黒漆平文の尉子平文の車平文の高机平文の鞍平文の野劔平文の鉾など古書の所見おほかり平は「タヒラナル」義にて金貝の類を平に文様にし塗たるをいふ玉金貝に限らず漆の地と同様に平なる也また狂文あり平文と同物なれどその文様を狂はせて塗込たる也今はいづれをも「トギダシ」といへりまた陰文陽文といふは印章の字鐘鼎の銘などにはりくばめたる字を陰文といひ置上の字を陽文といふ朱印に朱字は陽文白字は陰文板本に黒字は陽文石摺の白字は陰文也

此陰文を款文ともいひ陽文を識文ともいへり玉の帯に有文玉無文玉とて二種あり有文玉のほりくばめたる畫あるをば陰文帯といふ古書に隱文帯とも書るは誤也無文玉は文様なき玉、帯也また衣に平文あり狂文ともあり宗五大艸紙などに見ゆ安齋、火打袋に染くるはしたる紋也といへり

(四十四) 様 人を貴て様といふ字を書たるは飛鳥井雅世卿の富士御覽記に公方様と書れしなごやはじめならん是は後花園院の永享四年九月也

(四十五) 永樂錢京錢并たばこの始 永樂錢は天文の末に用始慶長十五年九月十日止られしよし奥州會津年譜を引て安齋隨筆小車錦漫錄などにいへり俗說辨にも見ゆまた歴代の古錢をば京錢といふよしも有たばこは文祿四年に始と云々武家盛衰記廿卷永樂錢盛衰物語の條に永樂錢京錢并永樂錢一文を鑑錢四文に當るよし委く見ゆ^{頭書}落集六

松屋筆記卷之五十四

東都 源與清文儒稿

(一) 山鹿義昌字子山鹿流軍學兵法神武雄備集 杏陰散
 人正意が兵法神武雄備集の序に于、茲尾畑景憲者甲
 陽武田氏家臣而後執贊奉調大權現相續奉拜台
 德院殿及大樹景憲嘗傳兵家者流其武名覆當世
 其門葉姓藤氏山鹿名義昌字子敬其先出於秀遠秀遠
 領肥之後州築城於山鹿邑嘗招平氏且奉安置
 天皇於城郭其遺行班々于家系舊記矣平家沈淪之
 後秀遠避難勢州其會胤落魄于民間義昌曾祖貞實
 十有六而復父之讎天正永祿之間與瀧川政一爲
 刎頸之交受身於戰街發名於伊陽伊曲至于今
 巷歌之義昌又流先會之芳六歲而應父命誦四
 書六經八歲而遊羅浮之門矣羅浮者藤敏夫之學徒
 也惺々子者本邦真儒之中興也義昌慕其芳跡常揭
 敏夫之手澤於纏隅令門人指示之十歲而詩文併
 熟牙籤向于五車十有二而志于兵法究於技藝術
 數當時從北條氏長氏長亦一世之雄才也氏長問兵

於景憲以古考今潤色之切世舉而稱之已義昌叩
 兵法濫與考漢志探倭訓微妙玄通矣夫傳受相承
 之術到其妙所則不可授不可受在自證自悟而
 已義昌之學及兵不怠者及古乎矣義昌十有一歲堀
 尾山城大守以家臣揖斐氏招焉父固辭而不應之已
 滿弱冠而源亞相賴直卿以秩祿招之菅羽林光高
 主以町野氏招之欲行而不果殆有遞世而不慍
 之風矣嗚呼德洋々于上漸々于下此是之謂乎此
 載某月袖若干卷示予愚雖不措志於茲術寡君
 義直卿續東照大神之遺武奉台德院殿之遺文通
 文章達武備矣每談兵必召臣講習討論之耳
 熟目濡其漸久故於其大道可得而聞今歷視此書
 愈深愈遠惟厚惟正一卷愈于千卷義昌就請書號仍
 題曰兵法神武雄備集云々と見ゆるまた慶安辛卯某
 月涉筆曳尾堂といへる漢文の自序もあり城制十三
 篇武備廿篇戰律十七篇與義五篇合五十五篇別に序目
 一卷あり

六官位不可頼七理不可頼八兵法不可頼 私云
 心に頼所ある時は其法怠て不正縦己が能道理也
 と云共是を頼になすは大なる誤也縦は漢の王昭君は
 我美人なることを頼にして畫工に賄せずして胡國に
 趣しごとし萬事の理必と頼事有べからず殊更兵法は
 意を以敵に被討不意時は實にして虚あらざるゆへ
 討るべき不意なし爰を以大將八の不可頼事と云へり

○士卒十病の事 一疑二恐懼三瘦四恨五臆心六二心
 七飢餓八混亂九迷十不知法 私云是を士卒の十病と
 いへり大將是を知て此病を去時は士卒衆議一味して
 其事不成と云事あらず云々與清曰徒然草に孔子時
 に不逢頭回早死を擧て不可頼事をいへり此大將八
 不可頼と士卒の十病は常人も心にとめて修身齊家
 の用とすべし

(三) 南天の葉穢を除 同書武備九卷に南天の葉けが
 れを除くといふ本文あり觸穢の時是を以手水をつか
 ふべしと有さては剛邊などにこゑて(以下)
 (四) 舟に乗時の用意 同卷に舟に乗には舟梁に繩或
 は三尺手拭などつけてそれをとらへて乗べし舟覆て
 もそれを放ざれば水入ることなしといへり又云舟に

醉たる時は十八小角豆の霜を湯にて用ふべしと云
 云

(五) 密書を認る用意 密書をかくには「豆のご」とて
 大豆を水に漬置てすりつぶしそれにて書べし白紙に
 白く書たれば落ちりても人白紙とおもへりそれを水
 上にうかべて讀ば文字鮮明に顯るゝ也似我蜂物語中
 十四に見ゆ

(六) 富術三道 富に有三焉曰本富曰末富曰茲富今
 洛中ニ屋潤者末富ニ非ルハナシ而茲富モ亦不少し是
 其貧ヲ得易キ以ナル歟ト閑際筆記上卷六丁にいへり與
 清曰後漢書に逆取順守の説あり一世の豪富順取事か
 たし名將賢士の天下を治るも亦此道理也江戸日本橋
 通一町目の白木屋に家の掟書あり夫に商賈を自己の
 利の爲にすることなかれ天下融通の爲にせよといふ
 詞ありといへり

(七) たんき星長刀星 大日本王代記百九太上皇帝元
 和五年己未の條にたんきほし出るなきなたほしとい
 ふ又ほうきほし出るくわゑんのごとし云々大日本王
 代記一卷あり延寶四年辰六月吉日日比谷横町又右衛
 門板と與書にあり

(八)卅三所観音 同書百十二新院万治二年己亥の條にらくやうに卅三所のくわんおんはじまる云々按に西國卅三所観音は拾芥抄に見え坂東卅三所は坂東観音靈場記に見ゆ桂川地蔵記にも卅三所の名目ありしやうにおぼゆ後に閱て書付べし新院は後西院也願書竹居

(九)ペラ坊 同書百十三今上皇帝寛文十二年壬子の條にべらぼうと云うまれそなひ京江戸大坂のしほゐにて見せると云々今上皇帝靈元天皇也後世愚人をペラバウといふはこれにおこれりと見ゆ願書興濟日碧梅トイヘルハマカレ棒ノ義ニテ約ニ立ヌヤクザ棒ヲ云ペラ坊ハ俗ニヘヨロノナドモ云テカノナキ山ヘロノ矢ナド云間モアリテタヨヘヨク約ニ立ヌモノニ云也願書梅ヘロノ矢ナド云間モアリテタヨヘヨク棒一向イタミモセメ義トシテ聞ユ

(十)京都町地間敷改 同書延寶二年三月の條に京都家敷軒のあらため表口うら行何間尺寸法のあらためありと云々

村より出たりとて江戸に來り熊本侯の白金の第に居る身丈七尺五寸手平壹尺貳寸足壹尺三寸五分名を大空武左衛門といへりごなん

(十一)小兒の力持井大女大男 同書延寶二年の條に江戸さかひ町に四つに成子ちからも石臼に錢貳貫文のせ持上ル十一月あふみの國よりたけ七尺三寸ある大女名をおよめと云見せ物ニ出ヌ云々按に文政十年の夏熊本侯の領地肥後國上益城郡矢部の在郷田所

(十二)道中駄賃増 同書に延寶三年二月一日に上道中だちん三わりまし其ほか何方へも道中二わりまし御禮出る云々

(十三)古作新刀の差別并解紛記 解紛記上卷に第一古作と云は卒を造り初めし大寶比より五百年以後後鳥羽院の御宇までの作をいふこれらは皆さかりもすぐる其上時代の形儀にて何れも妙ようちに造るによつてありても用にたつは稀也只當代取扱は右の御代よりこのかたの作共也され共目察をする時の爲に自然世にも残るべき古作までを勝て書記す者也云々解紛記上中下三卷あり奥に慶長十二丁七月日黒菴とあり活字板なり刀を卒と書たり片假名の合字也妙拵軒敷などやうのさまの合字あり

(十四)劍相 同書公程閑暇雜書一名立花家記寫本一册有門柳川にて承傳候儀御留覽香を寫置もの也實永に江戸にて道伯丙戌六月十八日と見ゆ淺川覺書といふべしに江戸にて道伯様肥後より御登被成候時宗茂様御對面之上道伯様の御刀拵見苦候間被進由候にて御刀一腰被進候

(十五)前髪向髪 今の若衆の前髪をいにしへ向髪といへりと見ゆ淺川覺書に薦野參河が嫡子吉右衛門まだ向髪有之候が御旗本方へ乗入候處に生れては無是非と申一番に扉に付申候云々旁注に吉右衛門此時薦野彌十郎と申候と有願書東鏡ニ垂髪ト多ク付タリ

道伯様御刀は宗茂様へ被進之候を宗茂様御取被成此刀も作はあしからぬ作に候仁王にて可有之候紹運様より被進たるかと御たづね被成候へばいかにも其通と被仰上一候時立齋様にも紹運様御事被思召出候哉御涙を御ながし被成候扱打こみ御ぬかせ御覽被成候に仁王三郎清と銘御座候清字の下字わかり見え不申候由に候道伯様被仰候は目利此以前より御好被成候程御座候由御挨拶被仰上一候處に戸次治部御機嫌伺に被參候則御前へ被召出治部事は刀脇指の運の善悪よく見申候此御刀運の吉凶見候様にと被仰付候治部則右之御刀を取ぬき候て見申候何のやくにも立申道具にて無之由申候てなげ申候道伯様ことの外無與被成候立齋様被成御意候は扱こそ主膳此刀さくれ候てよき仕合ある事無之候道具の運の吉凶は慥にしるしある事也と被仰御道具あまた御出し被成御見せ被成候それく善悪申上候あしきよし申上候は御指料には不成候道伯様治部へ被仰候は刀の運悪きをさしては指主のため悪き候哉と御尋被成候治部申上候は不及申事に候運の悪き刀は指主を不守それゆ

(十六)にぎり飯非屯食 同書に鑑俊御打果被成候御合戦夜打に被成候時立花切岸の儀被仰出云々道雪様奉始無滯喰申たるものは僅に八人に而有たる由に候其外には下々迄喉に通り不申候由に候此様子御覽被遊御立被成數千人の味方或は手負或は打死わづかに打捕候は上下によらず一人當千のものども也人が死ぬるより大き成事なし男たるものは死ぬとも食せぬは何を力にして死ぬべきぞ是見候へと被仰大なるにぎりめし四五ツさらりと被召上

御見せ被成候是を見奉り一度に獨も不殘食を給申候と也云々按に朝鮮軍記にもニギリメシと有しやうに覺ゆ古への屯食といへるは是也屯食の事六十六の卅二段を考合すべし

(十七)片名字片名下名 同書に立齋様御法名御わか被成御座候時御心易被得御意候御方何も立花左近將監様と福島左衛門大夫様事「片名字」「片名」に立左福左と被仰候後には御自筆の御状等にも立左と多分被遊被遣候間福左様と立左様と何も讀能御座候に付諸人唱申候御心易御方も被仰御若き時分「した名」に左様に申候間「りうさ」の下に「い」の字御付被成べきよしにて立齋様と申奉ると也云々

(十八)タンボ井デンドウ中 田邊を俗に「たんぼ」といひ淺草たんぼ吉原たんぼなど江戸にてもいへりこは「たのべ」といふを「たの」を音便に「たん」といひ「べ」を「ぼ」と通はしていへる也「ホトリ」といふも「ヘワタリ」の「ワ」を省き「タ」を「ト」に通はしいふにや「ヘタ」といふ邊方の略なるべしさて「タノベ」を「タナベ」とも通はしいふ丹後の田邊これ津國渡邊は「ワタリノベ」の義也淺川開書に田頭中に御領内の

庄屋百姓百四五十人相ひかへ居申候云々又久末村の前ノ黒衣と申ひろみの田頭に黒田如水鍋島加賀守本より清正御集會被成云々などある「デンドウ」も又「タンボ」を「田頭」と書き夫より音に「デンドウ」とは呼たる也畿内の人「デンド沙汰」又は「デンドニ出テ晴ガマシ」などいふも田頭は田邊の廣場をいふより移りて廣く公なる事にいふ詞とは成れる也
東鑑一ノ十二丁ウニ田頭ノ字アリ田ノホトリノ事ニテヒロキ義也甲陽軍鑑十一上冊一品五十五丁ウに各居館へこもり田頭へいでたてなつて事にはいたさず候云々同廿卷五十五品廿四丁ウに田頭へなして勝頼にまつべき事は思はるまじき仰らる云々室町殿日記廿ノ十三丁ウ變化者事候に「いりるさきでんどうにはたひとりまよひ給ふらん云々 桂川地蔵記上十一丁ウに田頭之農夫爲風流志二十天云

(十九)藁履酒 淺川開書に鍋島殿上へ被仰上ニ御入部の御禮儀に柳川へ被參候終日の御酒盛にて御打送候わらぢ酒迄御座候云々按にわらぢ酒は相別の時藁履をはきたる時に呑酒をいふ也今俗に袖引酒といふ事ありそは吉原の娼女が客の歸るをり袖を引て吸付煙草を吸しむるを袖引煙草といひしより移りし詞也わらぢ酒も心はおなじく臨別の酒盛也「ワラヂ」は「ワラクヅ」の「ク」を省き「ツ」を「チ」に通はしたる也「ワラウツ」といふは「ク」を「ウ」に通はし「ワランヂ」

といふは「ク」を「ム」「ツ」を「チ」に通はせし詞にて皆おなじ

(廿)出狂房土遊 俗に人形の事を「デクノバウ」といへり恩地左近太郎開書に正成鈔談の詞に曰云々最假借ノ遊ニモ竹馬ニ策ヲ打木葉ヲ集テ鶏トシ出狂房土アソビナドニ日ヲ暮ハ十歳ノ童タルベシ云々と有デクルヒ房の略語也是は人形のあやつりにて出て狂ふより名づけし也恩地左近太郎開書板本一冊あり頭書似我蜂物語下八丁オに「休和尙歌に「世の中の人はいくはあやつりてまはしまはせばのちはおつくり」予が過去の縁と云物有てり」に生をうけて人界に生れてくるほのこまも我もなきもの也云々大開肥十六ノ二十二丁ウ醜鯛花見の條にてくる坊の上手あやつりの名人を長谷川宗仙を以て召ていりる風流をつくべしとの玉ひ云々

(廿一)田樂猿樂互に譽る 同書に田樂猿樂ドモノ互ニ我ハ人ヲ譽人ニハ我カ藝ヲ讚サセテ見物ノ貴賤ヲ狂ヌニ似タリ云々按に今俗の山賣商人ガ「ハナツハリ」と名づけて己が仲間を買手の中に立まじらせ上品の安賣とふけらかして眞の買手を欺がごとし

頭書似我蜂物語下八丁オに「休和尙歌に「世の中の人はいくはあやつりてまはしまはせばのちはおつくり」予が過去の縁と云物有てり」に生をうけて人界に生れてくるほのこまも我もなきもの也云々大開肥十六ノ二十二丁ウ醜鯛花見の條にてくる坊の上手あやつりの名人を長谷川宗仙を以て召ていりる風流をつくべしとの玉ひ云々

「はづす」は「はづす」といふ詞は物語におほく見えてとりはづしてなごいへり按に「はなつ」の「な」を省きて「はつ」といひそれを體語にして「はづす」「はづし」などいふなるべし恩地左近太郎開書に實ノ軍ヲバセズ勝ベキ圖ヲ外也と有て外の字をよめり
(廿三)バサラ 太平記廿一ノ二丁オ廿四ノ三丁ウ廿二ノ三丁ウにバサラ繪あり已に前にもこれかれ説をしるしたりき恩地左近太郎開書に勇ノ似モノト云事アリ巧ニ勇ノ三相ヲ真似シ勇ノ譽ヲ僞テ語リ其心ノ奥ニハ上部ノ勇ダニモナシ今ノ世ニバサラヲ好人ノ中ニ多キモノナルゾ行跡語ト相違シテ如何ニモ知り安キモノゾ云々と見ゆ頭書建武式目二丁オ林源抄九ノ廿五丁ウ續教訓抄十一上冊六千手經曰若降伏一切大鬼神者當於殿折羅手谷響集五ノ五丁ウ六丁オ大開肥十五ノ十七丁ウ神道集五ノ一丁ウ
當世ノ披紗羅抄ハ卷中スナカレ云々同條之内法定に無位ツテ威儀ヲ嚴身披紗羅抄好ミ是又過者ト駭ト也云々同二卷鎌倉氏滿任官の條に此數年諸國ニ披紗羅抄モ少ハ止ミ在京ノ大名ドモノ花紗羅抄好ム人々ハ頼之ノ政道ハ樂モナキ仕置也ト詳ル云々

(廿四)聖德太子馬惱未來記 同書に上宮太子馬惱未來記等ニモ無智ノ人ニ禪ノ法ヲ大ニ誠給云々とあり太平記に見えたる天王寺なる未來記の事にや瑪瑙盤などに刻しものにや可考
(廿五)白拍子 白拍子といふはひとつの遊の名にて舞女などの名にはあらず長門本平家物語に白拍子をかぞへと有は拍子とりてうたふさまをいへりを見ゆ

恩地左近太郎聞書に田樂猿樂白拍子ハ入ザル遊也と
も有庭訓往來にも出たり調拍子の義歟又外に合せも
のなくて素拍子の義歟職人歌合にその圖を載たり
(廿六)池田氏 池田氏ハ其先祖不詳攝津國池田庄
より出たる事は疑なし恩地左近太郎聞書に正成ニハ
及バザリケメドモ正行程智ト仁ト勇トノ三ツヲ兼タ
ル良將ハ末代ニハ有ガタキ事ゾカシ然ラ吉野ノ公卿
達ノ智淺クシテ天下ヲ朝セシメ給問敷所ヲ兼テ覺シ
我身ノ病ヲ分別ジテ討死ヲ急給ケルコソ最愛ケレ正
行二三歳ノ幼童アリ多門丸ト號ス内室又一子ヲ孕リ
是ハ攝津野瀬ノ庄ノ住人内藤右兵衛滿幸ガ娘也滿幸
其比勇ト仁トノ譽アリシカバ故判官ノ仰トシテ角成
テケンケリ正行討レテ後父ノ滿幸ニ心有テ師直ニ屬シ
ケレバ不仁不義ノ者ノ娘置テハ何ノ用ニカアラント
テ正儀ガ計トシテ滿幸ガ方ニ歸シ遣ヌ程經テ産平安
ニシテ一人ノ男子ヲ生リ其後同國ノ住人池田九郎教
依此娘美人タルヲ聞テ内藤ニ所望シテ夫婦ノ契ヲナ
セリ件ノ子ハ大剛ノ者ノ子ナレバ某養子ニセンズル
ニコソトテ一家ヲ相續シ七歳ニシテ元服セサセテ池
田十郎教正ト名乗セケリ後ニ細川武州入道ノ手ニシ

ヨクシテ數度ノ戰ニ武功ヲ顯シ世ニ武ノ譽アリシ池
田兵庫助是也武州入道モ所以アル者ノ末也トテ大事
ノ人ニ思給テケリ今ノ池田ノ六郎ハ教正ニハ孫佐正
ガ子也トニヤ多門丸ハ四歳ニシテ病死仕タリトニヤ
云々按にこれによれば池田氏ハ楠正行ガ血統也清和
源氏ノよしなるは池田九郎教依ガ本姓にヤ可尋和
州諸將軍傳五の卷^{下七}に池田庄三信輝は攝州池田庄
ノ出生ニシテ源滿仲ノ苗統也信輝ガ母故アツテ尾州
ニ下リ信長公ノ乳母ト成リ是ニ依テ信ノ一字ヲ免ノ
信輝ト名ノリ先祖池田九郎教依建武ノ比攝州野瀬ニ
住ス彼養子ニシテ兵庫助教正ト云ヘリ教正實ハ楠帶
刀左衛門佐正行ガ子也正行攝津四條繩手合戰ノ前其
室懷妊ス又三歳ノ幼童アリ多門丸ト云妻共ニ正行
ノ男攝州ノ住人内藤右兵衛滿幸ガ方ヘ送り預ケリ
正平四年己丑春正月五日正行廿六歳ニシテ討死アリ
其後右兵衛尉滿幸心ヲ變ジ高師直ガ手ニ屬ス故ニ正
行ガ弟次郎左衛門尉正儀ト滿幸ト不和ニナリ其後正
行ノ後室男子ヲ産ス此節多聞丸病死セリ池田九郎彼
後室ノ美ヲキ、迎テ妻トナシ同赤子ヲモ養フ十七歳
ニシテ元服シ池田太郎教正ト號ス所謂ル兩父ノ諱ノ

一字ヲ取レリ後ニ兵庫助ニ改ム勇智アリテ細川武藏
守源頼之入道常久ニ仕テ屢軍功アリ源橋ノ二姓ヲ兼
タリ教正ガ長子ヲ池田修理亮佐正ト云是池田庄三
郎入道勝入、祖也云々と有にて源橋二姓の由來明
也
(廿七)もとのもくあみ 細字平假名の小本に太閤記
とて中は七卷なるを一冊に合せし本あり畫入にて古
代のくさ草子也大尾に右七卷者板行軍書拔書也寅正
月日うるこ形や板と有始には太閤記第一天正軍記足
利よしての公さいこの事初段と書たりこれ一の卷の
最初もとのもくあみ珍名の事の條に何事によらず
もとへかへることを世人のぞくせつにもとのもくあ
みといふ事有そのゆゑは南部簡井しゆんせう病なう
に付すでにまつごに成しかば山田道安福すみ兵衛い
ひ田ではの守松倉右近森しまの守をめしよせ仰ける
はわれすでに身まかると覺えたり然らば松永簡井の
家をせめん事うたがひなし我しせし事をかくすべし
その手立はつのふり町にもくあみといふまうじんあ
り常にめしませことをひかせ我つれんをなぐさみ
しが年の比おんせい我にかはることなしこれをめし

よせしん所のおくにいれおき我となづけておのく
かしづきとさまのせいいたうぐんりよをなし我しする
ことをふかくかくすべしと老臣共に申付つひにをは
られけり是によつてかのもくあみをしん所に入置し
ゆんせうのごとくかしづきちやくし藤かつを守立け
る扱三ヶ年過ければ御吊有もくあみはおほくの金銀
を下されつものふり町へかへされけりこれよりしてゆ
きてもあとへかへる事を世上にてもとのもくあみと
いひならはせり云々と見ゆ是は眞書太閤記にも出た
る説也こゝには天正軍記を引て書り 諸國傳吟集下
田
(廿八)愛宕山にてかはらけを投る 同書三信長記 武
田
いこの事 初段と有次に明智日向守光秀はんぎやくの
おこり并連歌の事の條あり畫にあたごさんかはらけ
なげる所あり
(廿九)檢校座頭井まいす 同三信長記けんぎやうざ
どうの事付まいすの事の條に津國兵庫の町人盲目の
檢校の仲間にいりて利を得し事盲人これを信長に訴
へ信長檢校の罪をたし檢校等金二千兩出して罪を
購しをその金にて宇治橋をかけさせられし事見えま

たむへんさいへる賣僧が信長にから竹わりにせられし事見ゆこれも眞書信長記の説也
 (卅) 權の輕重潮の満干による 司馬峻が和蘭天説八丁に古人の曰毎日ニ權ノ輕重不レ等潮升トキハ輕シ潮降トキハ重シ海水河水井水皆同物トイヘドモ河水ハ山獄ノ溪水聚テ河トナル大海ノ水太陽ノ氣水中ニ入照爛潮トナル海水不レ氷夜國ハ氷海トナル天氣不レ微火氣海ニ入一淺ノ不レ爲鹹故氷海トナル云

(卅一) 地中に泉を求る方 又十九地中泉ヲ求ムル術アリ求メント欲ル所ノ地ニ深サ三尺廣サト長サハ意ニ任ス銅或錫ノ盤一具ヲ用ヒ清油ヲ微ク之ニ逼ク擦テ底ニ木ヲ用ヒ高サ二三寸ヲ楷盤ヲ以テ假テ之ヲ置其盤上ニ乾草ヲ之ニ蓋トス草ノ上ニ土之ニ蓋トス一日ヲ越テ開キ視ルニ盤ノ底ニ水アリテ滴ナラント欲ス其地下則泉アリ又法アリ地ヲ掘ル一如前等火ヲ其底ニ入レバ煙氣上升シ蜿蜒曲折スル者是地中ノ水氣ニシテ滯ル所ナル必泉アリ云々
 (卅二) 雲氣烟氣 又廿一云雲氣ヲ見ルノ術アリ兵亂ノトキ此術ヲ用ル者アリ人大ニ群屯スルニ必人氣ヲ

見ル天ニ物ノ狀ヲ顯スト云ハ眞理ニアラズ妄説ナリ冬月火災多シ寒氣ハ地氣上升セザレバ水氣薄ク天氣多シ天氣ハ即火氣也冬月最モ寒甚シキハ萬物皆火ナリ寇炊爨スル時烟ヲ發スルニ是ヲ平遠ヨリ望見ルニ亭々ト直上スルヲ迅ナレバ旱ノ徵ナリ蜿蜒テ起リ上升セント欲シテ不レ得モノ雨ノ徵也何故ゾヤ曰水士ノ氣上騰ノ雲トナル雲凝テ上ニアリ未レ成爲雨空中ノ氣能行ハレ悉ク皆燥乾スル也夏月天氣サカニシテ山嶽雲ヲ起シ雨ルト多シ亦夏月早アリ此故ニ火煙ヲ直上シ礙トナシ雲將ニ雨ヲ成ントス空中ノ氣行ハレテ皆濕性ヲナス故ニ煙ハ濕ノ爲ニ礙テ上升スルヲ不レ得是宛曲セシムル也云々

(卅三) 天杯を賜 さかやく花ノ上ノぎやうかう天はいのぎぶがくの段に主上御はいをきこしめしてさらに酒を入て右大將に給右大將いそぎしやくをさしてはんはいを給はりてほんざにかへりてをのこごもをめす頭中將かはらけを持參す右大將ひざまづきてさか月なる酒をかはらけにうつし入て御酒盃をば頭中將に返し給頭中將これをとりて退きいづ次大將酒をのみてかはらけを座下におきて搦して南殿をくだりて

はしのまの西のほとりにたちてぶたうせらる 願書
 六十二ノ四十二段官位俗訓二の卷思のまの日記四十一丁

(卅四) 摠の字を誤て總の字に作る 續日本紀に佐志總領あり太宰帥をいへる也總の字摠に作るべし宋人王明清が揮塵後錄二の卷に摠管之摠字但從手不從糸といふ條に治平初詔改諸路馬步軍部署爲摠管避厚陵名也考之前史摠字皆從手合作摠字非從糸無疑出於一時稽考不審恣襲至今不可更矣と有

(卅五) 千秋節天長節非誕生日 續日本紀に千秋節天長節あり揮塵前錄一の卷に唐明皇實錄云開元十七年秋八月上降誕之日大置酒合樂燕二百餘於華萼樓下尙書左丞相源乾曜右丞相張說率百官上表願以八月五日爲千秋節著之甲令布於天下成使燕樂一休假三日詔從之誕日建節蓋肇于此天寶七載八月己亥詔改爲天長節云々とあり誕生日を祝の始也願書示見編十ノ廿丁

(卅六) 肅慎靺鞨ハ今滿洲といふ 邊要分界圖考二に滿洲ハ今ノ唐土清朝ノ本國ニシテ山丹ハ其部屬ナルトキハカラプトノ輿地ヨリノ道里最先ヅ知ベキ所

也蓋シ蝦夷人山丹人ノ語ニ云「カラプト」ヨリ山丹ノ「モチブ」ハ渡リソレヨリ「マンゴノ大河」ニ沿テ「ギチ」ニ至ル「ギチ」ヨリ「滿州イチヨボット」ニ至ル「イチヨボット」ヨリ「ヌンクタイ」「ギリウラ」ヲ歴テ「ボチヨ」ニ至ルト今按ニ「ヌンクタイ」ハ寧古塔「ギリウラ」ハ吉林烏喇「ボチヨ」ハ船廠ナリ松前漂民經過ノ道里ト粗合ヌ圖ヲ見テ知ベシ云々又云滿州ハ即肅慎靺鞨ノ故地ニシテ我「カラプト」ノ輿地ト接界ナリ清一統志ヲ按ニ盛京ノ統部東ハ海濱ニ至リ西ハ山海關ニ至リ南ハ朝鮮界土門江ニ至リ北ハ黑龍江外ヨリ魯西亞界ニ至ル其初清ノ遠祖三姓名ノ亂ヲ定メテ始テ寧古塔ノ地ニ居リ國ヲ滿洲ト號スソレヨリ興祖景祖ニ至ルマデ黑圖阿喇ニ居ル云々按興祖ハ慶王也直皇帝と號す景祖ハ祖昌王也翼皇帝と號す肅慎ハ日本紀に「ミシハセ」とよめり靺鞨は續紀及多賀城碑に見ゆ邊要分界圖考八卷近藤守重撰寫本也肅慎唐虞の代息慎氏といひ商周秦には肅慎漢以來扶餘挹婁の地と成後魏に勿吉隋唐に靺鞨と號す靺鞨に七種あり中黑水粟末の二部あり粟末は後渤海と改む五代の時契丹とく渤海の地を取りて黑水靺鞨その南に

あるものを熟女真と云その北に在るものを生女真といふ後述の興宗の降遼の大祖渤海の大経議を征して其忽汗城を拔き渤海國を改め東丹とす金の始祖此地より興りなり熱女真阿骨打に至りて始て忽汗水の故を以て國號を建て金と云忽汗水は今の寧古塔の虎爾哈河なり歴史に渤海とあるも靺鞨とあるもみな高麗の事也と知べし○日本紀欽明五年十二月に肅慎齊明紀四年に肅慎同六年に肅慎續紀元正養老四年に靺鞨聖武神龜四年に渤海郡者舊高麗國也云々天平十一年に渤海人鐵利人鐵利ハ渤海同十八年渤海人鐵利人天平寶字三年高麗國海チ改テ高麗ト云又渤海寶龜二年六月に渤海國同四年六月渤海○弘仁六年正月○延長八年渤海并東丹國本朝文粹東丹國入朝宇治拾遺に宗任が父頼任が談の條○多賀城碑靺鞨云々○尙書ニ肅慎家語同後漢書書唐書金史五代史通典その外肅慎渤海靺鞨の名におほく見ゆ

(卅七)酒泉 漢土に酒泉郡あり美濃に養老泉あり天地自然に湧出の酒泉あること造物者の無盡藏也最上徳内常矩が蝦夷草紙三卷ありその一の卷にウルツプ嶋の北方にチリボイといふ嶋あり此嶋の岩の間より湧き出る泉あり味酒のごとく匂ひ好き梨子のごとし

此嶋に行たる蝦夷土人此水の濃味なる事を甘じて其處を去り兼て數日滯留し是を飲み満服して飽かずといへりひたと呑めども無毒にして又醉事もなし土人は是を名づけて「カモイワツカ」といふ神水といふ事なり又赤人賞翫して甚貴むといへり遍く天下萬邦にもかゝる好泉も復と數あるまじといへり則赤人は是を尊信して「キスロラ」と名づく日本の養老水といふの義歟もしれず余此地にいたらざれば委敷しらす其水の味と匂とを尋るに蝦夷地に樺といふ樹あり此樹を生木のまゝ皮へ横に切疵を附れば即漆のごとく腦水出るを取て是を飲むは土人のなす所也其樹の腦水は彼島の水の匂に似たりといへり依て吾樺木の腦水を土人に命じて取て試るに能き梨子の香ありて甘し又東都の酒に似たりと思はる因て彼島の水の味を思ひやりて推量せし也云々與清按に赤人は山丹人也山丹滿洲とて蝦夷辛太の東北につゞきて「オロシヤ」の屬國也樺は樺櫻とて万葉にカニバもてつくれる舟などよめる木也信濃などにおほかり 國語 郡代醉編二ノ廿四丁オ矢酒甘路也云々

(卅八)蝦夷の言語 蝦夷草紙上卷言語之事の條に日本紀神代紀に「ノミ」の二字は祈禱と訓じたり蝦夷言

葉もやはり祈禱を「ノミ」といふ也又蝦夷人柳にて削り掛けを拵へ幣の如に作りたるものを神前に捧て是を名づけて「ヌサ」といふ是又神代の遺語なるべしある神道の書を見るに木匠の庶人家宅の造立の時捧物の祝儀とて棟木の上に達たる物にかんな屑を垂たるは青幣白麻を垂たるは白幣なる故に麻の字を「ヌサ」とよむ也と云々又蝦夷人は神を「カムイ」といふ神居の轉言なるべし神居宮居鳥居皆居の字は助語にて神居といふもやはり神の事也三味線を片部に「シヤムセン」といふがごとし「カミキ」を「カムイ」といふも同じ又麻を「ヌシヤ」ともいふ「サ」と「シヤ」と轉じたる也譬ば物を捨る事を打去る事を「ウツチャル」といふがごとし皆連聲に依りて轉じたるべし其外崎ミサ泊リ 拜ム 髪ドリ女メノ等の蝦夷詞はやはり日本の古語なるべし有増の物の名は諸書に見えれば是を不載子が集る所は日用の蝦夷詞を語りてこゝに録す是に志す人にそなふのみ

天氣が能いシクシヒリカ空が悪いニシヨロウエン能い日和ヒリカトウカフ雨が降るルアンヘアン雪が降るレバシヨ風ンが強いレイチヤブケ

此外おほかれと略す「ピリカ」ハ能也「ウエン」は悪き也

(卅九)エトロフ島の名義 同卷エトロフ嶋事の條に島中央に「モシリノシケ」と云所に「エトロフワタラ」と云岩ありあげまきの形に似たり此岩に因て當島をエトロフと名づく昔「ヲキクルマシヤマイグル」と二人の神ともいひつべき人蝦夷地に渡りたるが其人の太刀の鐔に提し緒の形に似たること「エトロフ」と云といへり「エトロ」ハ鼻「フ」は緒「ワタラ」は岩と云義也此二人は義經と辨慶の兩人也といふ説あれどもいまだ詳なる事をしらすと見ゆ

(四十)食土 同條にエトロフ北方海邊に蝦夷人食物とする土あり色白く和らかなる事餅のごとし食用に達せんと思ふ時はみづに施し水舞して砂を去て煮るにシヤツ糊のごとし味平淡にして毒なし土人殊に賞美する也云々 國語 信濃奇區一覽二水内郡飯綱山の條に昔光遠二里半峠より戸隠まで一里也此道筋峠より北へ十四五丁下りて方十歩ばかりの間湯地あり此所産て粟飯のごとく大麥の割飯にも似た飯にけることなき云々燕氏筆乘に白石を煮

(四十一)カムサスガ國までの島々 同書上卷カムサスガの事の條にクナジリ島よりカムサスガ國に到り

大小島都て廿一島みな蝦夷地にて日本國に相續して
 屬島也松前所在島の東浦ノツケ村より海上僅三里に
 して最初クナシリ島北極出地四十二三度周廻凡一百
 五十餘里也此島より海上僅五六里にしてエトロフ島
 北極出地四十三四度周廻凡三百餘里也此島より海上
 凡一十九里周廻凡一百五十餘里也此外大嶋にはシモ
 シリ嶋ホロモシリ嶋ヲン子フタン嶋の三嶋はエトロ
 フ嶋に勝れる大嶋也といへり然れば日本に比すれば
 四國と九州ほどの嶋々おほし何れも嶋といへば小に
 聞え國といへば大に聞ゆ大なるに依て國となる廿一
 嶋合ては日本に比すれば數倍に過たりクナシリ嶋北
 極出地四十二三度也カムサスガ國は五十四度也クナ
 シリとカムサスガ南北と相距る事僅四十三度なれど
 も東西に相距る事經二十餘度なるべしクナシリ丑寅
 に當りてカムサスガ國なるべき也坤より艮の方位に
 靡きたる島續きなれば日本に數倍せり其證據には日
 本長崎三十二度南部四十度相差り八度は是南北緯度
 也東西經度は十三度に過ず緯八度を横とし經十二度
 を縦とし此縦横の内へ斜めに日本國を帶たり地幅は
 日本國中皆一二度を過す所在は申より寅に靡きたる

國也クナシリ嶋よりカムサスガ國は緯十二度を横と
 し二十餘度を縦とし此縦横の内へ斜めに彼廿一嶋を
 帶たり地幅は諸嶋共に一二度に過べからず艮日本の
 地幅の如し所在は未申より丑寅に靡きて大に廣く長
 し是を知て歎左のごとし
 赤人國の年號一千七百一十三年日本の正徳年に當り
 て赤人初てカムサスガ國に到りて此國を從へたり其
 安永年間よりカムサスガ國に城郭を築き群縣の夫代
 ありて開業をなす事壯なり依て廿一嶋都て嶋の名を
 改め撫育教道し租税を采りて帝都「ムスクハ」に送る
 也其島々の土人も今は既に赤人の風俗に化したり嘆
 くべきにあらずや云々
 (四十二)蝦夷濫觴 同中卷蝦夷地濫觴之事の條に蝦
 夷地の最初を糺に往古此海邊に老人夫婦令住居食
 物無之に付艱難仕候所夢中に佛神の告有之一つの
 船の械を授給ひて是を以大海を探し食物迄得べしと
 て夢は覺たり其時教へに任せて彼械を以て掻き探見
 るにしろき水のしたより沫立て海底より蝦魚浮出た
 りしを取て食物として夫婦の翁一期榮しとなん此夫
 婦の住居の所今の江刺に有之を彼老翁をばエビス

宮と崇め姥をば姥神といはひて今兩社有之此兩神
 の子孫増長して年を歴るに從ひ繁榮成りし事也中古
 武田次郎信廣初て此嶋に渡りて蝦夷地半國從ひ上の
 國勝山に住居有是より信廣領分のもの自然と日本の
 風俗を聞傳へ四季年月日時を定め村里の差別相
 定候也相殘る半國も信廣家の下知に隨ひ然所風俗も
 別て賤敷誠に禽獸も異事なく親子兄弟を相嫁また耕
 作の業無之故雜穀の食用に良成事更に不知鳥獸海
 草魚類等食用となし皆海邊にのみ住居云々
 (四十三)山丹國の一里 同下卷に工藤庄右衛門申達
 候覺云々赤人の國名を「ヲロシニスコイ」と申候由國
 主は女帝にて都を「ヘチエルホル」と唱候由此度赤人
 等乗船仕候「ヲホヲツカ」と申所より都迄陸路通行仕
 凡道規五六千里御座候由尤此方にて五百間を壹里と
 仕候由承知仕候云々
 (四十四)山丹人言語 同下卷山丹人言語の條に酒ア
 ラキ 算盤シヨハハン 男クセ 女ナクテ 童チ、コ云々
 など見ゆ其外略之今阿蘭陀酒に「アラキ」といふ有
 (四十五)端午 洪邁が容齋隨筆卷一八月端午の條に
 唐玄宗以八月五日一生日爲千秋節張說上

大衍歷一序云謹以開元十六年八月端午赤光曜室之夜
 獻之唐類表有宋瑤請以八月五日爲千秋節表云
 月惟仲秋日在端午然則凡月之五日皆可稱端午一
 也と見ゆ本朝月令の事を記せる書ごもの端午の條に
 引注すべし
 (四十六)くさめ くさめの事ははなひると歌にもお
 ほくよめり容齋隨筆卷四噴の條に今人噴嚏不止者
 必嘆唯祝云有「人説我婦人最甚手按終風詩寤言
 不寐願言則嚏鄭氏箋云我其愛悼而不能寐女男我
 心如是則嚏也今俗人嚏云人道我此古之遺語也乃
 知此風自古以來有之とあり噴嚏の時の祝語拾芥抄
 に見ゆ
 (四十七)文選五臣注の誤 與清文選を讀むに六臣注
 いとく誤おほし僕國のさばかりの學者が注しけん
 ものにかう誤あるはいかにぞやといふかしくおもひ
 をりしに容齋隨筆卷一に五臣注文選を評せし條あり
 曰東坡詆五臣注人選以爲荒陋予觀選中謝元暉
 和玉融詩云「危賴宗袞微管寄明牧正謂謝
 安謝元安石於元暉爲遠祖以其爲相故曰宗袞」
 而李周翰注云宗袞謂王導導與融同宗言晉國臨危

頼王導而破符堅^二收謂謝元^一亦同破^レ堅者夫以^レ宗
 衰^レ爲^レ王導^一固可^レ笑然猶以^レ和^レ王融^一之故^レ微^レ爲^レ有
 說^レ至^レ以^レ導^レ爲^レ與^レ謝元^一同破^レ符堅^一乃是全不^レ知
 有^レ史策^一而狂妄注^レ書所謂小兒強解事也唯李善注得
 之^レ見^レの試^一にいは^レ序^一に式觀^一元始^一銑曰^一式用也
 あれど詩^レ邨風^一に式微^一々々^一箋式^一發聲^一と註^一したれば「ア
 ア」と訓^レべし^レ用^レの字^一に「ア」と訓意あらんや是誤也
 又茹^レ毛飲^レ血^一の注に濟曰^一茹蘊也言^一上古巢居穴處飲^一
 食血肉^一蘊^一藉毛羽^一時人質樸文章未^レ作^一とありこれも
 禮記禮運に見えて茹は食也毛は草也注疏を考すべし
 呂延濟が説誤也かゝる誤説五臣注中擧てかぞふべか
 らず今和板の六臣注は五臣注に李善が注を加へて刊
 行せしもの也取捨して用^レべし唐本に李善注のみの本
 あり最善也文選集成もよし

(四十八)小女子を産 和州諸將軍傳二の卷十六に永
 祿七年甲子春三月丹波國ニシテ七歳ノ小女産子カ此
 舉^レ世天下の恠異也ト云順慶も密ニ一士ヲ遣リテ其
 實ヲ見セシム翌年果シテ三好ガ弑害アリ云々按に文
 化年中にも下總國佐倉近邊にて七八歳の女子産せる
 と有何の變もあらざりしがオロシヤ人蝦夷に來て宮

館邊をさわがせし事ありこれらの瑞にや和州諸將軍
 傳十三卷あり寶永丙戌秋閑雲子が撰也同四年初春刊
 行す

(四十九)紙錢并金札銀札 今の世諸侯の國に金札銀
 札をもて金銀に代て通用せしむる事おほかり中國九
 州の大名に最多し細々要記一の卷に建武元年二月三
 日紙錢通用ノ儀仰出サレ諸國ノ地頭御家人ノ所領ニ
 課役ヲカケラル先例イマダナキノ所ナリ云々と見ゆ
 これ本朝金銀札の原始なるべし唐土にも紙錢の事見
 ゆ和漢神祭に紙錢を用る事又おほかり和名抄祭祀具
 部に紙錢新樂府云神之來分風飄々紙錢動分錦織搖紙
 錢俗云^一加美勢^一邇^一云勢邇加太云々全唐詩第一函五
 冊樂府送神歌にも紙錢あり該餘考神道名目類聚抄
 など考べし細々要記七冊興福寺實嚴僧正所^レ記也建
 武元年正月に起り永和三年十月に終興福寺の什物
 也

(五十)高沙井オラレ風 細々要記五の卷に延文六年
 南方正平 六月下旬の比阿波國高沙云所高鹽俄ニミチ
 在家數千軒海ニ沈ミ男女數萬人死スト云々按に關東
 にて津浪といへり余門人平戸の家老松浦外記語曰彼

國にオラレ風といへる烈しき風一條吹來ること時々
 ありその幅五六間若は七八間に過ずされば獵船四五
 艘も並たるに一二艘は此オラレ風の難に逢て溺死す
 れども傍の船は恙なし或人洲崎の高き巖頭に立て釣
 したるにオラレ風吹來り高浪打ちよせて其人海底の
 モクヅトとなれり其風必東或東北の方より吹といへ
 り雨増鏡一の卷廿六丁ウ新島守の卷にありそに高鹽などの
 六年條に八月三日甲寅大風諸國洪水高潮之間
 民烟田島多以成^レ海百姓死^レ不可^レ計云々

(五十一)メシマ瘤 平戸の元老松浦外記が小屋にて
 職原抄を講せしをり外記語曰平戸領内に和布嶋と云
 小嶋あり其嶋の桑木に瘤生する事ありそは菌の類也
 これを水蒸して用れば中氣に妙也とて余に一ツ惠た
 りこは幾度煮じ用ても功能ありされどセンシカスと
 呼^レ時^一ハ此瘤怒て更に効驗なし實に神藥也といへり
 因に云椶櫚の新葉を黒燒にして用るも亦中氣の妙藥
 也

(五十二)烏帽子子烏帽子親ヒキノオヤ 烏帽子子烏帽
 子親ハ元服の加冠の人を中比烏帽子著^レ時^一よりい
 ひし名也盛衰記十八の卷四丁同廿の卷九丁平家物語九
 の卷五丁平治物語參考本下卷八十八會我物語五の卷三十

丁太平記參考本十の卷廿四同廿九の卷五十六 伊勢の卷
 下卷七丁相州兵亂記四の卷十五などに烏帽子子見え烏
 帽子親ハ平治物語參考本下の卷八十一丁ウ盛衰記十八
 の卷四丁同廿六の卷廿一會我物語一の卷廿丁 同四の卷
 廿一丁同八の卷廿八 太平記參考本卅六の卷廿一 結城戰場
 物語類從本一丁ウ二などに見えたり伊勢の卷には將軍
 義滿勢州下向太神宮へ社參せられ多藝の御所立寄給
 ひ顯康卿の嫡男親能朝臣を義滿猶子の契約あり則諱
 の一字をおくられ滿泰と改名せらる顯俊朝臣の二男
 俊康をも烏帽子子とし京都へ同道して上り給ひけり
 と有○常山紀談五之上卷に黒田長政の嫡子滿徳丸と
 の四ツの年袴着の祝あり母里但馬は墓目親にて常に
 祖父となづけられし云々類聚名物考稱號十四東鏡源平
 盛衰記三十六ノ二十一丁ウ同
 廿八ノ二十三丁ウ烏帽子折上九丁ウ又片親トモアリ云はし親元服次
 第二丁ウ三丁ウ云はし子元服次第三丁ウ烏帽子折草子上九丁ウ十丁
 ウ和田酒盛草子四十丁ウ十番切草子十二丁ウ景清草子十一丁ウ元服
 丁ウ林源抄十二上六十三丁ウ 太平記廿九ノ廿七丁ウ同卅六ノ十六
 名付親伊曾保物語下十三丁ウ

松屋筆記卷之五十五

東都 源與清文儒稿

(一)戀せぬ人は無情 世の諺に戀せぬ人は無情也といふは俊成卿の長秋詠草中に「戀せすは人は心もなからましものゝあはれもこれよりそしる」といふ歌を出處とやせん

(二)松永彈正が名言 徒然草貞徳の慰草一の卷^{十六}七段に松永彈正久秀はかくれなき武勇の名將たりしが若きものごもに教て申さるゝやうたごへば今天がおつるといはは空を見ずしてゐるがよき也見てかなしむとておつべき天のおちずしてあるべき事かはどいはれしと也と云々與清按にこれ肝魂の落付たる人の語也必おもひ學ぶべし松永久秀の事跡は和州諸將軍傳といふ判本にくはし

(三)だれタツタと云詞 徒然慰草一の卷^{五十一}廿二段に今云あの人たちのもの申さるゝことばをきくに或は「たれ」といふことを「た」の字をにごり「た々」といふことをば「たつた」とかみの「た」もじをつめて下の

「た」もじをすみて申さるゝかやうのかたこといくらといふかすをしらす丸か耳にさへをかしく傳ればこれをしていにしへの人たちにきかせ奉らばいかばかりかなしくおぼしめされん云々

(四)消息文に年號書くはへまほしき事 同書一の卷^{六十}廿九段に文のおくの月日ばかり判の上にかきたるを見れば是はいつのとしにてありつるやらんごおもひ出さまほしく侍れば月のかた書に細字にて年號を書たき物也と常に存すれども人のめたつべき事なればさすがにえかゝで打過侍りぬげにもとよき人のたぼしめしてあそばしそめよかし又その年號の用に立事も侍べき也云々是は貞徳の存意也

(五)強と女房は新しがよし 同書二の卷^{五十一}廿二段にうつはものは新しきよし人はたゞふりたるのみぞたうとかりけるご尙書の文をよめる古歌あり必古き人のものをしるにてはなけれどとよき人の老てとゞまりたるは世のたからとなる也云々今世に疊と女房は新しがよし茶器は古きがよしといふ諺有似かよひたる古歌也

(六)富貴の人必智者ならず 徒然草卅八段に位高く

やんごとなきをしもすぐれたる人とやはいふべきおろかに拙き人も家に生れ時にあへば高き位にのぼりおごりをきはむるもありいみじかりし賢人聖人みづからいやしき位に居り時にあはずしてやみぬる又おほし云々此段を見て富貴はうらやまじき也

(七)齒生て生れたる兒を鬼子也とて殺すは日本の弊風 徒然慰草二の卷^{十六}四十段に日本はおろかなる風俗ありて齒のはえたる子をうみては鬼子といひてころしぬ牙齒は腎の臟をつかさどるゆへはやく齒のおふるは精力つよく無病なる子を生るればそのまゝうしなふてこそあたらし事にて侍れ此事はおほやけへ訴ておぼし立たきもの也同志なる子もしさやうの子まうけたまはは人はともいへかくもいへ殺さずして必そだてあげ給ふべき也云々與清按に日本紀に生ながらにして齒の生し給ひし天皇見え漢國の聖賢にも例おほし前太平記といふものに酒顛童子生ながらに齒生し事見え奇異雜談集二の卷にも齒の生て生れし鬼子の事有因にいふ酒顛童子の畫卷世に流布せるはいとくだれる代のも也香取の大宮司が家の畫卷二卷ありて古色いとめでたし下總國佐原の里の伊野衛

十郎が許に典物にて有しを余まさしく見てそが中田樂の圖をその里の門人永澤啓吉に寫させたりき詞は御伽草紙の中に收て刊行せり

(八)臣子たるものに見すべき連歌 徒然慰草二の卷^{廿七}四十七段に櫻井基佐が壽像の贊に「あとにはなさぬ都なりけり」といふ句に「いつくにも君すむ方を枕にて」一期の連歌の出來句と云々君父の方をあどにせまじき義を臣子にしらせまほし

(九)利休宇治の上林が茶湯をほむ 同書同卷^{廿八}四十八段にそのかみ宇治の上林がもとへ夜會に利休居士大名衆とゆかれけるにあるじはれがましくや思はれけん手もともふるふやうにてさゝくの菜よりおつるもなほさすせんころびたるをもそのまゝにてひざまづき利休の前へ茶碗を出しければ列座の若き殿たちみなまくはせてゑつばにいられけるを居士は日本一の手前かなとかんせられけり後にその心を大名衆たづね給ひければ各をはるゝ申入るもたゞ此一ふくをしんせんためばかり也これを湯のさめぬさきに奉らんといふ心一すぢにてけがあやまちに心をかけざりし所こそたてすましたるにて候へと申され

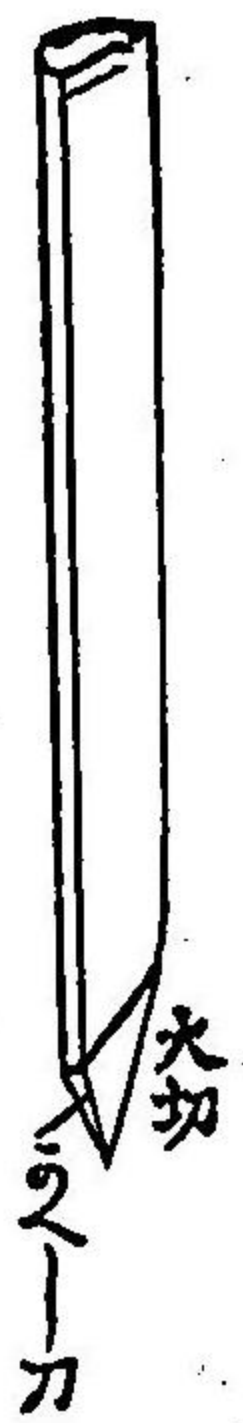
けり云々按に本朝茶湯の道は珠光法師東山義政公などに権興し紹鷗利休などに成れり利休己がおもひ付の事を數寄と號してさまゞ道を潤色せり此一條も上林が非を利休が口才に任せてほめなしたる歟

(十)目代井守目 徒然草二の卷^{四十四}五十四段にうづみたるものゝあたりをめしををおかざりしがあやまち也云々めしは目代にて番人也今昔物語にまもり目と有八代集の内の詞書にも有しやうにおぼゆ

(十一)牛のつのもじ 徒然草六十二段に延政門院いどきなくおはしましける時院へまゐる人に御ことづてとて中させ給ひける御歌「小たつもし牛のつのもじすくなもしゆかみもしとそ君はおほゆる」こひしく思ひまゐらせ給ふと也云々慰草に延政門院は後嵯峨院の皇女也ふたつもじは「こ牛のつのもじは「い」直なもじは「し」がみもじは「く」のよし注有按に此御世は假名遣の格もみだれたれば論なけれど戀の假名には必こひと書てこいと書事はなかりし也されば牛のつのもじは比の假名を「ひ」と書が牛角に似たるゆゑ也徒然草の諸注誤れり

(十二)かへし刀 返し刀といふは此方より一刀大き

く切彼方より一刀少くきりてその形



如此といふ也徒然草六十段に枝の長さ七尺或は六尺返し刀五分にきる云々慰草三の卷^三に木竹によらずはすぎりに切て其うらを切そぐを返し刀といふ云

(十三)長柄の人柱の歌 長柄の人柱といふは仁徳紀の武藏強頭が故事に附會せし説なり徒然草三の卷^{廿四}七十九段につのくにながらの橋たび／＼ながれしにある人ひとばしらを立給へと申す奉行せんぎして科なきものをつみなはんもさすが也とかくけ事いひ出したる人をいれんとていれけり後にそのむすめある所へ人かしづきてえんにつくるに三年まで物いはざりしかばかたはものごとおこせし人のもとへかへしやるその道にて雉子のなきけるを供のものころし侍りければ輿のうちよりかの女「ものいひし父はなからの橋柱なすはきしもいられさまし」とよみしにより啞にてはなかりけりて乗物をかきもど

し侍るとなん云々按に神道集七の卷橋姫明神事の條に抑人王三十八代ノ帝ヲバ齋明天王ト申ヌ皇極天王ノ重祚シ給シ時ノ御名ナリ此時攝州長柄ノ橋ヲ懸ラレシニ人柱ヲ被レ立タリシカバ其河ノ橋姫ト成レリ依レ之河ニテ死ル人ハ皆橋姫ノ眷屬トハ成ル也其故ハ橋ヲ懸ル事度重リケレドモ事行ザリケレバ人柱ヲ立ベキ由ヲ内談有ケル折節淺黄袴ノ膝ノ切レタルヲ白キサイデヲ以テ縫付タルヲ著タル男一人出來レリ其妻ハ二三計リナル少ナキ者ヲ負ケリ斯ル處ニ鶏ノ鳴ケルヲ人々聞ツ、差違此男亦材木ノ上ニ息タリケルヲ此橋ノ人柱淺黄ノ袴ノ膝切レタルヲ白キ衣端ニテ縫付タルヲ人柱ニ立程ナラバ相違无事行ベシト徒^{イシラケ}口ヲ立ケル程ニ橋ノ奉行聞レ之サテハ汝ヨリ外ニ別人有ベカラズ則取縛リテ橋柱ニ被レ立ケリ其妻女夫ノ別ヲ悲テ一首ノ歌ヲ讀ツ、硯紙ヲ乞テ書キ橋柱ニ結ニ付歌^{イシラケ}泣々少キ者ヲバ負ナカラ身ヲ河ヘ沈メケル其歌云「物イヘハ父ハナカラノ橋柱ナカスハキシモトラレサラマシ」ト讀タリ此女ハ則此橋ノ橋姫ト成ケリ人々哀ミテ橋爪ニ社ヲ立橋姫ノ明神ト祝ヒケル也とあるが出處也西遊行靈抄にも此説あり人柱

の事は築島草子にも見ゆ山組開五ノ三ノ

(十四)行粧調度などにて人の心しらるゝ事 人は行粧或は調度などによりて心もおしはからるゝもの也近來の人に正木千幹一柳千古などいふ歌よみは髪を總髮にし衣類をかざり大貧人なれども物もたり顔にもてつけて打ふるまひ調度なども芝居の道具めきたる人おどしのきら／＼しきをおきならべ俗人をはからんとかまへたるいとかたはらいたし狂歌堂眞顔もまた此癖あり余あまたゞび此人たちの客に對ふさまを見しに外に人ある席にては寛大無禮にふるまひておのれ大人がり外に人もなくさしむかひたらんをりはいとうやく／＼しく客をうやまひ最負せられん事もどむ千幹は外客あれば褥上にて余に對し外客なれば余をおくりて余が履を直したりきかくきたなく腹黒きふるまひして世に用られんとはかるはあはれなる衆生ならずや徒然草八十一段に大かたもてる調度にて心おとりせらるゝことはありぬべしさのみよき物を持べしとにもあらず損せざらんためとて品なく見にくきさまにしなしめづらしからんとて用なき事どもしそへわづらはしくこのみなせるをいふ也

ふるめかしきやうにてことくしからずつひえもな
くて物がらのよきがよき也といへるはよき教訓也楊
鳴曉筆にも此よし見ゆ

(十五)物は一具に調はずとも用に足らばさてあるべ
し 調度などすべて一具に對せずとも俗にいふ後家
入にても用にたらばさて有べし書も美本を好はやく
なし文字鮮明に紙質よく蠶或は穢なくば一冊は大形
一冊は中形一冊は寫本一冊は判本とりまじりても表
紙各々違ても苦しからじ萬のものこれにならずらへて
知べし徒然草八十二段に弘融僧都が物を必一具に調
へんとするは拙きものとする事也不具なるこそよけ
れといひしもしもいみじくおぼえし也とあるはよき説也
(十六)追々と云詞 俗言に追々といふ詞あり追てと
もいへり消息文におほし源氏松風湖月抄四丁におのづか
らおひ／＼にうちのことどもはしてんと有
(十七)鼻をすゝる 俗言に鼻をすゝる又はすゝりな
きなどいふは源氏松風湖月抄七丁にはなすゝりうちして
おこなひぬましたりと見ゆ

(十八)日どり 今の俗に日どりの善悪などいふは源
氏薄雲五丁に日なごころせ給ひてしのびやかにさる

べきことなどのたまひおきてさせ給ふ云々とあり

(十九)病者に酸物をくはしむ 病者に梅干をくはし
むるはその味かはらざれば也鹹は苦味に變じ甘は
泥み澁は下らすなまぐさきは嘔すたゝ酸味のみ熱
氣にさはらずよく食を引て降すゆゑに梅干を用るこ
と病家の常也源氏薄雲十八に此ごろとなりてはかう
しなどをだにふれさせ給はずなりたればと有柑子は
本草に無毒とありて又酸味よく食をみちびいて胃
口をひらくがゆゑに病者用ひしなるべし

(廿)やはら井やはらつゝ やほらといふ詞は物語文
にいとおほし舊本今昔物語に和ラと數所書たれば也
保良の假名なることうつなきを人みな「やをら」と書
くはあやまり也宇治拾遺には「やはら」とも有也波良
にて和ラと有もおなじ語意は和かなるより起りて俗
にいふ「ソット」又は「しづかに」なごゝ通ふめり源氏
薄雲湖月抄四丁にはやはらつゝ引いり給ふと見ゆ孟津抄
にちとづゝ引入給ふ也といへり

(廿一)ゆゝし井いみじ ゆゝしと云詞は忌々しき心
とのみおもへるは古きにかたよれる説也忌々しき心
キビノワロキ心用るは勿論にて殊の外の心に用た

るもおほしいみじと云詞も同義にて殊の外の心より
善悪にかよはし用ふ「いみじくし」といふを約て「ゆ
ゝし」といへりと見ゆ薄雲湖月抄四丁に柳のえだにさか
せたる御ありさまならんゆゝしときこえあへり云々
其外おほし徒然草にも此心に用たり

(廿二)梅雨 梅雨は四月梅熟の節をいふ俗に都山と
いへり「ツハル」を約て「ツユ」といふ梅のツハリて熟
せるにいふ詞也杜工部詩集七梅雨の詩に「南京犀浦
道四月熟黄梅云々注に趙日周處風土記云夏至前雨
名黃梅雨云々夏至は五月の中の節なれば五月上旬
なるべし圖書宮重顯筆下九丁オ金葉雜部に「葉かくれにつはる
と見えし程もなくばうみ梅に成にけるかなし」

(廿三)四松 杜詩卷十一四松の詩に四松初移時大抵
三尺強別來忽三歲離立如人長云々日本紀歌にひと
つ松とよみ氏に「柳ありさればニツ松三ツ松四ツ
松五ツ松などよみてもくるしからじ仁和寺の六本松
武隈の二本松などもむつ松ふたつ松といふことしか
るべし

(廿四)狂歌 本居宣長が玉勝間に本朝文粹の狂歌を
擧て今の狂歌の名におなじきをめづらしくおもひた
りされど詩題にはいとおほし杜詩十二の卷に狂歌行

贈四兄といふ詩あり白氏文集にもありその外所見
あげつくすべからず

(廿五)歌題おほくは詩題を用 歌の題はおほくは詩
題を用たり杜詩十三に立春の詩あり陸放翁が集に臘
裏立春ありこれは歌題の年内立春也

(廿六)竹の丸樋 歌に竹の丸樋とよめるは引泉筒也
杜詩十四に信行遠修水筒詩あり雲端水筒坼林表山
石碎云々公自注に引泉筒也

(廿七)折檻 節用集世部に折檻セツカン云々今俗貴
詞を「セツカン」といへり杜詩十八に折檻行あり注に
夢弼曰漢成帝時朱雲上書乞斬張禹上怒令御史將
雲下雲攀殿檻檻折後當治檻上曰勿易囚而輯
之以旌直臣故後世殿檻皆曲以雲故也と見ゆ

(廿八)古今傳授の徳にて玄旨法印圖を免ル 慶元通
鑑上に丹後田邊ノ城ニテ細川兵部大輔藤孝入道玄旨
相守ル七月廿七日ヨリ攻之寄手小野木縫殿谷出羽
守藤懸三河守高田豊後守別所豊後守赤松左兵衛督小
出大和守生駒左近太夫等也城中ニテ二男玄蕃頭ト父
子能守テ七月ヨリ九月迄寄手多討レテ城中少モ愁タ
ル色ナシ此人古今無雙ノ文武ノ名人也諸藝ノ達人歌

道ニサへ堪能ニテ主上ヲ始奉リ三公九卿諸門主ニ至ルマデ當時和歌ノ道ノ師範タリ依之此人ノ亡ン事ヲ世以テ惜ム處也三條大納言爲勅使寄手園ヲ可解トノ勅定アリ且又五奉行ヘモ其旨ナリケレバ九月十二日ニ諸方ノ責口引拂籠城ノ中年比日比相善リシ人々ヨリ公家武家トナク書通セシ其中ニ世間流布ノ返書アリ爰ニ記ス

去廿七日之御折紙今日相届令披見候世上之事餘不慮トモ不存候今更中モ事舊候ヘドモ信長御世太閤様御時似合之致忠節近年ニ到テ御念比ノ御事奉レ對ニ秀頼様何ヲ以可致疎略候哉此段越中守關東出軍内府世間之爲後見之條是又奉公ト存候處案之外不及是非一候一兩日以前從八條殿御使德善院案内者相添下候則古今相傳之箱證明狀歌一首「イニシヘモ今モカハラヌ世ノ中ニ心ノ種ヲ殘スコトノ葉」此短冊并源氏抄箱一廿一代集禁裏様へ進上候此外知音衆ヘモ草紙箱一二進候存生之思殘事無之満足候只今之手前之儀ニ候間兎角之事難申候連々被掛御目候ニ御殘多候御奉行衆ヘモ此通被仰候テ可給候此外不申候恐々謹

言

八月二日

立旨

東條紀伊守殿
上田勘右衛門殿
三好助兵衛殿 御報

とあり此に依れば古今傳授の沙汰はなき事也東 太平記六ノ十八丁ウニ古今ノ傳授ト謂ハ中古滋州士東下野守平常録ヨリ紀州ノ種玉龍宗祇ニ傳ヘ宗祇ヨリ三條大納言道通院實隆卿ニ傳ヘ實隆ヨリ稱名院公保卿ニ傳ヘ公保ヨリ三光院眞澄卿ニ傳ヘ其ヨリ四智院公國卿ニ傳フ公國早世ノ折節其子香雲院實隆未七歳ナリシ故細川兵部大輔藤孝入道支旨ニ傳フ云々委クハ原本ナク聞スヘシ

(廿九)一錢そり 同書上に豊前國中津城主黒田甲斐守長政云々長政多勢ニテ東國ニ下リシ故ニ中津ニハ兵士多カラズ諸浪人ハ云ニ不及也下人町人一錢ソリマデ兵士ニナシテ云々一錢ソリ未詳

(卅)闊ミカタと云字 同書に味方に闊の字を用たり味方とも身方とも御方とも書は普通也

(卅一)鉄初 慶元通鑑下卷慶長十九年三月廿一日の條に今年諸大名ニ仰テ武城井越後高田ノ城ヲ築シム惣ノ城ヲ取ルニ鉄初ト云事アリ高田ノ城ノ鉄初ハ城和泉守某今一人アリ長袴少サ刀ニテ鉄ヲトリ曳々應ノ聲ヲ掛テ打始ルト也云々按に重編應仁記に鉄初の

事ありしやうにおぼゆ

(卅二)御袋の歌 人の母を御袋といふ事室町の比より諸書に所見おほし慶元通鑑下卷に十二月十四日阿茶局京都ヨリ歸ル是秀頼ノ母公ノ妹京極若狭守忠高母常光院ヲ以テ扱ノ事ヲ仰ラルベキニ依テ也云々十二月廿二日大坂和陸ノ誓紙ヲ相調玉フ云々頃日京都ニ立ル處ノ落書也トテ狂歌ヲ陣中ニ謠フ「茶うす山引わけにする扱は京極殿の袋也けり」按に此時神君茶白山に御陣を召れたれば也これ冬御陣の時也

(卅三)八王子瀧山の城 八王子瀧山の城の事は小田原記太閤記などの類所見おほし慶元通鑑下卷慶長十八年の條に四月廿五日大久保石見守卒ス武州八王子ノ内瀧山ニ在城佐州金山ノ奉行タリ云々と見ゆ

(卅四)賞榜 訴人に褒美を賜ふべき由の榜をば賞榜と書べし宋人桂萬榮が棠陰比事の序に重立賞榜廣布耳目云々と有は御褒美可被下問可訴出よしの高札也

(卅五)瘖者に物いはしむる方 棠陰比事上卷丁に沈内翰云世人以竹木牙骨之屬作叫子置喉中類之能作人言予謂瘖者苦煩冤無以自明取叫

子令類之作聲如傀若嬰 傀 魯嬰切傀 子 粗能辨其 一二宛或可伸見沈括 云々この叫子を作りて瘖者に ものいはせまほしきわざ也

(卅六)板壁 俗に羽目といふものは板壁と書べし棠陰比事上丁に其炷 潤達切 竈近板壁久燥而焚云々 となり板壁は今の羽目也

(卅七)失火出火 世人失火を出火と詞にもいひ書にもかくは誤也皇國の古書にもみな失火と書き棠陰比事上丁に坐以失火云々ともあり漢籍にもみなしかり出火といふ熟辭は見あたらす

(卅八)羅織 棠陰比事上丁に唐垂拱年羅織事起湖州佐史江琛取刺史裴光製書割取其字一轉合成文以詐爲與徐敬業反書告之云々取反書向日看之乃見書字補葺而成平看不覺向日皆見遂集州縣官吏索水一盆令琛投書於水中一字々解散琛叩頭服罪云々とありこれ字を切あつめてつくりし偽書也

(卅九)嗅を聴といふ事 香を嗅を必香をきくといふはもと漢字によりていへる詞也棠陰比事上丁允濟聽葱段に呼令前一々聽其手遂獲盜葱者云々

とあり爾圖今昔廿九ノ廿五語聞香法華科注六ノ六十

(四十)店主 今の町人の家の主人をば店主といふべし業陰比事中九丁に唐貞觀中衛州板橋店主張述妻歸寧云々板橋店主は傾城町の家の主人也歸寧はその妻里へ行たるなり

(四十一)合格并拔萃 官職秘抄職原抄などに合格の吏といふ事は和漢の書所見いとおほかり業陰比事下八丁に鄭克曰按唐制選人試判三條辭理愜當決斷明白乃爲合格謂之拔萃音粹云々と有拔萃の字も純粹を拔義にあらず爾圖注に格正也

(四十二)定額 定額は數を定むる事にて小學注に額數也とあり定額字業陰比事上十一許元棧舟條に自是立爲定額見魏泰東と見え明會典杜氏通典文獻通考など所見枚擧すべからず皇國にも定額大納言定額女孺定額寺など延喜式徒然草歴史などに所見おほし歌にひたひさだめともよめり爾圖兵部式ニ定額兵部云々名導師云々政事要略廿八ノ廿二丁ウ續紀十二ノ二ウ菅家文章九ノ廿四丁ウ菅家遺訓下に定額之本院制度通六ノ十八丁ウ元亨釋書廿三ノ廿八ノ十一語

(四十三)優戯場 業陰比事下卷十九從事函首條に其夫至廬陵於優戯場認得其妻云々と見ゆ優戯

場は今の芝居也

(四十四)税籍丁籍 同卷廿三王曾驗税の條の鄭克按に争田之訟税籍可爲證分財之訟丁籍可爲證云々税籍は今の水帳也丁籍は人別帳也

(四十五)寇江賊 同卷廿五趙和贖産條に寇江賊とも寇江者ともあり日本の海賊也

(四十六)老人狂歌 居行子新話三の卷に老人狂歌六首の話の條に愚曰さればそれにつけ或人六歌仙と云狂歌を見せ侍りしを見しがよくもいひつゞけ侍る聞給へ「皷がよる黒子が出来る脊が勾む頭は禿る毛は白く成る」手はふるふ足はひよろつく齒はぬける耳はきこえず目はうとくなる」身にあふは頭巾櫛巻杖眼鏡湯婆温石渡瓶孫の手」くどうなる氣短になる愚癡になる思ひつくことみなふるくなる」聞たがる死とむながるさびしがる出しやばりたがるせわやきたがる」又しても同じ咄に孫ほめる達者自慢に人をあなどる」此狂歌のわるくちさりとては老人の情をよくいひしなりこれを見て老人たるものはたしなむべき事也云々按居行新話五卷あり京都西村遠里が撰也天明六年正月刊行す

(四十七)保元物語作者葉室民部少輔時長 井中原師梁

参考保元物語凡例に保元物語者世不知何人所著醍醐報恩院所藏舊記云葉室時長作大外記中原師香所手書上保元物語一狀云故師梁所鈔師香乃師梁子也云々尊卑分脈十四の卷閑院左大臣冬嗣公七男高藤公の流に高藤七代孫大藏卿爲房二男按察使權中納言顯隆卿葉室一流の祖也顯隆の弟に因幡守長顯あり其子中山中納言顯時二男修理大夫時光ノ子に時長民部權少輔從四位上書平家物語其一人也云々また顯時、四男に刑部少輔盛隆あり改名時光一其子時長民部少輔正五位下平家物語作者隨一也云々盛隆改時光而依白河院院宣歸本名畢云々かく兩所に出せるは誤にて顯時の子時光時光の子時長なること疑なし長時が叔母は平大納言時忠卿室にて安徳天皇御乳母典侍なれば其時代押て知べしまた中原師梁は系圖に掃部頭師蔭の三男師梁其子師香は師梁が兄掃部頭師干が養子にて大外記也時代は時長よりも差後輩歟管見記を考るに同族三條家大外記師顯は弘安年中の人も系圖に大外記師尙の長子師綱より師季師光師宗師蔭師梁とつゞきて七代也師尙の次男師重より師兼師顯

とつゞきて四代也此等を按に時長師梁時代不同なれど平家の世より已下鎌倉中比已上の人なりこは文政十一年三月十五日平戸侯の隠居靜山君の間に對へし也

(四十八)鳥銃 鳥銃の始は本朝は種子島に起れるよし南浦文集に見え關東にひろまれる事は北條五代記にあり明國は本朝よりも後に傳りけん武備志に倭寇鳥銃といふものを用るよし珍しきさまに書たり朝鮮國の始は懲志録一の卷三丁に庚寅萬曆四十二年也本朝三月義智對馬守也二孔雀及鳥銃槍刀等物一命放孔雀於南陽海島下鳥銃於軍器寺我國之有鳥銃始此云々と見ゆ懲志録は朝鮮柳成龍が撰也懲志意の書名也爾圖八幡愚童訓下廿一丁ウ飛騨砲暗クナシ鳴リ高ケレバ

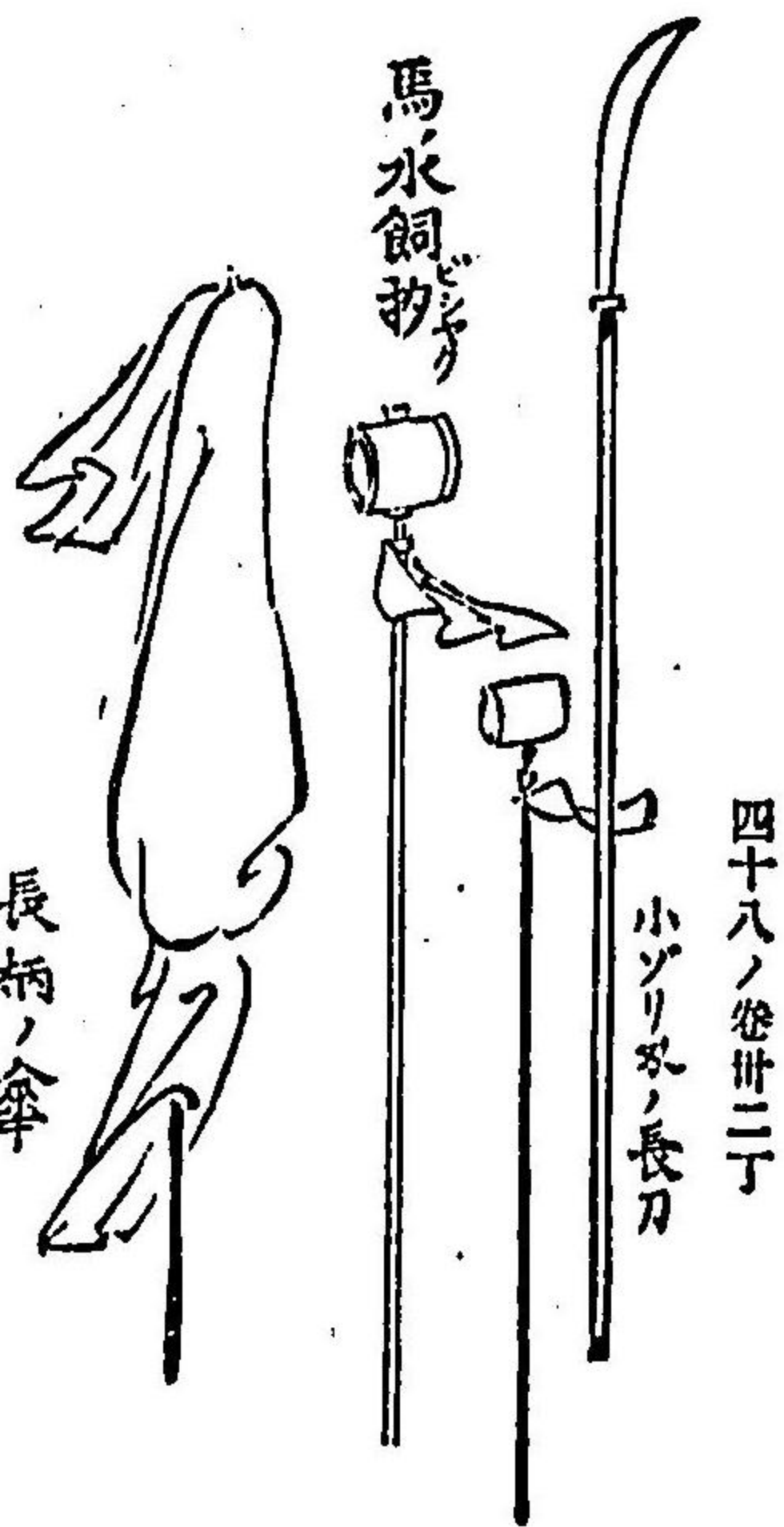
(四十九)倭學 本朝文粹に倭唐の學と見え近來倭學といふ稱これにもとづく懲志録一の卷十六に倭學通事景應舜あり朝鮮にて本朝の學者を置て譯語通事の官とせりと見ゆ爾圖菅家遺戒に倭魂とあるは源氏の詞によりたし又國學とも有異稱日本傳下四卷一丁ウ經國大典三卷禮典に寫字倭學伊路波息(中略)漢學

(五十)飢を救方 懲志録三の卷十三に請以此賑救

飢民以_レ前郡守南宮悌_ニ爲_レ監賑官取_レ松葉_ニ爲_レ屑每_ニ松屑十分_ニ合_レ米屑一合_ニ投_レ水以飲之とあり松の皮は水に漬し粉にして團子にて用れば肌を助るの功あり

(五十一)城雉 同書四の卷十五に古人言_ニ城制_ニ皆曰_レ雉所謂千雉百雉者是也余平時讀_レ書函粹不知_レ雉爲_レ何物_ニ每以_レ梁當_レ之嘗疑梁但千百則其城至小不能_レ容_レ衆將何以乎及_レ變後始得_レ成繼光紀効新書讀_レ之乃知_ニ雉非_レ梁即今之所謂曲城甃城者也蓋城無_ニ曲城甃城_ニ則雖_レ人守_ニ一梁_ニ而梁間立_レ盾以遮_レ外面矢石_ニ賊之來傳_ニ城下_ニ者不可_レ見而禦_レ之也紀効新書每_ニ五十梁_ニ置_ニ一雉_ニ外出_ニ二三丈_ニ雉間相去_ニ五十梁_ニ雉各_ニ占_レ地_ニ二十五梁_ニ矢力方盛左右顧_レ便_ニ於發_ニ射敵無_レ緣_ニ來_ニ附城下_ニ矣壬辰秋余久留_ニ安州_ニ念賊方在_ニ平壤_ニ若_ニ一朝西下_ニ則行在前而無_ニ一遮障處_ニ不_レ量_ニ其力_ニ欲_レ修_ニ安州城_ニ而守_レ之重陽日偶_ニ出_ニ晴川江上_ニ顧_ニ視州城_ニ默坐深念者久之忽思得_レ一策城外當_ニ從_ニ形勢_ニ別築_ニ凸城_ニ如_ニ雉制_ニ而空_ニ其中_ニ使_レ容_レ人前面及左右鑿_ニ出砲穴_ニ可_レ從_ニ中放_ニ砲_ニ上建_ニ敵樓_ニ樓相距千步以上大砲中藏_ニ鐵丸_ニ如_ニ鳥卵_ニ者數斗_ニ賊多集_ニ城外

砲丸從_ニ兩處_ニ交發無論_ニ人馬_ニ雖_ニ金石_ニ無_レ不_ニ糜碎_ニ若_レ是則他堞雖_ニ無_ニ守兵_ニ只使_レ數十人守_ニ砲樓_ニ而敵無_ニ敢近_ニ矣此實守_ニ城妙法_ニ其制雖_ニ仿_ニ於雉_ニ而功勝_ニ於雉_ニ萬々矣蓋千步之内敵既不_ニ敢近_ニ則所謂雲梯衝車者皆不_レ得_ニ用_ニ此事_ニ余偶_ニ思_レ得_ニ之_ニ云々與清按雉は城の出張の處にて横矢を射んための構也梁は土手なり



四十八ノ卷廿二丁

長柄ノ傘

(五十三)石垣 同十四の卷十八石垣の圖あり大原ノ勝林院の門前にある石垣也石垣の上に柴垣あり
(五十四)山門僉議の圖 盛衰記に山門嗽訴の事を記して三塔會合僉議のありさまをくはしくいへり其圖圓光大師畫詞傳卅一の卷十三に見ゆ
(五十五)長刀の鞘 圓光大師畫詞傳三十五の卷六に長刀に鞘をかけし圖あり

(五十六)無用の時人の許へ行きまじき事非爲人鈔 爲人鈔二の卷朋友尋訪用心辨に昔智アル人ノ謂ルハサシタル事ナクテ人ノモトへ行ハヨカラヌ事ナリ用アリテ行タリトモ其事果ナバ疾歸ルベシ我身隙アリガホニ人モ角アラント思フハ大ナルアヤマリ也光陰如_レ矢ナレバヨシナキ事ニ時ヲ移ス互ノ爲益ナシ歌ニモ「友ナラヌ人ノ問來テ長居スハ獨アルヨリ侘シカリケリ」語ニモ澹臺滅明行不由徑非_ニ公事_ニ未_レ嘗_ニ至於偃之室_ニトコソ侍_レ云々爲人鈔十卷あり万治二年苦甜齋守株床が自跋あり寛文貳曆壬寅仲夏刊行す

(五十七)學者は時を知ルを要とす 同書二の卷學者知_レ時爲_レ要辨に昔智アル人ノ云ルハ古ヲ好テ今ヲ非トスル者禍ヲ免ル、事少ナク是故ニ時ヲ知_レ學者ノ要トス今ノ世ニ生レテ古ノ道ニカヘルハ災難ヲ不_レ招ニテコソ有_レベキニ却テ惡名ヲ唱ラレ其咎ヲ免_レザルモノアリ明哲ノ君子コソ古ヲ好テ又今ニモ隨フベケレ我モ人モ明闇ノ時世々々々感テ邦有_レ道危言危行邦無_レ道危行言孫トアレバ深ク體認スベシ奥ニ

或人ノ曰伯夷叔齊ガ心ヲ底ニ含テ聖賢ヲ題ニシテ讀ル戲トテ二首「世ノ中ハ荆ノ下ノカキ蕨ムツカシケレドラレバヲラル、」「世ノ中ハ荆ノ下ノカキ蕨ムツカシケレバヲラヌナリケリ」云々與清曰漁父辭に聖人不_レ凝_ニ滯_ニ於物_ニ而能與_レ世推移といひ沙石集及澁柿に明惠上人の泰時に答られし詞に人はあるべきやうともあり余わかうとを諫て人はオツニヲカシクと説く共に一笑すべし

(五十八)もつけと云俗語 俗語にモツケナ事或はモツケノ重法なごいふ「モツケ」は物外と書り爲人鈔三の卷理氣之辨十七に物外ニナヤマス事必然タリ云々と見ゆ

(五十九)息合の藥 爲人鈔四の卷入敵國一武者嗜之辨に戰場ニテ水ニ渴シテ息ノ切ル、事多シ梅干ノ肉ト棗ノ肉トヲ等分ニスリ合セ丸ジ様口傳アリ是渴ヲ止ル妙藥也此藥ヲ絹ノ袋ニ裹テ緒ヲワタガミニ結付テ持ベシ云々見ゆ

(六十)くひちがひ土手 同書四の卷若輩軍法物語辨に土手ヲクヒチガヒニ築テ討理モアリ云々按に土手は封疆也古き詞には見あたらす

(六十一)重箱飯ツギ 同書同卷同條十二に陣中ニテノ飯器ハ銅ニテ高サ一尺八寸廣サ一尺五寸バカリニシテ三重ノ其中ニ重箱飯ツギ椀ヲ入組内ノツムヤウニコシラヘ袋ニハ牛ノ革ヲイタメ革ニシテ塗テヨシ云々按に節用集に飯桶メソツウと見ゆ

(六十二)袋を取井鎗金弓袋鎗床弓床 同條十三に一人ノ日鎗金弓袋ト云事ハ敵陣ノ前ノ小勢ニテ引退時方圓ノ備ニシテクリ引ニシテ引取也敵蒐ラバ鎗ヲ取テ八方ヲ下知シ小膝ヲ折テ待カクベシ必味方小勢トイヘドモ敵シラムモノ也一騎打ノ道モ此心得肝要ナリ或人ノ曰類々ノ袋ヲ取ト云事鐵炮ヲバ鐵炮ニテ防ギ弓ヲバ弓ニテ防ギ鎗ヲバ鎗ニテ防グ鎗床弓床トモ

云居敷ヲ待テ以テ床ト云ヒ袋ト云歟云々

(六十三)夜食 同書八の卷人而無醫術一忠孝之道不能行盡一辨に飲食ヲ節ニシ房事ヲ慎ミ夜食盡寢ヲ禁シツ、食後ノ行歩兵法ヲ馬ヲ自路ニ乗テヨシ云々

(六十四)元日の昆布栗屠蘇酒 同九の卷大江元就公元日祝辨に大江元就公正月朔日ノ早天ニ手水鶴飼シ給ヒテ東方ニ向テシバラク獸座アリシ處ニ近習ノ粟屋彌次郎ト云者罷出テ申上ケルハ元三ノ御イハヒヲ召上ラル、様ニト伺ヒケレドモ兎角ノ仰セ出サレモ更ニナシ云々其時元就公サラバ汝ニ語テ聞スベシ世ノオロカナル者ハ吉方ヲ拜シテ昆布栗ヲ取テ屠蘇ノ酒ヲ酌壽命長穩子孫繁昌ヲ祝シテ深キ慮ナシ云々

(六十五)無心ト云詞 井苗羽織佐竹紙 同書九の卷栗田刑部之小姓討死辨に家康公遠州高天神ノ城ヲ責給フ時城中ヨリ申ケルハ御陣中ニ幸若彌三大夫ヲ召連ラレタルト承及ヌ無心ノ所望ナリトイヘドモ舞一サシトアリシ時云々按に今俗人に物を乞に無心といふは無心の所望の略也又云苗ノ羽織著タル武者一騎城中ヨリ出テ其比關東ニ用ヒタル佐竹紙十帖厚板ノ織物ニ差添テ幸若大夫ニ引出物シケルトナリ云々

松屋筆記卷之五十六

東都 源與清文儒稿

(六十六)竹流ノ金子 同書十の卷大坂陣後評判之辨に大坂ノ人數ハ諸國ノ寄聚リニテ何ノ證據モナキ者ドモニ金銀莫大ニ賜ルニ因テ集リ來レバ爭カ一戰ノ功ヲモナスベキヤ竹流ノ金子ナド大半請取ラバ落行クモノ多カルベキト京童モ申ナリ云々

(六十七)鬼に金棒 同書十の卷諫言之辨に幼君ノ御伽ニ出サン者ハ無欲ニシテ愛和アリ漢和古今ノ物語ヲ能覺エタル學者ハ鬼ニ鐵杖ナルベシ云々 要具 下ノ一丁リ東明寺百首に「一心をたえすたしなめそのうへに方能あらは鬼に金棒」

(六十八)内股膏藥と云詞 同書十の卷王元之待漏院記之辨に毀リモナク譽レモナク進ミ退ク事モ人ニ付テ内股膏藥ナル臣モ亦何ヲ竊テ祿ヲ犯シ員ニ備テ身ヲ全スルモノアリ云々

(六十九)能組の事 同十の卷能與次第之辨に或能大夫ニ式三番能與ノ次第ヲ尋侍レバ答テ曰翁ノ神ハ春日大明神尉ハ白鬚大明神三番神樂ハ宇佐大明神延命冠者ハ住吉大明神也今ノ神樂ト云モ猿田彦命ヨリ始ルナリ云々

(一)蝦藥師 蝦藥師 臥雲日伴錄四に昔平氏小松相公病ニ癘就大泰藥師一祈一安全一藥師夢告曰此病非予力所及三條河原有二老僧一能治此病一行當尋之小松殿奇而驗之果河邊有二小堂一藥師如來爲之主而老僧在焉就僧求醫治而病果愈矣此佛元是自江文乘一河水而流出矣今相國寺妙莊嚴城西邊衣服寺藥師是也俗謂蝦藥師云々予曰蓋江文或衣服訛者乎云云按蝦藥師は蝦藥師に相對したる名といふべし蝦藥師の事は京童一の卷竹齋物語上卷五丁 杯に見ゆ目黒の蛸藥師ハ京都永福寺の蛸藥師を移して安置せし也その因縁法華驗記上卷十五 吉野海部峰寺廣恩法師が八隻鮮鱸の談に隣し江文寺の故事山城名勝志十二の卷四十に後拾遺往生記毘沙門堂記杯引て記たりきを刊本とす臥雲日伴錄五の卷に十二月廿二日明日立春故及昏景當每室散熬豆因唱鬼ハ外福ハ内四字蓋

此方ノ驅備之様也宜胤卿記文龜元年十二月十八日條云今夜節分讀心經打大豆事等如例云々同永正十一年正月一日條爲除夜之間云々職事伊長朝臣秀房六位等也公兄朝臣鹿々合火ツ、グシ云々守武千句トツと見えたるを脱たれば補べし今川大帥子三十三歳ト云々

(三)漢籍施行の例并孟子 臥雲日伴錄五ノ卷文安五年五月五日大外記來訪予曰昔時二條攝政與義堂和尚和漢和亦用韻時洪武韻府初來將用此也外記曰某見其和漢本因曰吾朝用漢土書必有朝廷施行之命如孟子一則未施行之書也攝政公用洪武韻府擬施行也云々韻府在孟子二已孟子ノ註二種アリ四書集註與詩經集傳來同年八月達ニ於東福寺不ニ破陽和尙始講此書云々倭版書考說同庚富能嘉吉二十二十三條同三六十二條寶徳元八七條ナドニ四書ノ事見ユ日伴錄寶徳元四十一ノ三條ニモ見ユ

(四)山の帯 江談抄五に白雲似帶圍山腰青苔如衣負巖背在中「け衣きたるいはほはまひろけんきぬ」山のおひするはなそ」異本に下句おひ遠須加奈とあり謠曲には白樂天の詩に住吉明神の答へ給ひし歌とす山帯は明人楊慎が丹鉛總錄卷一の條に張野廬山記天將雨則有白雲或冠峯巖或亘中嶺俗謂之山帯不出三日必雨唐詩風吹山帯遙

知雨云々と見ゆ

(五)龍燈 世に龍燈とて江湖川海より陰火のもえ出る處おほかりしらぬ火の筑紫といふも歌によみ景行紀に其由縁見えて亦陰火也丹鉛總錄二の卷陰火に易澤中有火素問云澤中有陽燄注陽燄如火煙騰足水面者是也蓋澤有陽燄乃山氣通澤有陰燄乃澤氣通山文選海賦陰火潛然唐顧況使新羅詩陰火暝潛燒是也東坡遊金山寺詩云是時江月初生魄二更月落天深黑江心似有炬火明飛燄照山栖鳥驚悵然歸臥心莫識非鬼非仙竟何物注引物類相感志山林藪澤晦明之夜則野火生焉散布如人乘燭其色青異乎人火劉須谿批云龍也非是坡公西湖詩又有湖光非鬼亦非仙之句此可互證また陰火の條拾遺記西海之西有浮玉山山下有穴穴中有水其色如火波濤灌湯而火不滅名曰陰火一本玄虛海賦所云陰火潛然者也然李善及五臣註皆不引之唐詩陰火雨中然顧況詩風晴泊起陰火深潛燒戴叔倫詩古成陰傳火寒蕪曉帶霜と見ゆ鹿島紀行にも龍燈の事いひたり

牛陶稿二ノ廿五丁ウ月令丁ウ廬山佛燈アリ滑稽雜談十三ノ六十二ノ段竹菴外集奇異雜談集一ノ廿丁オ新著開集五ノ廿五丁ウ崇行篤伊豆即往法師條に鴨が岩屋の入口にて念佛し六七年の後廿日の回向をつとめられしに毎夜龍燈三

ツ四ッあがりしやばあまりにことくしき事にて浪人後の恐をわへ訴へ傳りし云々ひて守護の小田原の奉行へ訴へ傳りし云々

(六)熱海 伊豆國熱海温泉の事は熱海志伊豆志熱海紀行杯に見ゆ熱海の字は丹鉛總錄二の卷熱海に岑參熱海行云蒸沙礫石然虜雲沸浪炎波煎漢月此循名相一說之誤參雖仕從邊幕亦未曾親到熱海也按玄非西域記云凌山葱嶺北隅坎雪積凌春夏不解縣釜而炊席氷而寢七日出山有一清池亦曰熱海以其對凌山不凍故得此名其水未必溫也玄非蓋躬至目見非參想像之詞耳と見ゆ伊豆の熱海は實に火燄湧騰して西域の熱海の類にあらず

(七)輿地 日本輿地圖は行基始製して拾芥抄に其縮圖を載たり寛永古板の圖余が藏にあり輿地といふ事は漢土の字にて皇國にも方輿集などいふ書名あり丹鉛總錄二の卷蓋元二輿地の條に世言輿地圖始于漢光武披輿地圖而不知前漢淮南王傳已有輿地圖之語地以輿名取易坤爲之義猶天如張蓋也張衡作蓋天圖義取此蓋天輿地正可作對と見ゆ輿の事五十の卷にいへり輿史記淮南王傳輿地圖云々周禮十の卷大司馬諸侯之地五倍於秦云々

(八)時の鐘 菅家後章十五丁オ時の鐘の事燕石雜誌に見ゆ

丹鉛總錄三の卷更點に今之更點擊鉦唐六典皆擊鉦也太史門有典鐘二百八十八人掌鐘漏唐詩促漏遙鍾動靜聞とあるをも鐘とは別なれと引べし

(九)傳馬 郵驛傳馬の事令式に見えたり丹鉛總錄六の卷置郵に孟子曰速於置郵而傳命注置驛也郵驛也驛與郵何別乎按說文驛置驛也从馬聲驛驛傳也从馬日聲合而觀之驛主于騎言馬也驛主于傳言車也驛字經傳罕見惟左傳文公十六年有楚子乘驛會師于臨品之文書云雨霽蒙驛克言龜文直達如驛路也許白雲曰字書馬遞曰置步遞曰郵漢謂之乘傳高祖五年令田橫乘傳詣洛陽如淳曰漢律四馬高足爲置傳四馬中足爲馳傳四馬下足爲乘傳一馬二馬爲軺傳又謂之遞說文傳也一曰寄也徐鉉曰傳驛車也周禮行夫掌邦國傳遽之小事傳車尙速也故又爲寄迫也莊子仁義先王之遺廬可一宿是遺廬即傳舍也風俗通曰漢改郵曰置此說非孟子已有置郵之說矣云々驛傳の事は事物紀原三才圖會通典文獻通考など考へし倭名抄にも名目を載たり

兵部式驛傳馬ノ事見ユ主稅式下ノ三丁オ

(十)扁舟 扁舟は小舟也。鰻魚舟を省て扁舟といふ也。丹鉛總錄扁舟本條に或問予詩人多用扁舟何處爲始。予按南史天淵池新製鰻魚舟形甚狹故小舟稱扁舟。六朝詩惟王由禮有扁舟夜向江頭泊之句。至唐人則多用之と見ゆ。

(十一)別號 丹鉛總錄十の卷別號に戰國策秦惠王時有寒泉子注云秦處士之號史記索隱云甘茂按甘茂居渭南陰鄉之楊里故號曰楊里子又范蠡去越自稱鸕夷子此國後人別號之處防乎と見ゆ。

(十二)不肖の子家を破らす 丹鉛總錄十一の卷石の條に人君之愚暗柔弱不足以亡其國亡國者必剛復明察之君也譬之人家不肖之子不足以破家其破家必輕俊而無檢者也在人臣則眞小人不美其肆惡國其亂國者必僞君子也蓋眞小人名不美其肆惡有限僞君子則既竊美名而共流惡無窮矣是故唐之亡不在僖昭而在德宗宋之亂不在京大而在王安石或曰子何以怨眞小人次曰子不觀白樂天詩乎狐假女妖害猶淺一朝一夕迷人眼女爲狐媚害即深朝々夕々迷人心白樂天豈怨狐哉と見えたるは國家を治る者必辨知すべき事也けり。

(十三)花の雪 ちる花を花の雪とよみふる雪をちる花とよみたるはおほかり丹鉛總錄十八の卷洛陽花に何遜與范雲聯句詩云洛陽城西却作經年別昔去雪如花今來花似雪李商隱送王校書分司詩云多少分曹掌秘文洛陽花雪夢隨君云々と見ゆ歌題に花似雪雪似花ともあり。

(十四)鳥のかしら白し 庵主に山からすかしらしろく也にけりわかかへるへき時やきぬらん」とよめるは燕丹が故事也丹鉛總錄廿一の卷白頭鳥に三國典略曰侯景篡位令飾朱雀門其日白頭鳥萬計集于門樓童謡曰白頭鳥拂朱雀還與吳杜工部詩長安城頭頭白鳥夜飛延秋門上呼蓋用其事以侯景比祿山也千家註不知引此云々これも鳥に頭白き説也吉野拾遺くわんこうとなくやよしの山からすかしらしろくしおもしろの夜や」ともよめり。

(十五)臣は君によりて忠あり 孟子に君視臣如土木臣視君猶寇讎と有又丹鉛總錄廿二の卷孫卿に作器者無食材而有食匠治國者無能臣而有能君勝者所用敗者之基也與國所用亡國之臣也とも見ゆ。

(十六)貴人あれども貴族なし 丹鉛總錄廿二の卷

孫卿に天下有貴人無貴族有賢人無賢族云々貴族にして貴人出るは本朝の名譽也。

(十七)氣を養 同書廿二の卷上怒則氣上喜則氣緩悲則氣消恐則氣下寒則氣收畏則氣泄驚則氣亂勞則氣耗思則氣結善養氣則無是矣と見ゆ人必氣を調ふべし。

(十八)橋の勾欄 同書廿四の卷珠玉に段國沙州記吐谷渾於河上作橋謂之河厲長一百五十步勾欄甚嚴飾勾欄之名始見此王建宮詞風簾水殿壓芙蓉四面勾欄在水中李義山詩籠輕幕重金勾欄李長吉詩蟬姑帛月鈎欄下字又作鈎宋世以來名教坊曰勾欄云云按に勾欄は今のてすりの事也。

(十九)同名異物 同名異物は數るに違なければ丹鉛總錄八の卷隱囊に晉以後士大夫尚清談喜宴佚始作塵尾隱囊之製今不可見而名後學亦罕知顏氏家訓云梁朝全盛之時貴遊子弟駕長簷車跟高齒屐坐基子方褥馮斑絲隱囊王右丞詩不學城東遊俠兒隱囊紗帽坐彈棋云々との隱囊ハ「フグリ」と同名也また同卷の條に齊高帝紀時軍容寡闕乃編糲皮爲馬具裝拆竹爲寄生又東昏侯紀馬被銀蓮具裝鎧雜羽孔雀寄生寄生不知爲何物也云々此寄生は

「ヤドリキ」と同名也。

(廿)香の物漬物の名に溲の字を用べし 醃菜ツケ 醃菜アサ糟瓜 ナラツ糟瓜 ナラツケ 琥珀瓜 壘ウリノカ 糟瓜 ナラツ醃菜 ナツ香蘿蔔モノ など漬物の漢字名物六帖文藻行潦の類書に擧たり按に丹鉛總錄九の卷齊民要術の條に溲音覽鹽漬物也とあれば淺漬澤菴漬鹽押の茄瓜菜類の香物には溲の字を用て「ツケモノ」と訓すべし。

(廿一)歸鴈 鴈は常世國より來りて常世にかへるよしいひ秋の來鴈春の歸鴈倭漢同日の談也紅毛雜話一の卷に赤道近き所には四季共に鴈栖す眞臘風土記に所無鴈黃鶯杜宇燕鷓之屬云々眞臘は八九度より十度までにわたる國也赤道近きあたりには鴈の無き事明か也と見ゆ。

(廿二)南無阿彌 紅毛雜話一の卷に南無阿彌はナムアミンにて名阿彌の義といへり翻譯名義集の説とはいたく異也可考。

(廿三)羽子板羽根 同書一の卷に羽子板羽根は黒坊の弄也とてその圖を出せり羽子板を「ラケット」羽根を「ウーラング」といふよし也按羽子板の事小車錦骨董集上編下の本卷などに見え下學集鹽麩抄六の羽子板世諺問答にこぎの子などいへり節用集には羽子板胡鬼板胡鬼子とあり圖梅花無盡藏五ノ七下

(廿四)飛龍頭といへる油揚 紅毛雜話二の卷に此邦にていふ油揚の飛龍頭は「ホルトガル」の食物也其製左の如しひりうづは彼國の語のよし也粳米粉糯米粉各七右水にて練合せゆであけて油揚にしたる物也云云按に本朝の飛龍頭は豆腐を摺て中に午房麻子など加へて油揚にしたる也形龍頭ともいふべきものなればさいふ也

(廿五)天鷲絨 井海黃絹花布等の名 ピロウド海黃の絹サラサ布杯の事紅毛雜話二の卷に見えて閱て知べし

(廿六)ミイラ 人の干死たるを「ミイラ」といふ紅毛雜話二の卷木乃伊の條にバルパリヤ人チープロス國に砂金どりに行て廣原砂地炎熱の爲に死したるを木乃伊といふこれ「ミイラ」なるよし委いへり「ミイラ」

の事赤鳥隨筆にも見ゆ考合すべし

(廿七)鳳皇 鳳皇は印帝亞の鶏なるよしはしく紅毛雜話二の卷にいへり按に聖人の世ならねど兩漢書晉書などには鳳凰の出し事おほく見えたり印帝亞の鶏を獻じて天子をよろこばしめたるものなるべし趙翼が廿二史劄記三の卷に以「衰亂之朝」而鳳凰猶見可知郡國所奏符瑞皆未ニ必得實也とも見ゆ

(廿八)風領 今の俗「えりまき」とて縮緬の切或は綿など襟に纏て風寒を拒ぐはもと西洋の風也法師は古來より用ること也紅毛雜話五の卷に和蘭陀の風領の圖あり彼地にては「ダス」といふといへり

(廿九)捨子を救 紅毛雜話一の卷幼院の條に歐羅巴國中に「ウキスホイス」といふ府あり明人幼院と譯す是國中の貧窮なる者子を生ても養ひ育べき爲方なく又是を殺せば國禁を犯せる罪を蒙る故國王兩全の方便を以て是を建つ下賤なる者のみにあらず身分は貴けれど家貧なる人の爲にも設けたる府也其子を入る窓ありて外より其處に音なへば彼人内より應じて戸を開き子を抱入るゝ也最年月日時を記したる牌を子の胸に掛しむ夫より後乞戻して家に養はんと思ふ時

先に府に入るゝ時記したる年月日時を認めて彼窓に投入るれば先の牌と引合せて子を戻す也府の中には諸藝の師匠ありて男女の兒童好む所の藝を教ふ男子は廿歳をかぎり金銀をあたへて府を出し心の儘に渡世をいとなましめ女子は十五歳を限り金銀をあたへて嫁せしむると也故に國中絶て捨子なしとぞ云々與清これによりて按事あり下總常陸陸奥の邊土にては民その子を養育する力なし故に嗣子を除て他子をばまびくものおほし水府西山公これを憂給ひて懇至の命令もありしかご今にその風止すぞなん江戸にも貧者その子を養にたへず或は捨子にし或は妻子を置去にして道路に迷はしむるもの少からずこれが爲に大勸進を起し養幼院を建立して仁慈の道を布行せまほしき事也そは三都其外廣邑の諸豪家に勸化し諸侯に請て其費用を貯へ官に訟て御免教場とし女は十三歳まで男は十六歳まで養育してさて女は十八歳まで男は廿三歳まで奉公稼をさせその給金を得て養育の恩を償しめば養幼院も相續しマビキ子捨子の災なく人物繁茂し廢田墾開國家富足の基なるべし

(卅)セイライとは鷹の上手をいふ 鷹をよく使ふも

のを「セイライ」といふは齊頼が鷹の上手なりしゆゑ也

(卅一)宿官 宿官といふはしばらく留て置て後住所に遣すをいふ叙留位に進ば相當の官より位重きゆゑ官を辭すべきを尙留て其官に任じ位のみ叙するをいふ宿官も似たる名目なれど別也

(卅二)小手差原の歌 獨笑菴竹村立義といへるもの秩父巡拜圖誌五卷あり文政六年三月十一日記せるよし跋に見ゆ秩父圓通傳に補正してつくれるもの也一の卷に云古手差原の事太平記卷の十義貞謀叛の條卷の卅一武藏野合戦の條などに見えたり後の武藏野合戦の事新安手簡に白石先生此北野天神のあたりなる由を擧て委しく論じ給へりまた青木氏が昆陽漫錄にも論あれど此所に用なければ記さず又小手差原の名古く東鑑に見えられど小山合戦の所なれば下野國にて同名異所なるべし新葉集に武藏國小手差原といふ所におり居て「君のため身のためなにかをしからんすてゝかひあるいのちなりせば」

(卅三)岩殿觀音の碑 秩父巡拜圖誌一の卷に岩殿の道をとへば云々觀音に詣づ御堂崖づくりにて格子戸

に錠をろせり御堂の後に岩屋あり横壁二間許深き三間程奥の方は薄くらし火を打て携へし蠟燭にうつし見るに下に剛する如く青石の板のごとく立ならべ様になし左右に同じく石にて位牌のごとく立ならべたり少し奥をも同じ様にて左右の刀はなし中なる石の上の方を丸を象り中に觀音殿と彫たり側に同じ石にて幅一尺に高さ三尺五寸程厚さ一寸餘りの碑有石面に文字有いとあざやかにて六百餘年を経し物とは見えすかゝる洞中に有て雨露にかゝらざるがゆゑかさもなくば文字の磨滅せしを後人の故のまゝに彫たるや其文は武藏野話にも載たり

當寺者天性岩窟自然寶石因行基菩薩手引十一面像自安置此靈地已來六百五十才始立此石門其結縁者數百人具記名字納此寶殿大悲照覽悉在此偈一具一切功德慈眼衆生福聚海無量是故應願禮

文和五年申二月十八日 願主比丘元行

又武藏野話に今一枚有て同じ程なる石にて其文は武藏高麗郡我那岩殿山瑞巖祥寺當時大旦那小野高忠と有と記せり此一枚の碑くはしくもとめたれど見えす若左右に立ならべたる石の内なるにやと裏表燭をて

らし見たれども文字なし何れへぞ持行しか堂内へ納しにや未詳是非なく立出もとの道を忠證菴のもとに下れりと云々

(卅四)秩父武光山 同書二の卷に武藏野話云々秩父嵩秩父山とも云大和本紀に勇者の怒り立るが如しと日本武尊のほめ給ひし山は即是也いつの頃よりか武甲山といひなせしは武藏第一の山といへる心にて甲の字を書し歟又武尊の武具を埋し説を附會して甲の字を甲冑の心にて用しや按に武甲山は武光山の誤なるべし此山の西南荒川を界とし東北産川を限とし此内を武光の庄といふ慶長の頃浪州長松の城主に武光武部と云いふ有いづれ武光氏の庄田なるべし云立義按に武甲山は武光山の轉せるならんといへるもさも有べし然るに此武藏野話より已前文晁の著せし名山圖譜に武光山と記したれば兼てもいへる事と見えたり云々

(卅五)荒川 同三の卷に百川朝宗曰荒川三十七間より五百四十間迄水元武州秩父郡古大龍村山中より流出東側は同國葛飾郡小梅村迄川路四十二里十二町餘西南側は同國豊島郡區場町迄川路四十三里十八町相流夫より川下海に入云々

那猪豊後守久繁施主

(卅七)飯田村光源院高札 同卷に云武藏鑑曰飯田村眞土散住す田少く畑多山里也字に上中下あり神社は天神社寺院は万松山光源院洞家甲州山梨落合永昌院末寺領三石清光院洞家

一當年甲乙軍勢於子彼寺中亂妨狼藉若背此旨者可甲州高札 光源院行罪科末印者也仍如朱印件 山縣三郎兵衛奉之 永祿十三年庚午二月廿八日

(卅八)野上總持寺法燈國師の贊 同書五の卷に通志曰野上町中に青色の板の如くなる石二基有り岩田の次郎父子の葬地也次郎は野上島田藤谷淵椽原が祖也此所を今も町と號するは鉢形城主北條安房守在城の時洞家は野上の足輕町と號せし故也鉢形より三里の所に足輕町有は氏邦の大しん思ふべし山際に正一位勳八等丹生大明神の社有社の東は岩田野上の三郎の館の跡也宮森の西は總持寺法燈國師の開山地也開山の木像も有繪像も有椅子に坐し拂子を握る僧形也上に讚あり

心即是佛 佛即是心 心佛如如 亘古亘今 永仁六九年二月二十日 鷲峰開山覺心云々

(卅六)薄村藥師堂棟札 同書四の卷云薄村と云名高き藥師有境内廣く前に流有云々通志曰今藥師の御堂有所本の薄村也御堂より六十歩去て薄の次郎長房館有背に正一位勳八等丹生大明神社有丹の黨の在名の地には何所にも氏神に祭る土人のいふ藥師の所も地主は丹生の地也爰に住せし次郎長房の系圖には丹治武信は陽成院の御宇元慶元年に武州押への使に加治洞家に下し給ふ加治一の井秩父に後裔あり武藏七黨の一ツ丹黨也長房此所に住せり嫡子薄小二郎三男は秩父織原に住せし織原三郎と云也御社御堂の紋も丸の内丹の字也其後秩父はすべて北條氏邦の領地也敵甲信兩州より深山を越て爰に至り村里を燒はたらきする時御堂類燒す其時別當寺より走來り漸藥師本尊と子の神將をば取出したりと云殘る神將は兵火にかゝる其後鉢形殿御營作也其時の棟札左の如し

當寺幸元別當成範 大旦那那氏邦 小旦那秩父孫次郎 施主 七條大佛工宮岡 十二神主願主藤田六 供聖乘坊別當成範 左六神内 天正十三乙酉八月 五日中午九郎施主 右六神内 同年十月二十四日 尾城主諏訪部遠江寺同十四年丙戌二月時正八日

(卅九)三ツ杯 愚記宣風卿即一の卷文明十二年三月廿二日の條に次有
 一獻ミサカ云々按に三ツカツキは今の三組の杯なり
 (四十)風呂 同卷文明十二年三月廿五日條に參一條殿入風呂武路
 次參詣文殊堂云々按に此風呂は今の錢湯の類歟も
 と湯風呂を設て諸人を浴さしむるは僧家の説に出た
 る也奈良般若坂に今も湯屋ありて施浴さしむこれ光
 明皇后の比よりのわざ也といへり 爾爾書爾から系草子六丁
 産まの樂の風呂の條にのり系御も申てまわれ
 けり其日のふるの奉行には土屋の三郎も申すなり云々
 (四十一)六地藏參 同書同卷文明十二年三月廿九日の條に橋本中將
 同道參詣例六ヶ所地藏云々六ヶ所は佐比壬生八田
 星光寺清和院藏珠院のよし二の卷に見ゆ按に百社參
 千社參などの類古書にも見えたる事也
 (四十二)外郎同書一の卷文明十二年三月廿九日の條に外郎法師來云
 云按に外郎の事關東兵亂記に見ゆ 爾爾書爾中次記六丁
 定例記十丁丁廿九丁丁梅花無葉藏三下九丁丁翰林五集廿七丁丁秋部万
 里待自注に有人欲欲京之醫師外郎外郎需之故用本草本草續草履雜歌
 十八丁丁
 (四十三)卷本草子本 同五月書に兼俱卿參先有御談
 議日本紀云々日本紀本草置小机上讀申之云々卷
 本は卷物也草子本は冊本也冊子の事好古小録除餘叢
 考などに見ゆ

(四十四)法華宗繁昌 愚記二の卷文明十三年三月廿六日の條に妙蓮寺
 賀室町殿渡御事此住持者源大納言入道弟也親王之
 御方外戚之間任申請先年被任僧正云々不可然
 事也勸例申入歟於注申例者皆爲山門憤申候弄指
 例也云々當時法花衆繁昌驚耳目者也云々按に長祿
 寛正記にも法華宗の事有しやうにおぼゆ可考合
 (四十五)繼連歌 同卷五月五日條に繼連歌あり續歌に對
 したる名目也續歌も此記中におほく見ゆ
 (四十六)虫拳 俗虫拳とて母指人指小指を配合して
 母指は蟾蜍人指は蛇小指は蜘蛛として相對して勝負
 を争ふ蜘蛛を制し蛇を制し蜘蛛を制す按
 に本草綱目四十二卷の諸蛇の條に蜘蛛甘帶出莊
 子子蜘蛛蟻也帶蛇也陸佃云蟻蟻見大蛇能以氣禁
 之啖其腦眼蟻蟻食蟻蟻食蛇蛇食蟻蟻食物
 畏其天也黑客揮犀云蟻蟻食蛇蛇即張口乃入其
 腹食之云々とあるは似たる事也また蟻蟻を制す
 るは今昔物語の加賀國靜蛇蟻島行人助蛇住島の談
 及東國紀行の江州三上山の蛇が俵藤太を雇ひし談な
 どに引用べき説也
 (四十七)蛇の人の隱門穴中などに入たるを治る方
 本草綱目四十三の卷諸蛇の條に蛇蟠人足淋以熱

尿或沃以熱湯則自解蛇入人竅灸以艾炷或辣
 以椒末則自出自注以艾炷灸蛇尾或割破蛇
 尾塞以椒末即出云々
 (四十八)ポツといふ息を突 俗にポツといふ息を衝
 といへり息衝事は万葉にもよめりポツといふは漢書
 東方朔傳に上令倡盛撈舍人舍人不勝痛呼暴溺
 笑之曰咄口無毛聲警々尻益高云々注服虔曰警音暴
 鄧展曰呼音號箭之聲警音瓜胞之胞師古曰鄧音是也痛
 切而叫呼也與田蚡傳呼報音義皆同一曰鄧音近之
 警自冤痛之聲也舍人榜痛乃呼曰警今人痛甚則稱阿
 に言歩高反是故湖逐韻而訓之云口無毛聲警々也
 云々と見えたる警も田蚡傳の報も同義也
 (四十九)北窓 北窓は書畫のためにと便よきよし
 にて畫工英一蝶は北窓翁と號し書家屋代弘賢は北窓
 に向て平常の居座をとりたり晉書陶潛傳に嘗言夏月虛
 間高臥北窓之下清風颯至自謂羲皇上人云々韓愈詩
 に歲晏偏相憶長謠坐北窓云々李商隱詩に誰向劉伶
 天幕內更當陶令北牕風云々と見え東壁北窓など對
 して用たり草根集冬部に初冬朝「冬やたちむかへる
 窓の北風にけさそなりゆく駒いはゆらし」俊成卿女

集詞書にむかしの北むきのあけほのこともたしい
 まのやうにあはれにてと云々光經集に「山里の窓よ
 り北は雪とちてにほひそうすき春の梅かえ」山里の
 窓より北の竹のはに朝霜むすふ冬は來にけり」雪と
 つる窓より北の梅かえに花をおそしと鶯そなく」拾
 玉集曰文集句題百首に暑月貧家何不有容來唯贈北
 窓風「夏をとふ人やあはれにきても見んむなしくは
 らふ窓の北風」夏臥北窓風「枕席如涼秋」小夜深て
 窓おしあくるうたねの枕涼しき庭の春風」など見
 え此外にもおほかるべし
 (五十)打橋 打橋はかりそめに打渡して別處にも移
 し架らる橋をいふ也移橋の義なるを打橋内階など
 書は借字也神代紀下に亦造打橋云々万葉二に上瀬
 石橋渡下瀬打橋渡云々同四に瀬平廣瀨打橋度須
 云々同上に機瀬木持往而天河打橋度云々同十七に
 可美都瀬爾宇知橋和多之余登瀬爾波宇相橋和多之云
 云源氏桐壺にうちはしわたごのこかしこの道にあ
 やしきわざしつ云々同夕貞にうちはしだつものを
 道にてなんかよひ侍る云々細流抄にきり馬道に板を
 打わたしてかよふ也内階云々一葉抄岷江入楚新釋亦

同目安に打渡したる橋也云々續源語類字抄に廊下に板を打渡しての橋也云々玉小櫛に移橋をつめたる也よのつねの橋はいつも同じ所にかゝりて所をかふることはなきをこれは時々このぞみていつこへも用ある所へもて行て渡すかりそめの橋にてこゝかしこへうつす橋といふ心也こゝは渡殿などの間に横に下を通はんために切れたる所のあるに時にのぞみて渡せる也内橋打橋など注せるはかなはず万葉などに打橋と書るは例の借字なるをや云々枕草紙春曙抄六にはごううちにはしよりもおちぬべし云々など見えたるにておもふべし已上の北窓打橋の二説は黒石侯津輕甲斐守の間に答まらせし也文政十二年八月十一日(五十一)能燈 龍燈の事万物怪異辨断七の卷十五に和漢の書を引て辨論せり此書は長崎人西川如見が作にて刊本也龍火ノ事續高僧傳十ノ廿七丁ウ中陶稿一ノ五十ハノ八丁オ龍

〔押紙〕宋人林景熙が霽山集四の卷辨説に柔兆困敦之歲朔騎歴境所過殺掠數十里無人煙明年秋予舟夜過北塘半醒睡一奴坐舟尾曰何怪也予瞻目視有火青々汗々伍々已而散漫阡陌彌千亘

万直際林麓子曰異哉此燐火也釋文謂人馬之血積而有光其信然與奴熟視浸玩脫草履招之冉冉近舟次復塵使去漸遠希予撫舷歎曰陽鳥西徂万目如漆彼馮託幽昏以恣弄光怪何獨燐也然燐不能近遠人而近遠之者人也晉溫嶠然犀牛渚海族不能遁其形若有呼者曰於君幽明道遠何意相照世未爲無怪也孔氏不語怪道其常而已矣故人失人之常鬼行其怪中國失中國之常夷行其怪怪且不可言而况乎招之以自近也哉

(五十二)倉庫鳴ル 歴史に大藏省倉自鳴などおほく見ゆこれも怪異辨断七の卷十九に論辨したれば閱て知べし

(五十三)佛像汗を流す 佛像汗を流すこと古書所見おほかり高畑不動縁起にも見ゆ怪異辨断六の卷十二に諸證を引て辨じたり爾雅扶輿略記廿五ノ九丁ウ同廿八ノ七丁ウ

(五十四)たまげるたまざる 俗言に肝を消す肝をつぶすたまげるたまざれたなごいふたまげるは魂消る也たまざれるも魂きゆるの訛也草根集秋上枕邊虫「月いとへよるの螢の玉きえし人も枕もふるき世の秋」とよめる玉きえは魂けるたまざれの詞におな

じ

(五十五)敵將をもて我將とす 廿二史劄記十二の卷に陳武帝多用敵將の條あり陳武帝起自寒微數年有天下其將帥自侯安都黃法煥胡穎徐度杜稜吳明徹諸人外其餘功臣皆出於仇敵中者也云々按豐太閣此におなじく大量をもて天下を取りし事速也神祖聖明大量仁愛にして亦大業を建たまへり

(五十六)反語 同書同卷六朝多以反語作識といへる條に自反切之學與途有以反語作識者三國史諸葛恪未被害時民間謠曰諸葛恪蘆葦單衣篋鈎落子何相逢成子開成子開反語石子開也後恪爲孫峻所殺投尸於石子岡晉書孝武紀帝爲清暑殿識者謂清暑反語爲楚聲哀楚之徵也齊書益州向無諸王作鎮宋時有邵頌曰後有王勝意來作此州及齊武帝以始興王鑑爲益州刺史勝意反語爲始興也頌言果驗又文惠太子啓武帝乞東田一作小苑東田反語爲顛童後其子鬱林王即位果以童昏見廢梁武帝削同泰寺後又削大通門以對寺之南取反語以協同泰也遂改年號爲大通以符寺及門名昭明太子時有謠曰鹿子開城門城門開

鹿子鹿子開者反語謂來子哭時太子之長子歡爲南徐州刺史太子薨乃遣人追歡來臨喪故曰來子哭也云々按神武紀に諷辭倒語あり齊明紀推古紀その外國史の童謠に反隱語の類あり無惡善ゆがみもじ牛のつのもじの類また反語に似たるものとすべし

(五十七)度牒 同書十九の卷度牒の條に宋時凡賑荒與役動請度牒數百道濟用其價值鈔一二百貫不等不知細流何所利而買之及觀李德裕傳而知唐以來度牒足重也徐州之節度使王知興奏准在淮泗置壇度人為僧每人納二絹即給牒令回李德裕時爲浙西觀察使奏言江淮之人聞之戶有三丁者必令一丁往落髮意在規避徭役影庇貨產今蘇山渡日過百餘人若不禁止一年之內即當失却六十萬丁矣據此則一得度牒即可免丁錢庇家產因而影射包攬可知此民所以趨之苦驚也然國家售賣度牒雖可得錢而實暗虧丁田之賦則亦何所利哉云々本朝度牒の事に引注すべき條なれば抄出せり

(五十八)文字の忌諱 同書廿六の卷奏檜文字之禍の條に文字之獄起て善類傾陷せるよしを記したり儒者

ともすれば忌諱の文を製て酷吏のために陥らるゝことおほしおそるべし

(五十九)元の世祖日本を犯す 同書卅の卷元の世祖嗜利驥武條に自高麗臣服即招論日本日本不通先平就羅繼而有事於南宋攻襄樊攻活淪以至下江淮降宋主追二王於閩廣先後凡十餘甫訖事又議征日本命阿塔海范文虎忻都洪茶邱等率兵十萬出海颶風破舟文虎等擇舟之堅好者先歸盡棄其兵於山島日本兵來凡蒙古高麗人盡殺謂新附軍爲唐人不得殺而奴之其得脫歸僅于閔等三人帝大怒欲再征日本遣王積翁先往招諭爲舟人殺於途始終不得要領乃止云々按此事太平記に引注すべしまた同書卅四の卷に嘉靖中倭寇之亂の條あり異稱日本傳日本外史等を補べき説也

(六十)利瑪竇并天下四大教 意太理亞の利瑪竇が事蹟除餘考に載すまた廿二史劄記卅四の卷天主教の條に意太理亞國在大西洋中一萬曆中其國人利瑪竇至京師爲萬國全圖言天下有大洲五第一曰亞細亞洲凡百餘國中居其一第二曰歐羅巴洲凡七十餘國而伊太理亞居其一第三曰利米亞洲亦百

餘國第四曰亞米利加洲第五曰墨瓦蠟泥洲而城中大地盡矣大抵歐羅巴諸國悉奉天主教天主耶穌生於女德亞即古大秦國也其國在亞細亞洲之中西行教于歐羅巴其始生在漢哀帝元壽二年庚申一閱一千五百八十一年至萬曆九年利瑪竇始泛海九萬里抵廣州之香山澳其教漸行二十九年入京師以方物獻并貢天主及天主母圖禮部以會典不載大西洋名目駁之帝嘉其遠來假館授餐公卿以下重其人咸與交接利瑪竇安之遂留居不去三十八年卒其年以曆官推算日食多謬五宮正周子愚言大西洋人屢地我態三拔等深明曆法其書有中國所不及者當令採擇遂令地我等同測驗自利瑪竇來後其徒來者益衆有王豐肅陽瑪諸等居南京以其教倡行官民多從之禮部郎中徐如珂惡之奏諸遂回四十六年地我等奏臣與利瑪竇等泛海九萬里觀光上國臣等焚修行道尊奉天主豈有邪謀致隨惡業乞賜寬假帝亦不報而居中國如故崇禎時曆法益舛禮部尙書徐光啓請令其徒羅雅谷湯若望等以其國新法相參較書成即以崇禎元年戊辰曆爲曆元其法視大統曆爲審焉其國人東來者大都聰明特達之士意

專行教不求祿利所著書多華人所未道故一時好異者咸尙之其徒又有龍華民畢方濟艾如略鄧玉函諸人皆歐羅巴國之人也統而論之天下大教四孔教佛教回教天主教也皆生于亞細亞洲而佛教最廣亞細亞洲內如前後藏準噶爾喀爾喀蒙古等部悉奉佛教中國亦佛教盛行亞細亞洲外如西洋之古里錫蘭國榜葛刺國沼納朴兒國南洋之白葛達國占城國賓龍國暹羅國真臘國東洋之日本國琉球國皆奉佛教但明史外又增迦刺國馬八兒國俱有佛鉢舍利見元史亦其餘海外諸蕃則皆奉天主教矣回教亞細亞洲內惟烏什葉羌喀什噶爾和闐郭爾巴達克山控噶爾克食米爾退木爾沙等國奉之見格爾丹外洋則祖法兒國阿丹國忽魯謨斯諸國奉之亦見明史孔教僅中國之地南至交趾東至琉球日本朝鮮而已是佛教所及最廣天主教次之孔教回教又次之孔子集大成立人極凡三綱五常之道無不該備乃其教反不如佛教天主教所及之廣蓋精者惟中州清淑之區始能行習粗者則殊俗異性皆得而範之故教之所被允遠也試觀古帝王所制禮樂刑政亦只就倫常大端導之禁之至于儒者所言身心性命之學原不以概責之庸衆然則天道之

包舉無遺固在人々共見之粗迹而不必深求也哉と云々除餘考にも此事あり清人張潮が昭代叢書廿七に泰西和類思安文思南懷仁が西方要記を收てその卷首の小引にいへらく云也夫泰西之說誠勝于諸教惜乎以天主爲言則其辭不雅馴一流于荒誕摺紳先生難言之苟能置而不談則去吾儒不遠矣とも見ゆ利瑪竇が事蹟明史三百廿六外國傳二見破邪集王教肅犯案二聖朝破邪集六卷二關邪管見錄(像章大司馬羅維德德爾甫著)云海外極西之國有天人利瑪竇號西泰者萬曆初年侍從四五人流入中國云云廣輿記卷一順天府部天主堂在宣武門內西洋利瑪竇航海九萬里入中國神宗命給賜第堂一第左一所製有節平儀一本名二鏡天圖爲測驗根本沙漏用以候時候鐘時自擊龍尾車下水可上以上千星鏡可視小爲大視遠若近皆極工巧云々回教之事七修類稿下因學紀開廿五唐回傳元和初始以摩尼至其法日食飯水茹菓屏淫酷可汗常與共國(何云蓋至子今不絕也)云々此回教也〔押紙〕崇禎曆書二奏疏其二用西法一條に高皇帝嘗得回回曆法稱爲乾方先聖之書令詞臣吳伯宗等與馬沙亦黑同事翻譯至今傳用惜亦年遠漸差萬曆間西洋歸化陪臣利瑪竇等尤精其術四十等年會經部覆推舉今其同伴龍華民鄧玉函二臣見居賜寺一必得其書其法方可比較正訛謬增補闕略蓋其術業既精積驗復久若以大統舊法與之會通歸一則事半功倍矣云々又徐光啓等題疏に臣

等昔年曾遇西洋利瑪竇與之講論天地原始七政
運行併及其形體之大小遠近與夫度數之順逆
疾一々從其所以然處指示確然不易之理較我中
國往籍多所未聞臣等自後每聞交食即以共
法驗之與該監所推算不無異同而大率與天
相合云々

(六十一)彌勒佛下生といひて衆を惑す賊 廿二史劄
記卅の卷彌勒佛謠言の條に順帝至正十一年韓山童倡
言天下大亂彌勒佛下生江淮愚民多信之果寇賊蓋起
遂至國亡然此謠不自至正中起也順帝帝至元
三年汝寧獻所獲捧胡有彌勒佛小旗紫金印量天
尺而泰定帝時又先有息州民趙丑斯郭善慶等倡好
言謂彌勒佛當有天下有司以聞命河南行省鞠
治之是彌勒佛之謠已久播民間矣蓋亂之初起不披
其根株遂至蔓延而不可救皆法令玩弛之所致也
とあり元史の條也彌勒下生と號して衆を惑はせし例
東國通鑑にもあり本朝にも彌勒の名をかりて衆を惑
はせし事歴史に見ゆ爾爾一丁耕

松屋筆記卷之五十七

東都 小山田將曹平與清稿

(一)神と君の名義 井天狗 與清按に神は上の義也上
たるものとして人々の尊敬ゆるの名也虎狼虫蛇の類
にいふもその物のおそろしさに上たるものと崇稱て
心をさるよし也伯頭尹正首守などの長官を加美とい
ふも省察の上座に就て事執人を下官より尊敬て上た
る官人といふ義也君も神の通音にて臣下の人の上と
して奉仕するゆるの稱也公侯の字を支美と訓も義おな
じ然て轉ては己より上とある人を神とも君とも又下
等なる人をも稱譽て君とはいへり遠津神明津神また
皇は神にし坐ばなど歌によめるは貴人を神といへ
る也大君父君母君などは貴人を君といへる也吾菴あ
がきみなどは下等の人にもあれ親て君といへる也歌
に下等の人を君とよみたるは舉盡がたし台記久壽二
年八月廿七日の條に親隆朝臣來語曰所以法皇惡禪
閣及殿下余者先帝崩後人寄帝巫口曰先年人為詛
朕打釘於愛宕護山天公像目故朕目不明遂以早世

法皇聞召其事使人見件像既有其釘即召愛宕
護山住僧問之僧申云五六年之前有夜中七字美
福門院及關白疑入道及左大臣所爲法皇惡之雖難
取信天下道俗所申如此先日成隆朝臣略語此事
今聞兩人說怖畏不少但禪閣及余唯知愛宕護山天
公飛行未知愛宕護山有天公像何況祈請乎蒼天在
上白日照怖々とある天公は山城名勝志九の卷に
縁起云有大杉彌天蟠地天竺大夫日良唐土大夫善
界日本太郎坊榮術太郎各將其眷屬現于大杉之上
有九億四萬餘天狗神頭鬼面被毛戴角と見えし天狗
におなじ天公は天の君と訓べく天の君は天の神と通
へば神通ありて天を飛行するおそろしきものゆゑ天
の君と稱さて字に天公と書き通はして天狗とも書る
より漢土にいふ天狗の事に引合せて牽強の説おこれ
る也萩生茂卿が天狗説服部元喬が高雄山移文小崎節
が假寐友三の卷村瀬之禰が藝苑日沙十二の卷などに
諸説を擧て論じたるも共にひがごと也秋葉山の三尺
坊大山の大小天狗最上寺の道了權現の類みな天を飛
行する神にて其像は神代紀の猿田彦神のさまをまね
び小天狗はすこしさまをかへて金翅鳥王などの形に

おもひよりて作り設たるもの也さて天の狗所見は天狗
の姿保元物語下天狗の顔盛衰記天狗の形参考太平記天狗の
様なる者八の卷天狗山伏参考太平記天狗付十の卷平家物語
八の卷盛衰記廿天狗道盛衰記八の卷参考太平記天狗の法長門本
語十の卷盛衰記天狗根性盛衰記十の卷天狗倒廿七の卷天狗の匂
笑盛衰記廿天狗の乗物参考太平記天狗の落文應仁別記天狗
の栖平家物語二の卷平治物天狗ばけもの七の卷盛衰記十
三の卷天狗保元物語上卷天狗の變化日記十九の卷天狗
の所爲平家物語六の卷盛衰記一 天狗の所行長門本平家物語十
七の卷天狗の兵法参考太平記などおほかり天狗流星とあ
るは應仁別記天狗星にて別也天狗とのみ見えたるは
保元物語上平治物語下平家物語四同五長門本平家物語八に二處同十
一盛衰記三に二所同四同八に二處同十同十三同廿六に三處同廿八參
考太平記二同七應仁略記下吉野拾 擧るに違なし聖財集中卷
道二錄倉大草紙下文正記に二處 天狗は山臥のごとしといひ天狗をよめる歌は吉野
拾遺に見ゆまた天狗波句といへるは誤にて天魔波句
也波句は悪者惡意惡法の義と翻譯名義集二の卷十六
法華經科注二の上卷五丁などに注あり又天狗を狼竇
といふこと續太平記廿三の卷天狗燒に見え今俗もさ
いへりこは狗品の義にて人品に對したる名なるを通
音に俱竇とは書たるなるべし 爾爾字注に人之出乎類者

亦得以神稱國語萬會一聖神子會稱之山註聖神各國之君也君主山川亦得以神稱之云々これ神と君とを以てし通ふ例也同書創聖第三十伏階上字注に高也尊也貴也下之對也云々又稱君者不致直言其君而稱上又太上尊之極也又同尙云々また尙字注に上也崇也貴也云々なご見ゆ大板に高津神が災トアルハ天狗也昔尙五法志中百姓註に天公誅譴汝と有も天神の類也筆澤塵一ノ卷に禮祭法山林川谷丘陵能出雲霧風雨兒怪物皆曰神此方ノ人指シテ天狗ト云但後天狗說の類に同じ

(二)服色の制 本朝服色の制は唐制に据たる也唐の劉餗が隋唐嘉話に舊官人所服唯黃紫二色而已貞觀中始令三品以上服紫五品以上朱六品七品綠八品九品以青焉と見ゆ衣服令に引注すべき説なれば抄出せり

(三)村氣 井田舎漢 隋唐嘉話に薛萬徹尙丹陽公主太宗嘗謂人曰薛駙馬村氣主羞之不與同席數月云々按に村氣は田舎風の事にて俗にヤボモノといふにおなじヤボは藪にて藪澤の人の義也古今にやぶわかねばとよめるやぶもまた隋唐嘉話に李昭徳爲内史婁師徳爲納言相隨入朝婁體肥行緩李願待不即至乃發怒曰巨耐殺人田舎漢婁聞之反徐笑曰師徳不田舎漢更阿誰是云々田舎漢は物語書に「るなかうど」と書たり國語彙編十七ノ五丁ウ方頭

(四)面に唾せらるゝとも不可拭 隋唐嘉話に婁師

徳弟拜代州刺史將行謂之曰吾以不才一位居宰相汝今又得州牧叨據過分一人所嫉也將何以全先人髮膚弟長跪曰自今雖有唾某面者亦不敢言但拭之而已此自勉庶免兄憂師徳曰此道所謂爲我憂也夫前人唾者發于怒也汝今拭之是惡其唾而拭之是逆前人怒也唾不拭將自乾何若笑而受之武后之年竟保其寵祿率是道也と見ゆ遺教經に忍之爲徳慈戒苦行不可及ともあり君子可慎焉國語彙編能改竄後錄一

(五)魚袋 金魚袋は三位以上用之銀魚袋は四品五品用之六位以下は無用之江次第抄に魚夜不寐故事君夙夜匪懈之義金銀以飾高卑也と見ゆ今世の印籠は魚袋の變製也延喜彈正式公式令三代實録貞觀元年四月の條江次第西宮記飾抄次第裝束抄名目抄年中行事秘抄故實拾要裝束圖式など考べし隋唐嘉話に朝儀魚袋之飾唯金銀二等至武后乃改五品以銅中宗反正從舊とへり

(六)禿居士 無位の聖財集中卷十一に剃頭云へドモ心不淨破戒ナレバ經ニ是ヲ禿居士ト云ヘリ決定ノ大賊也云々と見ゆ今の世は禿居士に乏からず

(七)木子息 木娘 木まじめ木やぼなどいふ木の字井土某と云土の字 俗に木子息木娘木真縮木敷などいふ木は徒然草枕草子などに僧を木のはしのやうといへるにおなじ又聖財集下卷二十六に木律僧土真言師荒禪とて三宗を誹たる詞あり此木律僧は木のごとく他をしらざる律僧の事にて木娘木子息の木におなじ土真言師も土百性土一揆などの土におなじ國語無位雜談三律僧同八ノ五丁ウ方頭 石集八ノ九丁ウ方頭

(八)酒壺 酒壺にならんといへる人 万葉三の卷大伴旅人卿歌に「中々に人とあらずは酒壺になりてしかも酒に染なん」と見えたるに吳志孫權傳注に吳書曰鄭泉字文淵陳郡人博學有奇志而性嗜酒其閑居每曰願得美酒滿五百斛船以四時甘脆置兩頭一反覆沒飲之他即任而啖肴膳酒有斗升減隨即益之不亦快乎云々臨卒謂同類曰必葬我陶家之側庶百歲之後化而成土幸見取爲酒壺實獲我心矣とあるは同日の談也水鳥記に地黄坊格次池上底深が酒瓶の事見え兩國廻向院には陶形の石塔有て「かねてよりかくあるへしと思ひしにつひにわか身は徳利となる」とありたり

(九)沈惟敬 沈惟敬が事蹟は懲秘録にくはし胡應麟が筆叢續集の甲乙剩言に沈惟敬以落魄僑寓燕中寓傍有問屋使賣水擔子沈嘉旺居之嘉旺本樂清趙常吉家蒼頭幼爲倭奴所掠載還日本凡十八載泛海而還還復走燕依超無所用之故以賣水自給惟敬暇則時々從嘉旺談夷中情俗雖器什卿語無不了悉會石大司馬經略東事而石龍姬之父袁某恒從惟敬游惟敬日與袁言夷中事若身至之者袁以告石石遂召與相見與語大悅遂奏受游擊將軍奉使日本而有封賞之說矣惟敬妻姓陳名滄如本故倡也惟敬既遠使石每到門慰藉至以沈夫人呼之真可謂能下賤矣第下非其所當下爲可惜耳と見ゆ

(十)廁籌 胡元端が筆叢續集甲乙剩言に廁籌の條あり云有客謂余曰嘗客安平其俗如廁男女皆用瓦礫代紙殊爲嘔穢余笑曰安平晉唐間爲博陵縣爲魯縣人也爲奈何客曰彼大家閨秀當必與俗自異余復笑曰請爲君盡廁中二事北齊文宣帝如廁令楊情執廁籌是皇帝之尊用廁籌而不紙也三藏律部宣律師上廁法又用廁籌是比丘之淨用廁籌而

不用紙觀此則器瓦礫均也不能不爲然要處掩鼻耳客爲噴飯滿案云々與清按に然々は會真記に見え李紳蘇軾などが詩に作りたる美人也然々傳ありて其事跡を記せり今皇國山家の百姓或は厠器を用ひ或は藁屑木草の葉を用て糞を拭ひ甚きにいたりては厠傍に繩を張たるを跨て尻穴を摺拭もありとなん婦女の立小便は田舎に限らず京大阪にもおほかり胡元瑞爲々が尻の糞臭をおもひ出其談北齊主文宣帝南山道宣律師に及ぶ蔡倫紙を製らざる以前は何をもて拭けん布帛などをや用けん娥皇女英妹喜姐己大姜褒姒毛嬙西施鄒姬虞氏薄姬が後門もおぼつかなし衣通姫のおもごもいかなる臭氣しけんと思ひやらるる

爾雅疏林百十三ノ便利部

(十一)春晝 春晝は俗に枕草子といへりそは清少納言犬枕といへるものによりて呼けるにや本朝には古今著聞集に師の房の後家の事を春晝に書し事有にはくなくふり袋法師晝卷など亦古し明人胡應麟が筆叢續集藝林學山四卷春宵秘戲圖の條に徐陵與周公讓書歸來天日得肆間居差有弄玉之俱僂非無孟先之同隱優遊俯仰極素女之經文升降盈虛盡軒皇

之圖勢則宋人晝苑春宵秘戲圖有自來矣張平子樂府素女爲我師天老教軒皇抑又古矣○按漢書藝文志有黃帝養陽方二十六卷堯舜陰道二十三卷容成陰道二十六卷務成子陰道二十三卷湯盤庚陰道二十卷天老雜子陰道二十五卷天一陰道二十四卷三家內房有子方十七卷張衡同聲歌天老教軒皇蓋出于後世房中淫邪之說其來遠矣即仁寶云漢成畫紂踞于屏此春晝所自始也凡房中稱帝王皆假託者然足見其來之遠矣漢已然矣云々明人徐燭が徐氏筆精二の卷詩原部に春晝之設其來久矣張衡詩云解巾粉御列圖陳枕張素女爲我師儀態盈萬方衆夫所希見天老教軒皇儼然閨房秘戲之像徐陵與周公讓書歸來天日得肆間居差有弄玉之俱仙非無孟光之同隱優遊俯仰極素女之經文升降盈虛盡軒皇之圖勢雖復考槃在阿不爲獨宿全用張語至于俯仰升降則通真中之術矣豈曰列圖已哉云々

(十二)鍾馗 胡元瑞筆叢續集藝林學山四の卷に鍾馗馗子考工記曰大圭首終葵注終葵椎也齊人名椎曰終葵蓋言大圭之首似椎爾金石錄晉宋人名以終葵爲名其後訛爲鍾馗俗畫一神像帖於門首執椎

以擊鬼好怪者便傳會說鍾馗能啖鬼畫士又作鍾馗元夕出遊圖又作鍾馗嫁妹圖訛之又訛矣又文又戲作鍾馗傳言鍾馗開元進士明皇夢見命工畫之尤爲無稽按孫遜張說文集有謝賜鍾馗畫表先於開元久矣亦如石敢當本急就章中虛擬人名一本無其人俗立石於門書泰山石敢當文人亦作石敢當傳虛辭戲說也味者相傳久之便謂真有其人矣○又蘇易簡作文房四譜云號州歲貢鍾馗二十枚未幾知鐘馗得號之由也慎按硯以鍾馗一名即考工記終葵大圭之義蓋硯形如大圭爾蘇公豈不讀考工記者蓋亦未之審思精考乎陳心叔曰鍾馗武德中應舉不第觸堦死后見夢明皇曰臣終南進士鍾馗願除天下虛耗之孽事見逸史唐書不載或云北史堯暉字辟邪本名鍾葵馗葵音同見續博物志又按周禮考工記云大圭首終葵注云終葵椎也正韻云葵亦作樑楊子扈言即以鍾馗之訛一本於此似無確據若以字音相同則左傳般人七族有終葵氏爾雅釋草篇有終葵中馗二草名豈可曲引爲證或云鍾馗當作終葵謂六書本義終有窮極畢死之義古文變一作馗集韻馗變遠暉通用製山谷孔叢子所謂土石之恠孽罔兩是也窮治邪鬼故

稱終葵耳此亦意撰也若然則作鍾馗亦可鍾有收聚之義何必改鍾爲終俗繪鍾馗執鬼以衛宅謂府云鍾馗鬼名非也又按孫遜張說文集有謝賜鍾馗畫表則鍾馗之名不始於開元時矣麟按鍾馗之名當起于六朝蓋習俗相傳鬼神名號固有不可致詰者必求其人出處以實之非穿鑿則附會耳楊謂鍾馗傳爲文人戲作最爲卓識其謂大圭之首爲終葵者本以起下文晉宋間人名終葵後因人名而訛爲鍾馗非即以大圭之首爲鍾馗所本也名疑謂無確據而引左傳爾雅以駁之似未深會楊意然楊亦本金石錄堯暉字辟邪之說而堯暉乃北朝元魏人非晉宋人也又暉本名鍾葵而以辟邪爲字辟邪固啖鬼之訛所自出求之鍾葵義了不相關又安知堯暉本名非出于左傳爾雅而出于考工耶凡此類俱荒忽誕憑起自閭閻匪若本諸史傳記志者雖瑣屑隱微有考必得也用修心叔俱以鍾馗不始開元時第據孫遜張說表言余考鍾馗傳明皇因得夢而召吳道子圖其形正與孫張二子同時蓋文士因謝表有之而戲作此傳以爲明皇時也傳中本稱武德進士楊以爲開元亦誤宣和畫譜楊葉傳下稱六

朝古碣有鍾馗字則不但不始開元亦不始武德矣余意鍾馗之說必漢以來有之如神荼鬱壘之屬載記偶亡無從考訂後人但見孫張謝表而戲作此傳世遂以爲開元人不深致辨也畫家鍾馗嫁妹圖亦有因沈氏筆談云歲首畫鍾馗于門不知起自何時皇祐中金陵發冢有石誌乃宋宗慈母鄭夫人宗慈有妹名鍾馗則知鍾馗之設亦遠矣按沈說最似可笑豈有婦人名鍾馗即以爲談鬼之鍾馗耶第六朝人好用佛家語及鬼神名以爲小字或當時已有此畫因以名其女子亦未可知如柳道隆或因其婦人貌陋而以鍾馗名之亦未可知今俗稱女子陋然則存中所引石誌意蓋以鍾馗之名其傳在六朝之前非以婦人名鍾馗即以爲世所畫鍾馗張本也存中負能考訂而此竟欽焉豈亦以無確證耶乃畫家所傳鍾馗嫁妹必因此而論矣蓋亦以鍾馗考北史及魏書暄堯傳暄字辟邪上黨長子人本名鍾堯後賜名暄聰了美容貌以武功至大司農云々然則暄名正作鍾非終也暄以美容貌宗氏以婦人而並得鍾馗之稱可謂枉濫無辜考暄在魏文時而宗慈當梁世其時相去頗不遠因宜爲兄妹耳聞者噴飯大

據按暄本名鍾堯而以辟邪爲字辟邪干暄字義既絕不相蒙干堯義又了不相涉則所謂辟邪何指也金石錄徒見名鍾堯而有辟邪之字便以爲談鬼之說所自起後人求之弗得惟此說僅似可信故靡然從之即不以暄爲鍾馗鮮不以鍾馗之譌本此亡疑余始亦大以爲然及閱事物紀原引沈存中說又取沈說反覆之而意宗妹之名本于鍾馗而得又取魏書反覆之而疑堯暄之字若于鍾馗有連者因豁然大悟曰鍾馗之說蓋自六朝之前固已有之流傳執鬼非一日矣堯暄之本名鍾堯宗氏之妹名鍾馗皆即以鬼神爲名故暄名鍾堯而字辟邪者即取鍾馗能驅邪辟耗之意後人既不得鍾馗出處見暄名鍾堯又有辟邪之字反以世傳鍾馗爲出于此豈不甚乖舛哉余久畜茲疑未能解脫一旦參會群籍不覺洞然信古今事方冊第存亡弗可究也研名鍾馗或如今研上所刻魁斗之形楊以研形如圭當之亦大附會胡不云如椎邪附笑續讀龍舒淨土文有唐人張鍾馗蓋亦借鬼神爲名若堯暄及宗慈妹彼此互證蓋信余所見不誣不爾則鍾馗已見武德開元際豈復襲此人名耶堯暄舊名暄作堯當是音同致訛

不必深辨云々與清按胡元瑞說鍾馗執鬼之說六朝以前有之其圖又古魏之堯暄本名鍾堯宋之宗慈有妹名鍾馗唐之張鍾馗などこれによりて名づけ研上に鍾馗を刻たるをやがて鍾馗といひ草名に蕪葵中馗の二種あるは音の通たるのみなるよし也郎瑛が七修類稿廿三の卷に鍾馗起於明皇之夢唐逸史所載也予嘗讀此史有堯暄本名鍾堯字辟邪意堯字傳訛而捉鬼事起於字也昨見宣和畫譜釋道門云六朝古碣得於墟墓間者上有鍾馗字似非開元時也按此正合其時堯字之訛恐如薛仁貴碑實名禮而傳寫之謬又如十八學士之類歟存疑以俟博古云云趙翼が陔餘叢考卅五の卷にもくはし爾雅天錫詩集士行和季五峰題馬騮鍾馗圖詩に老日無光露露死玉殿味々叫陰鬼亦脚行天踏龍尾倫得得進山秋水終南進士髮指冠絛束帶烏靴赤口淋漓香鬼肝銅聲劍々秋風酸大鬼跳梁小鬼哭豬龍肌嘖黃金屋至今怒氣猶未消舞舞參差勞雙目女名以佛觀觀者佛前類多し

(十四) 人頭鹿鹿頭人人面獸身 佛祖統紀三の上卷三丁に王說偈曰我實人頭鹿汝是鹿頭人以理而爲人不以形爲人云々史記周本紀五丁に山海經曰有人人面獸身名曰犬戎云々秦始皇本紀四丁に人頭畜鳴云々俗に人面獸心といへる字の出處人頭鹿又これに近し(朱世同)爾雅則棄君親臨財則忘仁義者也砂石集五ノ九丁ウ六

(十五) 風鈴 佛祖統紀五の卷丁五十七祖僧法邪舍尊者の傳に父母聞子語即舍出家它時聞風吹殿鈴師問鈴鳴邪風鳴邪舍曰非風非鈴我心鳴耳云々これ風鈴なり義楚六帖にも風鈴の事有

(十六) 佛像流汗 佛像流汗の事私案抄に高幡不動の靈驗を記し其外所見おほかり佛祖統紀六の卷丁四祖天台智者智顓傳に荊州玉泉弟子法優於江都造智者像還至江津像身流汗拭已更出識者謂師色身不異於此也と見ゆ萬物怪異辨談六の卷丁諸説を舉たるを考合すべし

(十七) 最風 俗に「ヒイキヤスル」といふはもと引を延たるにて人を引よしの詞也引立るなどの引におなじ「ひきく」といふを「ヒイキヒイキ」ともいへりさ

るを最負の字を宛ること心得ず品字箋地聲第二地諧最字の注に正韻箋云最負亦九種之一好負重今石碑下之龜趺也一日最負作力貌と見えれば力を入るよしにて牽合せしにや下學集下世三丁*

(十八)歌哥哥の字 古今榮雅抄序末卷三丁に歌とは和國の風なれば和歌といふ也歌の字哥哥の二字ころおなじ正字は歌也定家卿自筆の懷紙に哥の字をかかれたる也云々品字箋和聲第四哥哥字注に古歌字說文哥聲也藝文志哥永言劉禹錫云屈原作九哥皆此哥字今竟作哥弟之哥字矣哥猶兄也云々同歌字の注に說文歌詠也徐曰長其聲以詠之也虞書詩言志歌永言聲依永註心之所謂之志心有所之必形于言故曰詩言志既形于言則必有長短之節故曰歌永言既有長短則必有高下清濁之殊故曰聲依永又毛傳曰曲合于樂曰歌云々謂同上云々(十九)仁に人を某仁といふ義 人を某仁彼仁などいふは古きことにて職原抄などにも見ゆ品字箋新聲第七綸諸人字の注に仁也仁也者人之心也以仁爲心云々又仁字注に孟子曰仁人心也知仁爲人心云々など見ゆ

(廿)蹂躪井闌入 律法曹至要抄貞永式目などの類に蹂躪入の字あり品字箋論聲第十論諸躪字の注に踐踏謂之蹂躪云々又堪聲第十一談諸躪字の注に妄入宮掖曰闌徐曰律所謂闌入也通作闌漢成紀闌入尙方掖門應劭曰無符傳妄入宮曰闌西域傳闌出不禁史記注無符傳出入者皆謂之闌云々同闌字注に又與闌同史記無符傳出入謂之闌漢成帝紀闌入尙方掖門西域傳闌出不禁云々など見ゆ

(廿一)楛 万葉に楛の字を「シモト」とよめるは若木の合字也品字箋騁聲第十五騁諧に楛石榴又謂之楛榴と見えて義別也

(廿二)布袋は彌勒の俗號 布袋の事七福神考にいへり品字箋鼻聲第十六鼻諧勸字注に彌勒將來持世佛名俗傳謂之布袋和尙と有を引べし

(廿三)昭穆 昭穆の事は公事根源國忌の條に昭祧穆祧とありて禮記王制大至の朱子の説を引て集釋に注したりされど品字箋の説をくはしとすべし品字箋敲聲第十八敲諧昭字の注に昭穆廟制本然之序次也孝經註云昭明穆敬也故昭南面穆北面也又決疑要録云父南面曰昭昭明也子北面曰穆穆順也夫以南北言昭穆

者第就大治對饗之昭穆言初未及惟南不北廟制一定之昭穆言也善乎明卿陳氏之考昭穆云昭陽穆陰也陽左而陰右故左昭右穆也有廟制並列之昭穆焉有大治對饗之昭穆焉外此而又有世序分明之昭穆葬位昭然之昭穆祠廟秩然之昭穆錫爵無偏之昭穆與族食不紊之昭穆焉吳氏徵逖曰古者天子七廟周有天下增文武世室共九廟焉七廟者受命之主爲太祖謂之太廟居六廟之中左三而東陽爲昭右三而西爲穆穆其中之廟祖會高爲四親廟高祖之父與高祖之祖稱疎遠矣謂之祧廟祧超也親盡則超而遷之之謂也惟其中之功德非常者於親盡當毀時則別立一廟於昭穆北廊之北百世不毀與太祖同至於廟制皆南向各有門堂寢室而階宇四周故七廟同於都宮則昭常在左穆常在右外自不失其序二世自爲一廟則昭不見穆穆不見昭內復各全其尊然門堂雖南而寢室復東故神主在室中又皆東向此七廟並列至歲終大治將各廟已未祧之諸神主悉延太廟寢室中惟太祖東向自如爲最尊之位羣昭之入乎此者皆列於北廊下而南向羣穆之入乎此者皆列於南廊下而北向南向者取其向明故謂

之昭北向者取其深遠故謂之穆蓋羣廟之列則左爲昭而右爲穆洽祭之位則北爲昭而南爲穆也此大治共奠漢舊儀曰子爲昭孫爲穆昭西面穆東面而春秋傳復繼之曰太王之昭王季之穆文王之昭武王之穆此世序分明周官塚人掌公墓之地先王之葬居中繼世以昭穆爲左右此葬位昭然儀禮曰卒哭之明日以其班而或問之曰二世之主既祧則三世昭而四世穆五世昭而六世穆乎曰不然也昭者常昭而穆者常穆也蓋二世祧則四世遷昭之北廟六世祧昭之南廟矣三世祧則五世遷穆之北廟七世祧穆之南廟矣昭者祧則穆者不遷穆者祧則昭者不動此所以祧必以班而子孫之列亦以爲序之昭穆也禮又曰司士凡祭祀賜爵呼昭穆而進之又祭統凡賜爵昭爲一穆爲一昭與昭齒而穆不得入其行穆與穆齒而昭不得與其列此昭穆無偏大傳曰合族以食序以昭穆而坐位不紊此合族不紊生而賜爵合食死而爲葬爲祧皆以世序之昭穆也而易則廟中之昭穆可知矣云々按此文昭明穆敬也云々父南面曰昭昭明也子北面曰穆穆順也云々昭陽也穆陰也陽左而陰右故左昭右穆也云々東陽爲昭西爲穆陰爲穆云々南向昭北向穆云々など

ありて昭は貴穆これに次り昭は南面東面穆は北面西面也と知べし

(廿四)大の字に點を加て太に作る 太上天皇太皇太后太政大臣などの太の字に點あるは至極の義也品字箋太聲第二十太諧太字注に至極也大而無可復加之謂太如太極太一太初太和之類古無太字今大字即古太字也中古於大内加二點作太後去一存一耳また大字注に古太字今作大小大字矣と見ゆ

韻書 玉篇廿一ノ二丁オ 字典正字通小韻會十九ノ四十丁 龍虎手鑑六ノ十一丁ッ 大内裏考證三ノ上太極殿

(廿五)倭 倭の字延喜式をはじめ古書に多く見えて「タワラ」と訓り「タワラ」は東葉の略語にて葉を束て物を束納るゆるの名也されど「タワラ」は古語ともおもはれねば古くは倭の字を「ツト」「ニヘ」などや訓たりけん可考又倭の字は接の誤なるべし品字箋觀弊第二十四貌諧倭字の注に倭悲廟切倭散也以應得之物而照人分散爲倭云々とあり菴菴類の義なし又接同上又纏縛不開也俗言接住不放云々とあれば接倭同音相似の字にて接に纏縛不開也といへるは今の倭の貌なり 韻書 延喜四時祭式廿二丁ウ樹一倭云々同雜式五丁オ凡公私私進米五斗爲倭仍用三

倭爲歌自餘雜物亦准此云々

(廿六)瓠の音 神樂歌竈殿遊に「トヨヘツヒ御アソヒスラシ久方ノ天ノ河原ユヒサノコエスルヒサノコエスル」又「大原ヤセカキノ清水ヒサコモテ鶏ハ鳴トモアソヒテ行カン」此等ノヒサノコエハ瓠ヲ打鳴シテ歌舞スル也品字箋敲聲第十八詔諧瓠字注に瓠乃八音之一笙十三簧等三十六簧皆列管瓠内施簧管端或作瓠云々と見ゆ瓠の事體源抄杜氏通典文獻通考經籍纂詁など考合すべし

(廿七)碑 本朝立碑の事靈異記に少子部蝶麿が碑文柱あり伊豫風土記に伊佐庭の碑あり今に立碑の説あり今現存のもの多胡建郡那須國造碑多賀城碑佛足石碑の類おほかり袖中抄に靈碑の事を載す品字箋推聲第十九推諧碑字注に初學記碑悲也勸文其上爲往事悲也說文碑豎立也徐曰碑木石之柱古宗廟立之以繫牲者因以祖德紀述其上遂開後世作文勒石之端耳小補云在昔封禪七十二家亦俱勒石俱末名碑即穆天子傳僅云紀跡弁茲石上亦未言碑惟禮祭義曰麗于碑君牽牲入是君之廟有碑也士昏義聘入門當碑揖是士大夫之廟有碑也又識日畧者

以碑爲架空棺槨者以碑繫繩則碑亦不單指石碣故石柱木柱皆可稱碑而喪大記註云天子用大木爲碑謂之豐碑諸侯堅兩木謂之相楹是初學記之以悲訓碑但據後世之勒文紀事言而未原古初之繫牲宗廟耳至近代之以旌德志喜總謂碑文則於悲也之訓又大相刺謬矣云々豐碑の事駭餘叢考にも見ゆ其外所見舉盡すべからず

(廿八)算法の歸除并算盤 算法に歸除の法あり品字箋推聲第十九推諧歸字注に歸除算法也云々同尤聲第四十三尤諧歸字注に算也古無算子止十籌焉故用示爲算字示每示縱橫五籌以計算也又壽算亦云壽籌故增算謂之添籌又計更者爲更籌計酒者爲酒籌云々直指算法統宗二の卷に歸除凡二至九位數多者用此置物爲實以價或分者爲法先將法首對實首呼九歸歌或進或陪後將法次位對所歸數呼九々數除之用乘法還原歌曰惟有歸除法更奇將身歸了次除之有歸若無除數起一還將原數施或遇本歸々不得撞歸之法莫效遲若人識得中間意算學雖深可盡知云々按撞歸法とは見一無除作九一などいふ類也還將原數とは起

一陪一などいふ類也古算器考にも歸除歌括の事見ゆ因云古は算器皆籌を用明の初に珠盤起りしよし古算器考にいへり丹鉛錄八の卷に算法の説あり

(廿九)倭 品字箋和聲第四同諧倭字注に海東日本之人也俗呼海外之諸蠻皆曰倭本音猥詩倭々云云同書推聲第十九推諧倭字注に倭遲回遠之貌小雅周道倭遲又謹貌又順貌又魯宣公名又音窩東海日本倭國唐東蘇傳倭去京師萬四千里其俗多女少男小島五十餘皆自名國而臣附之云々按に舊唐書に倭奴國云云後漢書に倭面上國王師升云々 後漢書東夷傳には倭國王引たるに倭面魏志に倭人國云々などあれば倭は人を指すといへる名也日本紀纂疏三丁ウに舊說吾邦之人初入漢漢人間謂汝國名如何吾答曰謂吾國耶漢人即取吾字之初訓命之曰倭云々といへる説はうけがたしまた倭順之貌故曰倭面國よし同書にあるもいかにぞやこは倭々音とも倭々音ともいふは笑に「アワ」「又「ワイ」「又「ワット笑ふ」などいひ「ワラフ」といふ語も「ワ」といふに「ラヒ」「ラフ」の活語を添たるものと見ゆれば漢土の人いやしめて「ワ」と喚よしの稱にやそは匈奴も匈奴として 暄擾 奴の義南蠻も

南方の蠻々 賦舌の義なるをもおもひ合すべしさ
る音聲をもて名づくるは倭漢おなじくて「ア、ク」
と啼鳥を鷓々ときき「カリ、ク」と啼鳥を雁といふ類
おほかり

(卅) 鋪 井屋鋪風呂敷 宅地を屋敷といふ事平治物語
吾妻鏡などより後の書には所見おほし又屋鋪と書た
るもあり品字箋素聲二十一素諧に鋪小舎也市井有
店鋪二郊野有二遞鋪云々また鋪古鋪字今作平聲鋪
陳也設也云々と見えて鋪と敷と同義なればシキと訓
べし鋪の字を用るはあたれりといふべからずまた
掛字掛畫の類に一鋪二鋪などいふも「一シキ」ニシ
キ」の義也風呂敷は振敷の通音にて振は打とおなじ
ければ打敷なるべし風をこめて火を熾す爐を風爐と
いへばそれに出たる名ともおもはるれどさにはあら
じ 爾爾 盛衰記十ノ十七ウヤシキ 東寺文書抄五ノ十三丁ウ十四丁
には屋敷與の文書あり 新撰大鏡波集卷に「立かすむ里はふるや
の屋しきにて」砂石集六ノ廿一丁ウ屋敷一所云々同ウ同廿一丁ウ家
地又屋敷 東鏡一ノ廿七丁ウ敷地同廿八丁ウ敷地同廿六ノ五丁ウ家
敷田島云々又六丁ウ甲斐國市河屋敷等云々 砂石集七ノ卅二丁ウ家
敷タビテ云々 伊達日記中廿七丁ウ平屋敷
持云々 後院下廿八丁ウ 著問廿ノ四丁ウ
(卅一) 部曲部類 井カキと云詞 日本紀に部曲などの

字を「カキ」とよめり歌垣などの「カキ」も同語と見ゆ
又「ベ」ともメともよめり久米部などの部也「メ」の通
音にて「メ」は「ム」の約也群類をいふ語也品字箋素
聲第二十一附諧部字注に分也屬也界也又總也統也廣
韻署也近代名「六曹」爲「六部」者以其各有「卿貳」統
署諸曹之幾務也又軍伍謂「之部曲」者其爲「伍爲」什
若「佰若」任曲折而上以聽「元戎」之總提也又卷帙謂
一部「者言」必有「總挈」之宏綱「鼓吹」亦謂「之一部」者
以其有「整齊」之法則也と見ゆ
(卅二) 井 磁器に井あり蓋あるを蓋物といひ蓋なき
を「ドンブリ」といへり「ドンブリ」は水中に物を投入
る音より名づけしにて字もさるよしにてかり用ひ
たる也品字箋素聲第三十二罕諧に井音且投物井中
聲と見ゆ

(卅三) 撤 西宮記北山抄江家次第の類家記實錄に物
を取除くことを撤とあり品字箋素聲第三十四類諧撤字
注に除去也經典俱作撤といへり
(卅四) 亡命 井不命命者亡酒 品字箋素聲第三十五令
諧命字注に古命名同音左傳命名之大以從「盈數」史記
作命漢張耳傳亡命遊外黃師古曰命者名也脫「名籍」

逃匿也と見えたるにて亡命の義知べしまた命者亡命
者不命者の三品史記淮南王傳に見ゆ漢書高五王傳に
醉亡酒注師古曰避酒而逃亡云々は酒席を逃る也
(卅五) 道六神 俗に道六神といふは烟燭の類也品字
箋講聲第卅八講諧烟燭字注に烟燭淮南子云狀如三歲
小兒赤黑色赤目長耳美髮左傳註疏烟燭川澤之神也
又國語孔子云山之怪曰「夔夔」水之怪曰「龍罔象」土
之怪曰「羆羊」又世俗相傳其兎身長數丈坐人樓簷而
雙足著地名「烟燭鬼」與「淮南子小兒之說」大不相同
同「姑引」入之「以俟」博雅亦作「烟燭」又作「罔燭」又
作「方良」と見えたるをおもふべし
(卅六) 个枚 延喜式に一人二人を一枚と二枚とあり
又古書に一個二個など書たるおほかり品字箋佐聲第
四十一佐諧个字注に枚也一人曰「一个」左傳昭元年齊
公孫窈卒晏子曰又弱「一个」焉又物數考工記匠人廟門
容「大局」七「个」註每个長三尺云々又箇字注に同上箇
猶枚也木一株謂「之枚」竹一竿謂「之一箇」今物不
レ曰「一枚」即曰「一箇」本此と有にて知べし
(卅七) 錢の幕 品字箋佐聲第四十一備諧幕字注に又
音漫錢背也今俗擲錢爲「博戲」以其陰爲「幕」安息國

以「銀爲」錢錢如「其王面」錢之幕爲「夫人面」漢西域傳
屬賓國錢文爲「騎馬」幕爲「人面」師古曰幕即帳也と見
えたる錢幕は今俗錢の「ナメ」といふこれ也「ナメ」は
波の通音錢背波文あればなり錢幕の事漢書西域傳に
二處見ゆ爾爾 史記大宛傳
(卅八) 謳歌 吾妻鏡に評判風聞の事を謳歌と書たる
處はほかり品字箋尤聲第四十三憂諧謳字注に謳歌皆
吟聲但謳短而歌長耳孟子王豹處於淇而河西善謳綿
駒處於高唐而齊右善歌又謳歌與人吟頌聲孟子謳歌
者不謳謳歌之子而謳謳歌云々と見ゆ
(卅九) 窓字の差別 品字箋皇聲第二十九綱諧窓字注
に牖也釋名在牖曰「牖」在屋曰「窓」在屋天窓也また
牕同「上」亦作「窓」俗作「窓」また「窓」上又音窓窓突
也また「窓」同「窓」以通「明」也總謂「之牖」又音窓窓突也
與「窓」字不同「窓」同「窓」音窓窓云々天窓は今の引窓也窓
突は「ヘツヒ」なり
(四十) 帳 簿牒を帳といへること音書などに見え政
事要略におほく名目を載たり今世俗に大福帳金銀出
入帳などもいへり品字箋創聲第三十創諧帳字注に登
記之簿亦曰「帳」と見ゆ

(四十一) 尚は上配の義尚公主の類 公主を妻を尚といふは上配の義也品字箋削聲第三十仗諸尚字注に尊也妻公主謂之尚言帝王之女尊而尚之不取言妻也漢王吉傳註娶天子之女曰尚公主娶諸侯之女曰承翁主尚承皆卑下之名司馬相如傳卓王孫自以女尚司馬長卿晚師古曰尚上配也義與尚公主同易泰二爻得尚于中行王弼以爲配也見今諸侯に姫君御入與あれば尚して駙馬これを尊敬す養君にし奉る家はさあぬ事也

(四十二) 明暗雙々集 明暗雙々集八卷ありて金石系竹匏土草木と序せり草の卷華林宗珍公安骨碑に惟昔寛永五祀歲次戊辰三月廿六日前大德澤庵叟書于當山曹溪塔下と有金の卷は叶韵辨とて韵學の事を片假名に書著したり石の卷以下は詩文集也寛永の比の事跡を考るに便ある書也

(四十三) 岩船檢校山川檢校 明暗雙々集石の卷に岩船檢校城泉就予聊明心事雖晴却肉眼心眼開一日求授號號曰石田短偈失其義云云々同書竹の卷に山川檢校追悼檢校小齋云々これにて二檢校の時代知べし三絃考に引合すべき説也

(四十四) 久能山 同書土の卷に新久能良辨師之舊基也久能轉舊作新時窮則變通今古來橫谷閑雲不傳底閑梨平素一伽梨また舊久能招提跡廢古來今庭畔荒蕩草日深暗記閑梨行道處風吹森樹誦經音

(四十五) 牛籠天神并梅若塚 同卷に武州牛籠之天神遷宮神體箱之銘處々勸請處々同九重北關八州東壁之一月映衆水信則神明無不通また到木母寺梅若丸墓木母花飛不止枝隅田川白野風悲栽猶有思塚頭樹楊柳條垂恨若絲按に梅若塚は梅花無盡藏廻國雜記謠曲角田川などに見ゆ因に云牛天神は牛籠天神の略語にや私案抄に世田谷若材石天神あり石と牛と近ければ誤れる歟可考

(四十六) 喜多見氏 同書草卷の華林宗珍公安骨碑に本朝四姓系其一者平勝忠即秩次郎重忠裔也世家于武州江戸故以江戸爲氏後遷本州之喜多見郷改以喜多見爲氏矣歸依三寶而請戒名法號乃曰華林宗珍爲其人交而有信周而不比任運當義雖不學文而勝學者雖不識字而勝識人所謂彼雖曰未學吾必謂之學矣者乎難哉生今天下時而頗被信今天下人矣丁此明時下能通

上上能臨下是以爲當家所知已台命此下元和年中

閱河泉攝之郡事兼南北堺之庄務爾來十霜于茲矣獄無訟者街無奸人矧又家々豐年之笑乎个々上世之民也僉曰惡聲不入耳芳名在人言寛永丙寅有詔補任五位延令刺史若州寔規摸于子孫者乎未幾而丁卯冬罹痰水之患而不起夫天下無逆流水一人身無逆上痰雖然搏之激之者氣也過額在山之水不治終以臘月廿六日盡六旬又一命云々下惟昔寛永五祀歲次戊辰三月廿六日前大德澤庵叟書于當山曹溪塔下と見ゆ古今武家盛衰記卅の卷に喜多見若狹守勝重小田原落城の後御家人と成元和四年堺の政所并攝河泉三ヶ國の奉行職に補せられ武州多摩郡喜多見村本知行五百石の上千石御加増あり寛文十二年正月十四日隠居して宗幽と號し嫡子五郎左衛門尉重政に家を譲る重政立身し二万石に増封せられ牧野備州と兩輪の如く出頭し時に逢たりしが親族坪内惣兵衛が所縁にて御勘氣を蒙り桑名城主松平越州のもとへ御預に成て家断絶のよししくはしく記したり(四十七) 大猷院殿の御畫 明暗雙々集木の卷に家光公猷繪の贊あり「石頭舉羽似求雌一隻鴛鴦如公有

思染不成乾墨池上筆端妙處自然姿云々

(四十八) 老生小生先生諸生老先生 品字箋聲聲第四十八聲諸生字注に猶一人也俗稱先生小生猶之老人小人也又先生師也言其道徳問學皆先我而生者也又先生父兄也論語有酒食先生饌又諸生猶言衆學生今呼秀才謂之諸生云々按に先生老先生の稱義野客叢書二十六に見ゆ燕石雜誌に大人先生の差別を論じたり史記儒林傳注に云生者自漢已來儒者皆號生亦先生者省字呼之耳云々

(四十九) 膽寫摸寫 品字箋聲聲第四十八靈譜膽字注に轉抄也依前別寫謂之膽錄云々膽寫は轉寫也見うつし也摸寫はしきうつし也臨寫もおなじ

(五十) 檢子草稿 同書轉聲第四十九轉諸檢字注に今俗謂之文書葉爲檢子云々按に名物六帖にも引たり

(五十一) 寂の字 俗最上の最字を寂に作り古書にもおほく見ゆされど最の古文は歎なるよし字典に載す品字箋註聲第五十序諸寂字注に積也亦與聚通と有て別也

(五十二) 函簿 品字箋譜聲第五十五譜諸函字注に天

子之法從謂之鹵簿者鹵盾簿籍也大駕出則羽林軍士以甲盾居外爲前導其間一應兵仗數目皆記此中故名鹵簿皇后太子皆有之云々按に三代實錄に鹵簿を「ミユキ」と訓たり國語釋義卷六丁ウ

(五十三)花の隱逸花の富貴花の君子 品字箋譜聲第五十五譜諸杜宇の注に周茂叔愛蓮說末云菊花之隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也と見ゆ

(五十四)士進士處士博士居士 品字箋字聲第五十六字諸士字注に儒者之嘉稱也正義士之爲言事也謂其能精道義希聖賢守先待後以修己化民爲事也故其爲字从十从一數之始十數之終以若人者聞一以知十原始以要終身雖寄于農工商賈之先而德已次于公卿大夫之後今時之泥蟠蟻屈他日之爲雨爲霖有士乎云々士乃官之總名故詩云濟濟多士也云々大樂正論造士之秀者升之司馬曰進士云々又有道德而不仕者爲處士超流出品而不見者爲高士又博士庶吉士學士大學士皆官名又黃冠謂之道士羽士又緇衣謂之開士又在冢而誠心精進者謂之居士云々按に士の字處士の字の義學士のために快説といふべし國語釋義卷六丁ウ

(五十五)臣僕の字義 君臣の君はすべて主君に稱す臣は公に仕る人の稱也家臣陪臣をたゞ臣とはいふまじき也僕といふべし品字箋字聲第五十六字諸仕字注に禮運仕于公曰臣仕家曰僕とあるを思ふべし臣は「オミ」とも「ヤッコ」とも訓僕は和名抄に「ツブ子」と訓たりまた古書の訓に「ヤッコ」とよめるもおほし

(五十六)權勢權柄權執 品字箋字聲第五十六勢諸勢字注に説文盛力權也正義力有所乘謂之勢孟子齊人有言曰雖有智慧不如乘勢云々莊子天運篇に親權者不能與人柄云々字典に攝官曰權鼠璞權字唐始用之韓愈權知國子博士三歲爲眞云々又柄權也左傳襄二十三年既有利權又執民柄云々權勢權柄權執などの字義これらにて知べし權謀の字は左傳宣十二年の杜注を考べし

(五十七)世 世といふは人間一生涯にいひ竹の一節の間葦の一節の間などにもいへり又夫婦中の事を伊勢物語に世といひ好色心の付を「よづきてとも」よ心あるおうな「なごもいへりよとは問の義也寄除呼具などの與もおなじく寄は問あるもの、附也除は

間をはなれて除る也呼は間を隔たるを呼也具は二ツあるものをとり合せて具也品字箋字聲第五十六勢諸世字注に一世三十年也論語必世後仁注三十年爲一世又閱歷一生謂之一世又父子相代亦謂一世周紀ト世三十ト年八百又子張問十世注王者易姓受命爲一世又人生斯所謂之人世人世即莊子之所謂人間世也人在世間而無所逃顧處乎人世之間者何如耳と見ゆ史記孝文本紀の論贊に太史公曰孔子言必世然後仁注に孔安國曰三十年曰世如有受命王者三十年仁政乃成云々按此文は論語を引たる也

上二而相逢是也梁三朝伎謂之高組或曰戲繩今謂之踏索焉云々賢愚因緣經十三卷丁ウ婆世蹟緣品に是時國王集諸那羅上幢投窻空中索走如是種々衆多戲事時長者子亦往王邊次應現技上索而走索走既竟云々

松屋筆記卷之五十八

東都 小山田將曹平與清稿

(一)青首の鳥 俗に鳥の雄を青首といへり史記楚世家に三王以戈道徳五覇以戈戰國故秦魏燕趙者麒麟也齊魯韓衛者青首也鄒魯邾邾者羅鷄也云々注に索隱曰小鳥有青首者云々此青首は今の俗語の出處也

(二)共主 史記楚世家に夫弑共主臣世君大國不親云々索隱曰共主世君俱是周自謂也共主言周爲天下共所宗主也世君言周室代々君於天下云々按に共主は足利將軍の如く戰國は武田上杉織田北條毛利尼子などの類にたふべし

(三)家督 史記越世家に陶朱公長男曰家有長子曰家督云々今の世家督といふはこれを出處とす

(四)丈と稱す 今俗人を稱呼して某丈といふは丈人の略也女子などにいふは誤也史記孔子世家注に包氏

曰丈人老人と見ゆ論語の注を引べし刺客傳注を按に丈人は嫗の稱也男には丈夫といふ女にいふもさること也

(五)家老 史記魯周公世家に季平子怒囚臧氏老注に服虔曰老臧氏家之大臣云々衛康叔世家に孔氏之老樂寧問之注に服虔曰家臣稱老問其姓名云々今世諸家の家老といへる名目の出處也

(六)女坂 史記封禪書に從陰道禪於梁父云々陰道は今の神山佛峰の女坂におなじ

(七)趙武靈王胡服を用んとす 史記趙世家に武靈王胡服して周の禮を捨んとせし事あり秦始皇書を焚儒を坑にして聖人の道を絶んとすいづれも左衽の天地自然の道より別に己が道を立んとおもへるもの也聖人の道は聖人の私道也天地の大なるより見れば一小道耳天下の四大教は天主教佛教儒教回教也

(八)雷の大鼓 雷の圖に大鼓を畫くは王充論衡を據とすれど史記樂書に鼓之以鼙鼓と見え佛名に天鼓雷音如來あれば論衡に限べからず

(九)九壘 井闌炭抄十末 唐書百十一の卷王方翼傳

に煉松丸墨爲富家云々丸墨は墨を製る事也今の「タドン」にはあらず湧燼小品にこれを松烟墨の始といへり

(十)氷柱雪車 同百七十六の卷劉又傳に作氷柱雪車二詩出盧全孟郊右云々氷柱は氷て柱のごときにいへり雪車は雪の飛廻る貌をいひたる也

(十一)男子不死 武家の侯家臨終の時必婦人の手を離れて奥より出て近習の士看病す唐書九十九李大亮傳に吾聞男子不死婦人手命屏左右一言終卒と見ゆこれ殺梁傳

(十二)龍寶筵 雅亮裝束抄その外古書に龍寶筵あり唐書卅七地理志に龍鬚席ありこれ同物なるべし龍鬚は莞の類也格知鏡原六十八の卷に委し

(十三)祝髮 祝髮は薙髮也唐書七十六則天傳に使祝髮爲浮屠とあり皇國の書には所見いとおほかり

(十四)婚禮に謠曲をうたふは非禮 晉書禮志下に升平八年臺符問迎皇后大駕應作鼓吹不博士胡訥議臨軒儀注闕無施安鼓吹處所又無舉樂鳴鐘之條太常王彪之以爲婚禮不樂鼓吹亦樂之惣

名云々と見ゆ婚姻の席にて謠をうたふも樂の類なればかしこの禮には叶はず

(十五)長人鹿野武左衛門井闌學 文政十一年の夏肥後國隈本より長人鹿野武左衛門といふもの江戸に來る身長七尺五寸ありといへり又近年蘭學西洋學流行して彼土の器物をもてはやす輩おほかり今年秋九州中國大風波にて人民家船の損失舉盡すべからず冬に成て越後國大地震し五千餘人死亡すといへり蘭學者高橋某不軌を計て禁獄せらる晉書五行志上を按に長人の出るも胡物を玩ぶもよからぬ事のよしかしこには云りされど皇國は神明守護の國なれば憂にたらず

(十六)兩口の銚子片口銚子 兩口の銚子の事は運歩色葉集に大江山酒顛對治の故事を記せり晉書元帝紀に遂爲二極共一口以貯酒焉帝先飲佳者而以

(十七)四文錢小錢 今の四文錢及小錢の名目ははや

(十八)晉書廿六の卷食貨志に元帝過江用孫氏舊錢輕重雜行大者謂之比輪中者謂之四文吳興沈充又鑄小錢謂之沈郎錢と見ゆ

五月三日武州龜井戸村ニ於テ同六月十一日ヨリ通用ス一テ以テ寛永小錢ノ四ニ換ル云々宋洪邁が泉志十三ノ卷ニ水波紋錢顧旭曰太平四文錢背有水波紋者三種並徑一寸重六銖文曰太平百錢大鉢類三前條太平四文錢但製作微爲三環狀而背有水波文耳今世往々有之莫知其始書譜曰水波紋錢大篆隸書三種云々

(十八)さばの飯 俗に飯のはつほをとるをさばのめしといふは佛家より出し事にて禁秘抄にも御さばをとること有鎌倉年中行事に鬼飲とあるは毒味をするにいへり史記田單傳に令城中人食必祭其先祖於庭飛鳥悉翔舞城中下食といへるは今法師のさばの飯を鳥にあたふるがごとし

(十九)紹介井肝煮及取次者 今せわをやくといふ語や古くはきもいるといへり貞徳文集に肝煮と見ゆ史記魯仲連傳に平原君曰勝請爲紹介而見之於先生注に郭璞曰紹介相佑助者索隱曰紹介猶媒介也且禮賓至必因介以傳辭紹繼也介不一人故禮云紹介而傳命云々郭璞が注によれば紹介の字「キモイリ」とも「セワヤキ」とも訓べし索隱に据れば「トリツギ」と訓べし

(廿)炊婦 世に飯焼女といふは炊婦と書べし史記李斯傳に夫以秦之疆大王之賢由竈上廢除足_ハ以滅諸侯成帝業爲天下一統注に索隱曰言秦欲

併天下若炊婦掃除竈上之不淨不足爲難也云々と見ゆ炊は「カシク」と訓む雅言には「カシキメ」といふべし「カシク」は俗に「フカス」といふこれ飯より氣を吹出さしむる心蒸に對たる語也蒸は氣を吹せざる也

(廿一)一切 佛書に一切といふ辭おほく見え古訓に「ツヤ／＼」とよめり「ツヤ／＼」は今俗に「サツハリ」「ケツシテ」などいふにおなじ史記李斯傳に請一切逐客注に索隱曰一切猶一例言盡逐之也言一切者譬若利刀之割一運斤無不斲者解漢書者以一切爲權時義亦未爲得也云々と見ゆ爾雅釋詁四十五ノ廿八

(廿二)歌仙 歌仙の字古今真名序を出處とす史記淮陰侯傳茅坤が評に太史公文仙也李白詩仙也屈原詞賦仙也劉阮酒仙也而韓信兵仙也と見ゆ詩仙に對て歌仙とは書るなるべし

(廿三)稻荷の訓 井荷前 稻荷を「イナリ」と訓は「イナノリ」の略也「ノリ」は實登の義にて其年の稻の登たるをいふ万葉に「東路の荷前の匿」とよめるも朝廷に登先の早穂米を献るをいへり又馬に附る物を「ニ」といふも「ノリ」の約也「ノリ」は騎也荷字は負擔

の義なれど其物を運は人馬の力を用ることおなじきゆるに書る也さて保食神は五穀の神なれば稻を登する神の義にて稻登といひ荷擔の物を仁とも延ては乃利ともいふより稻荷の字をば用し也弘法大師東寺の門前にて稻を荷たる翁に逢しより稻荷大明神と勸請せるよしの説は稻荷の字に就て附會せる也けり又万葉の荷前を荷先にて始て奉る荷物といふも誤也惣テ中ニ揚テ行ク物を荷ともノリともいふ馬にノル舟にノルかごニノルなごも中に居て行ク事也

(廿四)民井蟹の語意 民は多美と訓む田部の義にて田を造る群生也美は女の通音女は部に通ふ海人を阿末と訓も阿は宇那の略末は女と通ひて部也されば海部とも書たる也さて「べ」とも「め」ともいふは「へ」の通音「め」を美に通はしいふ詞也「べ」とも「み」とも「め」も共に群衆の義にて群の約女也故に民は田部海人は海部なり委は余が姓氏録の三宅首の條の注にいひたるを見べし

(廿五)コミアグル井湧五味など云詞 俗に洪水の逆流して水門水口に入を「コミアゲ」と云又人身の嘔逆などにもいへり「コミ」は「コメ」也今まではさもな

き所に隱入る義也仁徳紀十一年十月の條に將防北河之湧以築茨田堤と見ゆ應神紀に湧田皇女云云安閑紀七月に此田者天旱難溉水潦易浸費功極多收獲甚少云々旱魃に乾水し小雨になど浸湧の字を訓るにてもしるべし和訓栞部に耗米を「こみ」といふこみ米ともいへり類聚國史に今或所司斛斗之外更加耗分補則一俵二升已上殺亦斛別五升已上と見ゆといへるコミ米は耗分に餘計を込納る事にて籠の義なれば亦同じ俗に塵芥粉雜の物を五味といひ五味取五味溜五味拂などいふ名ありこれは同語異義にて万葉集七の卷丁に「氏人之譬乃足白君在者今齒與良増木積不成友」同十一の卷十九の卷廿の卷などにも寄子積と訓て塵芥細屑の物の水汀に寄をいへり粉集の義にて細粉小屑の寄集也木積と書るは借字廿の卷なるは假名に許都美と書たり許都美の許を久に通はし美を省て久都といふ屑の字を用るはこれ也都を省て許美ともいふを今俗言に上を濁て五味といへり又庭の植込あり重編應仁記七廿五丁ウに雙岡ヲ木密トシテと有増補下學集木密見ゆ

(廿六)東常胤が東と稱號せるよし井下總國東の庄

千葉常胤が稱號を東と稱し下總國東庄を領せるよしは鎌倉大草紙に見ゆこは印東庄にて印幡郡の東を印東西を印西といふ印東郡の内の庄也佐倉風土記に藥師寺在船形安行基所刻藥師像不詳開基年時有鐘銘曰下總州印東庄八代郷船形藥師寺應長元辛亥年十一月願僧良圓敬白大工沙彌善性とあり此寺の側に成就院といふ寺ありと傳へいへり東鑑に下總國印東庄成就寺領と云々回國雜記の稻穂別當は此藥師寺にや此寺村の文書に別當とのみしるしたり東鑑に印東氏アリ又東氏モアリ千葉ノ一族ニテ印東郡ニ住タラシメ東次郎常義ナドイヒ又同族ニテ東トノミイヘルモゾガチテ知ラシメシタルベシ

(廿七)喜登元年 元親記上卷一宮建立之事の條に抑此一宮ト申ハ喜登元年三月卯日御影向正一位一宮高賀茂大明神ト被現一國一社ノ最上タリ一年中ニ七十五祭有リ其内七月三日ヲ本祭禮トス云々是は土佐國の一宮也一宮記に高賀茂大明神味相託彦根也云々神名帳頭注に土佐風土記曰土佐郡郡家西去四里有土佐高賀茂社其神名爲一言主尊云々神階記に貞觀元年正月廿三日從五位上云々神社啓蒙四の卷にも見ゆこれ都佐神社也元親記上中下三卷あり寛永八年

五月十九日長會我部元親卅三回忌の節高嶋孫右衛門尉正重撰也

(廿八)相撲人小嶋源藏 元親記上卷相撲之事の條に元親卿相撲ノ數奇ニテ毎年國分十七夜ノ會ナドニ近郡ノ取手共ヲヨセトラセテ見物シ給其比泉州小嶋ニ源藏トテ天下一ノ相撲取有リ修行ニ諸國ヲ廻トイヘドモ彼者ノ手ニタル者無レ之トイヘリ云々長六尺二三寸モ可有云々元親の家人久万兵庫ツマ取ラシテコレニ勝タルよし見ゆ

(廿九)吸物井日本三八幡 同卷夢合之事の條に八幡宮ノ神主左近ニ夢ヲ合サセ云々元親卿尤ト喜悅シ玉ヒテ是併左近口ヨリ出ルトハ覺エズ只八幡大菩薩ノ御託宣ト存ル也先祝申サントテ吸物ヲ出シ左近孟ヲ初メ候ヘト宣フ云々神主左近申云々八幡ト云ハ本地彌陀如來衆生濟度ノ御方便深クシテ人民ノ誓ヲ不捨給依之現軍神ニ猶武勇ノ士ヲ守給テ殊ニ當社ハ影向ノ神日本三八幡ノ一社タリ如斯故ニ別當八幡ト棟札ニモ顯シ申云々

(卅)手習講并恭馬術兵法 同書中卷元親卿息達其外家中侍ノ子共ニ藝能被仕付事之條に先城廻ノ子共

ヲ聚メ岡豐ニテ手習講ヲサセ文學ナドサセラル、師匠ハ吸江之眞藏主忍藏主ト云僧云々恭ハ大平捨牛ト云者在京シテ先々恭ニ成テ下ル馬ハ産方休少トテ師ヲスル上手有又信親兵法之事鎗長刀ハ大平市郎右衛門トテ眞道流ノ師ナリ太刀ハ須藤流又伊藤武右衛門トテ精參流相傳之將云々按に信親は元親の男也兵法とは劍術をいへる也劍術ヲ兵法ト云フ平治物語源平盛甲陽軍鑑二ノ廿六丁オ同六ノ十一丁オ後太平記十九ノ十丁オ兵法ツカヒ武具要説下一丁オウ二丁オ宗五大帥子下十四丁ツ

(卅一)眞虫 蝸ヲ「マムシ」といふ和語妙法寺記録に見ゆ元親記中卷一條殿被流條に懷中ノ眞虫トハ是也とあり今俗言に蝸を懷にいれたるやうといふこれ也

(卅二)辨當 いにしへの破子ワリゴを後に辨當ベンタウといへり元親記中卷仙石權兵衛と合戦の條に虎丸城ノ麓ニ父子辨當ヲ遣テ居給フとあり赤鳥隨筆に續武家閑談云木村高教述 信長ノ時迄辨當ト云物ナカリシニ安土ニ於テ始テ出來ス芋頭ホドノ内ニ諸道具納ルトハ僻事ナラントテ信ゼヌ者多カリキ云々按に宗ニか節用集に辨當あれば室町の代の製にて信長よりも以前の物也常山紀談二に信長の時今の辨當といふ物安土より始れ

り其始には小芋ほどの中にいかでいろくの物入られんとて人信せざりきといへり云々圓圖 面桶辨當同物ト筆記三ノ八ニ見ユベントツハ面桶也面桶は飯桶也名物六帖書財箋四庭厨家什門に食具ベントツ名山勝樂記明願珠記食具亦阻子塗云云また飯桶イヒヒツ又メシツギ郷談云々

(卅三)ぬたをこく 俗言に「ノタコク者」ノタコク「ノタル」又「ノサク」ノソクノソウラク者「なごもいふめり元親記下卷大佛殿御材木事之條に内藏助ハ黒茶ノ筒服ヲ著トノ口ノ笠ヲキテ仗ヲツキ川中ノ木ノ上ニ居テ人數ヲ遣付テ居タリ左京進ハ頭巾一ツニテイカニモ輕ゲニ出立弓ヲ持テ川洲ニ被居タリ扱左京進今日何者ニテモアレヌタヲコクモノアラバ一矢モツテ參候ズルト河原ヲ走廻ル云々按に此ヌタコクも同語也堀川百首の歌に「しゝのぬたうつ」とよめるに引注べしのためぬたあへ料理書に見ゆ圓圖 ヌタメノ事軍器考載怒濤(日本紀)節川集運歩色葉沙田之門(也)ノタアヘメタアヘトモ甲陽軍鑑七ノ十九丁オ格にはわたと云云々高忠聞書上十六丁ツに鹿の角にてつくりて三方にわたを殘す云云ぬたあへ三議一統下五丁オ今川大帥子十一丁オ

(卅四)檜楚 檜楚は倭名抄造作具部に漢語抄云檜楚比魯俗用ニ檜會二字今按楚字是也と見ゆ延喜式其外

古書におほく見えて檜木の小割也楚ハ楚割ノ楚にお
 なしく割の心也麻を會といふも又割たるよし也眞
 木裂槍のつまで」など万葉などの古歌により元親
 記下巻鯨進上被申事の條に槍ソヲ籐ニアミ巻包テ
 漕登スルとありて此比までもその名存せりこは槍角
 の事と開の關圖木曾路名所圖會三ノ四十二丁ウ三浦山の條に葉
 いふ俗これを白比槍と名づく云々下學集下卷廿四丁右草木門に槍
 楚ヒソ日本俗呼細木曰槍楚楚作槍非也東寺文書抄九ノ九丁ガ
 (卅五)テンヤ物 今俗賣屋にて買たる物を「テンヤ
 モノ」といへり元親記下巻聚樂ニテ書院中之事の條
 に敷寄屋ノ拂御用意ハ宗益馳走致ス御相伴ハ富田將
 監稻葉兵庫頭藥院也此小路地ニ御茶屋ヲ立テ女二人
 店屋ノ者ニ出立セ置タリ扱ソコヲ御カケ通被成候
 所ヲ此女出合テチト茶屋へ御腰ヲ懸ラレ候へ殿様ト
 申イヤ急候ト宣テ御通被成候所ヲ是非ト申シイダ
 キ入申餅オコシ召レ候へト上ル三人ノ衆モ同前ニ餅
 一ツ宛デンガク一串ヅ、參リ御茶オコシ召ス餅ノ錢
 ヲ被下候ト申ケレバ御腰ノ邊ヨリ金錢一文被下タ
 リ今一人ノ女デンガクノ主ハ此役ニテ御座候是非被
 下候へト二人シテ一文ヅ、コヒトリタリ三人ノ衆
 ハ此主錢過分ノ代也トテ錢ヲ出サズ通ントセラル、

處ヲムリニ取付錢トラデハ通シ申間敷ト申其時三人
 惡錢一文ヅ、被出タリ是ハ都ニテ見馴ヌ錢也扱々
 田舎人カ比與モノ也此錢替テクレヨトムシリ付三人
 ソコヲニグル太閤様ハ見歸リ玉ヒテヤレニガスナニ
 ガスナト宣テ大笑シテ敷寄屋へ御入被成シ也云々
 今いふテンヤ物は店屋物也茶屋は宗牧東國紀行に見
 ゆデンガクは犬筑波集に出たり
 (卅六)あたけ丸の船 元親記下巻高麗陣の條に毛利
 殿ノ日本丸九鬼大隅守ノ大アタケ元親ノ大黒丸此三
 艘ハ山ノ如シト云々あたけ丸の事江戸砂子江戸志な
 どにいひたるを考合すべし武家盛衰記廿九安宅丸ア
 タケとは大船の名也甲陽軍鑑八卷十七品ウ甲州海
 賊衆の事をいへる條に小濱あたけ一艘小舟十五艘
 と有關圖北條五代記七ノ十丁後太平記四十一
 有關圖ノ廿三丁東海道名所記一ノ八丁ガ
 (卅七)だに「さへ」の通ふ例 万葉二の卷下「明日
 香川明日谷左倍將見等念八方」云々此谷一に左倍と
 あるにて通ふ例知べし「だに」だも「でも」と轉りし
 語也左倍は副にて物のそふ心に用る詞なれど又軽く
 「だに」の心に用たるも有りぞ知べし
 (卅八)までと云詞 「まで」は俗言に「ほど」又は「ば

かり」など云心也万葉二の卷下「雷之聲登開麻低」云
 云此外おほし佛足石歌にもおなじ心に用て「ばかり」
 「ほど」などいふ義也同丁ウにも見ゆ可考
 (卅九)坂迎井送坂迎 坂迎の事は余已に擁書漫筆に
 いへり元親記中巻讃州香川殿降參縁邊取組之事の條
 に國分ノ表ニ茶屋ヲ立送坂迎有リ云々同下巻初而上
 洛之事の條に八幡ニテ御旦那上ノ坊御坂迎アリ又山
 崎ニテ與右衛門殿御坂迎又掛迄今井宗久父子御迎ニ
 被參東寺ノ南門ニテ京衆御坂迎致スト云々按に送
 坂迎といふ事もありし也關圖俗說辨
 (四十)ばけ井ほき道 「ほきち」ばけ」などいふ事相
 馬日記にいひたりき元親記上巻阿州大西覺用降參の
 條に阿波境ニ上名ノ橋トテ大木一本ニ割ヲ付打渡タ
 ル橋アリ其ヲ過テ西宇ノホケトテ三里ノ大難所有リ
 云々同中巻一條殿ヲ被流條に豫州ホケ津ト云所へ
 船ニテ送り捨ラレシ也云々
 (四十一)留守をつかふ 俗に客に僞て他行のよしを
 陳を留守を仕といへり史記淮南王傳に召相相至内
 史以レ出爲解云々此以レ出爲解ハ俗ニ出マシテ留守
 デゴザルと云に同じ

(四十二)六道錢 俗死人に錢六文を送りて六道錢と
 いふ古は六文に限る事ならず史記酷吏傳に會人有
 盜發孝文園瘞錢一注に如淳曰瘞埋錢於園陵以送
 死とあり地獄餓鬼畜生修羅人間天道に引あて、六
 文には佛者の定たるものと見ゆ又は六道能化の六地
 藏の賽錢の爲の心にて有べし關圖名物六帖器財三雙
 ドウセン元耐得翁就日錄唐王與師曰漢已來葬者皆有瘞錢是喪葬之
 焚紙錢也於漢世之瘞錢也家禮儀節見氏曰漢以來里俗皆以紙爲
 錢云々精錄ロドウセン古今原始周世宗發明之日金銀錢實再寓以
 形而精錢大如口其印文黃曰泉遠上寶一白曰冥遊亞寶一據此則
 金銀精錢亦始乎
 五代也云々
 (四十三)榮名 人は榮名をもて本意とす史記游俠傳
 に太史公曰諺曰人貌榮名豈有既乎注に徐廣曰人
 以顔狀爲貌者則貌有衰落矣唯用榮名爲飾
 表一則稱譽無極也と見ゆ同書同傳に竊釣者誅竊國
 者侯侯之門仁義存非虛言也今抱學或抱咫尺之
 義久孤於世豈若卑論儕俗與世沈浮而取榮
 名哉ともいへり聖人不凝滯於物而能與世推移
 宜哉逆取順守不無謂也
 (四十四)摺折井掛 格式の書及西宮北山江次第其外
 家記などの公事を記せる所に摺折の字おほく見ゆ史
 記滑稽傳補に西門豹簪筆摺折河立待良久云々注

に正義曰簪筆謂以毛裝簪頭長五寸插在冠前
 爲華言插筆備禮也磬折謂曲體揖之若石磬之
 形曲折也磬一片黑石凡十二片樹在虛上擊之其
 形皆中曲垂兩頭言人腰側傾也とあるにて其義知
 べし釋氏要覽中三丁に揖書云揖如磬折云々爾雅
 六十一卷十一段廿五
 卷ノ廿三段作法故實
 (四十五)屏語 人を物のかけに引て私語をば屏語と
 いふべし史記日者傳補に宋忠見賈誼於殿門外乃相
 引屏語とあり
 (四十六)人は性に据て學べき事非好こそ物の上手な
 れ 史記日者傳補に非其地樹之不生非其意之教
 之不成夫家之教子孫當視其所以好好舍苟生
 活之道因而成之云々と見ゆ「好こそ物の上手なれ」と
 いふ俗語の出處ともいふべし

松屋筆記卷之五十九

東都平與清稿

(一)賀茂の御阿禮 廢錄中より反古とり出たるに誰
 が説なりけん賀茂の御阿禮の説あるを左に書つく賀
 茂みあれの事愚考有之候哉と清太夫へ御尋に付清
 太夫あらまし御答申上候處猶御不審被仰聞御尤に
 存候先ツこれを「ミアラ」とよむべくにやと存候は禮
 の字は「レ」の假名とのみ世人心得居候へどもラの假
 名に用し例万葉中に所々に見え候是は漢音「レイ」な
 れば「レ」の假名はもとよりにて又吳音は「ライ」な
 れば「ラ」の假名にも用べき也さるは阿ら禮松原つぶ
 禮石さ禮石さ禮萩の類の禮はみな「ラ」とよむべ
 き也その訓證万葉四卷考別記に悉く舉おけりざるを
 禮を「レ」とのみ訓來しより「レ」と「ラ」の訓混じた
 る事數多有て和名抄にも混じたる事見えたりしから
 ば是は「みあら」といふべきを中古唱誤りしものなる
 べしさて荒妙和妙を細鹿の心とのみ思ふはまだしき
 也公事に荒和被といふは貞觀儀式に荒世和世の役

あり 荒世和世の世は長をいふ言也日本紀歌に「いくみ 然るは天
 皇の服御もて大御身の長を量りて祓やらふ事とおぼ
 ゆる也この荒和は親疎の心にて和は大御身に親しき
 服御をいひ「あら」は疎の心にて上のきぬをいふなる
 べし疎を「あら」といふ證は万葉に「つくし舟いま
 たも來ねはかねてよりあらふる君を見るかかなし
 さ」とあるは我を疎ぶるをいふ也また祝詞に荒振神
 等とあるも天皇に疎奉る神等をいふ也和は和魂の和
 にて親き心なることは神功紀に見えたる荒魂和魂の
 心にて知べししからは祝詞に見ゆる荒妙和妙も細鹿
 の心にはあらで神の服御の上下をいふなるべし是等
 の事は祝詞追考にいへるを見給へかし延喜式賀茂
 祭の條に下社上社松尾社別阿禮料五色帛各六匹
 下社二匹盛阿禮料宮八合下社三合上社五
 上社四匹盛阿禮料宮八合合井方一尺六寸盛阿禮料明
 櫃四合官物又園神三座祭料荒宮八合又鎮魂祭荒宮
 一合又御袂條荒御服二具料布一段五色薄繩云々は
 じめ「みあれ」の「あら」は荒妙和妙の「あら」にて神の
 服御の上著を奉ることならんと思ひしはあらざりけ
 り右に所引の危宮危御服また三代實錄宣命に賀茂
 齋院を奉らるる事を阿禮鳥等咩止奉給といふことあ

り是等を合せ按に「あら」は明白清淨の言にて明の
 略語也しからは是は吾神宮にて明衣といふものに
 て朝廷にては齋服といひ賀茂にては「みあら」といふ
 なるべし齋院を「アラヲトメ」といふをもて「あら」は
 齋にあたるを知り齋服を伊勢にて明衣といへば
 「あら」は明の略語なる事をしれりさて此祭は神祇令
 云一月齋爲大祀三日齋爲中祀一日齋爲小祀と
 ありて賀茂祭は中祀にて午未申の三日也そのはじめ
 午の日みあれ成べしその日明衣を下上社松尾社に奉
 り神人氏人まで齋服を著ればそれを分配するを「み
 あれひく」とはいふなるべし「ひく」とは今の世杯を
 ひくといふ「ひく」也今猶京にては朝家の官服をはじ
 め下々までこの祭より夏の服にかふるはこれがゆる
 なるべし右に引所の危宮の「あら」は明櫃の明にて明
 白清淨の心又その明櫃の明は韓櫃の韓と同義「あら」
 と「から」のひとつ證なる言は古事記に蛇の韓劔と
 あるを日本紀には蛇の荒正とあり是はもと「アカラ
 マサビ」といふ言なるを古事記には「ア」と「マ」を
 省き日本紀には「カ」と「ヒ」を省るよし也「アカラ」は
 明白清淨の心なるを一轉してよろしき物をいふ褒稱

となれり韓檀唐衣の「カラ」是也此「カラ」といふ言に三種あり「から衣」から玉などの「カラ」は明白清淨の心「アカラ」の略語「からある」「から桃」などの「から」は漢土より渡來し物の稱「から白」「から梶」「から笠」「からさき」の「カラ」は「からくり」の「カラ」にて機發あるものをいふ也此事は日本紀歌解に證例を擧て委く論おけり云々與清按にこは荒木田久老などが説なりけん後に可尋年中行事秘抄賀茂祭條に舊記云略飾走馬取奥山賢木立阿禮悉種々緑色云云上方十二の卷の四十九段にもいへり可考

(一)水向 佛に水向するは關伽といひて佛書に出たなれど史記禮書八丁に尊之上玄尊也注に正義曰皇侃云玄酒水也上古未有酒而始之祭但酌水用之至晚世雖有酒存古禮尙用水代酒也と見えて漢土にも似たることありし也

(三)上方下方左右方 史記滑稽傳褚先生補五丁に附益上方大史公之三章云々これは上文を上方といひたり同書龜策傳補三丁に編于下方云々これは下文の義に用たり又五丁謹連其事於左方云々これは下文を左方といへり右方の字も所見あらば引出べし

佩文韻府陽韻中方字の部に左方に書傳史記龜策傳漢書霍公病傳唐書禮樂志を引たり唐書禮樂志には左曰左方右曰右方と見ゆ下方に史記龜策傳孝經張華鶴鶴賦など引たり漢書評林凡例一丁に鶴之上方云々

(四)屏語 屏風障子などの陰にて私語をば屏語といへり史記日者傳五丁に乃相引屏語とあり物かげに引廻して私語こと也

(五)くぼさくぶさ井かかげ 神代紀に利を「クボサ」とよめりその外にも所見あり「カ」も訓て下野の地名に足利あり「カ」は「カゲ」也俗に「おかげ」を蒙るなどいふにおなじ「君が御かげ」の「かげ」も通音也「カ」は耀にて其人の威光を蒙るが則恩を受る也史記龜策傳補八丁に商賈不強不得其贏とある贏も「クボサ」の通音也「クボサ」は窪キ所に物の溜る義にて「サ」は幸也「サチ」は「サツ」とも活きて「サ」の一言が物を得る事の本語なり

(六)強氣なければ物を成すことあたはず 事に逢て勇氣なき時は勝利成就あることなし余が相識に下野

屋十兵衛といへる請負人あり口能談利害明能察未然而決勝千里之才と見えなれど懶惰の性質にて物の圖を外すこと常也故に貧困にして生涯を送り死して葬具の設もなかりき史記龜策傳補八丁に宋人衛平が元王に對辭を載て曰聖人別其生使無相獲禽獸有牝牡置之山原鳥有雌雄布之林澤有介之蟲置之谿谷故牧人民爲之城郭内經閭術外爲阡陌夫妻男女賦之田宅列其室屋爲之圖籍別其名族立官置吏勸以爵祿衣以桑麻義以五穀耕之耰之鋤之鉏之口得所嗜目得所美身受其利以是觀之非強不至故曰田者不強困倉不盈商賈不強不得其贏婦女不強布帛不精官御不強其勢不成大將不強卒不使令侯王不強沒世無名故云強者事之始也分之理也物之紀也所求於強無不有也とある強の字を思ふべし強は「ツヨシ」とも「ツトム」とも訓べく堪忍身保などの義にも心得べし

(七)禍福有因 史記龜策傳補九宋の元王の語に禍不妄至福不徒來天地合氣以生百財陰陽有分不離四時十有二月日至爲期聖人徹焉身乃無災

明王用之人莫敢欺故云福之至也人自生之禍之至也人自成之禍與福同刑與德雙云々按に積善の家餘慶あり積不善の家餘殃あり臣弑其君子殺其父一朝一夕の事にあらす慎べし恐べし

(八)日かげ月かげ井物の陰かげの馬「日かげ」「月かげ」などの「かげ」は光の事にて耀の通音也上段の「くぼさの條」を考合すべし又物の陰翳を「カゲ」といふは「カギ」の通音にて限る義也「木かげ」「山かげ」などの「かげ」也されば「かげ」と云詞に光と陰との二ツあればおもひわいたむべし又馬毛にかげあり鹿毛の義也

(九)全器は天災に逢 史記龜策傳補十二に物安可全乎天尙不全故世爲屋不成三瓦而陳之以應之天天下有階物不全乃生也注に徐廣曰一云爲屋成欠三瓦而棟之也正義曰言爲屋不成欠三瓦以應天猶陳列而居之云々按に滿則缺之謂也周鼎水を満しめず君子心をとむべし今茲文政十二年三月廿一日巳中刻外神田佐久間町一丁目材木屋尾張屋平兵衛が河岸地より火起て佐久間町一丁目目の河岸なる材木悉く焼失し其火川を隔たる内神田に移り柳橋濱

町靈巖島築地佃島八丁堀新橋にいたり本町石町日本橋鍛冶橋數寄屋橋邊まで縦卅二町横十町の間焼亡せり町名千五町なり但一町の内小名ありて其代地などといふあれば二三名合せて一町の所も有べし其中海賊橋なる牧野家の屋敷にて平日目塗などして用心したる土藏二十七棟焼失ぬ大傳馬町二丁目小津といへる太物店の土藏三千兩の費にて造りしも焼たり三十間掘手の字屋といふ材木屋にて四千兩の費にて成れる土藏も焼失ぬ其外土藏の焼たる數二千六百餘船は大小六十餘艘焼死人凡二千餘人といへりさるに鼠穴或は地震割などある土藏は無恙がおほかりされば全美の器物は天の悪を受る道理なれば心すべきわざになん美服思入指高名通神惡といへるも尤哉

(十)町人の陰惡武家の貧乏 豪富の町人金銀の力をもて諸侯を苦しめ官吏を指揮こと可憎の甚き也されど面に顯れざるわざなれば知人なし大坂の町人諸侯の用達をして其仲間相談し締貸をすること一也そは用達町人に一人借金を返さざる諸侯あれば例の仲間相談して外人は絶て用達せざれば金方の役人又々

せんかたなく舊の用達に託入贈物を費し古借を割振し機嫌をとり笑顔をつくる心中さこそ無念ならめしかれども主君のためなれば武士道も捨て町人の大鼓持をすることゝはなれり又金貨は金貨として商人も大陰惡心ありそは町を治る役人より取入て高官の許にも通じ何の株くれの株と微少の運上冥加を納め大造なる金設を巧み武家にも御出入といふを極め御出入仲間相談して高賣し「カギ」などといふ事をしてたごへば五人にて材木を納るには實は百兩の物を一人は二百兩一人は二百五十兩一人は三百兩一人は二百五兩一人は二百三十兩などゝ相談の入札をし安札の二百兩に命せられても未百兩の益ありそれを本人が三十兩利をとり外の四人は七十兩を分取て武家を欺く也近來或大諸侯の普請に檜五百本餘も入川ありし折御出入の材木屋三人右のカギ法を行ひ利を分たんとし一人は二千兩一人は千八百兩一人は千六百兩位の入札をし掛りの役人にも十分に賄して待たり顔に思ひをりしを重役人の中にて御分家の役人に高直のよし物語せしを御分家の役人さらば余が屋敷の出入の木田屋某に積らせ見んとて木田屋に命じた

りしに七百兩許にて請負べきよしひたればさては大なる益也とて御分家より御本家へ進上の顔にて木田屋に納させられしに木田屋本代は百五十兩にて買出し五百五十兩の得分をして地面を買たりかく本代は百五十兩の物を千六百兩より二千兩に及ぶカギ札入たるは極重惡人なれどかゝりの役人などがよくとり持てしくじりもせずなほ陰惡をたくむりすべて御出入といふもの小役人となれ合主君の爲には甚惡敷もの也小事はともかくも米薪材木衣服は日用の大事なればこれらは問屋仲買御出入は武家のため大に損也かゝる類をば禁じて勝手次第買せば各下直の物をうらんと出精し役人は下直の物を買揚んとはげみて主君のため大利益也三年をまたずして湯錢髮結錢をはじめ賣物大に安くなりて武家大利益いかなる御手傳御用にても差支なくなるべきをと平日嘆息せしに今年大火の後五月晦日までの間は問屋仲買に拘らず田舎より直賣を許し給ひしがば大に便利にて賣買出入の弊風忽に變じて聖賢の御代と歡喜せざるものは一人もなし四月十八日高賣をして禁獄せられし材木屋四軒あり佐久間町一丁目足立屋

某丸太屋彦兵衛鈴木屋與市通船屋敷山本屋次兵衛後家さだ召仕二人也これら欲心に迷ひて人の難を己が幸とし御制禁を蔑如せる惡人也

(十一)著述は千歳の尊榮盛大 漢書總評三丁に方孝孺曰漢數百年間王侯將相多矣司馬遷班固刑餘卑賤之人當世之所戲慢而侮訕者今彼之尊榮盛大咸不能自存一而遷固之言與經訓一並傳語云誠不以富亦祇以異其斯之謂歟云々與清曰立身行道揚名於後世一孝の終とすれども此大名著述ならでは成すことなし司馬遷班固が業實に稱譽すべし

(十二)發明者 今俗才がしごきものを發明ものといへり漢書申屠嘉傳六丁に無所不能發明功名著於世者と見ゆまた利發なども梅川忠兵衛の淨瑠璃の詞にあり利根發明の義なるべし

(十三)木石 人非木石といふ語は白氏文集を出處とす司馬長卿が語にも有しやうにおぼえたれば後に可考注漢書傳十二六丁賛に周昌木強人也注に師古曰言其強質如木石然也見ゆ遊仙窟抄本五卷に心非木石豈忘深恩云々 爾雅七ノ廿丁オ山谷詩集一ノ廿八丁ウ源氏鏡八丁オ談草一ノ四十四丁オ百世夏統傳に此與兒是木人石心也爾雅經疏三ノ廿九丁オ文選四十一司馬子長報に在少卿書身

由^也然而詩繪之凡家貧忽難^得其物^然之間還御
 其後存^{其實}勅定之由^捧美麗詩繪手宮於目上參入
 稱^{御引出物}之由^{而使}北面之周防入道能盛竊誘退
 出了云々昔從^乎陽成花山之狂^未聞^{如此}之事
 法皇又輕々狂亂雖^{不可}勝計^未有^{此程}之事^實
 運之盡給也^{不可}敢云々與清曰後白河法皇かゝる輕
 輕しき御振舞おほかりしゆゑ清盛入道に蔑如せられ
 たやすく院宣を下して表裏猫目の變るがごとくおほ
 し^かば臣下なつくことなく遂に天下を武家の手に
 おとしいれ給ひぬ加之後鳥羽院御短慮におはしまし
 て朝威振はざるはなげかはしき事ならずや
 (廿二)フシャウト、俗語にフシャウトといふは
 不請の字也玉海元曆元年八月廿一日の條に或説云文
 覺頗有^{不請}之氣云々然而取^在獄中之義朝首可
 來之由仰付云々と見ゆ
 (廿三)五節舞の裝束及祿物調度食物 玉海元曆元年
 十一月廿二日の條に五節事畢舞姬已下今夜退出大
 將五節裝束已下櫻祿等注文
 舞姬裝束 丑日
 赤色織物唐衣 濃打柏 裏濃蘇芳柏一領 已上 堀

川大納言入織物裝
 裏濃蘇芳柏一領 青單衣 濃打柏 濃張袴 青色扇
 已上中御門大納言入假裝
 青色唐衣 裾帶比禮 蘇芳末濃裳 已上借^{花山}大
 納言
 午日^{例年辰日也大嘗會畢}
 青摺唐衣 濃打柏 裏濃蘇芳柏一領 青單衣 濃袴
 同染裳 裾帶比禮 青摺裳 已上源中納言入假裝
 日蔭糸羅 古々呂葉 赤紐 已上於^{此殿}新調 七
 尺假裝髮川意之
 童女裝束 丑日二具 八條院名置^{衣笠(件)竹後}
 織物白菊衫^{濃打衣} 裏濃蘇芳柏三領 青單衣
 白表袴^{濃袴} 扇雅賢朝臣
 卯日二具^{院名置赤色織物}
 黃菊衫^{面織} 紅打柏 紫白柏四領 青單衣^{謂之}
 白菊表袴 紅三重打袴 扇公時朝臣
 下仕裝束 丑日余沙汰^{兼光卿爲在}
 梅唐衣立 裏增紅梅袂三領 青單衣 濃打衣 濃袴

村摺裳 釵子在緒 扇定長
 卯日攝政 生絹假裝不
 萌黃唐衣 黃袂四領^{皆同} 濃蘇芳打袂 紅單衣 紅
 張袴 村摺裳 釵子在緒 扇兼定
 打出四具^{保元八具}
 裏絹紅梅袂五領^{入緒五百兩} 濃打衣 濃紅梅單衣
 梅表著 荷荷染唐衣 不出^{袴是故}
 五節雜事^{依略儀無定} 此注文經奏注^{進之}
 一調度 二階 泔坏在^在 薰爐^{在籠} 打亂宮^{每夜入}
 一 脇息
 行事國行 所司重經
 一理髮具 末額 七尺鬘 蒔櫛 彫櫛 上櫛 下櫛
 釵子四^{花釵子} 本結^{紫練糸} 日蔭^{在緒} 心葉二 蘿
 行事國行 所司重經
 一裝束 屏風五帖^{四尺一帖泥} 壁代七帖 几帳八本^在
 三尺一本 茵二枚^{唐錦} 御籠十三間^{母屋四間} 疊十五
 枚^{細網二枚高麗} 領蓮五枚 差蓮卅枚 鏡子十二 燈
 樓四^{在網} 燈臺三本^{在打} 火櫃二口^{在鉢} 炭取二口
 行事以政朝臣 光綱 賴高 兼親 經泰 所司政
 職 侍仲政^{下家司} 久行

一盥具 手洗二口 椽二口 行事
 一舞姬裝束^{色目} 行事經泰 所司政職
 一童女裝束四具^{色目} 行事兼親 經泰 所司重
 經
 一下仕裝束四具^{色目} 行事保行 長俊 所司重
 經
 一打出四具^{色目} 行事賴高 兼時 所司賴重
 一仕丁裝束八具 退紅 襖袴 襖衣 帶 烏帽子
 一祿
 大師 長絹六疋 綿二連^兩 凡絹百疋^{代白布} 白布
 七反^{共女官} 長絹一匹^{執行女} 亂宮一口^{在裏料美} 火櫃
 一口^{在鉢} 炭取一口 紙立菓子十合 雜菓子二百七
 十合 糗料
 理髮 長絹三匹 綿三連^兩 袂一領^{執行} 凡絹卅匹
 代白布 疊三枚^{禮高} 白布一反^{執行} 白布七反^{共女官} 椽
 三反 手洗一具 亂宮一口^{在裏料} 薰物一裹 白物一帖紙
 頰粉一盤 細綿一壺 紙立菓子十合 雜菓子百七十
 合^{七十合共} 糗料米三石
 小師 上絹三匹 綿三連^兩 袂一重^{裏濃蘇芳} 濃袴
 一腰 凡絹卅匹^{代白布} 細美布一匹^{手巾} 美絹四丈^帶

几帳一本在雜料美 手宮一合在納物 屏風一帖唐紙 火桶一口在鉢 炭取一口 疊七枚高禮二枚 燈臺一本籬三 間圓座一枚 費布七反共女官 纒料米二石四斗 紙立菓子十合 雜菓子二百五十合 炭一籠

琴師 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
 閨司 絹二匹 綿十屯 凡絹五匹
 小歌 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
 拍子 絹一匹 綿五屯 凡絹二匹
 今良三人 各綿三屯 信乃布三反
 小舍人二人今度不給之
 一人六丈絹一匹 二人凡絹各
 仕人二人 各布一反 侍貞光
 行事光綱 經泰 侍貞光

朝餉 寅日二位中納言 卯日梅小路中納言 午日新宰相
 中將 各白布五反以絹裏之
 前物 大師左衛門督 理髮右兵衛督
 小歌衝重 右近府藤頭清景
 屯食十具 六府各一具 北陣一具 藏人所小舍人
 二具 進物所膳部一具

大破子十一荷 小歌二荷 脇陣二荷 掃部寮一荷
 主殿寮一荷 內膳司一荷 主水司一荷 朔平門一荷
 和德門一荷 玄輝門一荷

雜菓子 內侍所女官卅合 掃部寮女官廿五合 同
 男官十合 御服所女官廿合 洗女官十合 東童卅合
 御手水女官十合 御匣殿女官十五合 主殿女官廿
 合 御藥女官十五合 御膳宿女官十五合 御湯殿刀
 自十五合 進物所女官廿五合 水司女官十合 御樋
 殿女官十合 小歌女官四十合 大盤所女官卅合 上
 御厨子所十合 上刀自廿五合 命婦十五合 樂殿十
 合 書女官十合 油守十合 主水十合 御門守十合
 女史十合 內膳刀自十五合 采女中廿合 同官人
 中十五合 縫殿女官十合 御井廿合 墨摺十合 闈
 司十合 系所十五合 水取十合 女婦十合 當女十
 合 上御厨子所廿合 御厨人十合 長女十合 御服
 所命婦廿合 下御厨子所十合 御髮上女官廿合 主
 殿十合 女工所十合 婦十合 藏人所五十合 行事
 所小舍人卅合 仕人中廿合 內堅中五十合 官召使
 廿合 木工寮十合 和德門十合 朔平門十合 脇陣
 廿合左右各 縫殿陣十合 內膳十合 六府各十合

一棚 內十荷 院十二荷 上西門院八荷 八條院
 十荷 皇后宮八荷 殿下八荷已上御使 三位殿五荷
 右大臣殿五荷 權大納言五荷 源中納言三荷
 藤中納言三荷 中御門大納言三荷已上內 行事經泰
 所司重經

一櫛 內船院和 八條院火 皇后櫛 殿鏡
 此夜寅午兩夜裏櫛少々被儲于五節所 行事
 國行 兼時 所司重經

一雜事 打覆七間 打出長櫃四合 例長櫃四合
 疊臺四脚 覆蓮卅枚 炭宮籠 油一斗八升 雜饗
 用途高足二脚 籠代 筒木九 針糸
 一貴所御使祿

院 宮内卿經家朝臣 女裝束一襲
 廳官 六丈絹一匹
 八條院 右馬權頭基輔朝臣 女裝束一襲
 廳官 六丈絹一匹
 殿下 兵部權少輔信廣 白襖一領

(廿四)假名狀 玉海元曆二年五月廿日の條に以假
 名狀付定能卿奏院とあり假名狀は假名文をいへ
 る也

(廿五)小兒垂髮并總角 同書文治元年十月七日の條
 に誕生之小兒等利刺髮事禁忌月陰陽等申狀非一仍
 問遺在宣之許當道數聖之中器其披群之上文 申云正三五七
 九十月已上六ヶ二四六八十一十二已上六ヶ仍來月可垂髮
 云々他人慶長時申云十月不忌之十一月忌之他同在
 但晴光云或説不忌霜月云々因茲問在宣之處申
 旨如此仍可用此説先年姫君誕生之時在憲朝臣所
 申同如歟在宣説之故也見ゆ利髮は剃髮の誤なる
 べし産毛を剃るときこゆ垂髮に前髪を垂たる兒を吾
 妻鏡に垂髮と書たり今のワカシの事也さては髮置を
 いへり

(廿六)院分國井小目代 同書文治元年十一月十四日
 の條に梶原代官下向播磨國追出小目代男倉々付
 封了云々件院分國也と見ゆ院分國は仙洞御領國
 也

(廿七)軍役兵糧米井地頭 同十一月廿八日の條に傳
 聞頼朝代官北條九今夜可調經房云々定示重事等
 歟又開伴北條九以下郎從等相分賜觸歟五畿山陰山陽
 南海西海諸國不論庄土分歟可宛催兵糧殿別非
 番兵糧之催惣以可知行田地云々凡非言語之所

及と見ゆ兵糧米段別五升を宛ると吾妻鏡にもあり國には守護を置庄園には地頭を置てこれを取しむる也地頭の事北條九代記遺稿抄十六夜日記殘月抄等を考べし大八幡宮遺稿抄上十四丁太平記ノ一丁ウ同二丁ウ小夜の寢覺七丁オ地頭代砂石七ノ一丁ウ同二丁ウ同二丁ウ同二隨筆に地頭といふものを定しは頼朝公以來事也往古は平に出其國に居る内は兵糧の爲とて知一反に付て米五升づつ武士へ遣したる事也これ地頭のやうなるもの也其後頼朝公惣追捕使に被仰付し時より諸國に地頭を付け置たりこの地頭わかまいたしけるゆゑ多しの公家衆迷惑致鎌倉へ皆訴に出たり右様の大いひを糺さんために西明寺殿諸國修業に出給ひし也云々盛衰記四十六ノ廿三丁ウ地頭守護ノ事

(廿八) 令旨書様 同書文治二年六月十九日の條に令旨書様

正四位下行太皇太后宮亮兼伊豫守源朝臣季長
大藏卿正四位下藤原朝臣宗頼
從四位下行權右中辨平朝臣基親
正五位下守左京權大夫藤原朝臣光綱
民部少輔從五位下兼行和泉守藤原朝臣長房
右被仰備件等人宜爲北政所別當者
文治二年六月十九日
別當大藏卿正四位下藤原朝臣宗頼奉
正六位上行民部少輔安倍朝臣親行
右可爲知家事

右辨官吏生從七位上 季俊
右可爲案主
被仰備件等人宜行北政所事者
年號月日署所 同所

(廿九) 般富門院并門院號の後は仙院に准ず 玉海文治三年六月廿八日の條に此日有院號事 停皇后宮職 法皇第一女有當今 爲般富門院 申刻著東帶參内職 國母之儀 御名亮子 爲般富門院 申刻著東帶參内先 是公卿等參入云々仍以定經仰可定申之由 其間皇宮職可有院號事 何様 此間余候朝餉方良久定經來申 人々定趣 多是宣陽門云々 又般富門宜秋門東二條院等相加云々 其人申 其號 云事職事 不分明之間 慥不 聞及 大略只如此也 余重仰云宣陽門者内裏之中門也 無例如何 又二條者彼宮御領歟 如何歸來云 宣陽門事人々多定申且又陽明門院陽文字吉例也云々 中門之條定經不 二條非 御領 只當時御所願寄 東仍隨 宜所 申出 也大途只宣陽門也云々 即以定經奏 法皇 御大炊 其狀云人々中旨如此愚案宣陽門不 甘心 先院號者用 御所號 也待賢門之時始被用 無故之門號 然而猶是被 准 上東門陽明門等 之儀也 建春門建禮門被用 内裏 是偏新儀也 建春門院雖 吉例 建

禮門不吉也何況於中門者已無例仍被用般富門何難有哉西面已有上西門例其字文無難若猶可被用内裏門者宜秋門宜秋秋字頭雖非吉於后宮者得長秋之號仍女院之號強不可憚歟但猶是不甘心事也可被用門者宮城門可然也二條若又爲御領者東二條尤可然非御領者願以無所據歟所存如此此上可在勅定者暫而歸來云如此事一切不知案内只左右相計可被仰云々雖須重取御氣色已及夜漏又猶不可分明之成敗仍任愚案仰云停皇后宮職可爲般富門院停進屬可爲判官代主典代年爵年官御季御服御封雜物如舊奉宛於内膳御飯者宜從停止者是每度定經向陣仰右大臣余即參大炊御門亭法皇新女 院同居 著 女院御方殿上 以二棟廂南 右大將已下公卿等著之 對座余云々 按に門院號の後は皇后宮職を停め仙洞に准じて進屬等の官人も判官代主典代と改らるゝ也

狀被撰イ當時卅餘人領狀云々仰可奏聞之由云々同建久二年十二月七日の條に宗頼朝臣來云參院奏聞御後殿上人散狀可責隆雅之由有御定云々これ不參の狀を散狀といへる也庭訓往來八月七日に執筆書與問狀奉書於訴人之時及兩度無音者仰使節被下召符就違背散狀者直被下知于訴人令召進之云々抄に散狀とは其狀を物なしにして引やぶりなどするをいふ云々諸抄大成に問狀も召符も投やりちらして違背するをいふと云々同名別義也散狀の圖近代年中行事 細記十一丁オ卅六丁ウ

(卅一) 興福寺金堂及南圓堂再建費賤引綱并音頭取興福寺南圓堂建立の事は遺稿抄に見ゆ玉海文治四年正月廿九日の條に此日興福寺金堂南圓堂棟上也去治 年十二月化灰燼之 後八ヶ年于茲 云々 舉行事左少辨親雅經 庭中一取 綱與 余余已下取之次左近將監式親打 破即余已下 僧俗皆立 座引 綱 舊例 遺引 立柱 以吉日 正立 礎上也 云々 按に工等揚音は音頭取て發聲する也音頭之事 重編應仁記に見えたり文字微明篇に老子曰今夫挽車者前呼邪軒後亦應之此挽車勸力之歌也雖鄭衛胡楚之音不若此之義也興福寺遺稿抄一ノ十三丁ウに 音頭の笛吹出て云々又

十六丁オ倭漢三才圖會十六ノ十八丁オ節用集也部言辭門に遺歌ヤリ
ウタ云々同於部言辭門に音頭カンドウ地蔵發願記十ノ十五丁オ永正
十五年申堂供養記に音頭持鉢自餘持華宮云々音頭取大開記七ノ
十四丁ウ魏志十九ノ廿七丁ウ宗五大卿子上卅九丁ウ一音どうを取
候

(卅二)不時に花さくは災 玉海建久二年九月十七日
の條に有櫻樹華可有臨時奉幣之事云々不時に
華咲は吉事にあらす

(卅三)金銀御幣并男女神體御鏡 同書建久二年十二
月七日松尾行幸事條に戌刻參内依神寶御覽也次
向直廬著表衣衣冠正參上即出御御引直衣著打余候
母屋圓座先是運置神寶等次藏人頭宗頼朝臣參上
覽金銀御幣并御鏡等實殿二所云々而一所ハ金銀帶二御鏡
覽之故無御鏡云々又女林之方ニハ御鏡不付不緒細御鏡是
男林之故無御鏡云々又女林之方ニハ御鏡不付不緒細御鏡是
平緒尤無實然而此社例云々男林方ニハ如例付不緒細御鏡是
覽了云々按に兩宮儀式帳に弓劍鏡など神體の宮社お

ほく見ゆ可考合二國語人車記嘉應元十二ノ四ノ條今朝入道殿
獻金銀幣云々御幣今昔十四ノ三語本朝世記十九久安五ノ八ノ廿
條同廿二の條金銀御幣御鏡神林本書七ノ十一百續抄十四ノ廿丁ウ金銀
幣白妙幣又卅一丁ウ寶石類書五
ノ一丁オ宇治殿高野詣記二丁ウ

(卅四)文杖 玉海建久四年正月廿五日の條に文杖事
寛治天永用官文杖是非除目當日兼日有吉書除
目申文之時用藏人所文指也寛仁如今度當日覽吉
書然而文杖事無所見今度如何之由豫宗頼朝臣示

之余任吉例於吉書者用官文杖有何事一哉而
申文之時又用官文杖之由無所見日内事用兩方
杖之條理不可然於今度者兼日用意藏人方杖用
兩方尤可然且是元永記忘却不造杖之由記之存
之者仍用藏人所杖也云々按に江次第賭射籍に書
杖云々同國忌籍に白木書杖云々年中行事に内辨文杖
を持て東階をのぼりて云々又云すべて白き杖は御帳
のうしろにおく返すべからざる故也黒き杖はひがし
にそへておくやがて返し下すべきが故也云々名目抄
雜物篇に文杖有黑白依云々など所見おほかり

松屋筆記卷之六十

東都 平與清文備稿

(一)弓の製 弓の製往古の梛弓は梛木もて作りけん
「マユミ」は白弓にて白木の弓なり白を「マ」といふよ
しは白土などの類也又「マ」を「シラ」ともいへり白楳
白膏の類也梓弓梛弓は梓をもて作り梛をもて作れる
也梓は今の木さぐげにや梛は「ケヤキ」の事也史記田
敬仲完傳八丁 注に言作弓之法以膠被昔幹而納
諸槩中是猶以勢令入合也と見ゆ古來ぬり弓もあ
りける也

(二)三日の禮 今世朔日十五日廿八日を三日の禮と
稱して朝賀せり朔望の禮は史漢などに見えてかの國
によれる也廿八日の禮は所見なし俗歌に廿八日の禮
をよめる「正二四盆ト暮トニ禮ヲウケ」といへり正
月二月四月七月十二月の廿八日ならでは將軍家朝賀
をうけ給はず然るを下さまにて毎月朔望廿八日に賀
禮を行ふはたがへるが如し 國語類聚十の下卷に今朔望の
禮をありこれは大權現岡崎御居城の時御家出廿八日主君官長を賀す
しゆゑ朝道場へ参詣し上下のついでにて御機嫌を伺ひけるよりなり

さなく禮式さなり
けるとなん云々

(三)弘安板本三大部 弘安板本の三大部あり輔行第
六末卷の奥書に弘安四年十二月廿一日書寫畢阿闍梨
頼慶とあり文句四の卷の奥書に弘安七年六月十七日
宋了一敬書とありこれは宋の了一といへる僧歎止觀
五の卷奥書に弘安四年六月三日執筆嚴成奥弟子嚴尋
終功矣願主權大僧都承詮とあり以上はいづれも板刻
の字也別に應永十二年二月十日以如來藏第三點本朱
墨同寫之詮運正長第二曆西林鐘上五天尋寫右古
點一而已忠宴「教行坊日曦」とあり大倭綴にて標紙は
紺紙也紙は古製の書籍紙にて例の如く兩面に摺たり
綴目の小口は紺のしけ絹をもて袋綴にすこれに限ら
ず聖德太子の勝鬘經の注本の板本も目黒長宗律院に
藏したるを見しに七百餘年の古製なりき走湯山縁起
に刊本の沙汰もあれば本朝板刻の起りはや古きこ
となり

(四)「きく」は耳に開口に味鼻に嗅にいふ 弘安板正
觀輔行傳弘決卷第六末卷に正長二年古點を寫したる
に象聞血氣狂醉倍常とあり此外聞の字をカグと
よみたる所まゝあり楞嚴經詩注疏などに香にきくと

いふと見え易牙開味ともいひ眞名伊勢物語に聞き
 くどよめり口語にも目き口き手きの類一身に
 就て其主る用のよきをもいへる也と和訓栞にいへり
 願キヨシメスシロシメスキヨシナスナドノメスモチ
モ腹心ニ受納ルト云今昔十四ノ四十一同十七ノ卅三同
 十九ノ八語ニハ聞ノ字チカケトヨメリ同卅ノ一語丁子
 ノ香早ウ聞ニ云々又聞ケハ覽スキ黒方ノ香ニテ有リ

(五)倭語倭言 倭語といひ「やまご」とば「やまご」と
 のは「なご」といふは常の事なれど將門記に莞爾者倭言
 都波惠牟也ホ、エムもおなじ云々源治者倭言與呂古
 布など所見おほかり

(六)奉公 漢書張湯傳に趙禹志在奉公一孤立而湯舞
 智以御人云々同李尋傳に君德盛明大臣奉公云々
 などあるを奉公の字の出處とす願作股中
 奉公云々後漢書呂強傳に爲人清忠奉公云々また小黃門甘陵吳仇
 善爲風角博達有奉公稱云々服闋策八卷廿八丁オ韓王爲に冷向
 謂韓王曰云々強忍得入而
 徳公必以強忍奉公矣

(七)下名 玉海文治三年十二月八日の條に此日下名
 也以定經條々奏院可任之者注折帝加封進上
 之又昨日所被仰合之衛府督之間事書副愚札付
 定經依秘事也乘燭歸來任御定更注折紙下給
 定經於前即定經參陣了除目内覽可免之由仰之上

卿源中納言云々故基輔息少男申任兵衛佐了過分
 之朝恩也但此事不可爲非據之由在之由年十四
 歲頗雖早速重家任武衛經家十二歲任金吾云
 職云年其例不外求祖父頼輔入道無三品之運早
 以通世親父基輔不任諸衛佐空以歸泉彼兩人於家
 奉公超等倫當此時舉任少男施父祖之面目勵
 傍輩之節者也抑宗國任少將即申任其闕之條頗
 憚人口仍明春可被任武衛之由申法皇勅報之
 趣本懷已足今度拜任不可有其難置闕待明春
 者自障難出來歟云々仍今夜任了云々按下名の事實
 石類書卅一の卷に北山備忘略記山槐記安元年七月
 日を引ていへり

(八)火葬 火葬の事續日本紀に道眼より始よし見ゆ
 玉海文治四年二月廿八日の條に此日内府葬送也堂
 與葬場其間可謂咫尺仍每事有便宜云々用火
 葬之儀内府平生之時常曰火葬有功德土葬不甘
 心云々余父存此旨仍用火儀也不用薪用藥也
 是近代之意巧第一之上計云々按葬送式葬法密釋氏要
 覽火葬土葬の説可考合

之經所來問之字佐宮黃金事注折紙今日送之文
 書等返遣了件折紙狀如此

字佐宮黃金可被奉納石清水外資殿間事
 外記勘申旨先規雖不詳准據粗有例任件等之趣
 可被計行歟八幡聖御宮事尤雖是准據彼者新造
 之器也是者擬御體之神寶也尊崇之儀輕重不詳歟
 神祇官供奉并可被行大板之條頼業勘奏尤可被
 據用歟可被新造宮并辛櫃之趣師尙申狀又以不
 可及異儀歟但黃金本納香爐宮云々其體暗難
 知被尋本宮之條忽不可叶仍只追黃金之寸法
 先新造其宮可被納辛櫃也抑八幡聖御宮破損之
 時度々有奉幣今度之事爲新儀奉納之奉幣以前
 先可被告中歟但彼例依公卿之議設新造之宮
 沙汰之趣神慮難測破損之條非無其恐仍旁所被
 告謝也於今度者被行御卜了官寮共申最吉之
 由神告之條已無疑殆加之件黃金事達天聽之後
 依世上之騷亂有沙汰之權意適事定議決者雖一
 日早速可被奉遣也於良平之住宅送若干之日
 月深以有其恐之故也而有再三之奉幣者定爲
 遲緩之因緣歟仍雖兼日之使豫定其日殊仰宮

寺令致祈請歲内被念奉納自叶神慮者歟奉
 送本宮之儀退可有議定凡彼宮之濫行我朝之重事
 也先日被尋問之時粗言上旨趣了勘諸道訪群
 議殊可有其沙汰也云々

(十)坐喰すれば山も盡る 小説精言一の卷
 山空立喫地陷咽喉深似海日月快如梭
 云々人々此事をよく思惟して勤べし勤に貧乏追
 付すといふ俗語さると也

(十一)をか目八目 俗に碁の盤をワカメ八目といへ
 り按に外目八目を詛れる也堀川百首の岡見の歌など
 引ていふはひがごと也小説精言一の卷
 傍人觀看常言傍觀者清當局者迷尙或傍觀的口嘴不
 緊遇怒着處溜出半句話來麻者反輸輸者反贏云
 云とも見ゆされば「ワカメ」は傍觀と書べし八目は聰
 聰をたどへて八耳皇子ともいふが如く明見を八目と
 いひたる也傍觀八目と書てワカメハチモクと訓べし
 瑤囊抄を考合す願文海披沙三ノ二丁ウ太平記卅九ノ
 一丁ウ見南集四ノ十七丁オに長齋
 と俗に云しを其時おしひれたり云々
 (十二)酒の「かん」の字瑤囊抄屠龍工隨筆下卷など
 ハトリ

に論じたり小説精言四の巻廿に討ト一一壺上好酒コキ盪得ト濃熱云々又云茶甌ト一雨甌ト到也爽利朱氏取ト了茶甌ト守着要ト掛陳小官人ト慢着待ト我自掛ト我不喜ト小菜ト有菓子ト討些來ト下酒云々盪は酒のカンをする事也茶甌はチャワン也下酒は酒肴也國語五ノ六十二則可考昔昔羊房傳二下ウに厨炭和作ト飲形以温酒云云白氏文集林間燒酒ト紅葉ト晋書ト裴秀傳六丁ウに服ト寒食散ト飲熱酒而飲ト酒ト始七年ト魏云々魏書七の卷八丁ウにト寒食散温酒の條に宋季參政相公ト於於ト抗將ト求ト一容觀ト才藝兼全之姿ト經旬餘未嘗ト廢ト宿留ト試之及執事初甚熱次略寒三度微温公方飲既而每日並如初之第三次公喜遂納焉云々とあり

(十三)伊豆駿河古は木瀬川を界とす 玉海元暦元年八月廿一日の條に此日定能卿來傳聞頼朝出ト鎌倉城ト來ト著木瀬川ト之間云々 邊ト暫逗留進ト飛脚ト申云已所ト上洛仕ト也但ひきはりても不ト令ト上洛ト候也云々伊豆志ト一の疆域部に西北ハ大瀨瀧溪ト二溪茶島ト村上ヘニテ合流シ以下ヲ界川ト云幸原村ヲ經テ三島ノ千貫樋下ヲ過ギ長伏ト村ニシテ狩野川ニ注グマデ駿州駿東郡ト凡テ此川ヲ界別トスサレドモ近世幸原ニ水盡ク東ニ決レ西南方千貫樋迄水枯竭スレ仍舊古水通トヲ界トス長伏ヨリハ狩野川界タリ江間村ニ至テハ駿州大平村口野村トノ間連山岡脊界也海濱ハ重寺村

ト駿州口野村ノ間ニ犬潛ト云處ヲ分界トス云々又の部ト駿州駿東郡廿八村餘モト伊豆ノ地也如此ナレバ狩野黃瀬ノ二水北ハ官道ヲ以テ州界トス地形宜ク疆域分明也云々按今は駿豆の二國三島の西千貫樋の川をもて界とすれど古は木瀬川を界とせり伊豆志ト一の條に鏡ト作泉水二郷分置ノ時伊豆ニ屬シ延喜ノ郡ト駿河ニ屬シ北條氏割取シテ伊豆トシ駿河亞相駿城ニ在ト時庖厨料トシ復駿河トナルと見ゆ

(十四)武藏國乘瀧驛 續日本紀廿九の卷六丁神護景雲二年三月の條に下總國井上浮島河曲三驛武藏國乘瀧豐島二驛承ト山海兩路ト使命繁多ト乞准ト中路ト置ト馬十匹ト奉ト勅依ト奏其餘道春米諸國糧料亦准ト東海道ト施行云々 按に武藏乘瀧はアマママと訓べし令義解に剩田公田也と見え剩乘相通じて餘の字の義也されば餘瀧の義と見ゆ足立郡大宮宿の東に上天沼下天沼村ありこれいにしへの乘瀧也見沼につぎて沼邊の地なれど今は新田となれり高鼻村その北鄰也和名抄に足立郡餘戸郷あり餘戸は「アマリベ」と訓は證なれば「アマ」と訓べくや安間などいふ地名も「アマ」にて實は餘戸なるを安間と書るより「アンマ」とは呼る

なるべしされば乘瀧も餘戸の郷にて沼あるより乘瀧とはいへりと見ゆ

(十五)ベラ坊 大日本王代記寛文十二年の條にべらぼうと云うまれぞこなひ京江戸大坂の芝居にて見せると有今俗ベラボウといふ詞はこれに出る也

(十六)羅切 今俗語に隱莖を断を羅切といへり摩羅を切の略語にていかにも拙劣の詞と思ひしに皇帝紀抄承元元年の條に法然房專修念佛を進るゆゑト羅切取上人等ト或被ト切ト羅ト或被ト禁ト其身トとあり切羅とは摩羅を切事にて今の俗語の出處也

(十七)蓮の一莖二華は災殃の前表 蓮華に一莖二華あるを吉事とおもへるは誤也皇帝紀抄七の卷高倉院治承三年の條に七月之比法勝寺池一莖二華蓮華開敷洛外洛中視者如ト堵天下災殃前表何事如ト之哉被ト召ト諸道勤文ト之處毎事勤ト申不快之由云々とあり日本紀にも一莖二華の蓮あり追て可ト考注ト國語ト東大寺聖徳少僧都清海傳に長和三年六月十三日已越大佛殿前庭生蓮三莖惟ト一家召ト陰陽寮ト占ト惟兆有ト万兵火事之驚ト丑未年人有ト病患ト避ト其所ト歎云云

(十八)鷹司殿隅田川の歌 近頃鷹司關白殿下日光山にまうでさせ給ふを江戶に御逗留ありし廿七日隅

田川にて「はる／＼とこひこし我をまたてちる堤の花の心みしかさ」木母寺にて「古塚のむかしをさへは白川の花にはなれし人の傍」云々花にはなれしは花には馴し歎花に離し歎可ト尋人のいふまゝにこゝにしるしつ

(十九)佛像不用膠井御衣木 玉海養和二年養永元年六月四日の條に此日奉レ始一尺三寸十一面像ト智詮阿闍梨加ト持御衣木ト此佛如法可レ奉レ造仍佛師授ト五戒ト以ト柏木可レ奉レ造不可レ加膠又不可レ押薄并彩色是依ト近日之夢ト所レ奉レ造也殊以ト有ト存旨ト如法可レ造立ト即於ト智詮壇所ト每日受戒滿ト咒遍ト來十三日可レ奉レ造出ト也勸ト進家中男女ト給ト其料物是又爲ト先化他ト也即以ト結緣衆名帳ト可レ奉レ籠ト尊像之中ト也云云按に御衣木の事古書所見おほし吾妻鏡百練抄などにも見ゆ國語下學集ト卷十九ト右器財門トに御衣木トミツキト逆ト佛材木也

(廿)沽價法 玉海治承三年七月廿五日條に頭中將通親朝臣送ト書於基輔ト云万物沽價法可レ令ト定申ト者其狀如ト此

近日万物沽價殊以違ト法非ト唯市人之背ト法殆及ト州民之訴訟云々寛和延久之聖代被レ定ト其法云々隨去

保延四年且用中古之制且任延久之符宜遵行之由重被宣下云々今度猶可被用法歟將又驅騁推移時俗難隨者新可被定下哉就中錢之直法還背皇憲雖宜停止漢家日域以之為祥私鑄錢之外交易之條可被寬宥歟其法可用寬和沽價之准直歟又可依諸國當時之濟例歟將新可被定下歟此等之趣殊可令計申給者依天氣言上如件以此旨且可令披露給候通親恐惶謹言

七月廿五日

右中將通親上

進上 美作守殿

禮紙狀也

退言上

參入言上之間且為御不審内々所申上所也於今申給之趣者企參入可承候以此旨可令申上給候恐惶謹言

請文案如此

萬物沽價法可被定下事可令計申之由謹以承候了抑如此事以短慮輒難定申歟去年被下制符之時此事存為朝家要須之由尤可被定下其法之旨言上許也於其上之子細者愚意

暗難及歟先被仰法家及官底使廳等止令注子細之後可及議奏歟且以此等之趣可被洩奏狀如件

七月廿五日

右大臣

此事晴不能注進價也代々使廳之沙汰也先法家勘申本條并使廳官底止雖進度々制府且勘申當時官行事所及藏人所色代檢納之制諸國濟例等斟酌彼是且問有識且及評議可被定下事也凡我朝衰弊只在此事仍去年雖令注申歟制之中不被載此事不叶時議歟之由令存之間令有此沙汰尤可謂善政歟始終之沙汰能可被計行事也凡此貫首方事札篤法申行云々可謂賢云々但遇法歟

(廿一)「志」「せし」の差別 「まし」と「せし」といふ詞常におもひまがふゆりこは必差別ある詞にて相通ふものからおなじからずと知べし富士谷成章があゆひ抄五ノ十に「ちらし」「すぐし」など靡なき詞なれば「ちらせし」「すぐせし」などよむべからず「見せし」「きかせし」などもおなじやうにおもへる人もあればいふ也云々又云「し」は俗に「シタ」といふ心「させし」は「サセマイ」といふ心也云々木居宣長が玉

後四十に「おはしました」「なごいふべきを」おはしましたし「といふはわろしすべて「坐し」は皆「まし」といふ例にて「ませし」は俗也云々與清曰「あれまし」を「生ませし」とはいはず「まろしめし」を「まろしめせし」ともいはず又「せしかども」を「し」かども「とはいはず「せしまに」を「しまに」ともいはず此等の類必別也又「くだし」を「出がてにせしを」といふはおなじ語勢ながら通はしては用がたし都て上よりつづく詞には「まし」といひつゝかぬ詞に「せし」といふと心得べしつづく詞に「せし」といふはみな後の誤也「やすみし」「生まし」「まろしめし」「たし」「いであまし」「作らし」「いまし」「下し」「散し」「くらし」「かへし」「なご上よりつづく詞みな「し」といへり「せしかども」「せしやうにし」「せしみそぎ」「みゆきせし時」「せしまに」「出がてにせし」など上よりつゝかぬ時は皆「せし」といへりかれば「おはしました」「を」「おはしましたし」「おはし」「を」「おはせし」「見そなはし」「を」「見そなはせ

し「なごいふは誤なり令御坐為御坐令見給為見給など文字に譯して御坐令とはいはるれど御坐令為とはいはれず御坐為といふを御坐為といはるるなどおもふべしすべて「せ」は令也仰する詞也「し」は為也為と也と知て活用の味をささるべしされど「おこせし」といふ詞ありおこすは令送來義送是等は後に考へ定むべし

○おこせし云詞 新勅撰雜四能因「よそにのみ思ひおこせしつくはねの峯のまら雪今日見つるかな」玉葉春上和泉式部「見るほどにちらはちるらん梅の花しつ心なくおもひおこせし」同雜一為家「ふみわけて今日こそ見つれ都よりおもひおこせし山のまら雪」

○せしと云詞 万葉三十八歌思辭思為師云々同十四廿丁に安可胡麻我可度氏乎思都々伊底可天爾世之乎見多氏思伊能兒良波母伊勢物語十八丁に「花にあかぬなけきはいつもせしかとも今日のこよひににる時はなし又下六このおうなのせしやうにまのびてたりて云々又下八戀せしと見たらし川にせしみそき神はうけすも成にけるかな」又下十六三條のおほみゆ

きせし時紀の國の千里の濱にありけるいとおもしろ
き石奉れりき云々古今春下小町「花のいろはうつり
にけりな徒にわか身世にふるなめせし間に」同戀
五遍昭「わかやとは道もなきまであれにけりつれな
き人をまつとせし間に」後撰夏よみ人玄らず「ゆふ
たすきかけてもいふなあた人のあふひてふなはみそ
きにそせし」同秋上枇杷左大臣「をみなへしをりけ
ん枝のふしことに過にし君を思ひ出やせし」

○玄々云詞 雄略紀歌に拖磨磨積能阿婆羅彌陀陀
同施都魔積能阿婆羅彌陀陀云々また倭我依夜積彌
能阿婆羅彌斯志斯能宇隨積阿彌彌云々万葉一
に阿禮座師神之盡云々又天下所知食之乎云々又
御獨立師斯云々同二十九に御立爲之島乎見時云々
又御立爲之島云々又御立之島云々又同幸之宇
陀乃大野云々又御立之島云々又同幸之宇
伊座之君我云々同觀下四座之物乎云々同十一
辛衣君爾内著欲見戀其晚師之雨零日乎云々又
白細布之袖反之者云々同十三君者聞之々二云々

又廿八所遊 我王矣云々又廿九遺之舍人之子等者云
云又廿四公之佩具之投箭之所思云々竹取物語
かた時のほごくだしを云々源氏帚木月抄四に昨日
もまぢくらしを云々同末摘花に故宮おはしま
し世を云々同須磨にゆしうのみおぼしに
云々古今物名に「花ごにわかすちらし風なれば
いくそはくわかうしとかはおもふ」

○「せじ」と濁る詞は「せし」の裏表也 万葉十八
に可弊里見波勢自等許等太氏云々伊勢物語下
「枕さて草引むすふ事もせし秋の夜とたに頼れなく
に」又戀せしとみたらし川の歌は上の「せし」の條に
引つ竹取物語下八に人にきかせじと云々後撰春中
伊衡「竹ちかく夜床ねはせし窓のなくこゑきけはあ
さいせられす」又上「おほそらにおほふはかりの袖
もかな春さく花を風にまかせし」
(廿二)新田義重の墓 新田義重の墓處は上野新田郡
安養寺村にて不動を勧請すこれを觸不動といふそは
義貞義兵を起す時越後國に軍勢催促して觸廻りしゆ
るに然はよべりとなん關東御入國の比本多佐渡守成
瀬華人正巡檢せしに大光院の住寺吞龍上人今の大光

院の寺中に御墓あるよし申て遂に大光院を御靈屋と
定らる吞龍は越後の産高名の僧也と岡部の安部攝津
守家中蘆田七左衛門千別物語き

(廿三)神武紀に見えたる井光が子孫 武州岡部の領
主安部攝津守家中に吉野六郎左衛門といふものあり
本國大和にて井戸神の子孫也といひ傳たり姓は藤原
氏也こは神武紀に見えたる井光が子孫にて吉野より
出たれば吉野氏にや藤原氏は後にみだりに稱せしな
らんと蘆田千別いへりさもあるべくや

(廿四)もろこしの佐國 謠曲の二人靜にもろこしの
佐國は花に身を捨てと云々古抄に自昔此故事知レ
ザル也ト云々謠曲拾葉抄に大系圖云從五位上掃部頭
大江佐國平城天皇後葉式部大輔通直子矣本朝蒙求云
佐國は何の許の人と云事不知其生甚愛花園中に花
を植て目を悦て爲樂佐國死して蝶と成て園中に來
ると其子の夢に告たり文略新撰朗詠云大江佐國詩云
六十餘回看未飽他生定作愛花人云云此謠に
唐土の佐國と有唐土に佐國と云者ありや未考或抄
云樂天詩煙霞埋跡惜花暮佐國弄身不待春矣此義
に依てかく作る歎猶尋べし或説に吉野に唐土と云所

有此所に佐國住けりといへり此説よろしからず云々
廣益俗説辨殘編四十五の卷補もろこしのさこくが説
に二人靜の謠にもろこしのさこくは花に身をすて
つたへて唐今按るにさこくは大江の佐國なり大江系圖
を考るに佐國は朝綱が曾孫なり東見記を考るに佐國
は播磨國諸越の産なり予聞諸播磨土人諸越在賀
西郡今號佐國村一跡あり長明發心集に佐國の家を記す山
城名勝志引一書曰佐國天性花を愛す其賦する所の詩
多くは花を賞せり晚年吟曰六十餘回看不足他生定
作愛花人此詩によりて後人附會していはく佐國
没後その子の夢に見えていはくわれ存命のとき花を
愛する情にひかれ蝶と成て春ごに花園にあそぶ
と告たり其の子もろくの花に蜜をぬりて蝶に供と
いひ傳ふこれを花に身を捨てたりといふものなるべし
おもふに此佐國を音にのみ諸越を唐土にとりちがへ
異邦人とあやまり來るなり因思癸辛雜識曰楊吳字明
之妻江氏少艾連歲得子明之客死之明日有蝴蝶
大如掌徊翔於江氏傍竟日乃去及聞訃聚族而哭
其蝶復來繞江氏飲食起居不去蓋明之未能割戀
於少妻稚子故化蝶以歸爾宋高僧傳曰釋道賢追死

焚之火聚中盡化ニ金色胡蝶ニ而飛去大者聞集にし女の尸事なこれらのだぐひ和漢同日の妄談なり俗書に引ところ俗語にあるところ事實をあやまる事尤多しこゝにはしげきをいとひて二三をしるす餘は終編に載べし云々大江系圖に平城帝——阿保親王——本主備守賜大音人 文章博士 玉淵 從四下 朝綱 三木 澄江 從五下 通直 大學頭 佐國 從五下 大日本史二百十七の卷文學傳に澄江孫佐國頗善詩文長久四年與惟宗孝言源時綱一試於弓馬殿 百鍊抄扶桑 仕後朱雀後冷泉後三條白河朝一爲掃部頭兼兼越前權介云々類聚名物考人物部二に大江佐國從五位下新撰朗詠集の作者の中也鳥羽院御宇にあたる名高き人なり云々本朝續文粹姓氏の條に江佐國朝綱會孫叙從五位上爲掃部頭云々播磨事始經歴考下卷名所門に神東郡諸越山庄大江佐國ノ領ナリシ由佐國ノ歌ニ「もろこしの小萩か澤に影うつる月やさやけし秋の夜の空」云々播州古跡便覽下卷に神東郡諸越大江佐國の領地なるよし歌にもろこしの小萩が澤に影うつる云々與清按に諸越といへる地名和名抄に美濃國方縣郡に大唐の郷あり相摸國名所に諸越が原ありこは村越の通音に

て一村を打越たる所をさばよべりと見ゆ日向郡名諸縣を牟良加多と訓るにても諸は村の義なると知べし武藏久良郡諸岡毛呂の郷常陸國諸蒲郡同國鹿島郡諸尾郷但馬出石郡諸杉神社能登羽咋郡諸岡比古神社伊勢多氣郡守山神社讚岐寒川郡武例無の郷紀伊國牟婁郡牟婁郡の郷大和葛上郡牟婁郡同國添下郡尾張葉栗郡美濃各務郡などの村國郷の類いづれも通へる詞にてよしありげにきこゆ或は村或は室或は杜などに据れる語の轉れるなるべし

(廿五) 塙の字を「ハナワ」と訓て大坂の勇士に塙團右衛門ありこれは音便に「バン」ともいへり鹿島神宮の大宮司に塙氏あり塙保己一檢校など皆同稱にて「ハナワ」といへり類聚名義抄法中土部に登壇壇壝塙七谷下壁云々字鏡集四の土部に塙同塙同塙同塙同塙同タカキ云々倭玉篇中土部に塙タカキ云々など見えて「ハナワ」と訓る古證なし重之家集下雜十首の中に「たけくまのはなはに立る松たにもわかどひとりありとやは見る」一本にき又同たけくまの松一もどかれにけり「たけくまの松も一もど枯にけり風にかたふくこゑのさひしさ」年をへてたれをまつとか武くまのこ

きはにのみはいかてたのまん」此次の歌のときはを一本にははなわとあり空穂物語初秋に「たけくまのはなわの松はおやも子もならへて秋の風はふかなん」奥義抄中後撰集釋の條に此松はむかしよりあるにはあらず宮内卿藤原元能といひける人の任に館の前にはじめてうゑたる松也みちのくにの館は武隈といふ所にあり此人ふたゝびかの國になりて後のたびよめる歌也武くまのはなわの松ともよめり重之歌云たけくまの云々ありとやはきく武隈のはなわとて山のさしいでたる所のあるなりとぞ近く見たる人はまうし、云々袖中抄十六武くまの松の條に古歌云「われのみや子もたりといへは武隈のはなわにたてる松も子もたり」拾遺集云「われのみやこもたりてへは高砂のをのへに立る松も子もたり」云々按に「はなわ」尾上は似合まてしるべし今云宮城野武隈「はなは」館はひとつ所也云々歌林良材下に武隈松事古歌「われのみや子もたるといへは武隈のはなわにたてる松も子もたり」石奥州たけくまといふ所に二木の松ありこれによりて子もたるともいへり「はなわ」とは山のさしいでたる所のあるをいふなり云々藻鹽草三の隈部奥羽

觀迹聞老志五の名取郡部等の説亦同和歌名所追考百六陸奥名取郡部に武隈塙或は準輪山のさし出たる所を云則塙と云在所もあり今は植松といふ云々倭訓栞四の波の部はなはの條に奥儀抄に武隈のはなはとて山のさし出たる所也と書せり今も所の名に「はな」とも「はなわ」ともいふもの多し奥同の義也山鼻などいふ名義も同じ云々與清按に「はなわ」の「はな」は源有房集に「かすみたつるしまのはなを見わたせはたみかへしたる心ちこそすれ」神名帳に遠江國濱名郡部に猪鼻湖、神社云々更級日記に遠江のものはな坂云々後鳥羽院熊野御幸記に紀伊の猪鼻云々北國紀行に武藏のちやうのはな云々など皆「はな」の通音にて端也「わ」は回にて浦回浦回などおなじく曲たる所をいふされば端回の義なれば假名も波余和と書べし江戸の高繩は高き處の繩手道にて高繩手の義古き合戦の書どもにも高繩と書たるがよろしきを今高輪と書は誤にて端灣とは別也旅宿問答一丁ウに武藏ノ端ノ處也上總ニモアリシニヤ

(廿六) 植木鉢植井布入の植木の始 水野氏が草木錦葉集緒卷鉢植附布入の濫觴の條に染井の野夫三之丞

といへる者江戸にて桃株に梅を接たるは此三之丞なるよし開傳地錦抄といふ六冊の草子を作り草木の培養に心を用ひしるし置たるは元祿寶永の比の事也其の後同所の野夫伊兵衛其書を増補して正畫を加へ植作り方を再工夫したれど皆花壇植の事にてたま〜あるは石莖植也其比迄は鉢植はいまだひらけず又近來岩崎常正といふ人著したる草木育種の二卷に養ひかた委しくあれども是も鉢植の事而已にあらす云々又云鉢植の事は享保の末元文の比神木原十太此仁は永編の先生也中白は山角等の仁此山角より終ふり出るがへり草木を器に植其比より奇品を少しづつ観びたるよし其後永編といふ人専ら種々の欠陶又は危器のり淡土には其以前より鉢植有たり其比も渡り焼の鉢鉢植の初りたるは至て近來の事也花壇へ植る事はいつの比より初りたるかその濫觴をしらす云々又葉染分たるとく縞に白くなるをいにしへは筋といひ又銀葉ともいふ安永の初比より斑入と唱へ白くなるを白布といひ黄色になるを黄布といふ覆輪又は砂子布

ぼた班と云もあり無地の黄色なるを黄金といふ葉のかはりたるを葉替り又は葉形物と名付たり云々與清日草木錦葉集は四谷の御番衆の旗本水野某の作也假名に水のげんちうきやうと書き又四谷住御鉢植作留藏といふ隱名を記したり須原屋茂兵衛が書林にて發行す全編は未見板行は先七卷なれり抑植木を樂たるは晋書潘岳傳に築室種樹逍遙自得といひ宋陳和卿清陳漢花隠翁など漢土にも其聞人いとおほく兼好は作り木を口をしなどもいひたりき

(廿七)清文鑑 清文鑑は滿洲字を譯したる書にて八套卅二卷あり御製増訂清文鑑序緒古語言文字之傳不能不隨方隨時代爲變易將欲觀其會通一惟音義兩端爲之樞筥獨是施之於繙譯則以字之不得其音而舛者亦以字之強索其義而逾舛嚮評通鑑輯覽糾前史譯本失其則有校正正金元國語解之命及製西域同文志序諸作復連類而引伸之茲增訂清文鑑告竣並爲粵厥指以詔來者云々每門首著國語旁附漢字對音或一字或二合三合切音俾等量者不爽苗髮而字之淆於不得其音者抄矣詮釋具以日用常言一期人共曉

其俗解撫拾陳編章句及以之手者也爲文者悉汰之而字之汨於強索其義者抑又抄矣綜計續入新定國語五千餘句若古官名冠服上器用鳥獸花果等有裨參考者別爲補編云々乾隆三十六年十二月二十四日とあり

(廿八)秤上の奕の名井貝掩 姫百合草紙上下二卷松會板の草子上卷一丁にまづ秤の上の遊にはらんごむさしごいりかねありやなしや十たらずぬす人かくしまゝ子だてとさの入江の舟ちがへひやうごわたしさるがへりさゝだてしまだてめつけ石かすをつくして遊びたまひけると云々按にむさしごは今の十六武藏といふ類なるべしいりかねはかりがねなどの誤にや可考又一丁こんどは貝おひなるべしとていさうつくしき貝どもをそろへ給ひけり先難波津より参りたる梅の花貝をはじめて竹のうらばの雀貝杜に聲ある鳥貝浪打あぐるすだれ貝鷹の尾にきく尾形貝なみ白糸の鏡貝蟹の衣のうつせ貝不破の關屋の板屋貝波とや花の櫻貝柳のうらの楊枝貝このみひろふ栢貝波にぬれたる袖貝や日もくれかたのすはう貝かやうの貝どもをそろへてあそび給ひける云々按に貝掩の事は二見浦

伊勢又は雅游漫錄などに見ゆ

(廿九)林祭酒の諱 今の祭酒林大學頭諱は信衡といへるを省て林衡と書れたるが碑文などにも見ゆこは賤官の稱なるを心づかずしてものせる也晋書張協傳の七命辭に虞人數獸林衡計鮮と見えて虞人に對したる賤官の稱也

(卅)船中の紙織井湊入の火 船長日記尾張國の船頭重吉納屋町小島庄右衛門が千二百石の管乘丸に文化十年十月尾州殿の廻米を積り江戸に來りし歸るに難風に逢ひ英園にたひひしあらしを文政五年十一月池田寛規が聞書上卷に紙織を以て太神宮の神勅を伺て事を計る也此紙くじと云は一升枰に米を八合程いれ紙を一寸四方に切て思事を書付丸めて其上に置扱太神宮を念じて一万度の御稜を其上にかざせば丸めたる紙のうち一ツ飛あがりて御板へ付也それを見て知ると也此御告はいさゝか違となしされば日本の船頭は太神宮の神託のみにて船を乗侍る也と重吉はいへり云々又云暗夜に湊に近付たる時方角知ざれば是も又湊入の火を見せ給へと太神宮を祈念して目をひらけばその湊の方角に必火三ツづゝ見ゆる也やがて磁石をあてゝ方角を定め終れば忽火は消る也是は常に如此也とぞ云々

(卅一)船玉の去といふ事并天后の傳 同書同卷に船玉のさるといふ事はすべて船玉とは船のぬし也帆柱を建る筒の下に納め置事也紙雛一對其船主の妻の髪毛少し雙六の鑿ニッサイノ目此三品を納置を船玉といふ也難船ある時には必此船玉去也難船したる船を見るに必船玉はなきもの也とぞ難船すべき以前に何ぞに化して逝去事も有と云々與清按に船靈の事余已に船靈記にいへりまた西國にて水天宮と稱し天妃を祭るは漢土の神也そは福建省誌天后本傳などに見えて姓林氏宋太祖建隆元年庚申三月二十三日誕生す父ハ福建都巡官林恩母ハ王氏也天后十六歲窺井得符遂靈通變化驅邪救世屢顯神異常駕雲飛渡大海衆號曰通元靈女越十二載道成白日飛昇時宋雍熙四年丁亥秋九月重九日也と本傳に見ゆ福建省誌には后林姓世居莆田之湄洲嶼宋都巡檢林恩第六女也始生時地變紫有祥光異香長能乘席渡海乘雲遊嶋嶼間宋雍熙四年二月十九日昇化とあり常陸水戸の浦邊に處々天妃の宮あるは西山黃門の祭給ひしなるべし今筑後に水天宮とて靈驗の宮あり久留米侯の赤羽の邸にも祭りて毎月五日を縁日とし虎門外の丸

龜侯の邸中なる讃岐金毘羅權現の毎月十日の縁日に抗衡して參詣の男女老少幾千人といふ限をしらす天后の詩六十一の卷に載可考合爾爾有爾爾代爾爾廿九ノウ天妃
 (卅二)雪車橋并蝦夷の犬 雪車は倭訓栞に會津風土記を引て雪車雪舟など書よしいへりそりたる形ゆゑに名とす史記に橋に作り漢書に毳に作る注に以板爲之其狀隨行泥土と見ゆともいへり與清曰雪車橋は別物也閑田耕筆に或人の紀行を載たるに出羽のサツ子坂の條ありてそりかんじきのさま見ゆ橋は足にはくもの雪車は輿駕の類にて乗物なれば共に雪道の具ながらおなじからず夫木集冬三にそりのつな手そりにのるそりのはやをなごよめる歌三首あり船長中卷にカムサツカの事をいひて此國冬は雪三丈五六尺計積る云々扱そりに乗て犬に引せてありく也雪舟をサンカと云木を二本堅に並べて其上に巨燧やぐらのやうに組たて中を高くして跨て乗らるゝやうに皮にて作りたるが綱を付其綱を犬五疋か六疋にてひかするによき犬を先に立二側に立て引するなり後に立る犬はあしくてもよし四辻にいたれば犬何方へかゆ

かんと差圖を待て居る時カツ〜といへば左へ行ホガ〜といへば右へ行ヒロ〜といへば直に行也ア、〜といへば止る也棒の本の方をさがらし頭の方には錫仗のごとき銀の輪を付たるものを持て木などに行當るか又は傍へ寄過などする時はその棒のものとてこちて直す也犬のすゝまぬ時はそれを振上げて鐵輪をガラ〜とならせば先に立たる犬進出る也かくしても進兼る時はエツカナイトロバウメなエヒヨノマツツなごいふ事也事也といひて前に立たる犬を彼棒にて打ば先に立たる犬かけ出すなり先に立る犬はよき犬をよく仕込たるならではよろしからず雪の上のみを行なれば其中にも人々踏ならして一筋かたまりたる所を行にもし傍なる和なる所へ半分かかれば雪車横さまに倒れて人も横さまに落るを犬はかまはずむしやうに引て行を先に立て行人あればとめてくれる事也下り坂になれば彼棒を前へ押がひあひしらはざれば進過る也一軒の家にても是は誰か犬彼はたが犬とて銘々に食をあたへ飼置事也食は「セリジ」の事ニッを五六ツ、興る也遠方へ行時は前夜に八ッ九ッ計も食せ置て其朝は先へ行つくまでくはせぬ也

はやく行てくはんとていそぐ也云々按に犬に雪車を引すると蝦夷草紙東遊雜記などにも見ゆ
 (卅三)曆に黒日多き年は豊稔黒日少き年は凶作 或人の説に曆に黒日多年は必豊稔にて米價卑し黒日少き年は凶作にて必米價貴し黒日は民間耕作によしある日にや御代官を叙せらるゝ日は必黒日也といへりさもあるとにや文政十一子年曆の黒日少して凶作米價甚貴く同十二年は黒日多して米穀豊なりき

松屋筆記卷之六十一

東都 平與清文儒稿

(一)淺草下谷の曹洞宗の寺院塔婆の垣を止る事 桃水和尚傳贊六丁に師江戸ニ在留ノ中ニ下谷ノ寺ニ下錫セラレシ時其寺板ノ塔婆ヲ幾百枚トモナク繞シ立テ寺境ノ垣ト爲シ且時々ニ僕ガ菜園ノ糞ヲ塔婆ニ打カケルヲ見テ額ヲシワメ某寺ニテ自分ノ施物ノ有次第日々街ニ出テ板ヲ買來テ取カヘテ垣ニ立テ塔婆ハ角田川ニ持行テ流シテ誦經セラレケル寺主菜園ヲ巡ル次デ板ノ垣ヲ見テ厨下ノ僧ニ問テ答メラシケレバコノ頃ノ下錫僧ノ我錢ニテ板ヲ求メ立テ垣ノ塔婆ハ川ニ流サルト答フ寺主感恐ノ意ヤ起リシ今マデアリシ垣ノ塔婆ヲ遺サズ川ヘ流シテ跡ヲ皆高屏ニセラルコノ事諸方ニ風聞シテソノ比下谷淺草の洞家ノ寺ハミナ塔婆ノ垣ハ無リシトゾ云々與清按桃水和尚傳贊一卷は寛延二年九月十九日に記せるを明和五年戊子仲冬五日肥谷雲龍山清潭禪寺に藏板せる也卷首に洛北鷹峰桃水和尚傳贊師ノ諱ハ雲溪號ハ桃水生國ハ

筑後柳川城下ノ商家ノ子也云々七歳ノ時捨テ、肥前圓應寺ノ團圓和尚ニ送リ剃髮セシムルナリ云々と見ゆ天和三年癸亥九月十九日洛北鷹峰にて寂す年齢未詳但辭世に七十餘年快哉屎臭骨頭堪作何用一嘆真歸處作麼生鷹峰月白風清とあれば七十歳許なるべし乞食の行をなして悟道せし大徳也

(二)馬の杳草鞋并肩與昇大津繪 同書廿丁に師大津ニ居テ馬杳草鞋ヲ作テ毎日持出テ賣ラレケルニ後ニハ皆アツラヘ出來ルヲ待様ニテ大津ノ翁ガ杳ト謂ケル居所ハ商人ノ藏ト藏トノ間ノ六七尺バカリ空タル所ヲカリ藁ヲ葺タレ夜臥バカリノ爲ニテ炊爨ノ器具ナクコ、ニテ杳草鞋製テ併ノ様ノ物ヲ買テ二年バカリヲ送ラル或時馬子ヤ肩與昇共ガヨリ合テ謂フ様ハ翁ガ處ニハ佛ガ無イ佛ノ無ハ切支丹ト云フナゼニ佛ヲ置ヌゾト云ヘバ翁ガ云様ハ飯燒ヌ處ハ佛モイヤガルト聞人ミナ大笑シケリ翌日ニ一人ノ馬子大津繪ノ阿彌陀ヲ一幅持來テコレ翁ヘ遺ルゾ持佛ニセヨトテ與ヘケレバ佛ハイラスト云ニ無理ニ持カケテセマキ所ニトツブヤキナガラ受取テ置レケル隣家ノ者翁ガ他出ノ跡ニ見レバ佛ヲ掛テアリスニ文字ラシキモ

ノ書付タリ讀テ見レバ狂歌一首浮炭ニテカ、レタリ「陰ケレド宿ヲカスゾヤ阿彌陀ドノ後世タノムト思シメスナヨ」云々與清曰馬の杳草鞋など作りて賣屑與昇などのわざするもの寛永年中にもありけんぞ知べしヲラデは蕪沓の略也大津繪は近世奇跡考二の卷に元祿の比より古くは所見なきよし見ゆされど此桃水和尚は寛永中の人なればそれより以前に有し也

(三)紙子 同書廿九に泉州成合寺ノ愚白和尚ハ師ノ同行子ナレバ在所ヲ聞出シ正月末マダ餘寒甚シキニ知順ヲ伴ニテ新シキ紙子ヲ製テ、尋行玉フニ云々與清按に鷹筑波集卷第一十七板原三郎兵衛宗朋句に「紙子ばかりをかさねきる海士」お比丘尼の身も清水にこもりゐて」とも見ゆ鷹筑波集五卷寛永十五年五月廿五日長頭丸の跋ありて板本也貞徳俳諧の點あはせられたる中の佳句どもを集られたる也犬筑波に對へて鷹筑波とは名づけしなるべし

(四)桃水の語明惠の語に近し 桃水和尚傳贊廿一に角倉某ト云ル京ノ富家黄葉の黄泉和尚ニ歸依セリ師ノ事ヲ聞及テ家ニ請ジ宿セシメ因ニ坐禪ノ用心ハイカハイタスベキヤト白シケレバ師天井ヲ仰觀テ醬油

ハ土用ノ中ニ造テヨシ未嘗ハ寒ノ中ニツキテヨシトバカリニテ外ニ言ハナカリケル云々與清按に砂石集澁柿などに鎌倉執權北條泰時母尾の明惠上人に治國修身の道をさはれしに人はあるべきやうと答へられたると見ゆ同口の談といふべし此を今の文政年間の俗語にうつさばおつにをかしくといひてあるべし

(五)極樂を通り過てはと云狂歌 同書卅一に角倉一家ノ中ニ黒谷ノ某和尚ト云ニ歸依シ所作ヲ纏トテ一日ニ幾万遍ヲ滿ゼテバト云テ茶話シナガラ念佛唱ス人アリ師ヲ拜シテ念佛多ク唱スコトヲ白シテソノ上ノ御示ヲトテ乞ヒケレバ師傍ニ硯ノアリシニ筆ヲ染テ狂歌ヲ一首書テ與ヘラレケル「念佛ヲ強テ唱スモイラヌモノ若極樂ヲ通り過テハ」とあり與清按此歌世俗の口に膾炙して一休の歌とするは誤にやまたは一休の古歌を桃水の書れしにや可考

(六)招提伽藍道場 集千家註批點杜工部詩集卷之一遊龍門奉先寺詩に已從招提遊更宿招提境云々注に師古曰釋書招提菩薩皆古佛號故寺謂之招提或名伽藍或名道場云々與清曰招提伽藍道場の義釋氏要覽上卷十九丁ウツ住處部に見ゆ杜詩の集千家註批

點は宋の大徳七年癸卯冬盧陵劉將孫尙友が序ありて
卷端に須溪先生劉會孟評點とあり全廿卷初に年譜目
録附録及文集二卷を附す元末初明の板本とおぼし
雲衢會文堂戊申孟冬刊とあり戊申何れの戊申に
や

(七)酒を聖賢といふ事 同集^{卷一}對^{卷一}雨書懷走遊^許
主簿^許詩に座對^許賢人酒^許云々注に魏略魏太祖時酒禁
人竊飲^許之故難^許言^許酒以^許清者^許爲^許聖人^許濁者爲^許賢
人云々與清曰聖賢酒の故事三國志にもあり万葉集
三大伴旅人卿の歌に引注すべし

(八)歌に學者の體歌讀の體ある事 寂蓮は歌人顯昭
は歌學者にて常に爭論をなし獨鉤かまくびといはれ
たり實に幽玄平淡の體寂蓮に及べくもあらずされど
袖中抄の撰六百番歌合の判など顯昭が力見えて世
の爲人の爲其益少からず杜詩集千家註^{卷一}の春日懷^李
白^詩の注に遜齋閑覽云或問^{王荆公}云編四家詩以^李
子美^爲第一^{太白}爲^{第四}豈白之才格詞致不^逮
子美^耶公曰白之歌詩豪放飄逸人固莫^及然其格止^於
於此^{而已}不^知變也至^於子美^則悲^懽窮^泰發^歎抑
揚疾徐縱橫無^施不^可故其詩有^平淡^簡易者^有綺

麗精確者^有嚴重威武若^{三軍}之師^者有^奮迅馳驟
若^泛駕^之馬^者有^淡泊閑靜若^{山谷}隱士^者有^風
流飄籍若^貴介公子^者蓋其詩緒密而思深觀者苟不
能^臻其^間與^未易^識其^妙處^夫豈^淺近者所^能
窺^哉此子美之所^以光^掩前人^而後來^無繼也元稹
以^謂兼^人所^獨專^斯言^信矣^とあり杜詩を見れば其
學才李白に優れるとおもひやらる學者は世の歌人の
體に抱ずして新奇工妙故事意達の作を思ふべし

(九)狂歌 本居宣長が玉勝間に本朝文粹の狂歌とい
ふを引てめづらしげに記し今の狂歌の名に似たるよ
しいひたれどこは詩に常に用る字也杜詩集千家註
^{卷一}の贈^{李白}詩に痛飲^狂歌^空度^日飛揚^跋扈^爲誰^雄
とあり韻府にも張九齡が後漢徐徵君碣及杜詩白居易
詩を引たり白氏文集には題に狂歌とありこれは酒狂
などの時に作るよしの詩也

(十)私鑄錢 杜詩集千家註^{卷九}歲晏行に往日用^錢
捉^私鑄^今許^鉛錫^和青^銅云々注に唐制盜鑄者死
沒^其家^屬至^天寶^間盜^主益^甚雜^以鐵^錫無^復分^形
形^號公^鑄者^爲官^爐錢^云々按に私鑄錢の事唐書
六典通典通考に見ゆ本朝唐法に据て私鑄錢の律を立

給へり

(十一)磬折 儀式の書に磬折の字面おほく見ゆ杜詩
集千家註^{卷九}遺遇詩に磬折辭^{主人}云々注に洙曰莊
子漁父篇曲^腰磬折^云々腰を曲ると也禮記史記西門豹
傳後漢書馬援傳管子などにも出たり ^{國語}卷^四四十四段

(十二)とほじろく 万葉に川の貌を遠じろくとよ
めり杜詩集千家註^{卷六}問の詩に卷^簾唯^白水^隱几^亦
青山とあり白水は水面の白きをさしていへるなれば
遠じろくのしろくに叶へり

(十三)氷魚いさゝ 京都に氷魚あり若狹にいさゝあ
りいづれも川魚の白小なる物也杜詩集千家註^{卷六}白
小の詩に白^小群^分命^{天然}二寸^魚細^微雷^水族^風俗^當
當^園蔬^入肆^銀花^亂傾^箱雪^片虛^生成^猶拾^卵盡^取
義何如とあるは似たる魚なるべし

(十四)一万春 歌に千代の春万代の春などよめるに
杜詩集千家註^{卷六}承^問河北^諸道^節度^入朝^歡喜^口號
絶句十二首中に聖壽^宜過^一万^春とも作れり

(十五)屠蘇 杜詩集千家註^{卷七}槐^葉冷^淘詩に願^隨金
腰^袋走^置錦^屠蘇^云々注に洙曰金腰袋馬也脩可曰

屠蘇字或作^屠蘇^玉符^云屠蘇^庭也通俗文屋平曰屠蘇
廣韻云屠蘇草菴又屠蘇酒蓋昔人居^屠蘇^釀酒因名今
詳^是詩^走置^錦屠^蘇正^謂屋^也古^樂府^挿腰^銅七^首
障^日錦^屠蘇^云々按に延喜式江家^六第^公事^根元^等の
屠蘇散に注すべし

(十六)河伯馮夷 河伯の事余已に河伯靈面記にいへ
り杜詩集千家註^{卷八}天池詩に欲^問支^機石^如臨^獻寶
宮^云々注に穆天子傳天子西征至^陽紆^山河伯馮夷之
所^居天子沈^璧禮^焉河伯乃與^天子^披圖^視典^以
觀^天下^寶器^云々胡應麟が筆叢辛部莊嶽委譚上に馮
夷之爲^河伯^甚說^遠矣^好奇^之士^譚張^眩惑^紀載^定繁
即^特立^自信^歟君子亦但^斥言^其妄^而未^嘗不^以河
伯^爲水^神也乃余獨^于竹^書紀^年而得^其說^焉紀^年
載^帝芬^十六^年洛^伯用^與河^伯馮^夷闕^夫洛^與河^國名
也伯^爵也用^與馮^夷人名也謂^河伯^河神^則洛^伯洛^神耶
夫洛^伯能^與河^伯闕^矣胡^用之^爲神^寧々後^世而^馮
夷^獨盛^稱耶^觀池^十六^年殷^侯以^河伯^之師^伐易^則河
伯^爲諸^侯而^馮夷^非神^鬼昭^々矣^穆天^子傳^河宗^伯天
伯^爲穆^王乘^副車^遊之^極於^西土^而後^返則^當時^柏天
亦^造父^奔戎^之屬^譚從^穆王^者籍^如後^世所^謂魚^身人^首

何以周旋天子之側哉夫九歌屈氏之寓言而秋水莊生之幻說本末嘗謂實有且絕不道馮夷之名而茂先博物成式西陽從而爲說以實之吾不可不以不辨亦幸而得之竹書也段氏引河伯姓名口家西陽雜俎云河伯人面乘兩龍一曰冰夷一曰馮夷又曰人面魚身又金匱言名馮循一作河圖言姓呂名夷穆天子傳言無夷淮南子言馮遲聖賢記言服八石得水仙抱朴子曰八月上庚日溺河按首所引山海經云々此二書をも引て再説を立べし

(十七) 粗枚 杜詩集千家註十八戲作俳諧體遺二首の其二に於菟侵客恨粗枚作人情云々注に蒼舒曰宋王招魂粗枚蜜餌有餽餽注云粗枚以蜜和米麵煎作之粗奇舉切枚音汝云々按に和名抄十六麴麩類部に文選注云粗枚巨女音和名以蜜和米煎作也云云舊本今昔に與米と書き桂川地藏記に道徳與米とあり延喜式七の卷十七にも見ゆおこし米といふは煎て興ふくたむるゆるの名也爾雅十五下

(十八) 八座 參議を八座といふは員數八人ある故の名にて本朝文粹文徳實錄などに見え職原抄參議の篇の諸注にくはし唐の八座は六尚書左右僕射の事にて本朝とは同名異義也杜詩集千家註十八斐然之作三十

韻に連枝不日並八座幾時除注に唐以六尚書左右僕射合爲八座云々通典通考唐書百官志など考合す三國志

(十九) 絛袍 教餘于唱集三の贈人絛袍詩に膾末返寒厲爲貽新製絛云々十一絛袍記に余有新製一絛袍近頃得之人矣此遮寒之具而蓋不知所其名爲其形無可比況者惟片々輕樣則便乎起居其製也背一幅長二尺許割一領垂之兩肩以見於前尺餘有襟而無袖兩腋不合縫云々按に絛袍は木綿の上着の義也教餘于唱集十四卷元祿九年柔兆因敦難寶念日白巖山和南が序あり刊本也其師昌山空堂妙有法師の詩文集にて妙有は日蓮宗也日蓮宗には深草元政昌山妙有などを學者と稱す見開集三ノ廿七

(廿) 蘭アラ、ギの辨 同集七の蘭詩并序あり序に餘好嗜蘭淹矣此比復得數莖其葉最長其花殊香保重因斯甚矣夫蘭瑞艸也能降神辟不祥然其種有九種其花有數品出處不同利用亦別諸家之說區而未的識故無定論春芳者爲春蘭色深秋芳者爲秋蘭色淡今所得蘭春秋俱花而香然古之香艸亦名千金

花葉俱香依茲葉綴爲佩或浴或焚今之蘭但花香而葉無氣此非古人所指明矣或曰本朝所玩之蘭此異國之蕙也今考此說非也蕙乃零陵香也葉如麻兩々相對以七月中旬開花與今之蘭大異焉然則所流布之蘭已非澤蘭亦非蘭花此彼山蘭之中一種者歟寇子朱氏之說黃庭堅之辨別並本艸正誤正之爲非又有陸機之論宋濂之辨未知孰是凡萬物依時因處而其號亦改易如以難波之蘆葦勢州爲濱荻那槩而可定焉詩に花如鳥冕葉蒲蒲香徹四維鼻且窺自古梅檀芳譽甚商量優劣有耶無云々按に大和本草八の本草啓蒙十などに論辨せり蘭草は古歌にフデバカマとよめる物にて楚辭の秋蘭也澤蘭ハサハアラ、ギ延喜アカマガサ和名サハヒヨドリ俗などいへり俗に春蘭といふは一名報春先花獨頭蘭也秋蘭ハ蘭花也楚辭の秋蘭にあらず猶蘭ハ伊蘭ともいふ茶ラノの事也馬蘭ハコンキク也鷄兒腸の類也香蘭ハイヌアラ、ギ延喜イヌエ和名ネズミアアラ方音などいへりアラ、ギハ顯ハレギ也ハレの略ラ也キハハクシの略にて臭也其香芬顯著をいふ名也爾雅維其花同其葉同其香同紙遺之多其開之遲早有微別耳云々木にもアラ

ラギ有木曾路名所圖會三ノ四十二下

(廿一) 櫻川石の硯 同集十二に硯銘上州之産也維石斑名櫻河水儻習不竭筆也學生花云々今世常陸の櫻河に思ひまがふる人あり上野の産なると此自注にしるし

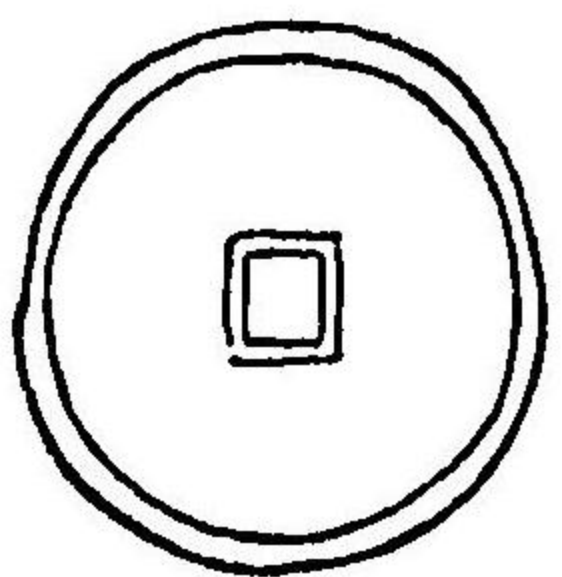
(廿二) 日本寺 同集十二に正東山日本寺鐘銘あり大日本國下之總州香取郡中村郷正東山日本寺者論說妙法之講肆傳持佛燈之靈窟也云々按に日蓮宗の檀林といふこれ日本寺と稱せるはあまりしき漫號也鎌倉建長寺を天下禪林江戸高繩東禪寺を海上禪林または品川の東海寺などいふ類自負たる名ども也

(廿三) 麻姑の手 同集十二如意銘に五指爬痒智一葉支願禪前代未聞處止觀尺餘全自注に一頭刻手指爲麻姑手一頭刻荷葉爲助老云々按に笠澤筆塵に麻姑手の事見ゆ爾雅佛祖統紀廿六ノ十四下丁除餘改齊波錄七ノ金盤玉杯ノ條體源抄十末ノ四丁オ和和子云々

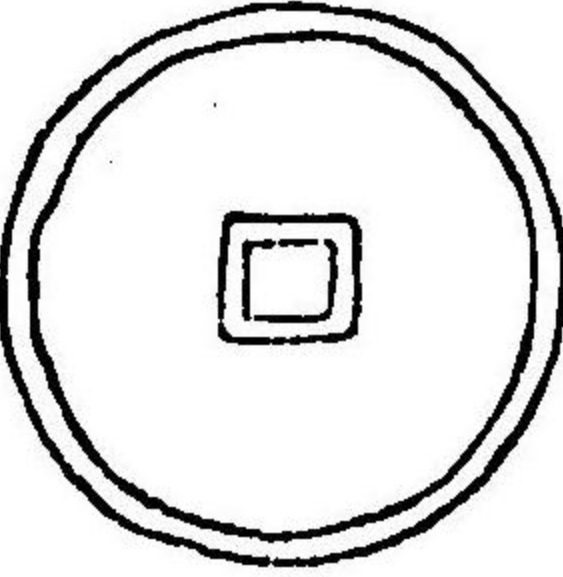
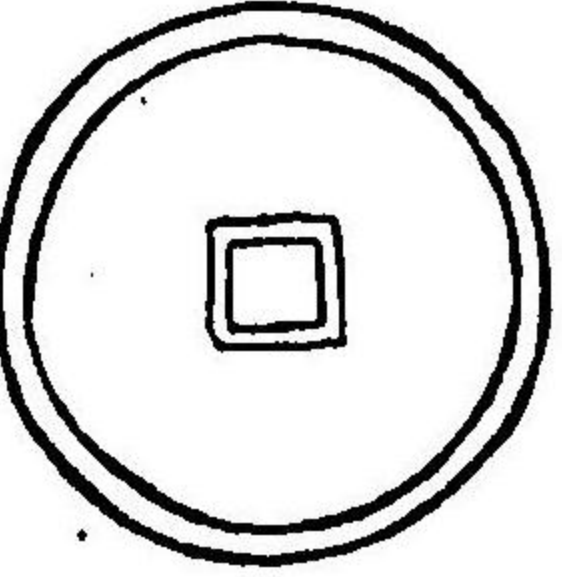
(廿四) のそくと云詞 俗言にのそく歩行などいふのそくは盗々の通音なり

(廿五) 雪燒井鷄目の病 高麗陣日記中卷廿丁吉州より飛脚到來の條に人夫雪燒ニアヒテ手足不叶或ハ鳥

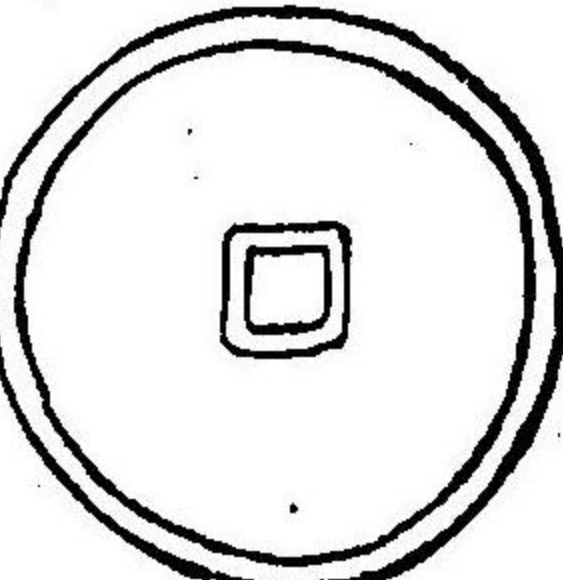
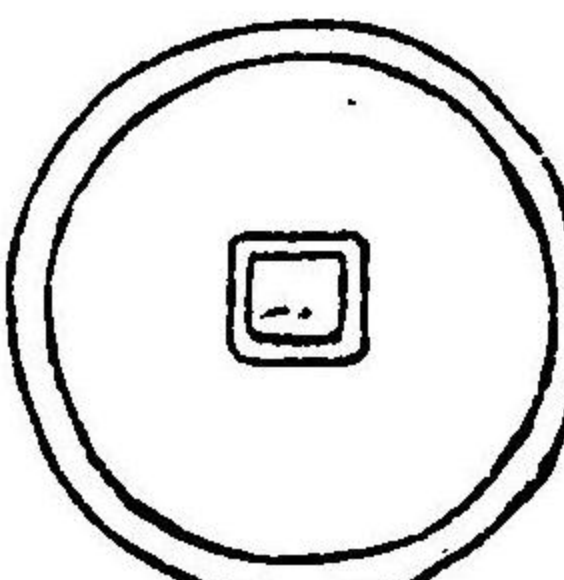
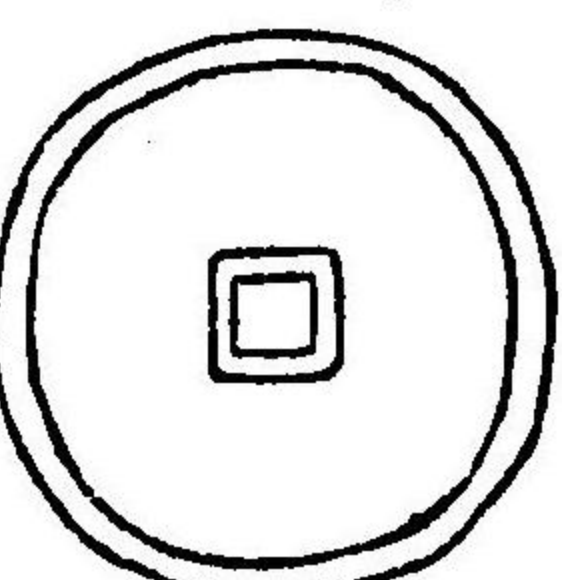
なごにも見ゆ錢錄卷十四外城諸品の條に延喜通寶和同開珍神功開寶萬季通寶隆平永寶乾文大寶の六種を載たり



右倭國延喜通寶錢詳見洪志按舊唐書倭國者古倭奴國也去京師萬四千里頗有文字俗尚周制



右日本國錢四種曰和同開珍曰神功開珍曰萬年通寶曰隆平永寶皆隸書洪志引舊譜並徑寸重五珠按新唐書言倭惡其名更號日本咸亨元年遣使來賀自云近日所出以爲名或云日本乃小國爲倭所并胃其號則日本即倭耳故宋祁不別倭國傳



右日本國乾文錢宋史雍熙元年日本國僧齋然與其徒五六人泛海而至獻銅器十餘并并國圖職貢今壬午代紀各一卷齋然善隸書云其國交易用銅錢文曰乾文大寶按今所收錢缺大字如洪氏圖亦隸書與前四種同云々與清按職貢今ハ職員令の誤也十餘并の并は宋史四百九十一列傳日本國傳に事に作る錢錄十六卷清乾隆十五年勅撰也錢の事古錢銘制度通なと考合すべし

(四十一) 字面非熟辭 熟辭を字面といふこと胡元瑞が筆叢に所々に見ゆ清の毛先舒が家人子語に忠孝二字字面自高淵云々とあり此書新安張湖字山來が昭代叢書九の卷に收て錢塘毛先舒稚黃著とあり (四十二) 西方要紀小引五大洲及路程 清人心齋張湖字山が西方要紀小引に泰西之言以大地爲圓毯上下四旁皆成世盼云々本文國土の條に西洋總名爲歐邏巴在中國最西故謂之大西以海而名則又謂之大西洋距中國計程九萬里云一普天下萬國總分爲五大洲其一曰亞細亞中國在其東南古來相通者七十餘國如東有朝鮮日本琉球北有東西諸國西有回回小西天竺以至如德亞國南有安南交趾暹

羅三佛齊緬國與滿刺加呂宋等地皆在此洲之內故中國圖誌如職方等俱有載之者自此最西一州名歐邏巴亦分多國各自一統其歐邏巴之南亞細亞之西名曰利未亞黑國在其內其四在中國之東歐邏巴之西名曰亞墨利加其地廣濶大過于前三洲其五在南極地方名曰墨瓦臘尼加此五大洲方國總圖詳列之其中地度風景土產嘗著職方外紀可考鏡也云々また路程の條に従極西到中國多浮海三二年初至過小西天竺國登岸小西離大西六万里大概淨海盡夜行得風順者半載可至又有過大浪山不得到小西者必在黑人國過冬二年始抵小西天竺小西又須半載餘換舟行二三月方抵中國總之住大西內地者今年起程明年始到小西又明年始到中國若居近海諸國者兩年可至也若陸路過回諸國多曠野又多盜賊語言不通甚爲艱險航海而來雖繞曲而遙然便于裝載且更安妥耳云々按に卷首に泰西利類思安文思南懷仁著とあり利瑪竇が職方外紀に合考べき書也 (四十三) 人魚 本朝人魚の出しこと近江蒲生川にて似たる物を捕しよし國史に見ゆ近來は人魚を獲たる

説時々きこゆめり西方要紀ノ海奇の條に有飛魚騰空而飛又有禽鳥恒浮宿海上舟人以計取之與釣魚不異亦有魚若牛馬猪犬之類且有與人相似者云々按に本朝にも飛魚あり平戸にてはアコといふ若牛馬といふは海馬の類にや與人相似者は人魚ともいふべし關書北條五代記七卷十九下

(四十四)西洋風俗 西方要紀風俗の條に西洋風俗道不拾遺偶或有遺得之者則懸垣壁以便原主復取或權收之貼示于聖堂之門原主言其所失記號合符則付還之云々此外正直の風俗本朝神代の風ともいひつべし

(四十五)鯉魚龍と變説 安南雜記の張湖が小引に安南在中國之西南鄰于滇粵其山則有句漏崑艾之勝其水則有來蘇龍門之奇云々考之廣輿記艾山上有仙艾仲春開花雨後落水面群魚吞之多化為龍又龍門江中魚色青綠曲而紅往々多化龍去云云按に龍門の鯉魚龍に化こと人口に膾炙し畫家好てゑがくめりされど此説に据れば鯉魚に限れることならず安南雜記は清の遂寧李仙根子靜著と巻端にあり張山來が昭代叢書卷廿八に收む交趾之地即安南即交

州即日南西北自交岡來故曰交趾東北界廣西東界廣東西界雲南西南界老樞即古哀牢南插入大海中通占城秦漢時皆郡縣也云々といへり
(四十六)慟哭記 宋の忠臣謝阜羽年譜張山來が小引に有宋謝阜羽當文信國既歿之餘猶時々登西臺而慟哭云々年譜に丁丑景炎二年時年二十九歲是歲車駕航海文公子正月自汀州移漳州龍巖縣謀入衛道阻不通三月入梅州五月兵出梅嶺入贛州會昌縣六月戰雲都捷號令通江淮引兵至吉州戰于終步不利戰永豐又不利戰于空坑大敗攻贛軍又敗文公妻妾男女皆被執幕僚張汴等死之公僅與長子道生客杜濟以數騎免趨永豐按西臺慟哭記所謂別公漳水涓涓者即贛郡西南之章江而非閩之漳州云々按に西臺慟哭記は宋の忠臣文天祥を慟哭して謝阜羽が記せる也謝阜羽が年譜は清人會稽徐沁楚公著よし巻端にしるして昭代叢書卷廿一に收たり
(四十七)神光井三光 神光とは眼光の事にて眼を塞て目尻を強く押せば暗中に光を見るこれを神光といふ也武備志に神光經の説を載たり清人唐彪が身易字翼修潞水人昭代叢書卷廿八に收むに三光者何也靈光也神光也精光也造化

之元生成之本也靈光性神光心精光命云々關書北條五代記七卷十九下

(四十八)富士山異國より見ゆると云説井長白山高麗陣日記上卷下セルトウスヲ生捕事の條にヲランカイより天快霽ノ時ハ未申ニアタリ日本ノ富士山近ク見ユル也とあり清人遂安方象瑛潤仁が封長白山記に登一山升樹而望遙見遠峰白光片々長白山也云々志稱長白山橫亘千里高二百里巔有潭周八十里南注鴨綠江北流混同云々とあれば此長白山を富士山と見まがへたるにやありけん關書北條五代記七卷十九下

(四十九)長壽の人 本朝長壽の人おほし武内宿禰尾張濱主など古代の眉壽はかぞへ盡すべからず文化年中神戸侯の高繩の下屋敷にて隨翁老侯尙齒會したまへるをり九十以上の人三人百以上の人四人つごひたりき百七歳を第一とす本所御材木倉の小吏の祖父也清の曲阜孔尙任が人瑞錄昭代叢書十に康熙二十七年十月二十三日奉恩詔一内一則軍民年七十以上者許一丁一侍養免其雜汎徭役八十歲以上者給絹一疋棉一

筋米一石肉十筋九十以上者倍之云々令天下計之七十者不可勝紀八十者一十六万九千八百三十人九十者九千九百九十六人百歲者二十一人是人也皆勝國之子遺也而能不死于癘疫不死于刑法不死于饑寒不死于水火盜賊留其餘生以受與朝之雨露雖其得于天者獨全亦必由善良以接物明哲以保身云々これに比れば本朝長壽の人おほし阿蘭陀人は三四十に過ずして殞す皆肉食のために生を害せりと見ゆ抑本朝は良米を食ひ魚菜に當て唐土西域の鳥獸を平常の食とする類に似ず實に神國の大幸にて長生を樂むと豈人もわれもよろこばしからざらんや

(五十)茶產地及茶壺 清人雉阜胃襄巢民が峇茶彙抄昭代叢書四に産茶處山之夕陽勝於朝陽廟後山西向故稱佳總不如此洞山南向受陽氣特專一足稱仙品茶產平地受土氣多故其質濁劣若產於高山一涇是風露清虛之氣故為可尚云々又云茶壺以小為貴每客一壺任獨斟飲方得茶趣何也壺小香不煖散味不就遲况茶中香味不先不後恰有一時太早未足稍緩已過箇中之妙清心自飲化而裁之

存乎其人。與清曰本朝茶の名日本後紀類聚國史性靈集經國集などに貢茶及烹茶の事見ゆ江次第に引茶の事あり喫茶養性記喫茶往來などにその徳をいへり唐土には三國吳志に茶菽の名あらはれ世説に常伯熊陸鴻漸が茶事あり陸羽が茶經盧同が茶詩など擧るにいとまなし

(五十一) 歌を學も詩學に据て心得べし 昭陽李沂艾山が秋星閣詩話に八字訣あり云學詩有八字訣曰多讀多講多作多改而已蓋作詩先問是非後分工拙初學須日課一首或間日課一首勸作則心專徑熟漸開門路否則勉強支吾終篇爲幸未可云是遑論工拙乎然非多讀古人之詩即多作亦無用譬無源之水立見其涸矣夫貴多讀者非欲譚斐意調偷用字句也惟取觸發我之性靈耳但古人之詩思理精妙法則嚴密非淺衷俗學可得而窺篇有無窮之格句有無窮之調字有無窮之義審問明辨而後旨趣可得是故詩欲多講苟草々讀過漫同嚼蠟雖盈腹何益宜其握管運思如墮烟霧也若作而不改尤爲不可作詩安能落筆便好能改則可爲瑜瓦礫可爲珠玉子美云新詩改罷自長吟子美詩聖猶

以改而後工下此可知矣昔人謂作詩如食胡桃宜栗剝三層皮一方有佳味作而不改是食有刺栗與青皮胡桃也又云一首五言律如四十位賢人不可著一屠沽兒言一字之疵足爲通篇之累而不可不審乎苟依此訣不思詩不進矣云々また吳門徐厨子能而菴詩話に作詩之道有三曰寄趣曰體裁曰脫化今人而欲詔古人之域舍此三者厥路無由夫碧海鯨魚自別于蘭若翡翠此古人之體裁也唐人應制之作皆合于西方聖教此古人之寄趣也少陵詩人宗匠從熟精文選理中來此古人之脫化也云々與清按歌人も此詩話の説によりて學べし古人の歌集を讀て己が性靈を發事必然り古集中にも拾玉集山家集草根集夫木抄を讀ば必利あり他阿上人集曾丹集散木集などこれにつぐ古今後撰など八代十三代の集に泥て腐歌をよみ出るをよきことおもへるは東野州宗祇などにばかされたる庸人のしわざ也

(五十二) 書法 書法の事は墨池篇佩文齋書畫譜などに諸書を引ていひ内閣字府にもくはし鹽城宋曹射陵が書法約言昭代書譜の總論に學書之法在乎一心心能轉腕手能縛筆大要執筆欲緊運筆欲活手不

主運而以腕運腕雖主運而以心運右軍曰意在筆先此法言也古人下筆有由從不虛發今人好溺偏固任筆爲體恣意揮運以少知而自炫新奇以意足而不顧顛錯究於古人妙境茫無體認又安望其升晉魏之堂乎云々

(五十三) 民の風俗皆水土に因 困學紀聞下ツに戰國人民の氣性みな水に因よし管子を引ていへり曰水一則人心正水清則民心易云々淮南子にも此説あり人國記に引注すべし

(五十四) 追儼 同書十の卷廿に游鳧問雄黃曰今遂疫出魅擊鼓呼噪何也雄黃曰黔首多疾黃帝氏立巫咸使黔首沐浴齋戒以通九竅鳴鼓振鐸以動其心一勞形趨步以發陰陽之氣飲酒茹葱以通五藏夫擊鼓呼噪逐疫出魅鬼黔首不知以爲魅祟也云々此追儼または疫神送りなどに注すべき語也

(五十五) 闘雞必勝の法 同書十の卷廿に羊溝之雞三歲爲株相者視之則非良雞也然數以勝人者以狸窩塗其頭注に羊溝闘雞處株魁雞師也雞畏狸也云々與清曰禁中の闘雞は強勝負を求めず相撲入道が時此法を得て傳授したらんにはいかなる富貴の者と

なるべき爲之一笑因云馬性畏狼合戰場帶狼牙著狼皮則足得利哉

(五十六) 人主は二目諸民は萬目 同書十の卷廿に漢書藝文志を引て人主以二目視一國一國以萬目視人主此名言也云々諸侯大夫士庶人といへどもこれを思て慎べし

(五十七) 時を得 同書十の卷廿に淮南詮言訓曰禹決江河因水也后稷播種樹穀因地也湯武平暴亂因時也故天下可得而不可取也霸王可受而不可求也張夫人諫符堅之言本於此云々與清曰君子は其獨を慎時をまつべし計之在人为之在天立身出世成富揚名ことく其時にあり強求必敗爾豈得而

(五十八) 水車の詩水確 元詩選一の卷袁楠が同子唯賦水車詩に挈瓶之智誠有餘抱甕之勞亦良苦何人嘗巧扶天機河伯遂巡魚鱉舞昂々長身臥膝岸卷地翻濤敵驕暑誰云龍骨化梅梁未信魚身作橋柱縈紆香輪過流水突兀雲梯卷清雨橫陳歌板促紛紛倒流谷籬聲齟齬東家鑪婦顏色惡步步生蓮空媚無陽鳥流燦汗成漿平陸須臾涌銀乳推移燥